

るは人の言の葉をもみぢによせん料也新古今同人「木がらしの風にもみぢて人忘れずうきとののは積る比哉

返し

小野のさだき

人を思ふ心このほにあらばこそ風のまにくりしれみだれめ契云人をかろくしくは思ふ我心ならねば木のはのごとくやすく亂れじとなり云々【諸成案にうつる心のはのごとくあらぬといふなり】真淵案にかろくしといふはわろした有べし

なりひらの朝臣紀のありつれがむすめにすみけるをうらむる

こと有てまばしのあひだひるはきてゆふさりはかへりのみし

ければよみてつかはしける

あまぐものよそにも人のなり行かますがにめにはみゆる物から

返し

業平朝臣

行かへり空にのみしてふることほわがふる山の風はやみなり【真淵案にかざはやみとよむべしかざまつりかざはやの浦などいへり】榮雅抄云一禪御説云山に風のはやき故に雲のまづかにぬ様に女のもとに人またかよへばうるさくて餘所になり行なり伊勢物語にはあま雲とよめり往還といひてもあま雲のことなりあま雲といひてふることはといふは少し雨の心をもてり集と物がたり

ける哉。諸成案に此歌二首の解伊勢物がたり古意の解をとるべし

題しらす

かけのりのおほきみ

唐衣なれば身にこそまつはれめかけてのみやはこひんとおもひし契冲曰衣のなるれば身にまつはれつく如く人にもなれゆかばさりとむつまじくこそならんとおもひし人のいと逢がたく衣架にのみかけ置ごとく餘所にのみ心にかゝりて戀ん物とや思ひしとなり衣のなるは萬葉に穢字をかけりなれてありつく也真淵案に篇次あふ後に離る、中なれば第二句は逢なれたるなるべしまからば身にまたしくのみこそあらんとおもひしにまかはあらで今あふとはなく餘所に我のみ心を君にやりてこひまたふかなとなりなる、にやがてあかつきこそなふの語あるにはあらず義を以穢の字萬葉に書と多し

ともしのり

秋風は身をわけてしもふかなくに人の心のそらにならん友則集には腰句ふかねども顯昭本には末の句「ちるらん。六帖には「みゆらん。契冲曰顯昭本には空にちるらんと有て注に風は人の身を分てはよもふかじなどかく君が心の一つにはなくて空に散らんと讀る也密勘

とかはること多し集に行かへりと有は心まされり真淵案に物語との相違は此歌等を詞書をかへ歌の詞をも少づ、かへて一條の物がたりとせれば皆異と有べきなり此集のごとくおせては物がたりにならぬ故なりいかにも行かへりといふは業平の口風なり贈答の雨雲を返歌にいはずして雨雲を自らに比したることを含てた、行かへりとよみて経歴にのみなせり是業平贈答一體有事なり他人と一體異なることを辨知べし又右解に女のもとへ人またかよへばうるさくてと有はあたらす此詞書にはうらむる事有て人また通ふや何のうらみにや知べからず是は物語に男あまたたりける人になん有けると有を此集へもかけて注せる成べし彼物がたりは作りごとにて證にたらず其上此詞真名伊勢物語には見えねば一向にとるべからず此集にていふとにあらす歌の心は契冲云おくる歌になり平をあま雲によそへしかばそれをうけて其雲のごとくいたづらにゆきかへりて中空にのみしてふる事は山風のあらければ山とはやがてたとへられたる雲になりて女をさして云り云々後撰「白雲のゆくべき山も定まらず思ふ方にも風はよせなん。拾遺「白雲のかゝるそら言する人は山の麓によせてけ

無不審とのみ有同心と見えたり今案に次下の歌に秋よりさきの紅葉といへるによりて思ふに空にちるらんとはもみぢにそへていへる歟秋風にちるものは木の葉なれば詩にも歌にも昔はその字をすゑねど其と聞ゆるを後の如くきびしくはいはざりければ此歌も其心にや大井川序にも「つたなきとはふく風の空にみだれつ、といへり身をわけてとふに人をわけていふとのふたつの心なるべし後撰「身をわきて霜や置らんあだ人のことのはさへにかれも行哉。真淵案に顯昭秘注云風は我と人のみとわけてはふかじ物をなかく君が心の一つにはなくて空にちるらんとよめる也とあれば古本皆ちるとありけるにこそ然れば契が言の如くなるべし秋風を出したる詮木のはといはでもちるといは、聞ゆべし又契が兩様の説をいへど後の説は非也よりてあげず

源宗平朝臣

つれもなくなり行人のことは秋より先のみぢなりける宗子集には腰句「ことのはや。尾句「紅葉なるらんと有契曰つれもなくとは始よりひたぶる情なきをいへど是は後につらくなりてつらきによく堪たる火をいへり秋より先の紅葉とは言の葉の早く變れるをいへり真

淵案になり行といへば後につれなくなり行なり

こゝちそこなへりける比あひしりて侍りける人のとはで心ち
おこたりて後とむらへりければよみてつかはしける

兵 衛高經朝臣女

去での山ふもとをみてぞ歸りにしつちき人より先こえじとて

二句を秘注には「ふもとのみよりと有て御本には「ふもとのみよりと有其は今少しつゞきよきか云々眞淵案にふもとのみよりは決して誤りなるべし教長卿云去での山は黄泉の道なりそこまでは行たりしかどつらき人をまづやらんとて我はかへりにきとのろひたる心なるべし顯昭云人をまづやらんとのろはねどつらき人にもさきだ、んことのさすがなればまづこえじとはよめる歟云々契沖云とはぬを恨てつらき人とはいへどまことに思ふ人なれば我は人のつらきにならば去での山を人よりさきに獨こえんと悲しければ命も限りあらんときはもろともにこそこえめと思ひてすでにこゆべかりしを麓を見てなんよみがへり來りつるとよめりと見ゆ此説眞淵案にわろし後撰朝忠朝臣「諸ともにいざといはずば去での山こゆともこさん物ならなくに。又云人の許より久しう心ちわづらひてほと／＼しくなんあ

りつるといひて侍れば閑院大君「もろともにいざといはば去での山いかでかひとりこえんとはせしあひしりける人のやうやくかたになりけるあひだにやけたるちのほに文をさしてつかはせりける
小町があぬ
契曰やけたるちのほとは野火にやけ残りたるなり○後撰にも小町があねとて三首あり同じ集にこまちがうまごととも有共に名あるものをあげて去らすること左傳杜注などに多し
時過てかれ行をの、あさぢには今はおしひぞたえずもえける契がかれ行をのを氏によせしといふは過たりあさぢはよくもみぢする物なれば身のさかり過て人のかれ行によそへたり或抄に春もえ出夏まげり秋おとろへ冬かれゆくに身をたとへてといふは非なり今こんとなどいふ歌を誤解せしを繋にならひて猶いふなるべし
物思ひける比ものへまかりける道に野火のもえけるを見てよめる

伊勢

枯て後野火に燃ても猶春を待つ頼有を我うき中は草と共にかれて後我おもひのみひとりもえてたのむかたなき心なり右二首一類此注あたれり或抄のごときは戀をわすれたるべし野をやくことは春に若なつまんとて春も焼又冬よりもやくなり拾遺に「物やくをのこかのみゆるみ山櫻をよきてはたやけなどいふは山中には山を焼て草木をからして畑となすなり

題しらす としのり

水のあわの消てうき身といひながら流れても猶たのまる、哉

六帖腰句「思へども。友則集は「知ながら。四句を流れても猶。六帖「いせの海のをの、古江の流れ江の流れてもみん人の心を。消てうき身は絶て賤身の如しきえてとは甚しくいはんとて也知ながらとあらば猶よく聞えぬべし消てうき身は泡よりいひて消てうき水といひかけて下に流れてといへり【眞淵案上の歌とかけてみるにたえなくながら少しか、りてあるを思ひ頼む也】

よみ人しらす

みなせ川ありて行水なくばこそつひにわが身をたえぬと思はめ水なせ川を以て水無を人の我になさけなきにとり有りて行はながらふるなり人をさして水なきといへど水は

有りて流行をその水名の如く絶てなくならばこそ人の我に絶々なるも終に我身を一向におもひ忘れぬるとおもはめ水無瀬川といへど有つ、行水有るごとく猶おもひにかけとまりて有となり
萬「うらぶれて物はおもはじみなせ川有ても水は行てふ物を。此歌を全くとれり萬四「戀二毛曾人者死爲水無川下從吾瘦月日異。榮雅抄に水無瀬は後鳥羽院執し思しめされける所にて御屏風の繪に水無瀬河書たる所を歌によむとて定家卿水無瀬とか、れけるとぞ眞淵案に是めづらしかず萬葉十二に水無瀬と書たる有又は七夕の歌にも水無云川とも書りさらすばおもしるからず國史には水生川とも水主川とも書主は誤なるべし萬には只水瀬とのみも書けり

みつね

よしの川よしや人こそつらからめはやくいひてしことわすれじよしの河はよしやはやくといはん料なり契曰今こそつらくとも人のむかし云しことのはをわすれじとよめる歟又わが人に契りたる詞をたがへじとよめりともきこゆ右三首一類眞淵案に契が始めの注はこそといふ詞をとりそこなへり人こそつらからめわれははやくいひし

とをわすれずたがへじとなりこそにてをばにて定かなり榮雅抄にもとわがいひたるをば、わするまじとなりと有は我ことばを人のわするまじきとおもひ給ふにや猶こそにてをばにかなはずみつねなどの歌に長じたる所なりいと詞直ほにしてたしかに感情ありて風調たぐひなし吟ずるごとに袖をまばり侍る

よみ人しらす

世の中の人の心は花染のうつろひやすき色にぞありける六帖腰句「月草の。契曰花ぞめといふも露草の花にてをむればいふ宇治拾遺物がたりに色青き大きみを青經とつけてわらひける事をかけるにも色は花をぬりたるやうにあをしるにてとかけり世の中の人とひろくいひて心はひとりにあるなり眞淵案此注あたれり誰かかくいはん

心こそうたてにくけれ染ざらばうつろふことしをしからましや契曰是は右の歌と二首にて心をいひはてたるなるべし萬葉には此體多し心は我心なりうたては世上にいふうたてしきなり竹取物がたりにうたてもの、たまふかなといへり物の重なるをいふ○色ともいはでぞめざらばといふは上の花ぞめにすれるなり別人の歌ならば用を

花にしもたとへていとせめて心をなくさむなるべし

よみ人しらす

今はとて君がかれなば我やどのほなをばひとり見てやしのばん契曰女の歌とみえてあはれにやさしき歌に侍かな下句はふたり見たりし時を思ひ出てや忍ばんといへり或抄に見て忍ばんをなくさまん心も有とあれど獨見てやといへるなくさまんとの心にはみえぬにや右四首一類萬九石河大夫遷任上京時播磨娘贈歌「たゆらぎの山の尾のへの櫻花咲ん春べは君を思ばん。眞淵案或抄の説はとるにたらず契沖が見る所おもしろしまかしながらまのぶといふ詞を古きを忍ぶといふとのみおもへるなるべし今引萬の歌もおもはんといふべからず思字書てもまのぶと訓例前々いへりまのぶは萬には堪忍のかたと戀慕の方と同辭別言なり今の歌も慕のかたにて其人をまたふなり

むれゆきの朝臣

忘れ草かれもやするとつれなきひとのこゝろに猫はおかなん歌の心あきらかなり

寛平の御時御屏風に歌かゝせ給ひける時よみて書ける

いひて體をあらはすと知べし右二首一類眞淵案うつろふは色の變なり又あるをいふこゝ、よりかしこへうつるも同じ理なりうたての事は春の部にいふくはしくは萬葉にいふ

こまち

色みえてうつろふ物はよの中の人この花にぞありける契曰發句のてもじすむ説あれど心の花誰か其色をみし歌はさのみよむ事なれど濁るは直なり眞淵案に濁は唱あしとて知て澄といへどそれらは後來華のみ好む人の言なり古を失ひ侍るもかゝることよりおこるなり女房などはさる事も多かれどそれは世の大道に用なし榮雅抄色の見えてうつろふとて濁るはかなはずと有は甚しき誤なり

よみ人しらす

我のみやまをうぐひすと鳴わびん人の心の花とちりなば花とちるとは我はあらず他に心のちるをいふべけれどうつるもちるも同じくよめる例なり上に「たれゆゑにみだれんとおもふといふも似たることなり

そせい法師

忘れ草何をかたれとおもひしはつれなき人の心なりけり契曰忘れ草は何をたねとしてか生らんと思ひつればつれなき人の心が種にて有けりと始て知なり或抄にわが心に生よと思ふ忘艸の種はつれなき人の心よりおこる義なりといへるは叶はず此歌上に「涙川何水上を尋ねけんと有し歌に似たり二首一類小町集「忘れ草わが身につまんとおもひしは人の心に生るなりけり。眞淵案に或抄の説は例の附會入ほかを好む注なるべし前後の歌も一通りに人の我を忘れ或はおもひはなるゝにて知るべし

そせい法師

秋の田のいねてふことしかりけなくになになうしとか人のかるらん除材抄云いねとてやらふ詞をもかけたることなきに何を我にはうしと思ひてか人はかるらんといふ事を秋の田の稻とつゞけ稻は秤にて懸る物なればかけなくにとそへ刈物なればかるゝにそへたり是顯昭注の心なり定家卿かけなくにの季句あまりにやと同心し給はねど後撰「秋の田のいねてふとをかけしかば思ひ出るぞ嬉しげもなし。六帖「我つめるいたづらいねのかさならば

けんげい法師 又はなし

忘れ草何をかたれとおもひしはつれなき人の心なりけり契曰忘れ草は何をたねとしてか生らんと思ひつればつれなき人の心が種にて有けりと始て知なり或抄にわが心に生よと思ふ忘艸の種はつれなき人の心よりおこる義なりといへるは叶はず此歌上に「涙川何水上を尋ねけんと有し歌に似たり二首一類小町集「忘れ草わが身につまんとおもひしは人の心に生るなりけり。眞淵案に或抄の説は例の附會入ほかを好む注なるべし前後の歌も一通りに人の我を忘れ或はおもひはなるゝにて知るべし

あふばかりなし何にかけまし。此らによればいはれ有
 願注にかけなくには又おもひかけずともいひつべしと
 有はいはれすすでにいねてふこともいへる物を眞淵案
 にかけてなくを季句とするはあまりなるべく誰もおもへ
 ど六帖の歌たしかなるより所なればさて有べし、かし
 稻何東などは年貢にいへどもはかりにかけたる事は
 まだきかす○東萬呂口いねてふは行去といふ言なり人
 かるらんは稻を刈といひ逃るといひかけたたりいねとや
 らふに逃ると云かけたたり眞淵案に眞名伊勢物語曰云々
 此夫逃而奥爾隱爾計利女「彼逃利天晴幾代之屋門成哉
 將接人之音信毛不爲。彼逃利はあれにけりとよむにて
 荒たるといふのみなるを狂言に書たるなりされども此
 夫逃てといふにけりといふ詞を入てよめるは物語作
 者の一興にそなへたるなりこれらも今の證にあらぬに
 も侍らす○いね稻を行去にかねたりかくるは稻をかり
 て牛木にかくるにそへたりかるらんは刈を離るによせ
 ていふ言は稻といふとかりてかけぬになにを牛木にし
 ていねをかるらんとなり行去といふともいひかけぬに
 何をうしとてか人離れいぬらんとか

きのつらゆき

初雁の鳴こそわたれ世中の人の心の秋しうければ
 世の中の人といひてさす人ある例いとおほし大様にて
 おもえろし

よみ人しらす

哀ともうしと物をおもふ時などが涙のいとなかるらん
 契沖云人をあはれと思ふ上に又うしとも恨みて一方な
 らず物をおもふ時は心の念々にいとまなきをいかなる
 隙より泪のちり來て其も又いとまなく落らんと怪しみ
 思ふ心也いとなかるらんはいとまなかるらんのを略
 後撰「春の池の玉もに遊ぶには鳥の足のいとなき戀も
 する哉。同「日ぐらしの聲もいとなく聞ゆるは秋暮が
 たになればなりけり。眞淵案に第一二句解いとむづか
 しまづあはれといふ事をしらざりけり是は人をあはれ
 みかなしみといふことばのみにはあらずア、といふ歎
 の言なり次の歌上の歌にもうしといふ詞有とも人に
 うらむるにあらず身をつみてうしとおもふなり人を恨
 る類にあらずさればあはれともいふもうき時は歎嗟
 する事なればかさねていふなり下にいとなしといふに
 上につよく物おもふことをいひ出したるなり契沖が注
 いとむづかし只かるく見るべしされば明らかなり

身なうしとわしふにさえぬ物なればかくしへぬる世にこそ有けれ
 契沖云身のうき時は消もうせなばやと思へどそれもか
 なはねばかく人にも忘られて有にもあらぬ身ながらせ
 んかたなくながらふる世なりとよめり新古今「忘られ
 ばいけらん物かとおもひしにそれもかなはぬ此世なり
 けり。此歌の心同じある人腰句「おもひにきえぬとよみ
 火にそへたりといへば流布の本思の字のみかけり正本
 を考へて定むべし眞淵案にうしとおもひには古のつ
 めけがらとも聞えず只今のかた亥かるべし

興侍藤原直子朝臣

六帖内侍のすけきよ子とあり

あまのかるもにすむ虫のわれからとねをこそなめ世をばうらみじ
 此歌を伊勢物がたりによりにていふ説は物語を實事と思
 ひとれる人なりそは云にたらず委しく物語の考にいふ
 契沖云藻にすむ虫をわれからといへばかくはつゝけた
 りわれからとは何事もわが身からとおもひ人はうらみ
 じといふをうらむるとは侍らじ拾遺「君を猶うらみけ
 る哉蟹のかるもにすむ虫の名を忘れつ。同「蟹のか
 るもにすむ虫の名はきけど只われからのつらきなりけ
 り。伊勢物語「戀わびぬ蟹のかるもに宿るてふ我から

身をもくださつる哉。榮雅抄にあまのかるもにつきて
 此虫我からと身をほろぼすよりの名なりと有眞淵案に
 あまのかるもには此虫のみつき侍るや通らぬ説なり
 此歌などいと深き傳へなどあるといふはかたはらい
 たし

いなば

契沖云桓武仲野親王基世王因幡顯昭秘注云此人の名を
 教長卿は稻葉とかけり目錄には因幡とあり基世王女也
 彼王仁和五年正月任因幡守云々或本權守云々

あひみぬもうきも我身のか衣おしひしらすしとくる組哉
 人のつらきにあらす我心と人にあはずそれ故にうき思
 ひのあるも自から心よりなりと云かるにひものとするは
 人にあふべき前相のごときなるは我心を下ひもはおも
 ひまらずとなりひものとするを顯昭秘注に教長卿説無
 名抄與儀抄など引てさまぐ論する無益なりか、る謔
 はとけては人にこひらる、相とも人にあはん相とも人
 を戀ん相ともみづからときて祝ふともさまぐに萬葉
 によみたれば歌に隨て釋することなり實録の論の如く
 覺ゆるは虚實のけちめをまらぬよりなり契沖人を恨み
 などしてあひみぬもさて絶てうきも我心づからのとな

り此ことわりをえらす又あはんずる様にひものとする
よとなり云々わが身からといふに中にもじ有ものび
やかなり萬葉仙女歌「あにもあらずおのが身のから人
のこのこともつくさじわれもよりなん。眞淵案に恨み
てあはざるか絶てうきか歌にさだかならねば入ほかな
り何事かありてさりがたくあはざらんうきも何事かう
かりけんわがあはぬよりはてはうき事も有けん又わが
身のからといふはさすがに契沖が論なり東萬呂曰のも
じを捨て見る説も有べけれども通音にて我ながらと心
得べきか○眞淵案に萬十六「豈藻不在自身之柄人子之
事藻不盡我藻將依。此歌自身之故といはゞ之のもじ聞
ゆべし

寛平御時ささきの宮の歌合の歌

すがのいたおみ おみと書て萬
むべしむと書 葉におんとよ
は後なり

三代實錄三十二云元慶元年十二月十六日右京人從五位
下行山城權介船連副使藤原藤權少允正七位上津宿禰輔
主主殿允大初位下葛井連直臣等三人賜姓菅野朝臣其先
百濟國人也同三十六云元慶三年十一月廿五日庚辰中宮
大進菅野朝臣直臣等並授從五位下。榮雅抄に忠臣と有

約上略中略下略のさたあるなりたゞ聞を延たるなり

あふ事の時ほら絶ゆる時にこそ人のこひしきこともしりけれ
契曰もはらは専一純一なり竹取物語りに「もはらさや
うの宮仕つかうまつらじと思云々。伊勢物語「もはら
あひこともえせで。源氏夕霧「もはらうけひかずと頭
ふりて云々。常の詞にはいへど歌にはまれなり日本紀
に専の字をたうめとよめるは此もはらの古語也眞淵案
るに土佐日記に「あはちのたうめの歌にめで、云々。和
名抄云日本紀專領二字讀^{太字女}今案專訓^{毛波}專一之義也
太字女者毛波良之古語也今呼老女爲太字女故次於^耳
顯昭秘注には「あふこともいとまたえぬると有て注云
いと最もいふなり教長卿はいたくたえぬるといへ
り私云心は同じけれど詞たがへり云々眞淵案に如此あ
りて異事無は顯昭の此の本にはいとと有りしなるべ
し今もはらと有をおもふに最の字をかきしをともにも
はらともよむべきなれば後に兩様によみたるなるべし
歌詞に他に見あたらぬをおもへばもはらは誤なるべし
其上顯昭は古人なればいとといふにまたがふべし扱
いとをも教長卿いたくたえぬると注せしを詞たがへり
と有は非なりいと痛の義にて物をつよくいはんとて

は暗記なるべし
つれなきを今はこひじと思へども心よわくもおつるなみだか
つれなきとは逢見て後につれなきなるべし篇次まかり
涙かは哉なり新撰萬にも入

伊 勢

人しれず絶なましかばわびつゝも無名とだにもしはまし物を
六帖二句「やみなましかば。人にまられず申たえたらば
佗ながらもなき名ぞとだにもいひなすべきを人の知ぬ
ればなき名とさへえいはぬなりと契沖いへり

よみ人しらす

それをだにおもふことゝてわが宿を見きとないひそ人のうたがひ思
契沖云今そればかりの事も有しより思ひなれたる事と
て人の聞所に我宿を見つるとないひそ人のうたがひ思
ふべきにとなり中々にまられずまらぬ昔にかへりて絶
たる時の歌なり或抄に初二句をそれかくすをだにも我
をおもふこととてあるべきなりといふは不叶後撰「な
き人を人のきかくにかけじとて忍ぶるほどぞ忘るとな
見そ。眞淵案きかくを秘注などにもいろくいへり古
言をまらざれば是計の安き事をさだかには解ざるなる
べしかきくけこの通音にて延たるなり惣じ古歌は延

なり萬葉に甚太痛など書り皆いたきといふ心なり詩な
どに愁殺笑殺痛哭などいふはいづかたも同じことなり
此歌大和物語に入は詞書にて心をたがへり

わびはつる時さへ物のかなしきはいつこを忍ぶなみだなるらん
後撰重て載て詞に男の忘れ侍りにければとて伊勢が歌
とす伊勢集とあり此集の後に作者まられたりけるかおほ
つかなし契沖人のたえてわびはつる時さへ猶とにかく
に忘れやすく物の戀しうおもはるゝは何をなごりとま
のびてか涙はおつらんとなり眞淵案に篇次の上の前に
「今しはとわびにし物をといふも同じ絶ぬる事をおも
ひなやみぬるはいまだし今は其わぶこともいたりてわ
び終時にはもはやまたふかたもなきを猶かなしく物の
おもはれてなみだの落るを下句へ泪を置て自うたがひ
いふなりさらでは落句と意たがふなりいづこをまたふ
などいふあたり次に恨みてもといふにつゞけばひとを
猶うらみたる泪と聞ゆ

藤原おきかぜ

恨みてしなきていはいはん方ぞなき鏡にみゆる影ならずして
契沖云落句のはてにはの字を加へて見るべし眞淵案に
はの字加へてもさも有べしさらでも影ならずしてとい

ひのこして人は絶はてたればと云を去らせたりいはんかたぞなきはせんすべなしいはんすべなしと云に同じ榮抄に鏡に見ゆる影ならねばと有は淨婆梨の鏡とやらん人の心をうつすなどいふいと笑つべし去かる心此歌にはみえず是は絶たる後のなげきの部の歌なるを知給はでいとあぢきなし影ならずしてとは萬葉にかかば不有影而といふなり仁安の約奈なればにあらすをならすといふなりかゝるといふにたらねどまどふ人多ければかりにいふ

よみ人しらす

夕されば人なきと云を打はらひなげかん爲となれるわが身か契沖云人の絶て後かゝるなげきせん爲とてうまれこし我身かと諸共にもふさぬ床をはらひなれたる事とて打はらひ女のぬるとて歎きてよめる心なり萬「真袖もて床打はらひ君待とをりしあひだに月かたぶきぬ」同「あすよりは我玉床を打はらひ君とはねすてひとりかもねん。眞淵案になれるは成たる我身かと今の身をなげくなり云々契沖がうまれこしといふは過たり夕さればとあるにて生れとはいひがたきを知べし

わつつみの我身こす波立かへりあまのすむてふうちみかた

へるはかなはず變果たる人を立歸恨る事もはかなしと思へるなり

あらを田をあらすきかへし返しても人の心なみてこそやまめ猿丸集には下句「みてこそやまめ人の心を。秘注云あらを田をばたびくすき返しつくるなり初にすくをばあらすきとてあららかにするなりつぎに又すくなり眞淵案に前の歌よりの篇集いとおもしろし新古今公忠「春にのみ年はあらなんあらを田を返々も花を見るべく

ありそみみの濱のまさごとたのめしは忘るゝことの數にぞ有ける契沖云是は「我戀はよむともつきじといふ歌より出たるべし濱の眞砂の數によせて末久しく變らじとたのめしはかへりて忘るゝことのおほきなりけりとよめるなり後撰「ときはにと頼めしとはまつほどの久しかるべき名にこそありけれ。清正集「忘れしの長きためしにたとへこし濱の眞砂や數つきぬらん。うつば「ありそ海のまさごの數は去りぬれどかぞふ計のあとをこそ見ね。眞淵案に秘注も榮雅抄も似たる様して必ほかなる所あるなり契が注に我戀はよむともといふ歌序の注にいふが如く戀をよむと云と古歌のつゞけにあらす一本君が代はよむともと有をよしとすさればこゝに引ても

秘注云普通本にはわが身かす波と有兩證本にはこす波と有末松山波こす心にもよせたるにやさればわれをおきてさきに人にあふを我身こす波とそへよめるにや後撰定文歌云「濱千鳥頼むを去れとふみそむるあと打つけな我身こす波。眞淵案に榮雅抄にあと打つけよと有も誤にてあと打つけななるべしさて榮雅抄に蟹のかづきするによせて我身こす波立かへりて人をうらみつるとなりわたつみのとよむがならひなり又我身こす波は我をおきて……松山の波かといふ人あれど末の松の心見えず眞淵案に下句にあまの住むてふといひ上に我身こす波といふはかづきの體にて表をつづけたるともいふべけれど只立かへりうらみつるとのみは何のことも去れず絶たる部の上に又それを立かへりいふ篇なれば末の松山の歌いとふるければ本歌に其心をいへる歌多しされば顯昭の説ならでは我身こすといふ句をさまりがたし序歌もつゞけやうこそあれ榮雅抄のごときいと非なり又わたつみのことならひなどいふは古語のさまを去らぬ人の言なり秋の部に委しくいふ契沖云是は末の松山の歌をとれり密勘にすべて波こゆといふ心はと有或抄にわが身こす波をあまのかづきするによせてい

もろ共に經ん代の數をたとへたるは忘るゝことの數と變しなりたりといふにも叶ふなり又榮雅抄に萬葉第四に「八百日往濱乃砂毛我戀二豈不益歟興津島守とあるを「濱のまさごと我戀といづれまされりと書るは萬葉は去らで人の言まゝに書給ひしなるべしかゝる違多き事なりあにまさらずかとよむべし去かれは濱のまさごは多けれどもわが思ふことの數にはまさらざる歟いかゝと島守に問かけ我思の數は濱のまさごほど多あるといふなり此歌引る始は秘注にあるにあにまさらめやとして上はたがはぬを又さにてはあしとおもひて萬葉をも去らで直したるなるべし榮雅抄よりは可なれども猶めやとはよみがたし甚意たがひたり今の代萬葉を引こと皆たがひ有と知べし

蘆邊より雲井をさして行雁のいや遠さかる我身かなしも萬「秋風に山飛こゆるかりがねのいや遠さかり雲がくれつ、

しぐれつゝしみづるよりもこのはの心の秋にあふぞわびしき一二句は秋時をいへりそのかなしきよりもとなり新萬「ことのはをたのむべしやは秋くればいづれか色のかはらざりける

秋風のふきと吹きぬるむさしのはなべて草葉のいろかほりける
契沖云秋風は人のあくにそへたり武藏野とは紫の一も
と故の心にてなべて草葉の色かはるとは「草はみなが
らあはれといひしゆかりの人さへつらき人のわれをあ
きぬる時は皆心かはりぬとそへて言なるべし眞淵案に
諸抄皆草のゆかりなどの心を思へりと注せり玄かれど
も此歌よみ人玄らねば關東にてよみしも玄るべからず
今の如くはあらねば實景よりよみたれば武藏野も一向
に紫のゆかりなくともあるべし

小町

秋風にあふたのみこそかなしけれ我身むなしくなりぬとかしへば
照昭秘注云秋風にあひぬる田はみのいらぬなり又云そ
れを特によする歟榮雅抄も是に同じ契沖曰家集詞書に
實もなきなへのほに文をさして人のもとへやるにとい
へり秋風にあふ田はみのいらぬなり田のみを憑にそへ
ていみじくたのみしことも忘られぬればむなしくなり
ぬるといふなり眞淵案に大様右の如し我身むなしくと
いふは死をいふにあらす我身かひなくといはんがごと
しそれを田のみの無よりむなしくといひたのめしこと
の我身にむなしく成たるとなりさて是は秋の野分をい

ふなり

ふみと書てふ
んとよむぞ音
便の音なるむ
と書は非也

秋風の吹うらがへす葛の葉の恨みてもなほうらめしきかな
六帖第二句「吹返さる」。秘注云萬づの草の中に葛のは
は殊に風にうらがへるなり此歌を本にてくすのはのか
へるうらみなどはよむなり萬葉にも「みづくきの岡の
くすはを吹かへすなどよめり又「まくす原なびく秋風
吹ごとになどよめり契沖曰此歌も又秋風にあくをそへ
たり眞淵案に上のつゝき草ばのいろかはるといひ秋風
にあふたのみといひたれば此第二句も秋を厭にそへ吹
うらがへすをあきて心の變るといひそへたるべしまか
らでは下にうらむといふも何をうらむとも聞えずあか
る、をうらむとのみもいふべけれどあきてかはるをう
らむる篇次なり又ふきうらがへすの詞つまりて聞ゆる
に六帖に吹返さるゝとも詞いとよきにはあらねど語は
と、のひて侍る玄か下にうらみといふに上にうらが
へすと有は古歌體なれば今を用ふべし又秘注此歌より
葛にうらみをよむといふさも有べし萬葉には吹かへす
とはいひたれどうらみとまではいはずりきされば今を

始なるべし

よみ人しらす

秋といへばよそにぞ聞しあだ人の我をふるせるなにこそありけれ
秘注云あだ人とはあだなる人なり我をふるせる名にこ
そは捨たりといふ事なりそれを秋によせてあきといふ
名といふなり○眞淵案にあだは他の義のみならず花の
あだなる露のあだなるともいへり時雨つゝといふより
是まで秋を飽にそへたる所は一類す中に中三首は秋風
といへり

わすらるゝ身をうちほしの中絶て人もかよはぬ年ぞへにける

又ほこなたかなたに人もかよはぬ

眞淵此注にても聞ゆべけれど左注は惣て後人の筆にて
とらず此はし作る事或抄云國史孝徳天皇御時大化二年
道昭和尙始造宇治橋云々大化二年より延喜御時にいた
り二百卅餘年をへたり道昭作りたる後此橋中絶たるに
や云々【扶桑略記云大化二年丙午始造宇治橋件橋北岸
石銘曰世有釋子名曰道登出自山尾惠潛之家大化二年丙
午構立此橋濟度人無山云々件道登者本高麗學生元興寺
沙門也云々國史云山背國宇治橋道昭和尙創造也云々】
案に續日本紀第一文武紀云四年三月己未道昭和尙物化

云々乃山城國宇治橋和尙之所創造者也云々此橋の中絶
たる事は古記に證を見ず契沖云身をうちほしとよする
によりて中絶て人もかよはぬともいへり是はたゞ歌の
上なり誠にうち橋にかけてさは有まじきなり眞淵案に
略記にはかの橋の石銘に道登と有國史と略記にさすは
續日本紀なりそれには道昭と有音の似たるによりたが
ふか榮雅抄に國史にといふはおぼつかなし何の國史に
や

坂上これのり

逢ことをながらのはしのながらへてこひたわる間に年ぞへにける
あふことをなきとうけたり是も又中絶ての後あふこと
なきなりこひわたるといふ以前も皆戀の部なるは沼土
をよせたり

とものり

うきながらけぬるあわとりなりな、ん流れてとだにたのまれぬ身は
六帖第二句「きえせぬあわと」。五句「たのまれなくに。
家集には二句「消ぬる泡と、有照昭秘注云水の泡の水
にうきながら消ぬるといふ浮を心うきにそへたり流れ
て末の世にあふべしともいふ頼もなしと云なりされば
玄なんといふなりとあり後撰「流れての代をも頼まず

水の上のあわにきえぬるうき身と思へば。中務集「うきながら消せぬ物は身なりけりうら山しきは水のあわかな。眞淵案になりな、ん萬二「秋のたのほむけのよれるかたよりに君により奈名こちたかりとも。此奈名の所になりな、んの言をいひぬ奈利奈名の利奈の約良なり故に延てはなりな、ん約めてはならなんといへりなんはもとなもにてもは助辭故になと計いひおさへたるもなんと同じ

よみ人しらす

ながれてはいしせの山の中に落るよしの、川のよしや世の中榮雅抄云男女なからひはながれてよき事はなしかぎりなくむつまじき中も終には別離のさかひにおもむく此いもせの山の中にさへよしの川のながれ落てへだつるなれば戀の道さまぐなれど定めなきをよしや世の中と歎念して心深き歌なれば戀の部のとちめに入られたる也流れてはとは是より末のことをいふと有眞淵案に男女の中何ぞながらへてよき事なきのみならん又終に別離におもむくとは死別離のこにや例の佛の道を歌に取交いふよりかくのたまへるなるべし此歌に然迄の事はなし又榮雅抄引る歌皆誤多し萬第七「背の山爾直爾

向へる妹の山事聽屋毛打橋渡。此ゆるすやもをかもと云も非也同第八「木道爾社妹山在云櫛上二上山母妹許曾有來。是を紀伊にこそとて引給へるはいか成とにや古人今只きと社いへきいと伊をそへたるとはなし其上木道とかけるをや又第三句石上とは何事をやかつらぎ山に二神山といふことは古記の例有事をまり給はざる成べし萬七「吾妹子爾吾戀行者之雲並居鳴妹與勢能山。是を我せことわがこひ行ばとはいかでかよまるべき○契沖曰流れてはといふに長らへきてはの心あり妹背の山のなかにさへ吉野の川の流れ來て隔たりはつるをおもへば男女のなからひもすべて我のみならず行末皆かかる事なりよしや世の中よとひろくうらみたるなり序に吉野川を引てうらみきつるにとかける此歌を思へるなりさて男女のなからひをすべといひたる歌にて戀の歌のはてにも此歌をば見たてたるなるべし或抄に妹背の山の中に落るとは二ツの川のたえぬ理なり隔る心はあらずといへり二ツの川とはいかに心得ていへるにかあらんおぼつかなし又中に落ると云に妹の山と背の山とのへだ、る心なくば一首の内何をとちめにてかよしや世の中とは恨すつべき紀の川をへだて、背の山は北

に妹の山は南に有紀の川はよしの川の末の紀の國にいたりての名なり木はよしの川なる故によしやよの中といはん爲に水上の名をいひて上にながれてはといひつればとわりたがはず萬葉に「うまさけのみわの山おほせ泊瀬の河といふが如し三輪にてはみわ河なれど泊瀬河の末なればはつせ川といふに相違なし此に准いふべし夫木抄第四河落花といふを平泰時朝臣明玉「春たけて紀の川白く流るめり芳野の奥に花やちるらん。此歌を思ふべし二首又類をもて連ねたり六帖「人ごとはあまのかるもにまげくともおもはましかはよしや世の中。眞淵案に契沖が注大かたよろし歌説はいまだあたらずおよそいもせの中にへだてはあるべからねど世の中てふものは思ふさまにはならぬ物よりへだ、るならひも有なりさればよしやとばかりにゆるす詞にて心にはあらねど世の中のならひにしあればよしやといふ心なり此歌などは天の川のへだ、れるたぐひにて中をへだつる心なりいもせの中二ツの川のことなどいふ説はかの傳授の説よりいふなり傳授の説皆偽りごとにて歌の正義なることひとつなしとるにたらず又いも山背山の事榮雅抄に紀伊の國に妹の山背の山とてふたつ相む

かひて有その中に落たる川をよしの川といふ又かの所の土民の中けるはいもせの山外に又いもせの山ありといふと有これらはいとつたなしか、る地名など後世とりたがへること多し古書を證としてたゞさは有べからず去かるに土民のことを何ぞ證せん是は契沖が説よろしその上東萬呂曰萬葉一云越勢能山時阿閉皇女御作歌「此也倭爾四手者我戀流木路爾有云名二負勢能山。此皇女の背とよみ給ふは日並知皇尊なり此を以ておもふに大和にあるいもの山紀道に有は脊の山にてその中を下る川をきの川とも水上に付てよしの川ともいふなり大和と紀伊との境なる川なるべし眞淵案に此歌はひろく夫婦の中をいひていとよく辭えらべと、のひたればげにも卷の終におくべし

續萬葉論卷第十五終

續萬葉論卷第十六

哀傷歌 三十四首

いもうとの身まかりける時よみける

小野のたかむらの朝臣

玉葉集戀一いもうとのをかしきを見てかきつけて侍けるとして歌有又新千載戀二にも妹によする歌有は此朝臣の歌とも見えす

なくなみだ雨とふらなんわたり川水増りなばかへりくるがに顯昭注云わたり河とは三途川をいふみつせ川ともいへり地獄書を見て拾遺雜下菅原道雅女「みつせ川渡るみさをもなかりけり何に衣をぬぎてかくらん。十王經には奈河といへり二七亡人渡奈河千郡萬縁涉紅波引路牛頭肩挾棒云々契曰彼十王經といふは信用にたらざるものなりされどわたり川みつせ川など聖教にたしかに見ゆる事なけれど昔よりよみ來れり三代實錄第二緣皇太后御願置安祥寺年分度者三人願文曰奈河之渡平生之財不隨平等之前君臣之序無辨是奈河平等は十王經に依れる詞なり平等は十王の中の平等王也○神代紀上云伊弉諾尊乃向大樹放尿此即化成三日月津日狹女將渡其水

き川と云は君が生命までの名にこそ有と也血涙は毛詩云「鼠思泣血無言不愠。易曰「泣血漣如其外にも多し

堀川のおほきおほいまうちきみ身まかりける時にふか草の山にをさめてけるのちによみける

僧部勝延俗姓紀氏承均兄也餘材抄

餘材抄云堀川亭は昭宣公の宅なる故に堀河の太政大臣といふ寛平三年正月薨五十六源氏藤のうらはに「三月廿日大殿の大宮の心忌日にて極樂寺にまうで給へり。抄に深草に有之昭宣公建立の所也古今に深草の山畑だにたてとよめるも此所なりと今案に宇治拾遺に極樂寺は堀河太政大臣兼道公の建立し給ふと見えたれば源氏抄の説誤なり榮花物語云又云又こばたといふ所は太政大臣もとつねのおとゝ後の御諱昭宣公なりそのおとゝのてんじおかせ給へりし所なり藤氏の御はかとおぼしおきてたりける所云々

うつせみはからを見つゝもなぐさめつ深草の山けむりだにたて僧正遍昭集にも此歌いりて詞にふか草の山にをさめてまつりしを思ひまゐらせん心のほどはおもひやるべしとして下句「けむりだにたてふか草の山と有六帖も云かり餘材抄にも如此ありてさて遍昭集は信すべからず

之間伊弉諾尊已至泉津平坂この巨川といへるや渡り河にて待らん六帖「うく有か昨日の小雨わたるせに人の涙を淵となさねば。眞淵案に此朝臣は和漢の學軌令の義解等を作る人にて古き世の人ことに彼傳記等に佛を信じたることなしなれば是神代卷にいふ伊弉諾命伊弉册命をえたひてよもつ國にいたり給ひし時ゆばり大河となるをひさめわたらんとする間にといふ是今の水まさりなばかへりくるがにといふに似たりたとへその詞は不似ともわたり川といふは是よりもとづけり

さきのおほきおほいまうちきみを白川のあたりにおくりける 夜よめる

ちのなみだ落てぞたぎつ白川は君が代までの名にこそありけれ 忠仁公也延喜の比太政大臣只二人也仍雖不辭官前と云なり前後のよし也眞淵案に三代實錄云貞觀十四年九月二日太政大臣從一位藤原朝臣良房薨云々十二月十三日己酉先是天安二年十二月九日定十陵四墓獻年給荷前幣是日四墓加太政大臣贈正一位藤原朝臣良房愛宕墓山城國愛宕郡或抄に白河にすみ給へばと有は非なり此歌のはし書は白川のほとりにおくりける夜とあるを見ずや歌の心は今血の涙の瀧とおちて血の川と成ば白

詞書に深草の山にをさめける後といひたれば土葬にしたるとみえたりよりて歌の心うつせみははかなき物なれど残れるからを見つゝもなぐさむるを人のからはうづみかくせばせめて火葬にして煙をたて見てなぐさまんとなり「うつせみは顯身の事なるよし冠辭考にくはしくいへり此比は空蟬の字に泥てたゞもぬけの事と思ひてよみたるは誤なり」又案るに土葬火葬をいはずをさむるといふべければ人はからをも残さねば煙だに今まばしたてとよめるにや煙だにたてふか草の山こそたけ高く心こもりておぼゆるを今のごとくのせたるはこを先としてつくるはぬをよしとせるなるべし眞淵案るにうつせみは顯身の事なるを此比誤れり委しくは冠辭考にいへりもはら此比蟬のもぬけの事と思ひてよみたるはひが事なり

かんつけのみれを

かみつけと書て音便にかんつけとよむべきなり又かみつけの、と有べき事なり契沖云崇神紀云以豐城命治東是上毛野君下毛野君之始祖也三代實錄第七云貞觀五年十月庚辰天皇宴太政大臣於内殿以賀滿六十之齡太政大臣家令從五位下難波朝臣藤原野朝臣弟門並授從五位

上從五位下上毛野朝臣滋子正五位下慶賀之餘歡恩獎及
餘家人といふ中に上毛野氏の女あれば峯雄も家人なる
事知べし

深草の、べの櫻し心あらばことしばかりは墨染にまけ
なき人を今をさむる深草の野べなれば櫻も心あらば人
の服衣をさる此春ばかりは墨染にさけとかなしびの切
なる心よりよめり公の薨は正月なれども詞書に深草の
山にをさめてける後にとあれば二月の末などに花の咲
けるを見てよめるものなり拾遺に朱雀院の四十九日御
法事にかの院の池の面に霧の立わたりて侍けるを見て
權中納言敦忠「君なくて立朝霧は藤衣池さへさるぞか
なしかりける。今は花さへ服きよと思ふいと切なり

藤原のとしゆき朝臣の身まかりにける時によみてかの家につ
かはしける きのとものり

拾芥抄に延喜七年卒とみえたり後撰にやまひし侍りて
あふみの關寺にこもりて侍ける前の道より閑院のみこ
石山に詣けるをたゞ今なん行過ぬると人の告侍ければ
おひてつかはしけるとしゆきの朝臣「逢坂のゆふつけ
になく鳥の音を聞とがめずぞ行過にける此たびのこと
にや

家集には第二句「ふちとなりつ」と有萬葉第二明日香
皇女木廬宿宮之時柿本朝臣人萬呂反歌「明日香川四我
良美渡之塞益者進留水母能杼爾賀有萬思一云水乃與杼爾加有益又拾
遺にも有落句たがひたり

藤原のたふさがむかしあひしりて侍ける人の身まかりける
時にとむらひにつかはすとよめる

閑院(宗子女也)

さきだゝぬくのやちたび悲しきはながるゝ水のかへりこのなり
八千度は數多なり流水……は日本紀第十九「豈圖一
旦眇然外遇與水無歸即安マサシハハツロキヤニ萬十五挽「ゆく水のか
へらぬ如く吹風のみえぬが如くあともなき世人にして
きのとものりがみまかりにける時よめる

つらゆき

契沖曰これは集なりて後に加へ入ける歌なり次の歌も
同じ或抄には友則此集秋部までの撰者なりといひ或抄
には撰集をはらぬに失ける時よめりといへる共に誤な
り其故は泉大將の四十賀は躬恒集に延喜十四年といへ
るに友則歌あればなり

あすしらぬわが身とおしへど暮の間のけふはひとこそ悲しかりけれ
拾遺六帖家集にも有六帖又家集には「いのちなれども

れても見ゆれどもみえけり大かたの空蟬の世ぞゆめにはありける
六帖並家集に第二句「ねても見えけりと有顯昭本にも
しかり又此集の一本にも見えけりと有からはしたが
ふべし

あひしれりける人のまかりにければよめる

紀貫之

夢とこそいふべかりけれ世の中なにうつゝある物と思ひけるかな
拾遺重載六帖第三句「世中をと有心は今におどろきて
こしかたをはかなむなりをと云はうつゝ、有物と世の中
を思ひける哉とつゞく古例なり今木世の中にと云は聞
えざる様にて却て後世になほしたるなるべし

あひしれりける人の身まかりにける時によめる
家集にはよの中つねならず心うかりし比と有

にぶのたみれ

ぬるがうちにみるをのみやは夢といはんはかなき代をもうつゝとほみす
六帖には第三句「夢といふ
あねのみまかりける時よめる

あねのみまかりける時よめる

家集には相知たる人のすまひのつかひに遠き國にくだ
るにと有り
(忠家集(風體抄)にてなりてしとみけり別をとむるしがらみなき)

と二句をいへり落句を家集には「あはれなりけれとす

たみれ

時しもあれ秋やは人のわかるべきあるをみるだに戀しきものを
萬十七哀傷長逝弟歌長歌句中「時之波安良牟乎婆太須
酒吉穂出秋之。同十九挽歌「何如可毛時之波將有乎眞
鏡見禮杼母不飽珠緒之情盛爾。拾遺別「時しもあれ秋
しも人のわかるればいと袂ぞ露けかりける。六帖時
しまれ秋やは人のわかるべきさるは夜さむになれる比
しも。同「おもふどちあるだに秋はかなしきに草のかれ
がれるを詫しき

は、がおもひにてよめる

凡河内のみつれ

父母の喪にあるを思ひといへること多し

神名月しぐれにぬるゝもみぢばはたわび人のたもとなりけり
契沖曰拾遺に冬おやのさうにあひて侍りける法師のも
とにつかはしけるみつね「紅葉はやたもとなるらん
神名月時雨ゝごととに色のまされば。是は今の歌に似
たりやがて是にや共に家集にはみえずわび人とは常は
世にありわびたる人のみいへど萬葉第九處女慕の歌に
「此道を行入ごとに行よりていたみなげかひわび人は
ねにもなきつゝといへるわび人に惑人とかけりかなし

みにまどへるをいへり眞淵案にわびと云は物おもひありておもひうんじたるを云よりその筋にもいへり宇良夫禮も同じく和備なり宇良約和夫禮約備にて和夫禮ともいふにて知べし後撰「から衣たつ川の山のみちばは物おもふ人のたもとなりけり

ちがおもひにてよめる

たゞみれ

ふちころもはつる、いとわび人のなみだの玉のをとぞなりける拾遺詞に服ぬぎ侍るとよみ人しらす三句を「君こふる。尼句「をとよなるらん。貫之集には腰句「君こふる。はつる、は喪服は端をぬはねば久しくしてはつるなり兼輔集「藤衣うきをかぎりにはつれつ、なみだの玉をぬきみだしつる

思ひに侍ける早の秋山でらへまかりける道にてよめる

つらゆき

朝露のおくて山田のかりそめにうき世の中をおもひつるかな眞淵案に第三句かりそめには深く思ひ入ぬをいふ末の句おもひつるかなのつるといふ辭にて前々の心をいふなり一本ける又一本ぬるとあり此中つるとけるとは此歌によして世の中のはかなき事をも前々は大きたにかりそめに思ひたりしが今ぞふかく世の常なきを知

と成べしつる哉とは過し事なればなり契沖曰朝露はおくとつゞけおくての山田はかりそめとつゞけん爲ながら道にて見る物につけてよめりしかれば朝露にもはかなき心こもるべし

おもひに侍ける人をとむらひにまかりてよめる

たゞみれ

墨染の君のたもと雲なれやたえずなみだの雨とのみふる拾遺題しらすよみ人しらす「墨染の衣の袖は雲なれや泪の雨のたえずふるらん。同歌の轉せるか六帖貫之「藤衣おりきるいと水なれやぬれはまされどかわくまもなし

めのおやのおもひにて山寺に侍りけるをある人のとむらひつ

かはせりければ返事によめる

よみ人しらす

あし引の山邊にいまはすみぞめの衣のそでのひるときしなし眞淵案に落くば物語に大將の妻の父の喪にかの里に行てこもりぬるを大將もこもらんとのたまひしを御子などあつかふ人なければこもり給はぬよしありしかればしうとの喪にもこもるなりけり拾遺「心にもあらでうき世にすみぞめの衣の袖のぬれぬ日ぞなき

源園の年池のほとりの花を見てよめる

嘉祥三年三月廿一日仁明天皇崩御此諒園のとしなるべし諒園は日本紀履中紀みものおもひとよめり字は尙書云諒陰三年不言王宅ツル寢亮陰

たかむらの朝臣

水の面にしづく花の色さやかにも君がみかげのおもほゆるかな顯注云水の面にしづく花の色とはしづくむといふなりされば普通の本にはしづくむと書りしづくむといふはうつるといふ心なり水面上にうつれる花の色やうにさやかにみえておほんかほのおほゆるとよめり萬葉云「藤波のかげなるうみの底清みしづく石をも玉と我見る。催馬樂云「かつらぎのてらの前なるやとよらの寺の西なるや江のは非にしら玉しづくやましら玉しづくや。密勘云しづくといふ詞心はさまでたがひ侍らすおさへてしづくむとは申にく、や沈むはそこへ入ひたるは水に入たりたとへばひたれるやうにて水波にあらはれゆられてかくれあらはる、様にするをしづくといふ又底よりつき出たらん石も波にあらはれてゆらる、やうにかくれてみえんを言べしとぞ申されし此引たる證歌にも是は叶て可侍契沖云萬葉第七に「水底爾沈白玉誰故心盡而

吾不念。此沈の字古點にはしづくむと有けるを仙覺證據をいだしてしづくと改められたり濱成歌經標式云如藤原宮内卿奉贈新田部親王歌曰美那曾已弊一句旨都俱旨羅他麻二句他我山惠爾三句己侶都具旨長四句和我母波那俱爾五句又顯昭のひかれたる歌にも又濱成式を引て證せられたればしづくは沈むといふことばの古語なり篁の比迄もよめるなるべし萬七「わたの底しづく白玉風吹て海はあるともとらずばやまじ。同十一「あふみの海しづく白玉しらすして戀せしよりは今ぞ増れる。此二首のしづくといふにも沈といふ字をかけり眞淵案に榮抄歌林良材を引てしづみたる花にては君が御かげさだかに見ゆるとはいひがたしと有案るに是も密勘によりての説なりしづみたるをさやかにあらずといはうきしづみ波にゆらる、がごときは猶々さだかに何の有とも見ゆべからず通せざる注なり又「蘆引の山の紅葉にしづくあひてちらん山路を君がこえまくなど萬葉を引此しづくあひては半あひてといふことなれば甚くと成をやさてしづくのくは計留約なりしづきて有なりしづは下なり

深草のみかどの御國忌の日よめる

【こ、はみはての口とよむべし猶かんざりまし、日とよむぞ古意なる】仁明天皇を申奉るなり延喜治部式云「三月廿一日忌東寺凡國忌日各請當寺僧一百口轉經禮佛輔承錄各一人玄蕃寮五位一人六位以下官二人皆詣寺以供事（以下太政官式）凡國忌者治部省預錄其日並省玄蕃應行事官人名申官前一日少納言奏聞諸寺司就寺供齋會事（治部式部式）但東西寺參議以上及辨外記史各一人太政官史生官掌各一人參。眞淵案是古へは桓武帝之御國忌三月廿一日に東寺にて行へり後世は唯空海が滅日をまつる日と思へりかなしきことならずや

文屋やすひで

草深きかすみの谷にかけかくし照日のくれしけふにやはあらぬ契曰深草のといはずして其心を草深きとかへして言は深き霞の谷とつゞけんとなり霞の谷とは折ふし三月にて霞の深きをもいへり六帖谷の歌にも「淺香山かすみの谷し深ければわが物おもひはる、よもなしとよめり今深草に霞の谷と聞ゆる所あれどそれは今の歌にて後の人の名付たりと知べきは六帖歌其證なり崩御を昇遐といふを昇霞ともかくは和訓のかすみも又かすかの心なれば和漢共に義通せりされば崩御の尊骸を深草に

をさめ奉るを霞の谷にかけかくしとはいへりて日のかくれしけふにやはあらぬとおほやけをば人の國にも日になぞらふるをこに此國は日の神の御末なれば日の俄にかきくらすなりおのづからゆふ日になりてくる、にはあらずまだ御世の盛と思ふほどに俄にかくれさせ給へるなり萬葉に草壁太子のかくれさせ給へる時舎人どものうたの中に「朝ぐもり日の入ゆけばとよめるがごとしけふにやはあらぬとは其日の世の中なげき我心のかなしみを今更に思ひ出てかなしび奉る心なり眞淵案に日本紀云（末に）自今後毎取國忌日要須齋也云々此訓は以麻與里乃千都爾爾美波天乃比爾加奈良壽於賀美須部之國忌二字波天と訓萬七三七云々駕能奈久良久良多爾之字知波米底夜氣波之奴等母伎美乎之待多武。東萬呂曰古葬于谷間此曰暗谷本暗津國也而爲名取愛而泣故冠于句也深草のみかどの御時に藏人の頭にてよるひるなれつかうまつりけるを諒間になりければさらに世にもまじらすしてひえの山にのぼりてかしらおろしてけりその又のとしみな人御ふくぬぎてあるはかうむりたまはりなどよるこびけるを聞てよめる

はもとよりなり清少納言にめでたき物の中に藏人を入れていはく「うへの近くつかはせ給ふ様など見るはねたくさへこそおほゆれ御ふみか、せたまへば御すゞりのすみすり御うちなどはなまわりたまへ云々。かしらおろしては文德實錄第一云嘉祥三年三月丙午左近衛少將從五位上良峯朝臣貞出家爲僧宗貞先皇之寵臣也先皇崩後哀慕无已自歸佛理以求報恩時人感焉

僧正 遍 昭

眞淵案に此集には俗なる時のをばよしみねのむねさだと書などするをおもへばこの時は遍昭とのみも有べし僧正と有は後人僧正の字落たりとてくはへしかもとり後に押費でかけるかおほつかなし

みな人は花の衣になりぬなり昔のたもとよかわきだにせよこけのたもとを昔字を書るにより衣のふるびたるをいふなどおもふ説は非なり羅薛衣なり隠士の體なり河原のおほいまうちぎみのみまかりて秋かの家のほとりなまかりけるにもみちのいるまだふかくもならざりけるをみてかの家によみていたたりける

近院の右のおほいまうち君

拾芥抄云河原院六條坊門南萬里小路東八町云々融大臣

家後寛平法皇御所四條京極西號東六條院融公寛平七年八月廿五日薨七十三也此歌はその秋なり本朝文粹第一源順河原院賦云々同第十四宇多院爲河原相府没後修誦文云々（起在）此誦誦文は延長四年七月四日なりうちつけにさびしくも有かもみぢらばしめしなき宿は色なかりけりこと書にはまだうすもみぢなるを反してかくいろなきとよみ給ふわたりことば書のつり合をよく見るべし有かは哉なり唐趙假過汾陽王舊薨詩今日獨經歌舞地古槐疎冷夕陽多うちつけは發語その事に即付てなり日本紀急居をツキウといふがごとくなるべし藤原のたかつれの朝臣の身まかりての又の年の夏郭公の啼けるを聞てよめる

つ ら ゆ き

郭公けさなくこゑにおどろければ君に別れし時にぞありける歌の心明らかなり

櫻のうゑてありけるにやうやく花咲ぬべき時にかのうゑける人身まかりにければその花を見てよめる

きのしちゆき茂行(祭雅抄)

花よりも人こそあだになりにつれを先にこひんとか見し

人ははかなき物といへど老てもながらふるを花は春を
限れば花をこそさきにこひんとは思ひしに思ひの外に
花よりさきに人をこふるなんあはれなるとよめり朗詠
「朝がほを何はかなしと思ふらん人をも花はさこそみ
るらめ。眞淵又案に人をまつは年ふるもの花は日敷も
なく散物なるに今見れば人はうせて花はあればいふ
あるじ身まかりける人の家の梅の花を見てよめる

つらゆき

色もかしむかしのこさに匂へどもうまけん人のかげぞこひしき
たゞ色もこく香もふかきがむかしの如しと云のみ六帖
に「のこさずとあるは誤なり

河原の左のおほひまうち君の身まかりて後かの家にまかりて
有けるに磯籬といふ所のさまをつくれりけるをみてよめる

菅家文章に大臣菟せられし又の年河原院やけたるよし
みえたり

君まさでけむり絶にし磯がまのうらさびしくも見えわたる哉
藤原のとしとの朝臣右近の中將にて住侍けるさうし身ま
かりて後人もすます成にけるに秋の夜更てもよりまうでき
けるついでに見いければしとありしせんざいとしげくあ
れたりけるを見てはやくそこに侍りければむかしをおもひて

よみける
右近中將利基内大臣高藤公兄中納言兼輔父さうしは曹
司なり

みはるのありすけ御春の
有助也

君がうみし一村すき蟲の音のしげきのべともなりにける哉
一村すきしげき野となりけるといふに虫の音もし
げき物なれば冠辭のごとくしてやがてあれたる秋の體
をいへり

これたかのみこの父のはべりけん時によめりけん歌どしとこ
ひければ書ておくりけるおくによみてかけりける

こ、にち、の侍りけんとは友則が父のなり契沖云或抄
に友則父は有常なりとかけり物にみえたる事にや有常
は惟高のおほちにてしたしく御供などせられければ
にさも有べくおぼえたり

とものり

ことならばこのはさへも消ならんみれば涙のたきまさりけり
父は消失て今なきにことのはさへも消よとなりされば
ことばあるをみればかひなく泪の落増に如是ならばと
なり

題しらす

よみ人しらす

なき人の宿にかよはばほととぎすかけてはにのみなくとつげなむ

順注云伊勢が「しでの山こえてやきつる郭公戀しき人
のうへ語らなん。此歌を引て云されば無人の宿とはよ
みの國と思はん事ひが事ならずや密勘云なき人の宿と
は我身は居たれどうせにし人の後家なればなき人の宿
にかよひありかばといひてしでの山の鳥なれば彼山に
行てねにのみなくと告よとよみたるとならびて侍なり

是はいづれもたがふまじ契沖が案に云無人の宿にかよ
はゞといひてなくとつげなんといへるはしでの山のか
たを無人のやど、よめると見ゆしでの山より此山にか
よはゞ又しでの山に行てねにのみなくと告よとは少し
むづかしくや定家卿も兩義を捨てたまはねば初の義に心
ひかれ侍り夏の歌に山郭公とつてんといふに似たり
源氏蜻蛉に「おまへ近き橋のかのなつかしきに時鳥の
二聲ばかりなきてわたる宿にかよはゞとひとりごち給
ふといへりこれうき舟の君のうせて後藤大將の三條宮
にてかくすし給へり三條宮に浮舟は居たまはざれば此
宿といふはしでの山の方をさしていへる證とすべしか
けてとはなき人をこと葉にも心にもかくるなり或抄に
人なき宿の思と其人いかにとおもふとふたつをかけて

なりといへるは用べからず萬廿元皇郭公猶もなかなん
もとつ人かけつ、もとなあをねしなくも。あをとは我
はなり源氏まぼろしに紫上失たまひたる次の年の夏夕
霧大將「郭公君につてなんふる里の花橋は今ぞさかり
と。眞淵案に黄泉をいふべしいざなぎのみことよもつ
ひぐひせりとあれは黄泉にも宿といふべし萬十夏「山
跡庭啼而香將來雀公鳥汝鳴毎無人所念

誰みよと花さけるらん白雲のたつ野とはやくなりにしものか
眞淵案に此白雲は葬の烟をそへたり萬葉には此葬の烟
雲とも霞ともよめり契沖曰萬葉には野に雲をよめる歌
數しらすあやしむべからず六帖「野邊なるを人もなし
とてわが宿にみねの白雲おりやゐるらん。同「たちねと
やいひにやらまし白雲のとふ人もなき宿にあるらん

式部卿のみ、閑院の五のみ、にすみわたりけるをいくばくも
あらで女みこの身まかりける時にかのみこのすみける帳のか
たびらのひしにふみをひひつたりけるを取てみればむかし
のてにて此歌をなん書付たりける

或考曰式部卿のみこは敦慶也二品式部卿宇多皇子母贈
太后藤原胤子延喜帝同母弟號玉光宮好色無雙美男閑院
五内親王未考日本紀帷帳後拾遺に一條院御時皇后宮

かくれ給ひて御帳のかたびらの紐にむすびつけられたる文を見つけたれば内にも御覽せさせよとおぼしがほに歌みつかきつけられたりける中に云々

かすくに我をわすれぬ物ならば山のかすみをあはれとは見よ

契曰我なからん後も忘れたまはぬ物ならばなきがらを納る山の霞を見てもなつかしみて哀と見おこせたまへとなるべし萬三家持「さほ山にたなびくかすみ見る毎に妹を思ひ出てななぬ日はなし。小町集はかなくて雲となりぬる物ならばかすまん空をあはれとは見よ。有

助が歌よりこなた又秋夏春と次第して春の歌の中にも花を先にし霞を後におけると上にいふがごとし眞淵案

に數々思ふ人有が中にと云ならん此説上にもその意なり契沖が引萬三の歌は大伴家持悲亡妻歌「佐保山爾多

奈引霞毎見妹乎思出不泣日者無とあり

なとこのひとの國にまかりけるまに女にはかにやまひをしていとよわくなりける時よみおきてみまかりける

ひとの國とは他國とも書て京より外の國をいひ又異國をもいへり是はいづれにやしらねど死に臨て便りせんよしなきならば遠き國なるべし

よみ人しらす

聲をだにきかでわかるゝたまよりなき床にれん君ぞかなしき

契曰六帖には腰句「我よりはと有聲は男の聲たまは我がたましひなり人にあひみることをばおきてほのかに聲をだにきかでわかれ行を我たましひよりも猶歸りきて我なき床に獨りねん君ぞ悲しきといへるなり眞淵案に人死る時たまよばひのこともあれどこゝはそれにはあらじ

やまひにわづらひ侍りける秋こゝちのたのしげなく覺えければよみて人のもにつかはしける

大江千里

もみぢばを風にまかせて見るよりもはかなきものはいのちなりけり萬八「神無月しぐれにあへるもみぢばのふかば散なん風のまにく。眞淵案に春の花をはかなき身のたとへ

とすれど萬葉を見るに紅葉を死行ことのたとへとする事多し「萬葉の過にし」もみぢばの過ぬと聞てなど拾

三挽歌の長歌にかたがたよめり

身まかりなんとよめる 藤原のこれもと 露をなどあだなる物とおもひけん我身も草におかぬばかりを拾遺集やまひして人多くなくなりし年なき人を野らやぶなどにおき侍るをみてすけきよ「昔人の命を露にた

とふるは草むらごとにおけばなりけり。眞淵又案にすべてやまひは其なやむ事を體にいひわづらふは何事にてもわづらはしき事にいひて身のいたむにわぶるをいふなり

やまひしてよわくなりける時よめる

なりひらの朝臣

(伊勢物語) 行遣とはかれて聞しかどきのふけふとは思はざりしを人のをはりの歌是におよぶはなし

かひのくにいあひしりて侍りける人とむらぼんとてまかりけるみら申にてにはかにやまひをしていまくとなりければ

よみて京にしてまかりて母にみせよといひて人につけ侍ける

在原のしげはる

此滋春の母は右大臣良相のむすめ染殿内侍なり此歌やまと物がたりにも有これより先かなたこなたさすらへしさまいとあはれなり萬十六戀夫長歌云「村肝乃心碎而將死命爾波可爾成奴云々

かりそめの行かひ道とぞ思ひこし今は限りの門出なりけり

是は滋春甲斐國に有常のありしをとむらはんとて下りける道にて病してよめるなり契沖云ゆきかひちとは行かふ道なりそれを甲斐の道によせてよめり眞淵案に往

反とかける即意同じゆきかへりの扁里約比なりよりてゆきかひといふなり

續萬葉論卷第十七

雜歌上 七十首

餘材抄にいふ雜といふ意は序に春夏秋冬にもいらぬく
 さくくの歌といへるは是なり種々と書ても又雜一字を
 もくさくくとよめり四季にかぎらず旅戀などの別に部
 をたてたる外を雜といふ其中に事にひかれて諸部にわ
 たる事は有べし或抄に雜歌は四季戀雜旅行述懷懷舊皆
 まじはるをいふなりとは此序にもそむけり用べからず
 眞淵考くさくくとはいろくといふに同じ神代卷に入
 色雷と有も色は品のことなればしなくいろくくさ
 くさとも同じことなり又此部は今案萬葉集には夏の
 雜歌秋の雜歌などいふ外には相聞挽歌客旅を立るのみ
 にて四季にても長短歌旋頭歌等を以て春物を詠じたる
 を春の雜歌といへば此集に雜體といふに似て侍るを此
 集までは序文を以て考ふるに四季戀傷客等にあらで
 たゞにいひたる歌を以て雜とたてたるなり【雜といひ
 て四季のくさくくの事も萬葉には入をたゞ四季ならぬ
 を雜といふは少しことわりのつきぬことなり】

題しらす

よみ人しらす

我うへに露ぞおくなるあまの川とわたるふねのかいのしづくか

或抄云伊勢物語になり平絶入ておもてに水そぎける
 をよめるなりをりふし七夕なればあまの川のふねのか
 いの半かよめり此説人しらする事なり○眞淵案物語
 は此歌をとりて一條の物がたりとして詞をつくりかへ
 たれば格別の心をなはれりこゝに川なき事なり又七夕
 なればといふは天の川とあるよりさおもへるなるべし
 詞等もさせることなし天の川に船よむこと必七夕なら
 どもそのよせを以ていふ事多し人のしらする説なりな
 どは何ぞやさせる説をしりたりとて何にかせんいとか
 たはらいたし物語りにては死て暫昇天したるといふよ
 り天の川をばもてきたり惣じて死ては天に昇るなどい
 ふことにて死にはさること物に多く有なりされどもこ
 こにいふに及ばざるなり契沖曰物語りは作りていへる
 か此集確かなるべし萬葉第十に「此夕ふりくる雨はひ
 こぼしのとわたる船のかいのちるかも。かいのちると
 はかいの半のちる也かいは棹の字なりさをといふも同
 じ此歌にてよめるかいの半とは大かたの露にはあらじ
 思ひよらぬ心をよめり案るにつゞき數首はよろこび有
 歌の類なるに其初にあれば七夕におもひかけす内の酒

宴などにめしあつめられて祿などたまはれる人の其思
 半をかくはよせたるにや「思ふどちまとぬせるよとい
 ふ歌のつゞきたるにも心を着べし後撰「我袖に露ぞお
 くなる天の川雲のしがらみ波やこゆらん○眞淵案に萬
 葉に我字多くかりとよめり其ゆゑはやつがりといふに
 て自卑稱なりされば此歌いと聞えがたきま、古は我字
 をかりてかりが上にとよみて鴈は天をわたるなれば天
 川の舟にちかくてかいかいの半を置たるとかりのはがひに
 霜の置など萬葉などにもよめること、して侍るべしと
 なり眞淵竊案に契沖が恩澤の論も篇次の様をもて見る
 に玄かるべしされば此兩説をあはせ考ればかりが上に
 と表は比して實は恩潤を貴みて天川よりの半とはいひ
 なしたるべし

おもふどちまとぬせる夜はから錦た、まくなしきものにぞありける

契沖曰まとぬは圓居なり世俗にくるま座にをると云是
 なり又錦た、まくをしきは左傳曰有美錦不令人學制留
 史記云片錦雖微猶難學製これより始るにやと云々眞淵
 案に諸抄みな此注なりたがふことも侍らす學製をば音
 にてよむべしまなびながらにた、しめすといふこと也
 抄の點皆非なり是は鄭子産之警學政語なりまとぬの所

をたちさりなんを、しむなり後撰「から錦をしきわが
 名はたちして、いかにせよとか人のつれなき。兵部卿
 元良親王家歌合曉別夫木三十三「春の夜のあかぬわか
 れのあかつきはちへのにしきをたつにまされる。躬恒
 集「君見では有ぬべしやと心みにた、まくもうきから
 にしきかな。此外伊勢集元輔集うつば櫻上などにも此
 こゝろの歌有

うれしさを何につゝまんから衣たもとゆたかにたてといはましな
 かぎりなき君がためにとをる花は時しもわかぬ物にぞありける
 ある人のいほく此歌はさきのおほいまうちきみのなり
 眞淵案前にもいふがごとく古注はとるべからず伊勢物
 語には詞を作りときしもに雉をかくしたりとせりこは
 作物語の一笑のみ此集に題なれば作花にやかへり花
 にやるべからずかぎりなきとは君を祝たりとは見ゆ
 諸注いふにたらず

むらさきのひととゆゑにむさしの、草はみながらあはれとぞ見る
 契沖云紫はいろのうるはしき草武藏野かぎりもなく廣
 くて紫もおほかる所なればおもふ人ひとり故に末々
 までもむつまじといふことをたとへてよめるなりみな
 がらはみな、がらなり此歌より事おこりて紫の一もと

なり平の朝臣

ゆゑとよみまたむらさきのゆかりともよむなり後撰に
 「むさし野は袖ひづばかりわけしかど若紫はたづねわ
 びにき」をみなへし匂へる秋のむさし野は常よりも猶
 むつまじきかな。貫之拾遺物名「紫のいろにはさくな
 むさし野の草のゆかりと人もこそ見れ。小町集「むさ
 し野の向ひの岡の草なればねを尋ねても哀とぞ思ふ。
 躬恒集「女郎花一も故に秋の野のちぐさながらに花
 を思ふかな。六帖「しらねどもむさし野といへばかこ
 たれぬよしやさこそは紫のゆゑ○眞淵案に諸抄皆右の
 如し然れどもおもふ人といひては戀の部に入べきにこ
 ゝにいれるをおもへばこひといふものにもあらず次の
 歌などもおもふにおのがつまのゆかりをいふなるべ
 しされば戀といふとは意別なりさてまたみながらとい
 ふ詞例なし荷田東萬呂は此辭つまびらかならずといは
 れし今案に六帖に下句「草はなべてもなつかしきかな
 とあるをもて考に「草はなべてもあはれとぞ見るとよ
 まばよく聞え侍らん萬葉に悉皆の二字を書しをみなが
 らと訓じたるは是とおなじ悉皆二字はなべてとよむか
 たよろしきなり

めのおととを侍ける人に向へるのきぬをおくるとて

じ解なりこれらは物語と此集のたがひめをしらで混じ
 て解するよりふたつながら其意を失するなり荷田春満
 曰くめのおととは業平のつまの妹をつまにしたる人
 なり扱業平の朝臣とかばねを下につくるは四品の人な
 り即四品も紫袍をきるなり袍はうへのきぬなり是業平
 のめのいもうとをめにしたる人につかはせば業平より
 はつぎの人なりめのあねをもたるといふとはたがひあ
 るべしされば謙退卑下の歌なるべし其故は此袍あらた
 にこしらへてつかはせるにあらずふるければいろあせ
 たるなるべしよりて其色のあせしをいはんとて打かへ
 しているこき時はとよめる業平の口風なり野なる草木
 の色はこき時はわかれざりけるそれにもおとろへぬ色
 なるをいまはふるびたりといはんためなり草木野にあ
 るはいろよきなりきりてあるなどは色變るなり仍て春
 の草木にいろわかればいろこかりし時なりいろこき時
 はと云はの字字眼なりこゝろをつけてみるべし業平の
 歌は多くかく反して心得ざれば解することかたきなり
 此歌實に雑の部に入りて戀慕の心なし物語にて大に作
 りかへたるをば又物語にて辨すべければ別の事なり又
 めも春は芽發するの心にて春といひかけたりめをはる

契沖云めはなり平の女なりおととはその妹也それを
 妻にもてる人になりうへのきぬは袍の字をよめり和名
 集には揚氏漢語抄云袍 海交反和名宇倍 乃俊沼一云朝服 著繭之袷衣也しは
 すのつごもりにはりやりたるよし伊勢物語に哀にかけ
 り眞淵案に此注おのれがともどちと云と同しさて物語
 を云は非なり物語には緑袍のうへのきぬなどいふは大
 に作りかへたるなりかれはめも春に野なる草木といへ
 ばみどりなりいろといふ心に歌の心を態と詞をもてい
 ひかへたることは前々いふが如し此集にてはしからず
 歌の下にいふ

むらさきのいろこき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける
 或抄曰わがおもふ人獨ゆゑにめもはるかに其ゆかりま
 でみなあはれと分別なくおもふとなり前の歌と同心な
 り紫の色こき時は我思ふ女寵愛の時なりめもはるには
 目も遙也土佐日記にも「松原めもはるく」なりとかけ
 り○契沖云野なる草木もあはれなりけりと有伊勢物語
 にむさし野の心なるべしと有右の歌を本歌にてよまれ
 たり色こき時とは寵愛の盛なる時はなりざりけると
 はいづれとも思はぬ也○眞淵案にこれらの他の注も同

ばるといふはいとことやうなる釋にて侍るさいひてい
 かに此歌を解せんや物語の虚作をも知わきまへぬ人の
 論はいふにたらざるなり【在満元春満と云諸成案に此
 在満が考よく聞えたりされど朝臣とかばねを下につく
 るは四品なりとはわろし四位とこそか、め又四品此紫
 袍をきるなりとはいかゞ一位は濃紫二三位は淺紫四位
 濃緋なり五位は淺緋なりと其位品により位色は定れる
 事なり業平の朝臣禁色をゆるとも下斐已下の事にこそ
 あれ紫袍をきるべきいはれなしおもふに此朝臣は父阿
 保親王は四品なり親王は元無品たりとも此袍着給へる
 事令條に明かなり藤氏勢募り無品親王黃袍を用給ふこ
 と、はなりぬされど四品親王は紫袍を用給ふなれば父
 みこの袍のあせたるをおくるとてそへし歌ならん】

大納言藤原の國つれの朝臣宰相より中納言に成にける時にそ
 めのうへのきぬのあやをおくるとてよめる
 近院の右のおほいまうちぎみ

或注云寛平六年五月五日任中納言從三位

いろなしと人やみるらんむかしよりふかき心にそめてしものを
 契沖曰日本紀に無色と書くみにくしとよめればそめぬ
 あやにつけてみにくしとやみるらんといふ心をそへた

りふかき心にそめてしものをとはまじはりのほどを告
まらするなり上に「色もなき心を人にそめしと有し心
なり

いそのかみのなみまつが宮づかへもせていそのかみといふ所
にこもり侍りけるをにはかにかうむりたまはれりければよる
こびいひつかはすとてよみてつかはしける

ふるのいまみち

契沖曰三代實錄第四拾九云仁和二年正月七日授從七
位上石上朝臣並松從五位下石上は物部氏也遠祖饒速
日命なり石上に有て布留の神室をも司る後に居所につ
きて石上櫻井兩氏となりて大嘗會の時神柄をたつる事
を此兩氏つかさどれり石上歷朝臣は持統文武兩朝の大
臣なり【西宮記臨時第一云侍從厨預上宣貞觀十官符内
豎任云々イ奉春良高貞定預大舍人昭並松任若狹目替云々】
或抄云かうむり給るとは叙爵なり昔は箱笠といふ物を
冠にす品にまたがひていろの品あり大織冠などは正一
位にあたるなり其後に一位二位といふ事出来るなり云
々眞洲案にかく書るはいかに心得られしや知がたし又
冠を蓋なりとおもふは甚非なり冠といふものは昔は錦
或は帛などにて位により髪をまさしものなり蓋は甚別

なるをいかに心得しにや論にたらぬ人わらへなるべし
又同じ注に是は延喜の御時今道勘當をゆるされて参内
の時歌つかうまつれとありしによめる歌なりと有は又
是も甚誤なり此詞書をわすれたりけるにや又みづから
得恩光たりとて花も咲けりとおのれが事をよまんや並
松がことをよめるにて主をも稱美したる詞なり異説臆
説を論ずるは畢竟歌まらぬ人のことなればいかゞなれ
どもまどふ人の爲にいふ
日の光やぶしわかればいそのかみふりにし里に花もさきけり
六帖に下句「ふりにし里も花咲にけり。契沖曰やぶは和
名集云「呂氏春秋云澤無水曰藪蘇后反和名源氏蓬生に
「さるやぶはらに年へ給ふ人を大將殿もやむごとなく
しも思ひ聞えたまはじなどゑんじうけひけり【やぶは
彌生なり皇極紀に「波魯波魯爾渠騰會根舉驗屢之麿熊
野父播羅。是入鹿の住し所也故に入鹿を島の大匠とい
ひし也○源氏蓬生に「心ひとつにおぼしあがるともさ
るやぶ原に年へ給ふを云々。猶未摘のすまひの所をや
ぶになれるといふみなあれたる所を云【後撰にみやづ
かへしける女のいそのかみといふ所に住て京のともた
ちのもとへつかはしける讀人まらす「かみさびてふり

にし里にすむ人はみやこに匂ふ花をだに見す。眞洲案
に契沖が説たがはず竹のある所のみをやぶと思ふ人は
論にたらず又萬葉にやぶなみのさと、よめるは越中の
地名なり

二條后のまた東宮のみやす所と聞えける時に大原野にまうで
給ひける日よめる なり 平朝臣

契沖曰江家次第十四云大原野行啓起五條后順子以藤
氏勸學院衆爲車副二條后高子以姪乘車後在五中將書
和歌與二條后歌略之人疑見若有密事歟といへり三代實

五條の後大原野詣は貞觀三年なり二條の後詣給へるは
貞觀十一年の後なり是江次第の大なる誤なり【清和天
皇貞觀八年十二月爲女御元慶元年正月三日立爲中宮延
喜十年崩六十九】物語は此集の歌をとりて誰ともなき
昔男の歌としたる物語の一作なれば詞に近衛司に候け
る翁など書て時代を業平と相違させたるを虚作とまら
ぬ人はまどふべし是二條后東宮御休所と申時業平近衛
司にあらず【陽成天皇元慶元年正月十五日左近衛權中
將同四年五月卒五十六】

録云貞觀三年二月廿五日己巳皇太后向大原野神社奉幣
御牛車以藤原氏六位以下爲御車從者云々今東宮御息
所とあるによれば年數相違せる故江次第は誤也【こは
五條皇太后大原野云々とのみ有しを伊勢物語によりて
さかしらに二條后云々と書直せしならん】大原野は關
院左大臣冬嗣春日社を勸請して藤氏の后女御等の詣で
給ふに便あらしめ給ふといへり仁壽元年に始て大原野
の祭を行○眞洲案に此歌に付てさまざまの説侍れど物
語と此精撰の差別を知らぬ人の事はとるにたらず右に
いふ江次第の説は顯注密勸にも誤なりとのたまへりた
とへ誰いはずとも實錄の年記たしかなれば分明なり先

大はちやをしほの山もけふこそは神代の事もおしひいつらめ
歌の心いと安くして藤氏の上代よりの宗神なればかみ
代のことともとはいふべし是をことばをかへて物語には
あらぬこゝろ有がごとく作りなせり惣じて業平此後に
密通の事無く物語には虚を専とすれば書まざらした
りゆめく證據なきことをおもふべからず此歌上代
のともなどいふあたり少しく詞たらぬ難有べきなり業
平のよき歌にはあらぬなり業平の口風をまらぬ人はこ
れらをかへりてよしとおもへりいと論にたらず或抄云
神代のごもは天照大神と天兒屋根尊は陰陽二神の末君
臣合體の神にておはしますなり小鹽山は藤氏先祖の御

神なり【或抄云大原野の上なる山を小鹽山といふ又北山に有大原に小しほ山よむとは後拾遺に見えたれども是はひがごとなり彼集詞書に三條院の御時大嘗會の御稷など過ての比雪ふり侍りけるに大原に住侍ける少將井の尼のもとに遣しける祭主輔親女伊勢大輔「世にとよむとよのみそぎをよそにしてを鹽の山のみ雪をやみし」をしほ山梢も見えず降つみしこやすべらぎのみゆきなるらん。かくはよめども今は詠すべからず】天智天皇の御時鎌足始て藤原の姓を給りもと常陸にて生れ給ふ故に鹿島にいはい奉る其後元明の御時和銅元年二月七日鹿嶋より大和國三笠山にうつし奉るその、ち稱徳の御時神護慶雲二年四月五日春日へうつし奉る春日大明神是なり今の京文徳御時大原野にうつし奉る嘉祥三年閑院右府冬嗣公申沙汰となり是は都近く常に神拜のためなり二月上卯日十一月中酉日祭有文徳御宇仁壽元年にはじまり其祭を藤原の後宮より行る、なり○眞淵案に君臣合體といふは何に有にや此集の序のひがことばを以てや、もすればいへり是は舊事紀云使天太玉命天兒屋根命陪從天忍穗耳尊以降之時天照大神詔天兒屋根命天太玉命曰惟爾二神並侍殿内善防護焉を

以ていふなるべし是にはいと相違あることなり亦嘉祥三年冬嗣公の沙汰といふも甚しき偽なり其故は冬嗣公は淳和天皇天長三年に薨じて嘉祥三年まで居給ふ人にあらずか、る注どもは皆偽なりとるにたらねどもこれらを上て他を知るべし○契沖云舊事紀云【右引が】東宮は天孫の御裔にて二條后はまた天兒屋根命の御裔なれば天照大神のよく守りたまへとありし神勅を思ひ出給ふらめとなりをしほの山もとは神のことはいともかしこければみかどの御事を俗に内裏と云が如く其社の有所をもてあらはすともいふべし又萬葉にはみわ山みもろ山そのほか神のます山をば即神といひたれば今も其心也伊勢物語には此歌の後に「心にも悲しとや思ひけんいか、思ひけんぞらすか」と書大和物語には「昔をおぼし出てをかしとおもほしけりとあればそのかみありし事を神代の事とはのめかせるなり○眞淵案に舊事紀のことは偽書なりとるにたらずかれば神の守り給へとありし契り見えず又山を即神といふ事神代このかた物皆神といへり山の神にあらずめづらかなる事にあらず又物語を是も作りなしたるものと云らでとかくか、づらふはいと誤なりおもふに此歌神代の事もなど

いふわたり詞書の様二條后のことかける物は後人の偽作る物語により加筆も有かおぼつかなし

五節の舞ひめ見よめる

よみれのむれさだ

或抄云五節の舞姫は清見原天皇よしの、宮におはしましける時日暮に琴をひき給ふ御前なる山岫のもとに雲の氣忽におこる其中に神女有て琴の曲に去たがひて舞けり五たび袖をひるがへすゆゑに五節といふ是より始めて毎年おこなはるまひ姫にまはしむるなり此姫を乙女といふ彼神女の歌に「をとめども乙女さびすもから玉を袂にまきて乙女さびすも。是よりおこるなりあまつをとめとも云から玉は琴を云といへり此五節は十一月新嘗會の時おこなはる代の始には大嘗會といふ云々眞淵案に此説皆非なり五節の起りの事天武天皇吉の、宮にての事古記に見えず思ふにをとめどもをとめさびすの歌は萬葉第五山上憶良哀世間難住歌之中句曰遠等呼良何遠等呼佐備周等可良多麻乎多母等爾麻可志。同歌中云「麻周羅遠乃遠乃古佐備周等都流岐多智許志爾刀利波積。古事記曰雄略天皇幸行吉野宮之時吉野川之濱有童女其形姿美麗故婚是童女而還坐於宮後更亦幸行吉野之時留其童女之所遇於其家立大御吳床而坐其御吳

床彈御琴令爲其娘孺子爾因其孺子好爾作御歌其歌曰阿具羅韋能加微能美豆母知比久許登爾麻比須流衰美那登許余爾母加此此二事清見原天皇禮樂を始め給ふ事績日本紀に次に引如くなれば天武天皇吉の、宮に住給へばかれ之を合て好事の者の偽云なるべしそもく五節の始は續日本紀第十五天平十五年五月癸卯宴群臣於内裏皇太子親饗五節右大臣橘宿禰諸兄奉詔奏太上天皇曰天皇大命坐賜掛長飛鳥淨御原宮大八洲所知志聖乃天皇命天下治賜比平賜比氏所思座上下齊備和氣無動久辭加令有八禮等樂等二部並比平久長可有登隨神母所思座此乃舞乎始賜比造賜比岐聞食氏與天地共仁絶事無久彌繼爾受賜波利行物等之皇太子斯王學頂令荷氏我皇天皇太前貢事奏。於是太上天皇詔報曰現神御大八洲我子天皇乃掛長天皇朝廷乃始賜比造賜留寶國寶等之此王令供奉賜天下立賜比行賜流法可絶彼事波無久有家利見聞喜侍奏賜詔大命乎奏。又今日行賜布態乎見行波直遊止乃味不在天下人君臣祖子乃理乎教賜比趣賜有奈母所思須是以教賜比趣賜何其受被賜持氏不忘不失可有表等之二一人乎治賜波奈止所思行須奏賜止詔大命奏賜波久奏。因御製歌曰蘇良美都夜麻止乃久

爾波可未可良斯多布度久安流良子許能末比美例波。又歌曰阿麻豆可未美麻乃彌已止乃登理母知氏許能等與美伎遠伊寸多豆末都流。又歌曰夜須美斯悉和已於保支美波多比良氣久那何久伊末之氏等與美岐麻都流。是ほどの正記あるを見ざるにやたま〜見るも只異義を好む輩専らかの神女の事をのみいふ國史を捨て偽書につかばせん方なき事なり。○契沖云續日本紀前引又曰河海抄云本朝月令云五節舞者淨御原天皇所製也傳云天皇御吉野宮日暮彈琴有與俄人列々前岫之下雲氣忽起疑如高唐神女應曲而舞舉袖五變故謂之五節。又契沖云本朝文粹第二三善清行延喜十四年上十二條意見封事中云請減三五節妓員故臣伏見朝家五節舞妓大許會時五人即皆預叙位其後年々新許會四人無預叙位之例山是至于大許會之時權貴之家競進其女以充此妓尋常之年人皆辭避可闕神事爰有新制令諸公卿及女御輪轉進之其費甚多不能堪任伏案故實弘仁承和二代尤好內寵故扁令諸家探進此妓即以為撰納之便也諸家僥倖天恩不顧糜費盡財破產競以貢進方今聖朝修其帷薄立其防閑此等妓女舞了歸家無預燕寢然則此妓數人遂有何用重按舊記昔者神女來舞未必有定數四五人伏望擇良家女子未嫁者

二人置爲五節妓其時服月料稍令饒給節日衣裝亦賜公物若貞節不嫁經十箇年者即預女叙聽令出嫁若願留侍者預之於藏人之列即擇置其替人亦如前年云々。古事記下雄略如真淵按契沖云今續日本紀と河海抄に本朝月令を引合て思ふに續日本紀はたゞ天武天皇上下をと、のへやはらげん爲に造らせ給ひて吉野にて天女の舞けるより起れる由見えすこれ正説なるべし孝謙天皇未皇太子にして五月にみづからまはせ給へばその頃までは事なかりける歟源氏物語抄に「十一月丑日舞姫參るなりもし丑日三あれば中の丑に參るなり二あれば後の丑なり但前の丑に例も有て此日を祭の日といふ則有帳臺出御寅日御前試卯日童女御覽辰日節會舞姫進舞辰の日は五節終の節會日なり天武天皇六年十一月五節舞姫はしまるといへりをとめどもをとめさびすもから玉を袂にまきてをとめさびすも此歌を天女の歌ひけるとも又天武天皇のよませ給へりともいへり云々。こゝに遍昭の俗名をかけるは在俗の時よまれたる上に後を初にめぐらして遍昭といはゞ似つかぬ故也真淵按に河海の説はとるにたらず契沖が引所みなあたれりされども續日本紀をあげながらさだかにいはざる猶口惜しき也

又一説から玉は琴をいふなど大なる偽なりゆめ〜さ思ふべからず上古女は必手玉足玉など用ひて身を玉もてかざる事あるなり又こゝに宗貞とかける是正説なり疑ひ云べからず國史等の書法有事也後來の百人一首など云ものに此歌の作者を僧正遍昭など書は物しらぬ書林の奴がめづらしめに價をまさんとて書しものなり

煙心耳乃忘乎和君子不聽五降前息則難辨此五節の文字の出所なりさて五節の節と杜預注せるものは節族也族奏也聲之續節也族去聲の時奏と同音になるゆゑ奏といふ事にて聲のつぎめ五たびにその聲のつぎめごとと袖かへすことは有べけれども只それのみおもへるはものしらぬ人のことなり今は五節とて一の名とすれど古人は只樂のことにて別に名付たる樂のあるにあらずされば真淵今案に續日本紀に舞五節と云るも和語ならで音にのみよむ事不審なりよりて是上代なれば此三字にてウタマヒヲナシ給ふとかよむべし後に上つ代しらぬ人のたゞ五節とのみおもひけるなるべしさてこの時の文に禮樂をもつてするは世ををさめん爲なりとある之をよく見るべし凡人の國に此樂有は聖人治世のために八

あまつ風雲のかよひらふきとらよをとめのすがたしはしとめん或抄にをとめは未通女と云男せぬ女なりとも女にいふべきにや真淵案に未通女と書は此五節の舞姫にはあたりたれども萬葉づくにてもかく書所多し是はことによりの義訓なればをとめといふ本語に非ず元來は男に對して劣女といふ事なますらをの對にて男は女にまさり女は男にとると云義也そのもとづく所は神代卷いざなぎいざなみの命の右よりめぐり左よりめぐり給ふ事のわけ有をしへ也○又五節の事異國の書を見ぬもの、五たび袖かへすなどのみおもひて天女五たび袖をひるかへすよりなどいひ出したり五節といふは左氏傳第二十九葉晉公曰女不可近乎醫和對曰節之先王之學所以節百事也故有五節五降連速本末以相及中聲以降五降之後不容彈弁以先王之樂得中聲成於是有煩手淫聲帽

ら治世のために作り出たるものなりしかるを天女のまひしなどいはゞ一時のたはむれなるべしさせるかりそめの事にあらず天下のためなることの本をしらでみだりに偽作せる事を羆にならへるともがらみだりに説をあやまる天の罰恐るゝにあまり有信て古の實録を見るべし無出所偽言をゆめ〜とるべからず後撰五節のま

ひひめにてもしめしとらる、ことや有とおもひ侍ける
をさもあらざりければ「悔しくぞ天津少女となりけ
る雲路たづぬる人もなき代に「朝ぼらけほのかに見れ
ばあかぬかな中なる少女しばしとゞめん

五節のあしたにかんざしの玉のおちたりけるをみてたがなら
んとむらひてよめる

河原の左のおほいまうちきみ

五節はて、の明日朝也○史記滑稽傳云前有墮珥トウジ後有遺
簪云々

ぬしやたれとへどしら玉いはなくてさらばなべてやあはれとおもはん
契沖曰此かざしの主はたれならんと思へどしらすとて
いはねばしからば誰となくありつるをとめのかざりを
やあはれとおもはんとなり

寛平の御時にうへのさむらひにはべりけるをのこどもかめ
なしたててささいの宮の御かたにおほみきのおろしときこえ
にたてまつりたりけるをくら人どもわらひてかめをおまへに
もていでいともかくもいはずなりにければつかひひかへりき
てきなん有つるといひければくら人のなにおくりける

としゆきの朝臣

或抄にはうへにさむらひけるは殿上人なりおほみきは

らざることは御前に出べくもあらぬ物なれば笑ふべし

玉だれのながめやいづらよるぎのいその浪わけおきに出にけり
玉だれのながめ此歌いと安く聞えたるを古歌のつゞけ
しらぬ人はさまぐいへり左にあぐべし或抄に云玉だ
れの小瓶をかめによそへてこよろぎの磯の浪わけ沖に
出にけると人の御前に酒入る小瓶の出るをかくよめ
り風俗に「玉だれのながめを中にするてあるじはさか
なもとめにこゆるぎの磯にわかめかりあげに。此歌に
つきて讀り歌には玉だれとてかめに讀續けたると此歌
の外なし后宮には造酒司日々に酒をまゐらするなりこ
ゆるぎの磯相模の國也後撰「君により我身はつらき玉
だれのみずば戀しとおもはましやは。玉だれのみすと
つゞくるは玉簾とて玉をつらぬきて御簾にはかくれば
玉を垂るといふ「玉だれのあみめのまより吹風の寒は
そへていれん思ひをとよめり萬葉に「玉だれのこす
のまとはし獨りてみるしるしなき夕月夜かも。みすを
こすとも云定家卿曰かめの玉垂を用ひず偏に御簾にの
み玉だれとよむべきなり此歌こ文字一によりて玉垂の
鉤とおけりと申せど一字を鉤とそへんために玉だれと
いはん事猶髮振なり瓶にてこそは侍らめ先人は猶みす

御酒なり大酒にあらずおろしは残り藏人どもは后宮
の御方の女藏人の事なり下膳女房を女藏人と云「源氏
匂宮に「系をいと多くもたせ参り給ふ云々蕭何がしが
おろしてもてまからん。おろしにて参りて二宮に見せ
奉らんといふ也人々大みきのおろしをこひにやりしに
此かめ後の御前までは出べき事ならぬをもて出たるな
り。女藏人は俗に今つかひばんなどいふ如くつかひ
などにあるくなり聞えには所聞と書て上へ申上る事を
云右は東萬呂のいはれし」契沖曰おほみきは日本紀に
酒の一字をよめりおろしは史記孝武紀胎餘比月燎之藏
人は女藏人なりわらへる心はおほみきのおろしを乞を
わらふにはあらじ瓶の姿のよくもあらぬゆるゑにや次歌
に女どもの見てわらひければと有も形をわらへるなれ
ば人と物とことなれどわらふ心同じかるべし眞淵案に
おほみきといふ語を兩注ともにしらざるなるべし大御
酒といふことにて音便におほんといふ語なり御製をお
ほみうたといふと同じ事にてきは酒の古語なり顯昭な
どもいろ／＼なる説を注したれど酒の古語をしらでい
ふなり此御酒の餘を乞にやりたる瓶御前に出べきにあ
らぬを女藏人の心得たがへたるなりそのかめ見よくあ

の鉤にてありなん瓶の姿にくしとぞ侍し瓶を偏によそ
へ沖に出にけりとはいへり一禪御説かめに玉のたれた
るかたの有をいふといへり俊成卿こがめの玉たる、事
にくしたゞ玉だれの鉤といはんとてこがめと續けたる
にて有なんと云々玉だれは簾をいふ也契沖曰玉だれの
こがめは玉だれの小瓶なりかめのうへにぬりてやきつ
けたるもの、玉やうにさがりたれば云なり密勘に云々
今案に萬葉第七第十一に「玉垂之小簾「玉垂之小簾と
いへるは玉だれの小すだれ也今の俗鉤簾とかくは後の
人のまわぎ也用べからずみすのこうをこと一もじにい
ふべきやうなしたとひいふとも此うたにとりて何のよ
せなし風俗の歌に云々これをふみてよまれたり玉だれ
のこがめはいづらやととへばこよろぎのいその浪わけ
ておきに出たらんやうに后の宮のおまへにもちいで、
かへらすとこたへたるよしなりこれより下三首は講諧
とまでなきもの、すこしあざれたる心あるをもて次第
せりと見えたり○眞淵案に此説々小字を萬葉に物まら
ぬもの、こと點じたるより誤をわきまふる人なくて皆
此歌にも誤れり萬葉第七第十に小簾小實と書る又は玉
垂の越の大野などつゞけしも皆小をば乎とよむ事なり

小萩なども萬葉にいまだこはぎといふことなしをばぎ
 とはいふなり瓶をばをがめといふなり玉をたる、緒と
 いひかけたる冠辭なり冠辭といふ物二語三語につゞく
 事は百が一なり皆古歌は一語に受るならひなりよりて
 是は瓶までの冠辭にあらず萬葉其外日本紀古事記等の
 古歌のすがたを見て知るべしされば玉だれば冠辭にし
 て歌の心に用なしかめは磯にいへば龜にいひかけたり
 惣じて玉だれといふに二ツ有一ツは右のごとし今一ツ
 は玉垂のを簾玉だれのみすといふ是なり簾は玉簾珠簾
 など云て玉にてかざるなりよりて玉をたれたる簾箔と
 いふ事なり今の俗玉だれとのみいひて簾のこと、する
 は本をまらぬ故なりよりて是もをすみすともをと言
 は發語なり又玉垂の越の大野をもをちの大野とよむべ
 きをこすの大野といふ點あるは甚人わらへなり乎智の
 大野と別にかな書有をもまらぬ盲人の點なるべし○歌
 の心も抄とはたがひたり是に詞書に藏人どものわらひ
 たるをいふなりをがめの見ぐるしとしてわらひたれどそ
 のをがめのいづら行しぞや皆はわらひても御前に出た
 るは大成となりと龜の沖に出たるはかれも成長して大
 海に出たるといふが如くそへたり藏人どものわらひた

るはあしとおもひてわらひしをかへりて御前に出たる
 が出世したるが如くいひなしたるなり詞書のやうをよ
 くまらざる注どもはとるにたらず此外も詞書と歌とを
 よく見て知るべし萬葉七「玉垂之小簾之間通獨居見驗
 無暮月夜鳴。同十一旋頭歌「玉垂ノ小簾之寸鷄吉爾入
 通來根云々。又同二人麻呂長歌反歌に「敷妙乃袖易之
 君玉垂之越野過去亦毛將相八方一云平知野爾過奴
 女どもの見てわらひければよめる けんげいほうし
 後撰すがたあやしと人のわらひければ躬恒「いせの海
 のつりのうけなるさまなれど深き心ぞそにしめつる
 かたちこそみやまがくれのくち木なれ心はなになまばなりなん
 莊子曰形固可使如槁木
 方たがへに人の家にかかりける時にあるじのさめなきせ
 りけるをあしたに返すとてよみける
 きのとしのり
 眞淵考方たがへは方角を避るなり陰陽家にての事なり
 外に行て歸るにそのかへるかたふたがり方なれば更に
 又他の家にゆきて一夜宿て我屋にかへるなり旅よりか
 へるにはいはず只久しく他にありてかへる時の事なり
 ○契沖云かた、がへは天神のかたをたがふるなり中神

或は長神と云歌には一夜めぐりの神と云「君こそは一
 よめぐりの神ときけなどあふとの方遠ふらん「あふこ
 とのかたふたがりて君こそば思ふ心のたがふばかりぞ

きのとしのり

蟬のはのよるの衣はうすけれどうつり香こくも匂ひぬる哉
 友則集には落句「なりにける哉。契沖云蟬のはの夜の衣
 とは彼主貧しかりけると見え至りて薄き也文選張景陽
 長命云秋蟬羽質不足擬其薄。和名集羅何反此間云うつ
 り香こきは芳心の深きをへたり貧しきを憐みて心あ
 るを賞たり○眞淵案此注甚迂也何ぞ然る事あらん此
 時うす衣なるべし其人の匂ひこきと云は人がらを賞た
 る也蟬の羽と云とていかで貧しきに極らん折節の衣な
 らばさもいはざらんや必竟移り香を深くいはんとして衣
 をうすしといはんこそ語勢ありて聞えぬ

照しらす

よみ人しらす

おそく出る月にも有かなあしびきの山のあなたをしむべらなり
 六帖第一雜の月にのす又里の歌に上二句是にて腰句以
 下「山の端のあなたの里も惜むなるべし。六帖みつね
 「こゝにまだ我あかぬ月を山のはのをちの里には返し
 とや待「夏の夜は月こそあかね山のはのあなたの里に

すむべかりけり。以下九首月によりてよめる一類
(大和)
(風體)
 更科は信濃國の郡名なり大和物語りにはをばを此山に
 捨置かへりて甥がよめるといひ俊賴卿説には捨られた
 る姨がよめると云古より物語の様さまくなるべし契
 沖曰その事によりて後こそ人の姨捨山とは名付めいま
 みづからをば捨山とよまん事心えがたしかれば此集に
 つきて書たる事にてまことは後の人彼山の月を見てそ
 の時の事を思ひてよめるなるべし眞淵案に後こそよま
 めといふ難誰も見ゆる事なり大和物語か、るあさはか
 なる事を書しや心得がたし惣じて物語は此集の歌より
 とりてあらぬ事を書そへて心別になるやうになしたる
 を此物語はいとつたなし後來の説なる事眼前なればい
 ふにたらず大和物語をば打やめて此山の名古よりをば
 捨たりといふ心にいひならはしたるなるべし山川の名
 などいとあやしき事多しことくその由來をいはん
 とせば附會多かるべしまかれども此歌は物がたりより
 も先にさいふ事の有しを則歌によみしなるべし山の名
 にとりてあはれによみなせりとたゞに心得べしをばを
 捨ると云山ならば我心なぐさめかぬるともいふべしお

もふに古へ老女を捨たるゆゑありてもや名付たるべし
 【合集解に信濃の俗老人を山に捨たる事有よしこれら
 も隠にいへることをふと書しならん】さてをばといふ
 を今はをちをばとかぎりて心得る不古なり古しへは老
 女老男を稱して云なり一偏によるべからず物語などは
 古今の辨なくて作るなるべし眞淵案に此歌いと古く
 侍りしにやこれをととりてよめる歌どもは小町「あやし
 くもなぐさめがたき心かなをば捨山の月も見なくに。
 躬恒「をば捨の山よりほかにてる月もなぐさめかねつ
 このごろの空【俗説に見てのてを濁るといふ事あれど
 此小町躬恒集によりて消を本とす】貫之「君が行所と
 きけば月みつ、をば捨山ぞこひしかるべき。信明「秋
 のよのあかつきがたの月みれば娘捨山ぞおもひやらる
 る

なり平の朝臣

大かたは月をもめでし是ぞこのつもれば人の老となるもの
 或抄云何にても物一日貪着して一身をわする、心のお
 こたりのつもれば老となる所を思ひかへしておほかた
 に月をもみよさのみ十分になれば月の如くにかくるぞ
 と我身をおもひとりたるなり大方とは十分の物七八も

といふ心なりさなくては心得がたし十のもの七八も月
 をめでしと思ふ心なり當座月にむかへばいへりなり平
 のうたにはすぐれたるなり不愛と書てめでしとよめり
 一禪御説めでしはめでたりしなり又めづまじきといふ
 心にもかなへり眞淵案に右の注一つも此歌に不叶此歌
 にさせる心はなきなり下につもれば人の老となると有
 に上を何にても貪着すればなど云こと有べしや月をも
 のも文字をあらく見るよりなりこれは月は可愛ものな
 がらあいせじといふてにをはのもなりまからでは歌あ
 らぬかたへなりて意通せず大かたの詞十の物七八など
 云はいとつたなし是は凡と同じことばなり又一禪御説
 とてひけるは伊勢物語の愚見抄の意なり恐れながら是
 又甚非なり月をもといふも文字右のごとくめづべき物
 をかへりてめづべからずと云は業平の口風にて世の中
 にたえて櫻のなかりせばなどの類皆かゝる打かへした
 るてにをはなり又業平の歌にしてはすぐれたるなどは
 いかにか心得ていへるにか右のごとき注にておのがひが
 心にかなひたるを勝れたりと云かたはらいたし契沖云
 物語に昔いとわかきにはあらぬこれかれともだちども
 あつまりて月を見てそれが中にひとり云々大よそは月

を今よりはめでしとおもへば是ぞ此三か月より有明の
 末迄ながめく／＼てめづれば人の老となる物なると也月
 をめでしと云に花紅葉の類籠れり○眞淵案に物語には
 心格別に作りなせりこゝに用なし其上眞名本には文字
 大方之月面不目出とかければ別に論有也三日月よりと
 云はあまりなりその心に似たれどもさまで云は迂なり
 紅葉の類をこもれりと云は月をもものも文字を是も誤り
 彼は此てにをはを誤りて世上の貪着など例のひがごと
 をいひなし是はそれをあしと思へば花もみちとかへた
 るなるべし○眞淵案に歌の心は凡月は自他可愛見物な
 りされどもその月をもめでし月のつもり行は人の老と
 なる物なれば月はつもれば是ぞ此老となる物をといふ
 月に愛あるよりかへりてかく思ひかへして云也業平の
 歌はおもてより直に云はいと少し皆情を外になしてい
 へるより情あまりてとはいへり今見る天上の月にかね
 いへるなり【萬葉三に「往影乃月文經往者玉蜻日文重
 と云も此月日は年月日なるに往影とは天つ月の事也】
 月おもしろしとて凡河内躬恒まうできたりけるによめる
 かつみれどいとくも有かな月かけのいたらぬ里もあらじとおもへば

きのつらゆき

「郭公ながなく里のあまたあれば猶うとまれぬ思ふ物
 から「思へども猶うとまれぬ春霞か、らぬ山のあらじ
 と思へば。貫之集「久かたの月のたよりにくる人はい
 たらぬ所あらじとぞ思ふと有は今の歌の變にや同人の
 歌なればおぼつかなし上に花見がてらにくる人とよめ
 るごとく月おもしろしとてきたると詞書玄たるにもと
 より月のために來たれば必我宿をのみ間にあらざるべ
 ければうとく覺ゆと戯れたり
 池に月の見えけるをよめる
 ふたつなき物とおもひしをみなそこに山の端ならで出る月かけ
 一本「とおもひし菊をと云歌の類也拾遺集能宣「秋の
 月波のそこにぞ出にけるまつらん山のかひやなからん
 題しらす よみ人しらす
 天の川雲のみをまではやければ光りとめす月ぞながる、
 契沖云水のふかきすぢをみをとといへば天の川といふに
 つけて雲のみをといひて月をと、こほらさずはやくな
 がすなり水尾は水も早ければ萬葉に「さよ更て堀江こ
 ぐなるまつらぶねかち音高しみをはやみかも【式玄蕃
 寮云々攝津國守等聞着氏水脈母教導賜書云々】
 あかすして月のかくる、山本はあなたおしてぞこひしかりける

山西をおもひやるなり

これたかのみこのかりしけるともにまかりてやどに歸りて夜
ひとよさけなのみ物がたりをしけるに十一日の月しかくれな
んとまけるなりみこゑひてうちへいりなんとしければよみ侍
りける

【夜一とよ物語をしける云々のをもじ異本になし此本
に有はふるし可用○對に書たれば有べし】

なり平の朝臣

あかなくにまださし月のかくるゝか山のはにげていれずもあらなん
或抄に云月をしむ歌に山のはにげてなどいはいはゞわざ
とめかしてよろしかるまじきにははこれたかのみこ酒
にゑひてうちへ入なんとしける時の興に乗するさまめ
づらしきなり土佐日記に「こよひの月は海にぞいるこ
れを見て業平の君の山のはにげて入ずもあらなんとい
ふ歌なんおぼゆるもし海邊にてよま、しかば波たちさ
へていれずもあらなんとよみてましや云々。六帖に女
をはなれてよめる紀友則「いる月を山の端にげていれ
ずとも人の心をいかゞたのまん「ぬば玉のよわたる月
をとゞめん」に西の山邊に關もあらなん。物語に詞を所
所かへ有常が返しなど作りて昔男の歌とせり

田村のみかどの御時に齋院に侍りけるあきらけいこのみこを
は、あやまちありといひて齋院をかへらんとしけるを【齋院
をかへらんは還か猶かへらんと有べしと覺】そのことやみ
にければよめる
あま敬信の朝臣

榮雅抄云田村御時とは文徳の御事也田邑は山陵なり在
所不分明なり○眞淵案三代實錄卷第一に云天安二年八
月己丑朔廿七日乙卯文徳天皇崩於冷泉院親成殿云々こ
の間諸道の警固等あり備於亂也同九月己未朔二日庚申
云々至山城國葛野郡田邑郷眞原岡定山陵之地云々六日
甲子葬文徳天皇於眞原山陵送終之禮皆從儉約一如仁明
天皇故事如是れば其地不分明とはいかなる事にやこ
の實錄を知給はざることは有べからずしかれども前々
の注は國史をば見給はぬさまなればいと和學にはこ、
ろざしうとくおほしけるにや○契沖云文徳天皇を山城
國葛野郡田邑にをさめ奉るゆゑに田村のみかど、いふ
あきらけいこは慧子なり文徳皇女なり母は藤原列子從
五位上是雄女なり文徳實錄第八云天安元年二月己巳朔
丙申廢鴨齊内親王慧子更立三述子内親王爲三齊内親王
遣右大臣正三位藤原朝臣良相於神社告事由「其事秘者
世無知之也皇子は母にあやまちあれば源姓を賜はらざ

る事貞登朝臣のごとし然ば皇女は母にあやまちあれば
齋宮齋院など廢せらるゝ例にや文徳實錄には齋院を廢
せらるゝ事何故と見えざれども今此詞書にて其よし顯
はれたり齋院をかへらんはかへられんと有けんれの字
落たるにや元慶五年正月六日薨遂述子爲齋院母與惟高
同二年而退○眞淵此説あたれり此歌よみし時は其沙汰
有しを未ださだかならずして一度かへられんとする事
やまざる時のこと見えたり文徳實錄に有は此歌より後
に遂にかへられたる時をしるせるものなり此前後の順
をよく考ざればたがひとなるなり齋院はいつきのみや
とよむなりさいむんといへば官名となる也齋宮は伊勢
なりかへらんは契沖が説さもあらんと東万呂いはれし
大そらなてり行月し消ければ世かくせどひもかりけなくに
心明らかなり

願しらす

よみ人しらす

いそのかみふるからをのゝもがしほもとの心はわすられなくに
契沖云ふるからをの布留野の冬枯たる時をいへり孫
姫式言浪花津之渡送三冬而奔二月「舊枯野之木柏因新
交而恨故人からはかれなりかれ木をもから木といふが
如し應神紀伊豆國にて作らせ給ふ船をから野と名付た

るも枯野と書り密勅云冬野にはなべて木の葉の色も殘
らずかしは、枯たる葉の枝につきて春までおちぬもの
なればひとりもとの心わすれぬ者としてよめるとぞ侍し
もと栢につきて或抄に萬葉に古人と書てもとつ人とよ
みたれば栢の古葉なりといひ又栢の葉風は風にもまれ
ておちて本ばかりに葉の有を云ともかけり後拾遺に會
丹が歌に「神とる卯月になれば神山のならの葉栢もと
つはもなし。六帖昔あへる人「石上ふるの社の其かみ
の古き心は今も忘れじ○いその上は冠辭のみふるとは
萬葉に「はたで古からつみはやしてふにひとしくこそ
の枯葉を云り本がしは、萬葉に本ほと、ぎすと云に同
じく舊き時より有かしはなり元の心といはんとて古く
枯たる舊栢といふをもとがしはと是をも兩様に云り此
歌戀にあらねば只もとよりしるなる友などをわすれぬ
よしなり是をもと、して戀にいはんにも勿論なり躬恒
が萩の古枝の歌の心に同じ【布留野の枯野のと思ふは
非なり秋はぎの古枝に咲る花なればといふに同じつゝ
けなりもとの心と云はんとて上に古びたる事を多くい
へるのみ眞淵今案舒明紀歌に「標騰渠等爾波那場左該
騰換那爾騰柯母子都俱之伊母我摩陀左根涅渠農。この

心は繁き木ごとに花は咲ども何とてか如花うつくし妹は未開出来るといふなりされば草木に本末てふ事もつねにあれど本といひてたゞ其木立の心にのみいへるも古しへは多し萬葉十春相聞「出見向岡本繁開在花不成不止とかく萬葉等にも本繁てふ語あり草木をしもと、いひ山下の繁きをふもと、いふなども皆木、株の多きなり是等によるに今は布留枯小野の柏木といふ心なるをもとの心といはん料に本柏とはいひたるものなり」いにしへの野中の清水ぬるけれどとこのころをしる人ぞくむ顯注に此清水は播磨の國稻見野にあり昔はめでたき水にて興ありけるが末にわろくなりて人などもすさめぬをむかしをき、傳へたる者の尋來て是もとめでたかりける水なりいかでかのまでは過んとてのめりける事をよめりとぞ申ぬるそれよりもをしる事にいひつたへたるなり今はかくも侍らぬよ之は人のかたりにし事なり見たる所もなければたのみがたし或人此よしを申され侍りき歌の心になへり能因が歌枕に野中の清水とはもとのめをいふといへり古き先達もさこそ申され侍しかさればにやたゞうちある清水には戀の心なくてはよめりとも見えす後撰歌「いにしへの野中の清水みる

からにさしぐむ者は涙なりけり。又元のめにかへりすむと聞て「わが爲にいかゞ淺くやなりぬらん野中のしみづふかさまされば。是ら皆古今の此歌を本としてよめると見えたりけさうする女の更に返事せざりければ實方中將「わが爲に玉の清水ぬるければ猶かきやらん扱もすむやと。古く物言ける人に元輔「草がくれかれにし水はぬるくともむすびし袖は今もかわかず。ともに拾遺に有野中の清水とさ、ねどかやうにもよむべきなり但件のいなみ野の野中の清水はこのころもえもいはすつめたくこそ侍れ密勘云清水の事奥儀抄如是本書をいふと云るせる事此歌を思うて此人かくよみつれば則本書のごとくになりぬるにや近衛を三笠山兵衛を柏木など諸歌枕にかきつけたるも堤中納言宰相中將より中納言になりて賂弓のかへりあるじの目「ふるさとのみ笠の山は遠けれど、よめり土御門中納言兵衛佐なるには「かしは木のもりにし物をとよみたるより先に此御笠山柏木萬葉にも古今にも近衛兵衛の本文顯昭は見及侍らねどやがてこれらよりもとづけておのゝ中事にやとこそ侍れ野中の清水本妻とさし侍りなん能因が妻たらん物は未見侍らす「かしは木のゆはだそむ

てふむらさきといふ古歌を兵衛のたちのをと釋する猶不審残り侍りしある物にも續なりめゆひ也などかきたるもたちの緒とも覺え侍らす○契沖云延喜式云「凡衛府舍人刀緒左近衛緋繩右近衛緋繩左兵衛深緑右兵衛深緑左衛門府淺緑右衛門府淺緑。これにかなはねば太刀の緒ともおぼえ侍らすとはの給へるなる歎又歌おもてにさもいはねばにや定家卿の心は野中のまみづとよめり此歌かならず本妻といへるにあらねど後撰拾遺等の作者さやうに取用ひたればやがて本妻の事になるなりとて三笠山柏木等を例に引れたりまことに此二首はともだちにまじはらんはこの心なるべきにこそは侍らめど此集序にもあるは松山の浪をかけ野中のまみづをくみといひ六帖にもむかしあへる人といふ歌とし侍れば昔より本妻の心に用侍り又中務集に云知たる人のはやくいきし所に又いきけるに「見る人の袖をあやしくぬらす哉野中の水の古きばかりに。但野中の水と云を印南野といへるはひがごとにて布留野に有けるなり其證は貫之集「いそのかみふるの、道の草わけてまみづくみには又も歸らん。此歌も戀歌の中に「古へに獨立かへる心かなと云歌の上にあればもとみし人に又

戀かへしてあはんの心なりすなはち六帖に同じ題にて今の歌とならべり寂紹法師が歌に「昔見し布留野の澤の忘水何今更に思ひ出らんとよめり又堀川院初度百首に河内の野を讀るにも「いにしへのふるの、道を尋來て清水を猶も結びつる哉とありこれらによらば布留といふは振の義なれば崇神天皇の御時はじめて布留社はいは、れさせ給ひてみづがきの久しき所なればむかしより古き心にいひなしたるより古野と云心になして又それを轉じていにしへの野と讀る歎六帖にかしは原のみかどの御歌として「いにしへの野中ふる道あらためばあらためられよ野中ふる道。此いにしへの野と續きたるも今の歌と同じく布留野と聞たり其ゆるに上に貫之歌に石上布留の中道とよまれたるとかなひて見ゆるなり拾遺にすけみか物名に「ふる道に我やまどはん古への野中の草はまげりあひにけり。これ此集に隱題にやがてその物の上をよめるごとしやまとをかくして則大和の名所をよめるかと見ゆ又狹衣に「あかざりし跡や通ふといその上ふるの、道を尋ねてぞ見る「いそのかみふるの、道をたづねても見しにもあらぬ跡ぞかなしき。これあかざりしと云る清水を下にふくみてき

こゆ又今の歌いそのかみふるから小野と云に次たれば
 かたぐ有祭その證あるに似たりまからずや○眞淵案
 顯昭はりまといへど其據何にありや又契沖が振野とい
 ふは少しより所有に似たれども證とたしかにすべくも
 あらずいにしへのといふ物何ぞよし有に似たればたし
 かなる證あらばふる野にもつくべけれど猶おぼつか
 し引る歌の様は此歌いと古ければ本歌としてよみたる
 と見えたれば戀を櫻にもよみつる例多し本歌とりの歌
 にて則本歌を解む事はゆめく有べからずまた能因が
 本妻などいふは此集に雜の部に入たるをわすれて後撰
 などに是を本歌にとりたるを思ひなづみて本をわすれ
 たる説なりいふにたらずまかれども序に松山の浪をか
 け野中の水をくみとあるをも戀なりとおもふ人侍
 らんか此所また次第不同して對句専らとせるより秋萩
 の下葉をながめと次にいふにてまるとし又密勘の顯の
 事顯昭定家卿などの御存ある事にあらず是は袖中抄に
 て論すべし別にわけ有事にてこゝに引出すべきわけも
 なき事なり其外此歌さまぐの説あれどもひとつもあ
 たらす六帖などは誤多き者なればとるべからず只此集
 に雜の部にのりてもとの心をわすれぬといふ心秋萩の

ふるえにさけるといふに同じゆめく戀にあらすおも
 ふにいづこにもあれ野中に有まみづといふなるべしも
 とは家にても有て岩井などわき出つらん所あれて野と
 なりし所へ昔思ひて問ひし人などのよめるなるべし井
 の水をまみづといふことは例あるなり題まらねば全篇
 はさだかに解ずとも歌のおもむきよろしければのする
 なるべし其類此集に多しうがちて論するより附會の説
 多しまらざるをばまらずとすべし附會せる事は眼ある
 人はよくまざるものなり
 いにしへのしづのをだまきいやしきりよきさかりはありしものなり
 契沖曰いにしへのまづのをだまきとは日本紀萬葉延喜
 式等に倭文と書てまづともしづおりともよめり萬葉に
 もいにしへのしづはた帯ともよみたれば此しづといふ
 布はあしくしておりていやしきもの、衣にしたる故に
 それをきるほどの者をも衣につけてしづとはいへる
 なりもろこしにいやしき身のなり出るを布衣よりたち
 てなどいへるが如し延喜式には諸社の祭の注文にも多
 く載侍れば上古より有りけるものなるによりていにし
 へのとはおけるなりをだまきは帯を續みて巻たるを卷
 子と云それを帯環とはいへり顯注にげす女の帯をうみ

てまきたるをばへそといふをしづのをだまきと云とか
 へられたれどこれは本末たがひたりといふは倭文をきるゆゑ
 にいやしきものをしづといふなるべきをしづがうむを
 だまきなるゆゑにしづのをだまきといふと心得られた
 るをいふなり萬葉にしづたまきとのみもよめり「しづ
 たまきかすにもあらぬ我故にとも「しづたまきいやし
 きわが故ともよみたれば昔よりいやしき事によめりさ
 ればしづのをだまきいやしきもとはつゞくるなりいや
 しき人たふとき人皆盛は有しとよめる也伊勢物語「い
 にしへのしづのをだまきくり返し昔を今になすよしも
 がな。眞朝臣の歌、數ならばか、らましやは世中にいと
 悲しきはしづのをだまき○眞淵案今おとろへて身の昔
 したふ意あはれなる歌也萬葉十一「去家之倭文旗帶乎
 結垂孰云人毛君者不益。一書云古之狹織之帶乎結垂誰
 之能人毛君爾波不益。四、倭文手纏數二毛不有壽持奈何
 幾許吾戀渡【萬葉三】「古昔有家武人之倭文帶之帶解替
 而云々。又武烈紀「於哀積瀨能瀨於寐能之都波陀】榮
 抄に右二首はいやしき者をいふと有は誤なり前二首は
 只古きまじはりを思ひ此一首のふるき我身のさかえを

いふなりいやしきもよきもあれば一偏に見るべからず
 つゞけがらをしり給はねば成べし
 今こそあれ我もむかしは男山さかゆく時もありこしものを
 さかゆくは榮え行なり序に男山のむかしをおもひいで
 てと言心あきらかなりしかるに或抄に定家卿の説とて
 男の遁世の時むかしを思ひ出てよめるなり云々契沖
 も又世をそむき家を出たらん人の陰の朽木となりてふ
 かき山に身を過し侍らんが男にて有し時人に立まじり
 つかさくらゐにつけてさかえし時も有し物をと云々此
 此所に云おとたるか
 兩説何を證とせるや此歌には山ごもりとも官位をかけ
 しとも見えず今おとろへし事はいづこにもいかにても
 ありなん作者の外は知べからず附會なり
 世の中にかりぬるものはつこの國のながらのほしと我となりけり
 顯注に國史云嵯峨天皇御時弘仁三年六月遣使長柄橋此
 時造られける歟然らば造ると有べきを修理などを加へ
 られけるにや契沖云日本後紀の略本を二部迄見侍りし
 に遣使長柄橋造橋とあれば顯昭の見られたる本には造
 るの字を落せるなりされどもこれもはじめてかけそめ
 たるにはあらず此歌前後の續きを見るに只身のふりぬ
 ると言のみにあらずしかるべき人の才能あれど世に

ふるされて用ひられぬ時に人を渡す用ある長柄の橋のたゞふりにふりゆくによそへ述懐せる歌なるべし○眞淵考に契沖が述懐の歌と見しはいりほかなりさせる所見えすたゞ身の老ぬるをたとへたるにて感情餘り有也さて日本後紀弘仁三年はし作る事おぼつかなし長柄橋断絶せる事は文德實錄第五云「仁壽三年冬十月戊戌云云攝津國奏言長柄三國兩河頃年橋梁斷人馬不通准三堀江川置二雙船以通濟渡許之。此正記に此事はやく絶たるよしなり仁壽三年より前に數ふれば弘仁三年まで四十三年なりさらば此歌文德天皇元年頃の人の歌と見えたり伊勢は宇多天皇の御息所なり凡宇多天皇寛平九年の頃より仁壽三年まで亦四拾四年なりされば今の歌をとりて伊勢がながらのはしもつくるなりとよみしなるべし

さの葉にふりつむ雪のうれかおしみとくだち行わがかりはも契沖云顯注云くだつとは斜といふ字をよめるなりなめになるなり萬葉には降といふ字を書りこれもかたぶく心なりさの末のおもくなればもとのかたぶくを我よはひのかたぶくにそへてよめりわがさかりはもわが盛はいづくやと云なり○眞淵考に人の老降ゆくをさ

さの葉にふりつむ雪のしなひたわめるにたとへよみしのみ萬葉五「和我佐河理伊多久々多知奴久母爾得夫久須利波武等母麻多於知米也母。同七「今夜等之曉降鳴鶴之念不過戀許増益也

おほあらしのしりの下草おいぬればこまもすさめずかる人もなし契沖曰六帖に作者小野のこまちと有集にはなし顯昭に大荒木の森は能因が歌枕には山城國に有といへりとかる會丹が三百六十首のうち四月中の歌に「大あらしの下草までに風ふけば靡きて神を祭りあへるかも。此歌によれば加茂の邊にあるにや今案に萬葉に「かくしてや猶や老なんみ雪ふる大あらしの、さ、ならなくに「かくしてや猶やなりなん大あらしの浮田の森の玄めならなくに。此歌どもを思ふに大和國宇智郡に荒木の神社あり神社を萬葉にもりとよみたれば彼所にや萬葉第一に人萬呂長歌に「み雪ふるあきの大野にはた薄玄のをおしなみともよめるも宇智郡なるに吉野の郡に續きて共に寒き所なれば同じくみ雪降とおけり萬葉に越の國の枕詞にもみ雪ふるとおけるを思ひ合すべし山城ならば此詞應せず又續日本紀第三十二に云「寶龜四年八月辛亥左兵庫助外從五位下荒木臣忍國言養老五年以

往辭爲大荒木臣神龜四年以來不著大字至是復著大字。これも宅地の荒木に有てこそを氏とせるか然れば荒木の神社を大荒木神社といはん事うたがふべからず引所の萬葉の歌と今の歌と相似たれば共に大和の大荒木にて山城なるは同名異所なりと考るべしおいはてたる草をば駒もすさめず人もからぬによせて身の老ぬればいとほる、をなげくなり顯注草のおふるをばおひぬとかくべきを人の老によせておひぬればとかけりといひかる人もなしとは秋の草をおそれをなして人もからぬとなりとか、れたるはとも誤なり老ぬればにてこそ下の句はいはれて侍れ後撰忠峯「大あらしの森の草とやなりにけんかりにだにきてとふ人のなき。みつね「人につく便だになし大あらしの森の下なる草の身なれば。拾遺に忠峯「大あらしの森の下草茂りあひて深くも夏のなりにけるかな。同、いたづらに老ぬべらなり大あらしの杜の下なる草ばならねど。貫之集「おぼつかない今としなれば大あらしの杜の下草人もかりけり。是らは皆今の歌より出たり或抄に今の歌の五文字おあらしのとよむべしと説あり用べからず只有のま、によむべしもし是をおあらしのとよまばさきに引萬葉の歌の下

句の大あらしの、さ、ならなくにと云をいかゞよまんとぞおもふ注にさくらあさのをとは櫻麻生なり萬葉により櫻麻とはすなほにおひたちたるが枝葉さへ櫻に似たればいふにや櫻の咲ころ麻をまけば櫻麻といふも一説なり学生は只字をまける所なり名所にあらず萬葉第十一に「櫻麻の学生の下草露しあればあかしていゆけ母は玄るとも。これを六帖第六下草の題には「さくらをのおふの下草とていれたり又萬葉十二に「櫻麻之麻原の下草はやくおひば妹が下紐とけざらましを。これ麻原ををふとよめば櫻麻をさくらをとよめるもいはれたりこ、に櫻あさとあるも古點の心なるべし【櫻麻の事冠辭考にくはしく見ゆ眞淵今案大荒城は殯歟新墓曰今城姓氏亦書大荒木者殯之地之故可知】

かぞふればとまらぬものなとといひてことしはいたくおいせしける契沖云三句引つゞけて讀と心得べしといひては年を疾にかけたり下に「とゞめあへずむべもといははれけるといへる心也釋名曰年者進也進而前也これより興風が歌までは老をよめるを類とす○眞淵案此注あたれり是より老をよむといふはおそし前の歌も老をよめるなり段々老にはなり行のはやく覺えたるに今年は

のみおもひしにや非なり

かみ山いざ立よりてみてゆかん年へぬる身は老やしぬると
此歌はある人のいほく大友のくろぬしがなり

眞淵案此にくろぬしは近江の人といひ其上此歌みてゆ
かんなどいふあたり序にいふに似たれば附會せるなる
べし歌の心は年へて老ぬるは勿論ながらかくいへる意
いと老人の心なるべしあはれに聞ゆ○契沖云七叟の歌
とて清輔朝臣の尙齒會の時も用られるは白樂天が履
道坊の閑居にて盧胡等の七叟尙齒會をなし本朝には菅
原是善等の尙齒會せしに准しておこなはれけるにこ、
なる七首のおのづから數もかなひければうたがはれけ
るにやまことに七叟のありけるやうにおもふもの有か
ありけりとおもはゞ誤りなり

なりひらの朝臣の母のみこなが岡に住侍ける時になり平みや
づかへすとて時々もえまかりとむらほす侍ればしほすばか
りにほいのみこのもとよりとみの事とてふみをもてまうでき
たりあけてみればことば、なくて有ける歌

契沖云三代實錄第五云貞觀三年九月庚寅伊登内親王薨
帝不視事三日内親王者桓武天皇皇女也母藤原氏從三位
乙淑之女也長岡續日本紀第三十八云延暦三年十一月戊

五の子とはあれども阿保親王娶桓武天皇女伊豆内親
王生業平とあれば行平等とは別腹にて伊勢物語にい
へるに同じされば愈々見まくほしう思されけんもこと
わり也彼物語の或抄に皆同腹なれどとりわけかなしく
思ひ給へばひとつ子とはいへりと有は口に任せていへ
る也○眞淵考眞字伊勢物語には一子爾副と書たればひ
とり子とよむべしひとりをつなど書違しにや

返し

なり平朝臣

世間にさらぬわかれのなくしがなちよもとなくく人の子のため
契沖曰物語にはちよもとなくくをちよもと祈ると有な
げくとは深く思ふ心なれば祈る心あり人の子とはおよ
その子をいふと云へど我事なり上句は廣く下句は我身
に歸するなり○眞淵案諸抄人の子とは世上の人の子を
云て其内に我有といふこれはかの百千どりまづひとつ
爲と定家卿の臆説あるをよしとして是らにも其意を用
ひたり契沖が云こそよけれよく聞え侍る又千代もとな
げくとは其ことをなげくなり物語に通本にはいのると
あれど古本眞字本に千世漢常齋と書たればいふと訓
べし

寛平御時さまの宮の歌合の歌

成朔日甲子天皇移幸長岡宮。とみの事は頓の字なり源
氏物語桐つぼに「は、きみもとみにえものものたまは
ず。はは木ぎに」とみにもまどろまれ給はず。夕顔に
「か、るとみの事にはす經などをすなれとて云々。ま
はすばかりに云々此内親王薨じ給へるは九月なればそ
の度の事にはあらず病氣などの時なるべし枕草紙にま
た「なり平が母の宮のいよく見まくとのたまへるい
みじくあはれにをかし引あけてみたりけんこそおもひ
やらるれ○眞淵案におのれが考もたがはずされども伊
登内親王をいまの人いとうとよむは甚誤の俗よみな
り續日本後紀伊豆又伊都とかければいつと訓なり親
王は乳母の氏を名とする例なり古いとうと云氏やは
ある

老ねればさらぬわかれのありといへばいよく見まくほしき君哉
さらぬ別と云は不避別也のがれぬ也竹取物語に「此月
の十五日にかのものとの國より迎へに人々まうでこんず
さらすまかりぬべければおぼしなげかんが悲しきとを
云々。順集「川風はさらん方なみ山吹の散ゆく水をせ
きやとめまし。伊勢物語に「ひとつ子にさへ有ければ
いと悲しうし給ひけり。三代實錄に故四品阿保親王第

ありはらの棟梁

白雪のやへふりしけるかへる山かへるくもおいにけるかな
新萬冬に入顯注には「やへにかさなるかへる山かへ
すくもと有眞淵案に顯昭の本にさあらば猶詞と、の
ふかたなるべしかへるくといふ事少し聞えがたし顯
注にまたがふべしまかし上句はやへといふも聞えたれ
ど雪のやがてかさなるといふもいかゝあらん上句は今
のをよしとすべし又契沖は上は序ながら白雪をいひて
髪のまらげはつるをこめたりといへりさも聞ゆれど序
歌は例にもなければ作者の心まりがたし

同じ御時うへのみむらひにてなのことにおほみき給ひてお
ほみあそびありけるついでにつかうまつれる

とし行の朝臣

貴來

老ねとてなどか我身をせめきけん老すばけふにあはましものか
せめきけんを顯注に兄弟闕于牆外禦務注云闕恨也禦禁
也務侮也【兄弟闕于牆外禦務は詩小雅】といふを引る
を定家卿闕字常棟詩に此詞侍と云此歌は責來といへる
を習てかの兄弟闕の字を用る事おもひより侍らす猶責
來けんにて歌の心たがはずや侍らん云々是は定家卿の
説眞なり其上異國の詩を和訓にてよみては通せざるな

の事なり今は子松なりされば種はまきけんと云も人の
 親子を思へる心なり子松といふ説は萬葉第二に云「妹
 が名は千世に流れんひめ島の子松がうれに昔むすまで
 に。第十六卷向のひばらも未雲のねば小松がうれ従あ
 わ雪ながる。第十一「なら山の子松がうれにあれこそは
 我思ふいもにあはずやみなん。是らはみな子松とかけ
 り又拾遺に「我のみや子もたるてへば高砂のをのへに
 たてる松もこもたり。以上引合て良證なり筈を竹の子
 といひ古事記に仁徳天皇の御歌には「ひともとすげは
 子もたすともよませ給へり大きなれどもそれより大き
 なる松にそひてたてるをば子松といふべし又は小松に
 て今は大きなれどもたねまきけん時をさしていへる歟
 いそべに松の種まく事はなけれど常の草木になすらへ
 ていへる歌の習なり

かくしつ、世をやつくさん高砂の尾上にたてる松ならなくに
 顯注云是は播磨高砂の尾上のさと、いふ所の濱に松の
 有を高砂の尾上の松といふ惣じて山を高砂といひをの
 へを尾上といふにはあらず歌にまたがひておもひわく
 べし契沖云かくしつ、とはさせるとなくていたづらに
 老行心なり拾遺の難戀貫之「ひととりして世をしつくさ

名と聞ゆ是は一地名なる事序に高砂住の江の松も相老
 の様にと此歌どもの事をかければ地名なる對語にてま
 るべし

藤原の興風

たれをかし知人にせん高砂のまつもむかしのともならなくに
 或抄にたれをか昔の去る人にせんとおもふに高砂のま
 つならで昔のものなしされどもそれはのこりても友に
 てはなければかひなしと舊友を慕ふ由也眞淵案に此注
 大概聞えたるを慕ふといふぞあし、さる心には非ず契
 沖いふ此歌は興風老はて、昔の友の獨も残らざる事を
 わびたるなり誰をかも何をかもといふ心人の上にかぎ
 らず萬物の上にて何をか友にせんといふ心なり萬物の
 中には高砂の松のみ色もかへず所もさらずよはひ久し
 き物なればせめてかれをとおもへどもむかしの友にあ
 らねば外にまた誰か有んといふ事をあまり我身の老た
 るといはんとて松さへ我にくらぶれば猶此ごろの物な
 りと云心也土佐日記に貫之の「今見てぞ身をばしりぬ
 る住の江の松よりさきに我はへにけり。此心同じ以上
 五首松につきてよめるを一類とす眞淵案に此注に土佐
 日記を引ていへるかの契沖が僻なり日記の歌は今心の

ば高砂の松の常磐もかひなかりけり。同難戀貫之「いたづ
 らに世にふるものと高砂の松も我をや友と見るらん。
 六帖「徒に老にけるかな高砂の松や我身のはてをかた
 らん。重之集「高砂の尾上の松の我ならば世をへての
 みはたてらざらまし【後撰春上花山にて道俗酒たうべ
 けるに素性法師「山守はいは、いはなん高砂の尾上の
 櫻折てかざ、ん】○眞淵案に或抄にかくして過つ、世
 をやつくさんのをのへにたてるまつならねばとなりかく
 しつ、はとにかくにと云心なりと有此とにかくにとは
 似たる事にて非なりかくはまかと同じ如是しつ、なり
 拾遺貫之の歌を以てみるにいたづらに過行身をなげき
 て高砂の松の徒に年をへたるに對して言なり或抄の松
 ならねばと云は非なり松にあらぬにて又或抄に此播州
 は尾江なりと有此江はえのかななり何にも證ありて江
 といふには有べからずさ思ひよりてかはりめいはんた
 めにてかなはわきまへざるなるべし惣じてをのへとは
 山にいふ詞なり和名集に高砂と云地名もなく只多加と
 云郡は有なりそのあたりにやまして尾上といふ地名も
 見えねば是はかへりて高砂といふ所の山に有松ならん
 と覺ゆ素性法師のよまれし花山にての歌なれば山の惣

にあらずかの詞を見て去るべし今の歌は二首共に序に
 高砂住の江の松も相おいのやうに覺えといふをしらざ
 りけるより諸抄共解を誤れりいかで松より我はふりた
 りと思ふ心此歌にあらんや引歌を以て本歌を誤る注共
 なり歌の心は吾いたりて老ぬれば昔の友一人も今はな
 しさらば高砂の松は世にふりたればかれをや友とせん
 と思へばかれはた非情のものにて我昔の友にあらず今
 はた、世に我ばかり老てあることをなげきて詠たる歌
 なり高砂の松ばかり我も老たるこ、ちするといふとを
 序に書しにて此歌注他を求るに不及ものを序の詞を相
 生と心得るより皆違ひ有なり或抄に舊友をしたふとい
 ふは歌よくしらぬなり是は我極老をいはんとて昔の友
 なしといふなり舊友をいたふ本意にはあらず我極老を
 なげくなり

よみ人しらす(一本無はわろし)

わたつみのおきつ照あひにうかむあわの消の物からよるかたしなし
 歌にも大祓辭にも照のやほちの八しほちのしほのやほ
 あひなどいへり下句消ぬ物ながらよるかたもなしとい
 ふは是も老て後はまだ消すしてあれど身のより頼む方
 もなしと述懐せるなれば上に次り消ぬものからはいつ

にもいふべけれど打まかせては老ては消ぬべきなるを
命の残りたりと見ゆるは籍次にて知るべし

わたつみのかざしにさせる白妙の波もてゆへるあはちしまやま
或抄喜撰式に海底と書てわたつみとよめるを萬葉には
大海ともわたつ海とも又わたのそこともよめり日本紀
に海神と書てわたつみとよめり又海神と書てわたつみ
とよむによせてかざしにさすといふ山神と書てやまづ
みとよめり嶋をしら浪のゆふと云事はあるべくもなけ
れどよろづの物をゆふなれば浪にて嶋をゆふによせて
よめり○契沖曰わたつみは惣じて海をもいひ又海の神
をもいふ今此歌は海神なり海神海童海若など書てわた
つみとよむ是なり波のたつが白くて花のやうなればわ
たつみのかざしにさせるとはいへり萬葉第一に人萬呂
の長歌「山づみのまつるみつぎと春べには花かざしも
ち秋くればもみちかざせりとよめり後撰小町「花咲て
みならぬものはわたつみのかざしにさせる沖つ白浪。
今の歌にてよめるか又伊勢物語に「わたつみのかざし
にさすといはふも、君がためにはをしまざりけり。是
に今の歌を思へるにや浪もてゆへるとは帯のこしをめ
ぐるが如くあはちしまを浪の立まはれるをゆひかた

むるといへり文選天台賦云結根爛於華古詩云冉々孤生
竹結根泰山阿。萬葉第三羈旅歌に「わたつみはあやしき
物かあはちしま中にたておきて白波をいよにめぐらし
○眞淵案に右の説大かた當れりわたつみの事は皆わた
つうみと今の本に惣じて書は非なり萬葉に渡津海など
書たるをも皆わたつみとよむべし其證は同萬葉かな書
に皆和多都美など書て和多都ウ美と書しことなし是實
に古語にかなへり秋部にくはしくいふごとく元來は海
神の名なりをれより只のことにもいへり語の本末をし
らぬ注はまどふべしわたは宇奈の約和なり多は奈可の
略語にてなだといふも海の邊にはあらず海中をいふこ
とにて語も通ずるなり津は司の略美は神の上略なり表
津々男中津々男底津々男などいふも表司男神といふこ
となるにて此津助字ならぬ事を知るべし扱わたつうみ
といひてはわたにて即海也又下にうみといはんや古語
しらで古語をとくと古の學を害するにいたる歌などは
ともかくも云ても罪なかるべし又白妙の波花に似たれ
ばと云に後撰の歌を引るは叶ふに似たれども物語には
藻をかざしにとよめるを思へば必花ならでも海上に
たつ白波をかざしといふは白細と置るによれば布の類

に見てそれより裳の腰をゆへること、いひかけたるべ
し布の類をさすとはいひがたけれども上は只浪をかざ
しと見たて、下句へつゞけるは布のかたにてみるには
ゆふといふことのよく聞え侍るなり白妙の藤など直に
萬葉は衣服に云冠辭なるを白妙の浪といふは此比はや
く冠辭のさまの轉じたるなり始め聞しにはかざしにさ
すと云より結といへりと是は髮によせてゆふとも云べ
し

(哉なり)

わたの原よせくる波のしほくもみまくのほしきたまつしまか
その景物を以即いへりしほくは數々の事なり波はか
さねくよりくる物よりしき波と云は重とも及とも書
字の心なりそれはかずくある者なればしほくとも
云はかさねくもみまくほしきといふ心なりされどもし
ほくの本語はしほくなりしほくは暫時のと
ながらそれをかさねくいへば多なり或抄どもに萬葉
の「郭公とはだの浦にしほく君をみんよし
もがもといふ歌を引るは萬葉にては此歌も論あるべき
なりそのうへしく波はしきる波にて重及の心なりそれ
に布或は敷の字を假字せり下句のしほくには數々と
書り此敷に敷と字の似たれば後人數々と誤りしを其儘

しほくともみしにや萬葉の歌はしく波のしくくと
つゞけし例あればしくく君をといふなるべきを論も
なくて引てはかへりて此歌の論に害するなり此歌も古
歌と聞ゆればしくくもとありしにや作者の心まりが
たし今の世にては古今集は皆全本はすたりてかの定家
卿の頃の疑本のみ傳ればたゞすに所なしかなしむべし
玉津嶋萬葉(引歌)「玉津島みれどもあかすいかにしてつみ
玉津嶋萬葉(引歌)「玉津島みれどもあかすいかにしてつみ
如是よめればむかしよりいと絶景の地なる名有なり又
聞玉津の津もじは濁音によむべし玉出る嶋といふ義に
て玉出嶋と書し古書あれば濁音の證なり「うつば物語
吹上の卷の上「年を経て波のよるてふ玉の緒にぬきと
めなん玉出るしま「おぼつかかな立よる波のなかりせ
ば玉づる嶋といかてまらまし「玉出る嶋にしあらばわ
たつみも波立よせよみる人ある時と見えたれば玉出る
嶋といふ事をしれ」惣じて津都の字は多くは濁に讀な
り又衣通姫の命此に齋て和歌の三神といふ事何にも正
記になし只後世好事の歌學者の偽りごと、るにたらず
なにはがた鹽みちくらし雨ころもたみの、島にたつ嶋わたる
或抄に田鏡といはんとてあま衣といふみのは雨にきる
衣なりあま衣はたゞ海人の衣也「ころもでのたなかみ

と續けたる同事なり○眞淵案に右の兩説はいづれとも
 わかち得ざる注なり衣手のたなかみとは衣袖の手とつ
 けてのもじ有てよく聞ゆ是はたゞ雨衣とのみいひき
 りて手とつゞきしと聞えずその上貫之の雨によりたみ
 の、嶋をとよまれしを以て此歌もあま衣袋とつゞけた
 るなりと知べしみなたゞ當分一首にて思ひよることを
 以口にまかするより誤り多なりつゝ、しむべし契沖云是
 は神樂大前張の歌なり願注云あま衣とはとり物の中に
 あるあまぎぬといふ物なりたみのといはんとてあま衣
 とはおけるなり袋すなはち雨にきる衣なり雨衣を油衣
 とも書り三品以上雨懸雨衣たみの、嶋は津の國にあり
 されば難波がたとよめり遠所の七瀬の中にあげたり天
 王寺の傍にあり今案に説文云袋雨衣也海人の衣と云に
 はあらずと知るべし「なにはがた鹽干に立て見わたせ
 ばあはちの嶋にたづ鳴わたる

つらゆきがいづみの國に侍ける時にやまとよりこえまうでき
 てよみてへかはしける

藤原たゞふき

契沖云宇多法皇春日社にまうでたまひける時大和守忠
 房二十首の歌をよみて奉る此歌も大和守の時なるべし

君をおもひおきつの濱に鳴たつたづねくればでありとだにきく
 契沖曰君をおもひおくとつゞけたり上に「露ならぬ心
 を花におきそめて。又「人に心をおきつ自波とありし
 意なりおきつの濱和泉なり鳴たつといふをうけて尋く
 ればぞとつゞけたり有とだにきくといふはすこしおと
 づれの絶たるをうらみし心あり

返し

つらゆき

おきつ浪たかしの濱のはま、つの名にこそ君を待たりつれ
 契沖云拾遺に二たび此歌を入られたる詞書にいづみの
 國に侍りけるほどに忠房朝臣やまとよりおくれる返し
 とあるは先の歌と詞書と違へり貫之集ことば書の様今
 と同じ沖つ浪はたかしの濱とつゞけたため高石は持統
 紀に大島郡高脚海とて放生の地とし給へる地なり今も
 聞ゆる所なり濱松の名にこそは松の名にたがはず待事
 の久しきと也或抄にかゝる名所の聞えずやはあらんと
 君を待たりつると也所からによりてこそ待得つれと
 述懐の心なりといへり入ほか也萬葉「いざ子等はやく
 やまとへ大とものみつの濱松待戀ぬらん。同東歌「た
 きこるかまくら山のこたる木をまつとながいは戀
 つ、やあらん。眞淵案に此歌は上句は序にて待をまつ

の名といふ同じ語なればなり其上とこしなへにまちし
 といふとなるべし下に待わたりつれと有にて久しく待
 しと聞ゆ即國の名地を以て詞とすさて拾遺詞書と右の
 詞との違の事おぼつかなし其故は歌をみれば則いづみ
 の國に忠房の行替てよめると見ゆるを詞書にやまとの
 國よりこえまうきてまではさ聞ゆるを讀て遣はしける
 と有物いづみの國の貫之の治より他所まで來りてよみ
 てつかはしけるにやしからずはきてつかはしけるの上
 にやまとよりこえまうでゆきてかへりきてよみつかは
 しけると有ぬるを又文字の脱たるにや此詞のやうおぼ
 つかなし拾遺は考てさおぼゆるなり歌は即そこに
 よみし様ながら後にかへりてつかはすにもその時のこ
 とをたゞちにいはんにはさもよむべし契沖が論いまだ
 くはしからずつかはしけるといふは拾遺に有叶ふなり
 しかれども拾遺には一たびとむらひ行しことを略して
 いふにやしからずばいまだ貫之が任にはゆかて同じ國
 に行たりし時によみてつかはしけるなるべし○眞淵又
 案に契沖が「いざこどもはやひのもとへと云は萬葉し
 らぬ詞也萬葉第一山上憶良在大唐時憶木郷歌「去來子
 等早日本邊大伴乃御津乃濱松待戀奴良武。第三高市連

黒人歌「去來兒等倭部早白菅乃眞野藤原手折而將歸の
 類にていざこらと四言によむべし等の字をどもと訓じ
 たる例未見す右の歌を新古今集に「いざこどもと「い
 ざひのもとへとてのせられしかどかの集は古歌を直し
 或は萬葉などをばよくも知給はで書給へばこれのみな
 らず證ともなしがたし「はやひのもとへとはいかゞ覺
 ゆ日本と書てはやまと、よむ事日本紀の例萬葉にも
 「日本のつげのをぐしなど有をおもふに和泉にもやま
 と、云地名有てやまと、よむべく侍れば是をも黒人の
 歌のごとくはやくやまとへとかははやまとべにとかよ
 むべきを決てかなをあぐる事いとかははらいたしこ、
 にあづからぬことながら此外も引る歌に誤多ければか
 りにいふのみ

なにはにまかれりける時よめる

難波がたおふる玉しなかりそめのあまとぞ我はなりぬべらなる
 或抄に云難波がたにおふる玉をかりそめにくれればあ
 まとなりたると也契沖曰京より來て海邊に出づるめづ
 らしさにかりそめにこゝに住つきて玉藻などかり蟹と
 もなりぬべしと浦をほめてよめり拾遺に打出といふ所
 に山吹の花面白くさけるをみて惠慶法師「山吹の花の

さかりにゐでにきて此里人になりぬべきかな

あひしれりける人の住吉にまうでけるに讀てつかはしける

にぶのたゞみね

住吉とあまはつぐとしながあすな人わすれ草おふといふなり
契沖云住吉長の浦とよめるは此歌によりて名付たるか
ふるさうたには見えぬにや拾遺貫之「月影はあかす見
るともさらしなの山の麓にながみすな君○眞淵案に此
歌にいたりてすみよしなりとおもふ人あらんか前にい
ふごとく古歌には皆すみみの江なれば元來は住吉と書て
も江のかな、るを是は住えきと云事を用ひたるなりさ
れどもえと云もみえしのなどの類にてよきと云意にな
せるなり猶すみのみえとよむべし

なにはへまかりける時たみの、鳥にて雨にあひてよめる

つらゆき

雨によりたみの、鳥をけふゆけばなにはかくれぬものにぞありける
拾遺重て載て第二三句「たみの、嶋にわけゆけど。家
集には三句「來て見れば。五句「我身なりけり。名に
はかくれぬと云に難波を云そへたり玉葉集秋の下たみ
の、鳥の菊をよめる「たみのとも今はもとめじ立かへ
り花の半にぬれんとおもへば

に心もとなく思ふべかめるにからめいたる舟につくら
せ給ひけるいそぎさうぞかせ給へおろしはじめさせ給
ふ日はうたづかさの人めしてふねがくせらるみこたち
上達部などあまたまわり給へり

水のうへにうかべる舟の君ならばこゝぞとまりといはましものを

契沖曰上句水のうへにうかべる舟のごとくなる君なら
ばとも又水のうへにうかべる舟のま、ならばとも兩方
に聞ゆともに同じ心なり眞淵案に榮抄に舟の君にてあ
るならばといふかた然るべしのもじにて略したること
なきにはあらねど如くとみんもむづかし契沖のうかべ
る舟は荀子云君者舟也庶人者水也水能載舟水亦能覆舟
此心には非ず莊子に虚舟來觸喙あり今は法皇なれば莊
子の心なり本朝文粹第七法皇請停封戸書云願早収繪旨
莫繁三小僧虚舟之心同第八九日後朝侍朱雀院同賦閑居
樂秋水應太上法皇製非知者不樂之故得我后之歡三脱履
非玄談不説之故過我居之途虚舟。後拾遺に延久五年三
月住吉に參らせ給ひて歸きによませ給ひける後三條院
「すみよしの神はあはれと思ふらんむなしき舟をさし
てきたれば○眞淵案に法皇なれば虚舟のごとくいふは
非なり歌に虚舟のと見えす是は今日舟あそびの次に君

法皇にし川におはしましたりける日つるすにたてりと云事を
題にてよませ玉ひける

契沖云延喜七年九月に此御幸あり九首題をもておの
くくに歌をよませ給ふなり友則貫之躬恒是則頼基等な
り序は貫之かけり或抄に云延喜七年九月法皇主上大井
川に臨幸なる此日九首の題にて歌をよませらる西川は
大井川なり云々眞淵案に法皇主上臨幸は延喜四年十月
九日なり此延喜七年九月にも主上も行幸ならば法皇と
のみ書べからず

あしたづのたてる川べを吹風によせてかへらぬなみかとぞ見る
眞淵云河邊をと切て次を心うべし

中務のみこの池にふねを作りておろしはじめてあそびける日

法皇御覽じにおはしましたりけりゆふさきりつかたかへりおは

しまさんとしけるによみてたてまつりける

伊勢

契沖曰中務のみこは代明親王か式明親王歟考ふべし兼
明親王には有べからず諸抄に敦慶親王といへど敦慶は
式部卿なり【扶桑略記云延長五年十二月廿七日三品行
中務卿敦實親王云々】源氏物語胡蝶に「山のこたち中
嶋のわたり色まさる苔のけしきなど若き人々のはつか

をふねといふことも侍れば語のより所としてよめるの
みなり法皇を虚舟といふはさることなれどもこゝに用
なし○契沖云下句はこゝぞとまりといひてとゞめ奉る
べきものをとなり還御を惜み奉るなり或抄に伊勢は法
皇の御おもひ人世思ひに叶はぬやうの心侍りけるころ
にやこよひはこゝにとゞまらせ給へとの心なりといへ
るは誤なり用べからず御思ひ人なりしは位におはしま
しける時のことなり是は中務親王家にての事なればあ
るじのみこより始て人々の心をよめるものなり

からこといふ所にてよめる

素せい法師

都までひりきかよへるからことは涙のをすけて風ぞひきける
【古は次をもすぎといへば是はつげをすげといふべし】
契沖曰六帖第四句「波のをよりと有するは萬葉に
著の字を用たり都にて名高く聞ゆるといふとをからと
といふ所なればひりきかよへるといへり六帖「松のね
をとにえらぶる秋風は瀧のいとをやすげてひくらん

在引の瀧にてよめる

在原の行平朝臣

こきちらす瀧の白玉ひろひ置てよのうき時のなみだにぞかる
後撰「朝毎におく露袖にうけたためてよのうき時のなみ
だにぞかる。伊勢物語「我世をばけふかあすかとまつ

かひの泪の瀧といづれたかけん。六帖「わび人の袖を
やかれる山川の涙のごとも落る瀧かな。貫之集「たぎ
つせもうき事あれや我袖の涙に似つ、落るゑら玉

布引のたぎのしとにて人々あつまりて歌よみける時よめる

なり平の朝臣

ゆきみだる人こそあるらし白玉のまなくしちるかそでのせばきに
契沖云ちるかはちるかななり我にえさせんとて水上に
ゑら玉の緒をぬきみだる人こそあるらめつ、むべき袖
のせばきにあはすれば分に過たりとよめるなり後撰
「たぎつせに誰白玉をみだりけん拾ふとせしに袖はひ
ぢにき【真淵案みなかみに誰人の在てかく白玉をぬき
みだしつ、わが袖におとし入ぬるにかかく狭きたもと
にはつ、みあへざるをとなり且瀧をほめてはた身のは
どをうれひたり】

よしの、瀧を見てよめる

承均法師(均同垢)

たがために引てさらせるぬのなれやよなへて見れざとる人もなき
六帖五ぬの、題に二句「かけてさらせる。五句「さる
人もなき【ぬのなれやぬののあればやなり】

願しらす

神たい法師

契沖云文徳實録に嘉祥三年五月に神のために七十人の

分衣とは袈裟を蓮花服離靡服などいひて内外清浄に道
を行なふ人になへる衣なれば清瀧の瀧々のゑら糸を
もておらばやとよめる心にて露分衣といへると詞は似
たれどかはりぬべくおぼゆれどふるくも然べき人々皆
露分衣の類によめり玉葉旅「朝明の山分衣ぬれてけり
深き夜たちの露のまゆりに。新後拾遺「足引の山分衣さ
のみやは雲より雲に日かす重ねん。新續古今春下「花に
こし山分衣風ふけばかへるたもとぞ雪になりぬる。同
旅「こえ暮す山分衣さらでたにはさぬ袂にふる時雨哉。
真淵案に此歌題去らずとあれば吉野なる事は前の歌に
ひかれて顯昭の誤とゑられたり又山分衣契沖がいふ如
く隠者山僧などの衣なり心は此歌にかなへりあながち
に袈裟といふも作者法師なればさも有べけれどもたゞ
に山ごもりの衣とみん方あるべし山伏など、云は山分
衣といふをいと狭く思ひたるなり隠士などにてもいふ
べし後世常人の旅行などによめるはあたらす

龍門にまうで、瀧のしとにてよめる

伊勢

伊勢集にやまとに三月ばかりすむにさうくしく寺め
ぐりせんとおもひてありさけるにりうもんといふ寺に

僧を度し給ふよりて名の上の字におのく神といふ字
をおけり此神たいも其一人にや

きよたきの瀧々のしら糸くりためて山わけ衣おりてきましましな
・顯注云きよたきは醍醐にもあり清瀧川は高雄にもあれ
どこの歌は吉野の瀧にてよめる山わけ衣とは山ぶしな
どの山をわけ行衣といふ也萬葉には露わけ衣とあり萬
葉「夏草の露分衣きもせぬになど我袖のひる時もなき
【萬葉十露歌「夏草乃露別衣不著爾我衣手乃于時毛名
寸。真淵案に下句に我衣手といふに思へば上の露別衣
は一種あらざれば聞えず山わけ衣と云とは心違也より
てツユツケシキヌキモセヌニとよむべしされば山わ
け衣と名目にいふ引歌には不叶なり萬葉をあしくよむ
より違有なり露わけしとよますば此歌聞えず】瀧々の
白糸くりためてとはせ々のゑら波の糸のやうなるをく
りためてと云なり契沖云題去らずと有うたをいかで此
歌今吉野の瀧にてよめりとは申されけんもし顯昭の本
には題去らずといふ事なかりけるかもしくは上によしの
の瀧をよみ次に龍門の歌あればよしの、たきにこそは
とみゆれどきよ瀧もまた山わけ衣とよまじき所なら
ぬうへあらはれたる名なればよしのとも定がたくや山

まうで、む月の十日あまりになんありけるみれば此て
らのありさま瀧は雲の中よりおちくるやうに見ゆ仙人
のいはやといふはいたく年つもりていはのうへのこけ
やへにむしたりあはれにたふとく覺えて涙はおつる瀧
におとらずみゑらぬこ、ちにたぐひなくめでたく見て
物かなしく宮こおもひやられていしのもとにゑばしな
がむるに此寺いとくろうなりぬ雨やふらんとすらんと
ともにある人といそぎければ雨はふらじ雪などいふほ
どに雪さえはかりにてかきくらしふるある人々いざ歌
よまんといひければたちぬはぬとよみたればこと人よ
ますなりにけり真淵案扶桑略記云寛平十年十月廿二日
太上天皇直指宮瀧上皇臨發云々廿五日遂至宮瀧…向
龍門寺禮佛捨綿松羅水石如出塵外昇朝臣友干朝臣兩人
攀向古仙舊奄不覺落淚殆不言歸

たりのぬぬ衣きし人しなきものを何山姫の布さらすらん
契沖曰たちぬぬ衣きし人は仙人也もろこしにも瀧を
瀑布といひこ、にも布引の名さへあれば今は其山人も
なきに何しに山姫の布さらすらんとよめり懷風藻に葛
野王五言遊龍門山一首「命駕遊山水長忘冠冕情安得王
喬道控鶴入蓬瀛。素性集に「雲とみて人惑はすな流れ

出で、龍の門よりきたる水かも。能因「あしたづにのりてかよへる宿なれや跡だに今はのこらざりける。眞淵案に扶桑略記云昌泰四年八月云々同月天台山沙門陽勝於大和國吉野郡堂原寺邊飛行空中云々古老傳本朝往年有三人仙飛龍門寺所謂大伴仙安曇仙久米仙也大伴仙草庵有基無舍餘兩仙室于今猶在但久米仙飛後更落其造精舍云々大和久米寺是也

朱雀院の御門のびきの瀧御らんぜんとして文月の七日の日おはしまして有ける時にさむらふ人々に歌よませ給けるに讀る

或抄にふみ月は七月なりふみひろげ月といふ常にはふ月と云々眞淵云ふみ月はほふ、み月の略なり萬葉考の別記にくはしく云又ふんと書は非なりふみ月とかきてふん月とよむぞ言のならひなる

たらばなのながもり

作者部類云橘長盛長門守秋成子至延喜延長十二年たちばなの直幹の父なり

ぬしなくてさらせる布をたなばたに我が心とやけふほかさまし瀧をやがて布とのみよめり

ひえの山なるおとはの瀧をみてよめる

たみかぬ

殿の東

おしひせく心のうちの瀧なれやおつとはみれどおとのきこえぬ【伊勢集たきおちたり「限りなき心のうちの瀧なれば世に傳はりて流れこそせめ】契沖云文集五絃彈を顯昭引て曰「第五絃聲尤掩抑瀧水烟凍不得流。密勘云御障子繪をよませ給ひけるに更衣のよみ給へる歌なれば思ひせきて苦しき心の中をこそせくとはいひながら聊か色に出給ひけぬ眞淵案にいさ、か色に出などあるは何の思ひとはまらねど戀などのことと思ひ給ひし注にや然らば戀に入るべし是は元來然る自らのことをいふに非ず繪をよむなれば音のなき瀧の體をいはんとて心の中にいひ出すして思ひたぎる事のあるにたとへたりと見るべし又顯注に思ひせくは思ひむせぶ也と有は似たるとにて此歌には不叶いはんと思ふ思ひを瀧川などせきとむる如くせきとむるによせたる詞也文集の句などここに用なし歌の體次の歌にて知るべし

屏風のみなる花をよめる

つらゆき

咲きそめし時よりのちはうちへて世は春なれやいろの常なる契沖云咲そめしといひて花といはぬは繪にゆづるなりうちはへては萬葉に打經而とかけり布繩など引きはへ

うつほ物語第三に曰く「すみわたりける所はそのあたりはひえさかもと小野わたり音羽川ちかくて瀧の音水のごゑあはれに聞ゆる所なり。契沖云此音羽の瀧を又はおとなしの瀧ともいふか六帖「いかにしていかによからんをの山の上より落つる音なしの瀧。源氏夕霧朝夕になくねを立つる小野山はたえぬ涙や音なしの瀧

おちたぎつたきのみなにかみ年つもしりせいにけらしな黒き筋なし

おちたぎつは

おちたぎつはおちたまるなりかくかさねたるは本語はたぎるを後に瀧の名となればなりみなかみに髪をいひたり

同じ瀧をよめる

みつ

風ふけど所もさらぬ白雲は世をへておつる水にぞ有ける

えら雲は此てにをはあるなり吹上にたてる白きくはと言は先本をいひて末にうたがへりこは末にことわれり吹上とは反するなり能宣集「うき鳥と名に聞くれど浪の上に所もさらす世をぞへにける

田村の御時に女房のさぶらひにて御屏風の繪御覽じけるに瀧

おちたりける所おもしろしこれを題にて歌よめとさむらふ人

におほせられければよめる

三條の町 紀伊子名虎 女惟喬親王母

契沖云女房のさむらひは臺盤所なり主上御座なり清涼

たる如く長き心也文鏡秘府論屏風詩曰「綠葉箱中夏紅花雪裏春去馬不移迹來車豈動輪 唐吳成。管家文集第五屏風詩曰「人馬無來去煙霞不始終。後撰「ゑにかける鳥とも人をみてしがな同じ所を猶尋ぬべく。眞淵案にはへては契沖が説も同じとながら語をまらぬ也はへあるといふも共にのびたる也前に、ほへるといふに注す

屏風の繪によみあはせてかきける

さかのへの是則

かりてほす山田のいねのこきたれて鳴きこそ渡れ秋のうければ契沖云かりてほすに雁をそへて下のなきこそわたれを

あひしらへるか稻はこく物なればこきたれてとつ々けたり山田の稻も雁も皆繪に有けるなるべし躬恒集「かりにくる山べの鳥を秋霧のたつたびごとくに空にこそ見れ。これは田ともいはでかりてくるといひてかりてくる山邊の鳥とつ々けたるに雁をいへるとぞ聞えける六帖「かりてほす山田のいねのこきたれてねをこそなかめ代をばうらみじ。眞淵云此歌は二首を一つに書たるなりさてこきたれば契沖少したらずおつる涙を稻をこきおろすによせたり

續萬葉論卷第十八

雜下 六十八首

題しらす

よみ人しらす

世のなかに何か常なるあすか川きのふの淵ぞけふは瀬になる
 或抄云あすか川の定まらぬ川なれば明香川といへば水
 につきて昨日の淵ぞけふは瀬になるとよめり眞淵案此
 注あすか川の淵瀬かはりやすき川なる證此歌の外には
 なし此歌にてさおもふなるべし又明日と云より昨日の
 ふちといひつゞけしなりといふは前後心たがひたる注
 なり諸抄大様是に同じ又曰此集の序今はあすか川の瀬
 なるうらみも聞えず淵變爲瀬砂長爲巖等のことば、
 歌のことをいふなればたがひなし○一禪御説例の物知
 りがほに筆にいとまをいれていろくの事を書給へり
 たゞ瀬の定まらぬ川なり契沖云きのふのふちとみし所
 けふは瀬となればけふ瀬と見る所あすは又淵となるご
 とく世間はいつれのといかなるわざか常ならんと思ひ
 取なり後撰「ほかの瀬は深くなるらし飛鳥川きのふの
 淵ぞ我身なりける。眞淵案に契沖が注も歌の意は然り
 され共あすか川にかはるといふとは元來此川の變じや

すきといふ外に證なければさだめがたし是はあすかと
 いふよりのふけふとはいひひきて川は變る事有物なれ
 ばつゞけて此川あながちに定なく變するにあらずされ
 ども此地に變するをいふには古證例有ことなるを人
 みなおもひよらざる也飛鳥のあすかの事は古事記履中
 記云坐伊波禮之若櫻宮治天下也坐難波宮之時
 坐大嘗而爲豐明之時於大御酒宇良宜而大細寢也
 爾其弟墨江中王欲取天皇以火著大殿於是倭漢直
 之祖阿知直盜出而乘御馬令幸於倭故至于多遲比
 野而霜詔此間者何處爾阿知直白墨江中王火著大殿
 故率逃於倭爾天皇歌曰多遲比怒遲泥牟登斯理勢婆多
 都基母母母知兵許麻志母能泥牟登斯理勢婆至於波邇
 賦坂望難波宮其火猶炳爾天皇又歌曰波爾布邪迎和
 賀多知美禮婆迦藝漏肥能毛山流伊幣牟良都麻賀伊幣能
 阿多理故至幸大坂山口之時遇一女人其女人白之持
 兵人等多塞茲山自當伎麻道廻應越幸爾天皇歌
 曰淤宮佐迦邇阿布夜衰登賣衰美知斗閉波多陀邇波能良
 受當藝麻知衰能流故上幸坐石上神宮也於是其伊呂
 弟水齒別命參赴令謁爾天皇令詔吾疑汝命若與墨江
 中王同心乎故不相言答曰僕者無穢邪心亦不伺

墨江中王亦令詔然者今還下而殺墨江中王而上來彼
 時吾必相言也故即還下難波歌所近習墨江中王之
 華人名會婆加理云若汝從吾言者吾爲天皇汝作
 大臣治天下那何會婆加理答曰隨命爾多祿給其華
 人曰然者殺汝王於是會婆加理竊伺己王入廁以
 矛刺而殺也故率會婆加理上幸於倭之時至大坂山
 口以爲會婆加理爲吾雖有大功既殺己君不義然
 不賞其功可謂亡信既行其信還惶其情故雖
 報其功滅其正身是以詔會婆加理今日留此間而
 先給大臣位明日上幸留其山口即造假宮忽爲豐
 樂乃於其華人賜大臣位百官令拜華人歡喜以爲
 途志爾部其華人今日與大臣飲同蓋酒共飲之時
 隱面大鏡盛其進酒於是王子先飲華人後飲故其華人
 飲時大鏡覆而爾取下置席下之劍斬其華人之頸
 乃明日上幸故號其地謂近飛鳥也上至于倭詔云
 今日留此間爲祓禊而明日參出將拜神宮故號其
 地謂遠飛鳥也是飛鳥は大和高市郡なり右の文にて
 とぶ鳥はもとよりの地名其上に此時にあすかと云との
 始まりしより元來の地名によりて飛鳥と書也飛鳥と書
 てあすかと讀るにはあらずさてこのそばかり忽ちに

大臣と也忽ちに命を失ふなどによりて飛鳥にはきのふ
 にかはると云ふ事をいふに川の淵瀬をよせていふなり
 これそのもとなり今の歌はたゞよの中の變をいふのみ
 いくよしもあらじわが身をなぞもかくあまのかるもにおしひみたる
 契沖云日本紀に萬歲と書てよろづよとよめればいくよ
 しもあらじとはいくばくの年もあらじといふなりあま
 のかりごもといふごとくみたる、物なればよろづに思
 ひあつかふをよせたり諸成案いくよしもの志は助字也
 鷹の來る嶺のあき霧はれずのみ思ひつさせぬよの中
 契沖云顯注にこれはくるみをかくしたる歌なり藤原輔
 相集にありよくよみたる隱題の歌はたゞの歌に入たる
 もよきなり今案に源氏物語橋姫に「嶺の朝霧はる、を
 りなくてあかし給ふに云々此歌をとれるか上ははれず
 のみといふべき序なり鷹のくるは歌のほひなり會丹
 集「みぞれふりくもれる冬のはれずのみつきせぬもの
 やまろが身のうき○眞淵案にかくし題ならばこゝに入
 べからず家集などには誤多ければいふにたらず
 小野たかむらの朝臣
 しかりてそむかれなくとしあればまづなげかれぬあなうよの中
 六帖には四句「まづなげかる、契沖云事ある時は先

あなうの世間やと歎かる、事よき有とてそむかれぬ物
ゆゑにといふなり清原の元輔歌「うしといひて世をひ
たすらにそむかねば物おもひまらぬ身とやなりなん。
眞淵いふこと、いふは軍祭喪などのことを皆いふ人の
死たるなどは皆こと、只にいふ

かひのかみに侍りける時京へまうのほりける人につかはしける

今本に京へまかりのほりけるとあるは誤なりまかるは
京より下るにこそいへ下にもまうのぼると有をおもへ
【今本に京へまかりのほり云々とありまかるは京より
下るにこそいへ下にもまうのぼると有をおもへよりて
あらたむ】○文徳實錄第五云仁壽二年九月戊子朔從五
位小野朝臣貞樹爲甲斐守京へのほる人は介掾などの朝
集使大帳使上る時などの時にや

都入いかにととほりやまたかみはれぬ雲井にわぶとこたへよ
契沖云行平のもしほたれつ、といふ歌にあはせて見る
べし山高みはれぬ雲井とはかひのまら根などをこめて
心のはれぬをよするなるべし

文庫のやすひでがみかほのさうになりてあがたみにはえ出た
たじやといひやれりける返事によめる

小野小町

ぬうき草の水より外に行かたもなし。浮萍轉蓬等は文
選等にもたとへたりわびぬればを諸注世にすみ侘ぬれ
ばといふ一向にすみわびともいふべからず身の時にあ
はぬ者はおもひわぶる事さま／＼有ものなり此はし書
を案るに後撰の歌の如く定めたる男もなき頃なればに
や康秀もさはいひたるなりまかれはいと身の愁侘る時
なるべし次の歌におもひはなれぬといふに是はねをた
えてとあるは反して此住なれし所はうければおもひは
なれて行んとなり

阿しらす

あはれてふことこそうたてよの中をおもひはなれぬほだしなりけれ
眞淵云あはれてふは人の我をいふなりことこそこのこと
は言なりうたてはそのことかさなりせんかたなきを云
が如し契沖云中々に人の我をあはれといふ詞こそうた
てく世を思ひはなれて捨もすべき身のさすがに心よわ
くえすてやらぬほだしなれとなりうたてをうた、なり
といふ説につかばさらぬだに世中をおもひはなれかぬ
る身にいよ／＼あはれといふことばのほだしとなりて
とむる心なりほだしは羈絆の字なり馬のほだしより出
たる詞なれば思ひはなれぬほだしといへり下の同じも

或抄に云あがたはる中を云なり外官春除日をあがため
しと云縣召は春二月外國人に官をなさるなり二月に有
事なり官召は春官を京中のをなさるれば又秋外國の人
を官をなさる、春は縣召秋は官召なり契沖云縣見はる
なかを見にはといふなり後撰にさだめたるをともな
くて物思ひけるころ小野小町「あまのすむうらこぐ舟
のかちをなみよをうみわたる我ぞかなしき。眞淵案に
或抄のことは常のことにていふに不及あがたはる中の
ことなるは聞えたりの中をば又或説には偏地は暇あり
て日長きなどいふはかたはらいたしゐなかは田居中の
略言なり【の中は外國をばみな夷といふ夷はえびすな
り言延備約爲なり須は略す乃加多は奈は乃加約多加通
にてえびすのかたといふ事なり此本書にゐなかの事を
かくありことのつゞめがらさなれど後の考にたゐな
略き言とあるはやすく此考に決したればこの約言のえ
びすのかたはむづかしければ略きぬされどのち評すべ
き事なれば書をふるなり】

わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなんとぞおもふ
【かくのみいひてえゆかぬよしいはんぞよき後の人お
もへ】六帖うき草伊勢續後撰「夏の池によるべきだめ

しなき歌に「世をうきめ見えぬ山ちへいらんには思ふ
人こそほだしなりけれとよめるも山ちへ入とのならぬ
ほだしゆゑなりといふ心なればいらんにはといへるも
ほだしの縁の心なり眞淵案にほだしは萬葉十六乞食者
詠云「馬爾己曾布毛太志可久物牛爾己曾鼻細波久例。是
によりて契沖も馬を本といへり布毛約保なればほだし
も同じ事なり字書云「馬繫足曰「絆繫首曰「羈。揚子雲交
州牧箴云「爰自「開闢「不羈不絆。又釋名曰「羈檢也所以
檢持制之也。不羈之士才高識遠不可羈係也。足ぶみをさ
せずからみつくる故に踏黙止の意なるべし○「あはれ
てふ言だになくば何をかも戀のみだれのつかねをにせ
ん。是も人のあはれと我を云也「あはれてふ言をあま
たにやらじとや春に後れて獨さくらん。是は人にあは
れといはる、なりかく二つある中に今は世中のことの
おもひ捨がたくなげかしきゆゑにはなれがたきなり

よみ人しらす

あはれてふことのはごとにおくつゆは昔をこふるなみだなりけり
契沖云あはれてふことのはとは是はあはれいつはかく
ありし物をと過にし方をいひ出るなり露の木の葉草
の葉に置て見ゆるによせて昔を戀る泪を言の葉ごとに

おく露とはいへり後撰「あはれてふとにまるとははなけ
れどもいはではえこそやまぬものなれ。同「あはれて
ふことになぐさむよの中をなごかなしといひて過ら
ん。眞淵案に此歌諸抄の注不叶契沖が説まかり過にし
方をあはれいつはといふ釋下句に昔をこふるといふに
て上のあはれは過にしかたをおもひ出で歎ずること、
まらるゝなり又後撰のあはれてふことにまるとははなけ
れどもといふ歌にて此詞呼鳴と歎じたることまるとは
或抄に無常をいふなど有は語をまらぬ説なり

世中のうきもつらきもつげなくにまづしるものはなみだなりけり
契沖云或抄に上句うきもつらきも世中は告ぬにといへ
るよし注せれど世のうきも世のつらさも涙にわが告ぬ
といへるなるべし後撰「見し夢のおもひ出らるゝよ
ひくゝにいほぬをまるとは涙なりけり。是は今の歌をと
れるにや續古今集にも和泉式部「何事も心にこめてま
のぶるをいかに泪のまづ知ぬらん

世の中は夢かうつゝかうつゝと夢ともしらすありてなければ
或抄に我身のありてなくなればといふは非なり凡世事
を觀念するに現も夢とあるよりおもひあやまる如しさ
れば世間といふものはあれども無がごとしとなり次の

歌もいづら我が身とあるより思ひあやまれる成るべ
し

世の中にいづらわが身のありてなしあはれとやいはんあなうとやいはん
契沖云いづらは事のまこといつはりなきはめとふやう
の詞なりいづら我身の眞實はときはめとひて求れども
ありてなければおもしろき物とやいはんあなうの物と
やいはんとなり上の「あはれともうしとも物をおもふ
時とも「あはれあなうと過しつる哉ともよめり下句語
勢巻頭の元方歌に似たり眞淵案にあはれをおもしろき
といふ説いかゞ侍らんあはれといふは嘆美にも嘆慨に
もことによりていへどこゝには美していふとは何を稱
美せんやこれらはいたりてうきをあなうといひて猶い
ひたらざれば又嘆の語をかさねたるなるべし上にあは
れあなうと又はあはれともうしともといふは嘆慨をか
さねたるにて安く聞ゆ

山里はものゝさびしきことこそあれよのうきよりは住まかりけり
小町集には第二句「ものゝわびしき。朗詠には二三句
「物さびしかることはあれど。契沖云或抄に物のわびし
よと有てそのよしに注せるは本の書誤るにこそ

これたかのみこ

白雲のたえずたなみきれにだにすめばすみぬる世にこそありけれ
六帖みね題作者をまるとす契沖云誰身上にもかくはお
もふべきを文徳天皇第一の皇子にましくて御うつく
しみも他にことにおはせし御身をやつして世をのがれ
てかすかなるさまにおはしましけるほどの事思ひやり
てみるべし此二首は山家の歌なり

しりにけん開ていといへよの中は波のさわぎに風ぞしくめる
契沖云かつはもとより知ても有けんさらすばまた聞て
もいとへ波のさわぎにそひて風さへ吹どよまんとことな
んおそろしきと世間昔も今もおだやかならぬ事をよめ
るなり風のしくとは日本紀に重波をしき波とよめり菅
万には頻波とか、せ給へりかさなりしきるとなり朝康
が歌に「白露に風の吹しく秋の野はともよめりこれよ
り下十一首は世をいとふことをよむなり

そ せ い

いづくにか世をばいとほん心こそ野にも山にもまどふべらなれ
或抄云世をいとひてもいづくにかすまんと思ひ定めず
我心こそ野にも山にもすむべくもおほえすまどふべけ
れとなりたゞ心が肝要にて有となり三界唯一心云々眞
淵案に此注いかゞいへるにか聞えがたし心が肝要など

又は佛の語等用なし契沖云心は野にても山にてもまど
ふ物なればさていづちにか世をいとはんとなげきてよ
めるなり「山も野も猶うしてへば白ま月いるべき方の
思はえぬかな。眞淵案契沖注も非なり心ばかりは野に
も山にもまどふやうながら身はいまだ閑居をさだめず
となりおのれがわかき時注せしに心社は山野に行ふり
なれ世をいとひて身を置ん所さだまらずとなり心こそ
といへば心が安くも山野にまどひゆけども身はいまだ
のがれやらすあるとなり身といはねど心社といふに身
と聞ゆ契沖が注なども社と云てにをは詞をよく解せざ
るなり。

よみ人しらす

世間はむかしよりやほうかりけんわがみひとつのためになれるか
契沖云昔よりかくうかりけるか昔からはうからで只我
身一つの爲にかくなれるかと身のうき事をせめていは
んとてかやうにはよみなせるなり眞淵案にむかしより
やは、意なしおもふにむかしよりやもと有つらんか契
沖云拾遺「大かたの我身ひとつのうきからになべての
世をも恨つるかな

よの中をいとふ山邊の草木とやあなうの花のいろに出にけん

或抄に云よの中をいとひて住山への草木にならんとおもひてやよをうの花といふ名にさへつきて有けるとなり色に出にけるは名につきけると云心なり花によせれば色にいづといふあな愛の花とよそへたり卯花に草木の別名あるとかや和歌所の會に沙汰有しに醫師丹波守高惟宗光吉杯座に在て玄か申き眞淵案に此注甚非なり先第三句草木とやとのみ有を草木にならんとおもひてやといふ表の上一語もしかる釋有べき事なしさいは只卯花の歌なり前後卯の花をのみよむべき篇にあらす色に出にけんを名に付とはあまりなると也いかに花なればとて名に付を色に出にけんといひて事の様聞えんや是また全體卯花をのみ心得たるなりかへすくひが注なり又卯花に草木の別名有と醫師もまをしきとは何の書に誰か書る物にさありやさもいはざればとるにたらず其うへたとへさいふことの有とも此歌にとりさまに解していかゞに此歌の落着をなすにや此集篇集をも考えらす正記の證なければ虚言なるを辨へず歌の様心をもえらぬ注なり人をまどはすの端歌道の罪人なるべし契沖云人の世の中いとひて住べき山の草木とてや心に心をつけがほに世の中はあなうの花といふ名つ

きたる花のさき出てみすらんといふ心なり卯花は木なるを草木とは惣じていへり眞淵案に此注よろし草木とやとは種々といふがごとしそれにいひよせて草木と大様にさしてその草木の中に卯花あればなりわが若年の時おもふによをいとひて住む山のものなればとやあうしといふ花の開あらはれけめとなりいろに出るはそのことを顯なり草木をうつぎの名としては甚拙なり山邊の草木の一つ是卯花なりされば世をいとふ山中草木多き中にその所の意にかなひて愛の花のいろに顯れ出たるなり今案にこれらも大かたたがはず是山居に卯花の咲たるをよめるなるべし或抄のごとくしては山居せずして卯花をよめるごとく聞ゆ上句よをばいとほんともあらば有増こと、もすべし歌にはいとふ山邊の草木とやと有をや

みよしの、山のあなたに宿もがなよのうき時のかくれがにせん或抄云みよしのをかくれがといふ事ならの都にてちかき深山なるにより詠じ來る也眞淵案此説玄かるべし冬の歌に「みよしの、山のしら雪つもるなりふるさと寒くと云古郷もならなりといふまことに玄かるべしされども今の歌はならの時の歌にはあらねど前々よみ來る

例によめるなるべし願注には腰句「家もがなと有てよしのは深き山にて有をそれよりも猶あなたに家もがなとはせめて深き隠家を願ひたるなりいたりてよのうき事をいへり眞淵案にそれよりもなほあなたにといふ説しかるべからず山のあなたにとよみしは山のおくにといはんが如し入はかなる説は用べからず次の歌にても知るべし【あなたとは即よしの、山の奥といふ意なり願注によしより猶おくと迄見るは非なりあなたおもてといへるとは少しとなり】又ありかといふと或は有家或は有所なりといへり家はいへとこそいへかとは音なれば非なり所をかといふ義は聞えつれどいかでさいふといはいかに答ん是は師曰ありかかくれがすみか又は萬葉にまさかたゞかなどいへり萬葉のまさかたゞかは別事なれども是に正香と香字を皆書り此香字極て清音の時は聲に用ひよみの時は濁なり仍こ、は濁るなりされば横通にてやに通じて屋といふ也家は元來身をかくす物なればかくれ屋といふなり又乎もうたがひ哉也もうたがひにて同ければカとヤの通用例有事也同ことにても家と心得るは音になれば違有こと知るべし

契沖云いほのかけ道は棧道と陰道ふたつの説有日本紀崇神紀云「時官軍屯聚而躡^{ノボリ}阻^{サス}草木。萬葉には踏平をふみならずとよめり或抄にふみなれんとなりといへるは叶はず高うひき、所あるを同じほにするをならずといふそのならすなり眞淵案にかけ道は予聞かけはしの道にてけはしき道をいふなり和名集山棧道也^{山乃加}或説に陰道といふを契沖が不辨はいかにぞや陰道ならば山の下にの文字なくて陰の下にのものをおくべし山陰の道こかげの道とこそいはれたれ木のかげ道山のかげ道といふのもじの置やうに心を付べしふみならずとは日本紀には草木をふみならずとあればたひらかにふみならずをいふはもとよりなれども此歌にてはその用を以ていふなりされば或説のみよしの、おくに住て岩の棧道ふみなれんともいはるべし心はよしの、山をふみわけていりてあらんといふをふめばすべて平かになるよりふみならずといふなり道學などは少し語を花にて用ぬるより文と歌には釋に用捨あるとなり

いかならんいはほの中にすまばかほよのうきことの聞えこざらん眞淵案に餘材抄に天台法句譬喻經無常品を引ていふは附會の説なりとるべからず彼經の文は死の事なり此歌

は只よのうき事といへり此歌死のをいは何ぞ哀傷に入ざる其上彼ふみにも巖中ともいはすたとへ又巖にかくる、と有とも歌はさる故事を述たるにて風體風雅なる事にあらず此歌は山中といはんをつよく深くいはんとしていはほの中といへりいはほの中を岩室など、のみ思ひけるよりいとつたなき説多し深山には岩ほの多き物なり其岩ほのはざまに住居してをらば世塵も絶ゆべければいかなる山にすまばかといふのみなり山中といはでいはほの中といへるこそおもしろくあはれは有なりさる佛のこと引てはかへりて風體を失ふなり或抄にも右の説をあげてこれらの説もわづらはし例のことなり人もかよはぬ山中にすまばうき事もきこえずもやあらんとよめる歌なりと注せるはいとよろし【若紫にも「ひじり岩のはざまに入り居たり】

あし引の山のまに／＼かくれなんうきよの中はあるかひしなし或抄云ふかき山のはざまにかくれすみて有んとなり此まに／＼は間々の心なり契冲云山のまに／＼とは深き山にまかせてかくれんと也眞淵案契冲が説まかり或抄の説は例の語をしらで其歌に當りていろ／＼云かへたるは古語の習に非ず萬葉の言に通せざれば語を解とい

ふ物に非ずまに／＼はま、に／＼を略したる語にて萬葉に多きことなりかれこれをよく通して知へし間々といふは通せざるなり言は山により隨て隠れんとなり世の中のうけくにあきぬ奥山のこの葉にふれるゆきやけなましうけくはうきのきを延て云り萬葉第五長歌にも「世の中のうけくつらけくと讀り末は奥山へ行陰れなましと云とを雪の消にかけて云り跡をけすとも云ば雪やけなましとよせたり後撰「人心うきこそまされ春たてばとまらずきゆるゆきかくれなん。拾遺などにも此心の歌有消るはそこに失て無なれるとかくれ失ると心同じく成故にかくもよむ也源氏蜻蛉に「俄に消失にけるを身なげたるなめりとて。冬の部に「あとはかもなく思消らんなど有は思絶たるを雪によせて云にて茲とは別也

おなじもなき歌 しの、へのよしな
是は歌の心をもてこゝに入たり
よのうきめみえぬ山路へいらんには思ふ人こそほだしなりけれ契冲曰此歌みえぬといひ山路へといへるに聞くとこも同じもじあれど字體別なる故其難なし【見えぬのえはヤイエユエのえなり山路へのへはヒヒフへのへにてかな別なり唱ふにはエの如く聞ゆれど本の別なればく

るしからず】新勅撰第二十卷に二條太皇太后大貳がよめる同じ文字なき歌には「あふとに今はかぎりのたびなれや行末しらでむねぞもえける。此歌は系とえと同音の字あれどこれさへ字體別なれば同じ文字にあらずこれをよくわかつたぬ人はおなじもなき歌にいたりてえよまぬてふことあるべし拾遺「みかりするこまのつまづく青つゞら君こそ我はほだしなりけれ

山のほうしのもとへつかはしける 凡河内みつね
よなすて、山に入人山にても猶うき時はいつち行らん家集に世をうらみて山寺にまかる人に遣はすとて「よをうしと山に入人山ながら又うき時はいつち行らんと有六帖「山里も同じうき世の中なれば所かへてもすみうかりけり。大和物語「今はわれいづちゆかまし山にても世のうき猶もたへがたき哉

物おもひける時ときなき子をみてよめる
今更に何おひつらんたけの子のうきふししげきことほしらすや契冲云六帖に第二句なにおひつらんと有つともじ濁りて出の上略にや毛詩云「我生之初尙無爲我生之後此逢百罹尙寐無^{のうま}叱^{のうま}。是より三首は竹によせてよめり
題しらす よみ人しらす

よにふればことのはしげきくれ竹のうきふしことらうぐひすぞなく契冲云ことのはしげきは人の物いひさがなきなりよふしことのは皆吳竹の縁なり爲も竹を宿としてなければ身をよそへたり

本にもあらず草にもあらず竹のよのほしに我身はなりぬべらなり契冲云木にもあらず草にもあらずとは晋戴凱之竹譜云植之中有^二名曰^一竹不^レ剛不^レ柔非^レ草非^レ木小^レ異空實大同節目或茂沙水或挺岩陸四聲字苑云竹草也一云非草非木竹のよのほしに我身はなりぬべら也とは顯注に孫姬式にははしたに我もと有はしもはしたも同心歎なにもつかずといふ心歎密勘言はしたに我身ともはしに吾身はとも兩説心は同じはしたのよし也内親王の身思ひがけぬ入内をして又其はいある御さまにもなかりければ木にも草にもあらずはしたなる身になりけりと讀給へる也今案にはしたの説所存末はひとつになれど本は少しかはれり間字をはしとよめり間人と云氏有萬葉に「ゆく鳥のあらそふはしにと讀るもあらそふあひだにと云心なり長間筭を和名にしめとよみ兩節の間をよと讀り長間に兩節のあひだの長き心になつたればはしはあひだの心なり橋も兩岸のあひだをわたせば間

の名にやとさへおもひ出侍り【或説にはしたものとて賤しきつかはれ人をいふと有は清少納言に「手づからは聲もしるきに句はした者童べなどはされどよしとあるをおもふべけれどそれは別なり後撰題不知「身のうきを知ればはしたになりぬべみ思へばむねのこがれのみする。案にいづかたへもつかぬとにいへり諸成案にのちの世此はしたを半女と字をあつるもなかばにていづかたへもつかぬ心にいふか】六帖に貫之「紅葉する草木にもぬ竹の葉ぞかはらぬ者のためしなりける。竹の草木のあひだにてよのふたつのふしの中にあるごとくつくかたなき身になりぬべしとよませ給へるなればするははしと云に同じ真淵案にはしは間なり端にあらずして和名又は萬葉又は氏姓のよよを引るぞよき顯昭定家卿などの説は語をそらにおぼして云のみ

ある人の云くたかつのみこの歌なり

左注をとらざるは既にいひつ契沖云高津の内親王は續日本後紀第十六承和八年四月辛丑朔丁巳三品高津内親王薨遣從五位下美志真王等監護喪事親王者桓武天皇第十二皇女納從三位坂上大宿禰河田麿女從五位下全子所誕也嵯峨太上天皇踐祚之初大同四年六月授親王三品即

立爲妃未幾而廢良有以也嵯峨天皇の頃はもはら詩文を好ませ給ひて歌はまれによませ給へり【此みこのみならずかくいづれへもつかずはしになる人世に多し此みこの事とあて、いへるか中々に後人の意にて侍り】後撰に此みこの御歌「なほき木にまがれる枝も有物をけをふききずをいふがわりなき。今の歌もともに本文をひかへて詩文のあまりにてよませ給へると見えたり歌をのみよみ給はましかば皇女の御身にかなひて然のこほれる涙よりも玉をなし松風にかよへる琴よりも猶玄らべの高く侍りぬべきをと惜くぞおぼえ侍る真淵案左注は後人の書し事前にもいふが如くなればとらず此歌によりて好事のもの、たかつのみこと書るなるべしわが身からうき世のなかとなげきつゝ、人のためさへかなしからん是は題を知らずなればいか成時の歌とも去らず然ればいろく聞ゆるなりそれが中にうたがひの語なくてらんといへば世中をわが身よりうしとなげきさへといへば本わが身になげきの有にいかで又人の上をさへなげくらんと見るべし

おきのくに、ながされて侍りける時によめる

たかむらの朝臣

おしひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたさいりせんとは

真淵云契沖説大概なるうちにたくなはの論いまだあたらず委しく餘材抄にあり栲の字万葉に多たへとよみたり是は元來彼集の誤字にて栲字を書あやまれるなり栲はたへともたくとよみて紙に作る木なり元來は紙布と云物を着たり其上至て白布なれば白栲の衣などいふ冠辭ともせりたくとは白きといふ古語とは誤なり白きをたくといふ事古來なしたくは栲なるゆゑ白きものにいひかけたる古語也たゞ白きとのみいはゞ白たへとはたへも白きといはゞまろくとかさねんや是又白たへといふ詞を妙の字をかくになづみて語を去らでかくいふなり其上此たぐ細を白きとのみいふよしあらんや

田村の御時に事にあたりてつこの國のすまといふ所にこり侍りけるに宮のうちに侍ける人に遣しける

在原の行平朝臣

網或は網引の繩をば栲にてするなり則栲をたくと訓よりたくなはといふ此栲潮に入てつよきものよりなり他の麻は潮氣まめば則弱なりこれらをもよくく知りわかきまへて注すべしさてこ、になはたきと有は契沖云ごとく栲にはあらず細手ぐりなりたくなはとは別なり幾を久里の約とせり證いと多しもすの草くきも草く、りなりその外万葉に多き事なりいさりは東方呂説三有りあさりは足探也海人取蛭に必足にてふみ探りてとる也

わくらにはに問人あらばすまのうちにもしはたれつゝわぶとこたへよ或抄云わくらには、邂逅と云心也又夏木立の中に紅葉したるをわくらばと云常にいふ但此わくらばをわづらはとよむ説有確なる證文尋ぬべし源氏には「わくらばに行あふみちを頼しに猶かひなしやしほならぬ海。新古今「わくらばにはとはれし人も昔にて其より庭の跡はたえにき。古き物にわくらばとはたまさかと云詞也玉ゆらとはまばしと云詞なりと書たれど何故に玉さかをわくらばといひまばしを玉ゆらと云とは注さねば古歌に

任せてよみけるにや定家古今集の秀歌十首の一なり契
 冲云わくらは、たま／＼の心也万葉第五長歌に「わく
 らはに人とはなるを云々。同九の歌に「人となる事は難
 きをわくらははになれる我身は云々」眞淵案に枕草子に
 なほ世にめでたき物の奥に「をさめ文をもて來たりお
 まへより左京の君して忍びていはせたりつるといひて
 云々、なる所にあからさまにまかりてまわらんと
 ひていぬる後に御返事書て參らせんとするに云々。是
 はかりそめに外へ行てこんといふ也されば皆あからさ
 まはまれかりそめたま／＼にはかなど同じ心也わくら
 は、あからさまと詞通じあからさまはかりそめと通ず
 然ればたま／＼の事ともなる少きはたま／＼によりめ
 つるをそともいふ心なり」もしほたれつ、とはならは
 ぬあまのまわさずる心に泣てのみふる山をそへたり延
 喜式第五齋宮式云「凡忌詞外、七言哭、稱鹽垂云々。唐吳
 融が時に「五陵年少若相問何對泉頭一布衣○眞淵案に
 萬葉第五貧窮問答歌中「日月波安可之等伊倍騰安我多
 米波照哉多麻波奴人皆可吾耳也之可流和久良婆爾比等
 等波安流乎比等奈美爾安禮母作乎。如是有て今とは心
 かはれると東万呂のいはれしをもて眞淵案に和と安の

通ふ例多きを以て思ふにわくら婆はあからさまなるべ
 しあからさまは白地をよみてかりそめたま／＼俱に通
 じてたま／＼に人に在をといふ也白地と書は明なる所
 には何のかくれたる事もなきにそこより物の俄に出た
 るごときを以てはからざるにはかなることにあからさ
 まといふなりされば是も流人なれば誰問とおもふべき
 にはあらねどたま／＼とふ人あらばと云なるべし源氏
 の歌も不圖行あはんことをたのめしにといふなり病葉
 などのたとへ何のよせなくて出べき事にあらずそのう
 へ證文もあらねばとりがたしあからさまは前にいふご
 とくあはわに通ひかごとく同音佐を略婆と麻と通音か
 た／＼より所侍ればなり契冲云事にあたりてとは勸勤
 にあふなり御けしきのあしかりけるほどの事なるべし
 文徳實錄にも見えず只すまに籠居せられけるはかろき
 答なるべし

左近將監とけて侍ける時女のとむらひにおこせたりける返事
 によみてつかはしける なの、はる風

或抄云是は解官とてつかさをとめらる、なり解官に
 三義有一に喪解父母におくれぬれば必所帯の官をとく
 なり一には病解病及廿日又解官なり一には理解是を理

解といふことわりにて解官する程に強苦なし科にて解
 官するを憂とは云なり此人寛平二年任右少將契冲が注
 も同じ

天彦のおとつれじとぞ今はおしふわれか人かと身をたどる世に
 或抄云われか人かと身を尋るをこたへんもかなしかる
 べきにとあまりに思ひまづみていへり云々眞淵案にそ
 の女に尋るべきとおもひけるにや甚非也詞書に女のと
 むらひける返しなるを見しらざりける注なりたどるは
 わがもとのごとくもあらずつかさ解ての侍れば心まど
 ひし侍るをいふにて人に我か人かと問べき事にはあら
 ず歌ははかなくよめるともさせるを人に尋んや契
 冲云あまひこは山ひこに同じ音信じとは山ひこは呼に
 つけて答るものなれば今よりはこたへもせじとなり我
 か人かとは源氏夕顔にも「君はものも覺え給はず我か
 のさまにておはしつきたり。これより下五首一類なり
 眞淵案に天彦は前に注す音といふ冠辭のみながらもは
 や此頃の冠辭には少し心をつけたる事多ければ音信を
 わが方より答へはせじとの意に用ひたるべしされば下
 に我か人かと身をたどる時なれば誰としてこたふべき
 よしなしといふ語の意を天彦の答ふるものなるに少し

よせたるなり或抄にたどるは尋字をよむといふは寛急
 をしらぬ説なり尋をたどるとよむは義訓にて尋ること
 有りてそれにたどらる、には尋字を用ふべし是はたづ
 ぬるにはあらず只身をおもひまどふ心なれば人にた
 づぬる義にあらざるなり

つかさとけて侍ける時よめる 平さだふみ

拾遺に重載して詞書につかさとられて侍ける時いもう
 との女御の御もにつかはしける云々拾遺の詞書はお
 ぼつかなき事多し

うき世には門させりとも見えなくになどか我身の出がてにする
 或抄には何とてわが身の出がてにするぞと我ながら不
 審したる也契冲曰出がてにとはなり出かたきなり六帖
 「いづくより思ひ入てかまどはる、戀は門なきものに
 ぞありける。同「かざせども花さくやどは頼まる、みの
 なりいでん時しなれば。躬恒集「今までに出た、ぬ
 身は百しきの宮の櫻をみでや、みなん。眞淵案になり
 出ぬといふも語例なきには非ねどたゞに身の出世をせ
 ざるをいふべし是はつかさとけて侍れば何の故とはし
 らねど是あやまちあるにべしさらば門さして籠り
 の侍るべしまかしながら出難きといふは出べき頃にも

出がてにするとならばつかさとして久しく召されざるゆゑにと契沖はおもふべしさまではいふべからず詞書の様只其ころなるに似たればさらに籠居せるをいひなげくなるべし

ありはてぬ命まつ間のほどばかりうき事しげく思はずしかな
萬葉第五山上憶良長歌「靈刻内限者平氣久安久母阿良牟遠事母無裳無母阿良牟遠世間能宇計久都良計久。契沖云いのちまつまはかぎりあるしはしの間なり眞淵案にいのちは生中息内なるを體にいひなし來れり

みこのみやのたはきはきにはべりけるをみやづかへつかうまつらすとて侍ける時によめる

みやぢのきよき

眞淵案にみやづかへつかうまつらすとは今いふ無奉公なり契沖云日本紀に東宮をみこのみやとよめり

つくばねの木のもとごとになちぞよる春のみやまのかけをこひつ、契沖云下の常陸の歌をとりてよめりこのもとごと、はかたへの親王たちの御あたりへまゐるをいへる歎春のみやまとは春宮の帶刀なればはるの宮の御かけを戀るといふ心によせたり六帖貫之「君まさぬ春のみ山は櫻花涙の雨にぬれつ、ぞふる。金葉「うれしくも秋のみ

やまの松風にうひとのねのかよひけるかな。是は源仲正が娘美濃が後の宮にはじめてみやづかへに出たるにことひかせ給へる御心になひける時よめる歌なるゆゑ中宮を秋の宮と申せば秋のみやまの松風にはいへり今の春のみやまをおもへるにや眞淵案にこのもとごとといふ注解なくては有べからざるを或抄にはたゞつくばねの木の上に立寄て東宮の御影をこふるなりと有は即本文にして注とも見えす契沖が説はくはしきに似たれども解官して又他の親王たちへみだりにまゐるべくもあらず詞書にもさることも見えねば春宮の御影をこひ奉るより木のかげごと立よめてこひねがふといふのみの上句にて陰といはん料に木のもと、いひて本歌にすがりたるなるべしおもふにこれをちかく解んには「つくば山は山しげ山しげ、れど君が御かけにまさかへはなしてふをふまへてよめりさてたゞ春宮の官人には女房などへまでも願ふ時其人等を木のもとごとにとたとへてつくれる歌なるべし

時なりける人のはかに時なくなりてなげくをみてみづからのなげきもなくよるこひもなきことをおもひてよめる

清原のふかやぶ

光りなき谷には春よそなれば咲てとくちるもの思ひもなし

契沖云六帖には發句「ひかりまつと有と書のやう光りなきにて有べし官位尊き人は日のよくあたるみねの如くなれば數ならぬ身は日かけもさ、ぬ谷の如し春は物をさかやかせば春も餘所なればとは恩光をおもひもかけぬたとへ也後撰に時にあはずして身をうらみてこもり侍りける時文屋康秀「白雲のきやどる峯の小松原えだしげ、れや日の光りみぬ。物思なしとは物思ひの花もなしとなり花によりては咲をまち散を惜むとて物おもひとなればやがて花に物思といふ名をおほせたるにこそ貫之集「としげき心よりつく物思ひの花の枝をやつらづるにつく。同「草も木も吹けばかれぬる秋風に咲のみまさる物思の花。うつば物語梅の花笠「物思の枝にこもれる物ならばもえわたるともみえずぞあらまし。源氏すま「咲てとくちるはうけれど行春は花の都を立かへり見よ。眞淵案物思の花とよめる歌もふるきことなれど東萬呂もめづらしき注なりと云れし花といはでも咲散をいひたる詞書の歌は多けれどうつば物語などにも今の歌にてよめると見ゆるに物思ひのといひて枝にこもれると有は物おもひの花といふ詞を又うけた

りと見ゆれば契沖が説をかるべし又或抄に櫻といはでも咲散といへばと有は古歌をも此集をもしらぬなり花といふは百花なり必咲とは云べからずされども此作者なり平の「春の心はのどけからましといふなどより反してよめらば櫻にも侍るべけれどもさくらと或抄にいふ意は後世の事によりて此集のことをもよくしらでいふなれば其意たがへり又東萬呂曰おもひの花は秋によむはおもひ草とも云べし杖にせんといふは草に有べからずまかしたゞ春といひ咲ちるといふは花と見ゆるなり眞淵案物おもひの花とよめるによりて今を解はわろし諸成案眞淵の此冠注まことにあたれり此歌の解東萬呂もわろし時なりける人にあたりとくちるは俄に時なくなりてなげくにあたるされば光りなき谷の口もあたらぬあたりの花なき所には咲ちる物おもひもなしとよめると見ばむづかしく物思ひの花など論ふに不及事にあらずや

かつらに侍りける時に七條中宮とほせ給へりける御返事にてまつれりける

伊勢

ひさかたの中におひたる里なれば光をのみぞたのむべらなる

契沖云七條后は温子照宣公女寛平九年七月廿六日立后
 昌泰二年七月皇太后伊勢集云此女はこれかれいへどき
 かすみやぶかへをのみしけるに時のみかどめしつかひ
 給ひけるようぞけしからぬ人のことをきかざりけると
 心にもおやなども思ひわたりけるうちにはらみにけり
 さてをとこみこそぞうみ奉りける我おやみづからもう
 れしと思ひけりつかうまつりしみやす所もきさきにな
 り給ひにけりうみたりけるをとこみこはかつらの宮と
 いふ所におきてみづからはきさきのみやにさむらひけ
 るに雨のふる日うちながめてゐたりければきさきのみ
 やのよみて給へる「月のうちのかつらの人をおもふと
 て雨に涙のそひてふるらん。御返し今の歌なり歌次に
 いはくかくてみかどおりゐさせ給ひて云々これによれ
 ば寛平九年の歌なり今の六帖には「久方の月のかつら
 の里なればと有願注云久かたとは月をいふ月の中に桂
 木はおひたれば桂の里といはんれうに久かたの中にお
 ひたるさと、はよめり久方の空とよめるに付ては久か
 たとはそらを云と見えたり久方の月と讀につきては久
 方とは月をいふと見えたるに空といふ人は久かたの月
 といふは久かたの空の月と云會釋するに此歌久かたの

中におひたる里と云は月の中の桂の里といへれば月も
 久かたと云證歌にするなり但久かたの中に生たる桂と
 云はそらの中の桂と云ふかつらは即月の桂なり光をの
 みたのむと云月の光をたのむといふ也此義をたのみ
 てや猶月をば久かたといふべからぬと思ふべき尙月の
 中桂とたのみてや月をも久かたと云證にいたすべきは
 かなふべし又后をば月にたとふれば光をたのむといふ
 は后をたのみたてまつるといへり密勘委細の趣誰有其
 謂只空月とも久かたといふとばかりしり侍るなり契
 沖云久かたの空ともあめともよめる日本紀萬葉等に數
 するべからず空とつゞくるにつきて天月日空務などお
 よそ空に有ほどの物に續くるはちはやぶる神とつゞく
 る心にかもの社ともひらの、森ともつゞくるが如し此
 一首ぞ月を久かたとよめるは聞ゆれど月も空の物なれ
 ば月中の桂を空の中の桂とすべてをめていへりいはゞ
 是も兩様なるべき歟土佐日記「久方の月におひたる桂
 川底なるかげもかはらざりけり。此久かたはそらと續
 くることに月とつゞけたる歟但月のうちの桂の人とよ
 ませ給へるにすがりて久かたの中におひたるといへば
 久かたは月をいふとしられたり月の名を貴家萬葉には

玉桂とよめり「戀徒て影をだにみじ玉桂ことは根さへ
 にほりてすて、ん」のちつひにいかによよと玉桂戀
 する宿に生まさるらん。是なり又小大君集云うちへま
 ゐるにさねかたの中將月こそいとあかけれとのたまひ
 しに「雲の上にさそはざりせば久方の身にそふ影もお
 くらざらまし。是も久方をもて月とさだめてよめり又
 惠慶法師家集云東山にて月あかき夜「久方は手にとる
 ばかりなりにけり雲のゐるてふてらに宿りて。是も月
 をひさかたとよめる事影と、もに明かなり后を月にた
 とへまゐらすとは禮記曰「天子之與后猶日之與月陰
 之與陽相須相須而后成者也。此歌は光りなき谷と云に
 光をたのむとよめるを以つらねたり【此注いにしへを
 しらすむづかし白たへは衣袖などつゞくるいにしへ
 の例なるを白たへの雪とも富士とも轉てはつゞけぬた
 らちねはは、といはん冠辭なるを遍照はたらちねとて
 たゞちには、の事として讀るも轉じてたらちね則は、
 とおもへる比になりてよめるがごとく此歌もひさかた
 の中におひたるとつゞけて桂の事とまではぶきよめれ
 ば何の論か及ばんこ、にひさかたとよめるは月をさし
 ていへるのみこは眞淵の後の考委しく冠辭考にその例

を論れば諸成らもたはやすくこれをしれりさらばこの
 古今の考の比までは眞淵もくさくしにめをとめ勢をか
 さねられしならん又字を誤りしと見る説は眞淵の下に
 くはしく考あり【眞淵案凡萬葉古今ともに誤字多し又
 句例語例時例人例書例此五を以て古書をば考ることな
 り然るに萬葉日本紀等の歌に久かたといひて天象のも
 のにつゞけし事數ふべからず久かたの中におひたると
 いふ例なし月をのみいふなど有注は論にもたらぬ僻意
 なければいふに不及此集は後なり久かたの出所にあらず
 しかるを此歌についてとかく論じその上家集など引て
 は論にたらずか、るふること古事記日本紀萬葉をおき
 てはよる所なし今此歌久方の中とよまば甚だ俗なり伊
 勢が歌がらにあるべからず故に東萬呂の案に此中字月
 の字などの誤にて月中など古書は草文字に書しをあや
 まりたるべしまからば久かたの月におひたるとにて何
 のうたがひ有べからず此一字誤字なる案をもめぐらさ
 だりなる事なりその上此歌は六帖に「久かたの月の桂
 の里なればと有少たがひたれど是證なり土佐日記にも
 桂川をこゆる時によめるに「久かたの月に生たる桂川

とよめるかたゞ此句例多しことにつらゆきは此集に入し歌をおもひてもよみつらんさなくとも貫之月におひたるとよめるをもて中におひたるとはよむまじきをも志るべし契沖が後々の家集をひけるは誤りをかざるに似たり悉く書を信じて誤なるをしらざりけるいかに古書は見わかんや光りをのみぞたのむとは此かつらの里におき奉る宮並自らも后宮の御恵みにまかせ奉るといふなり久かたの事別に注す定家卿説は只當然のみいひて古語知給はねば論にたらず

紀のとしさだがあはのすけにまかりける時にうまのほなむけ

せんとてけふといひおくりける時にこいかしこにまかりあり

きて寝ふけまで見えざりければつかはしける

なり平の朝臣

三代實録三十六云「元慶三年十一月廿五日庚辰大内記紀朝臣利貞等並授從五位下。伊勢物語には馬のはなむけせんとて人を待けるにこざりければと少書かへたり大和物語にひとの國の守の下りけるうまのはなむけを堤の中納言していひ給けるにくる、までこざりければいひやりける「別るべきことしも物をひめもすに待とてさへもなげきつる哉とありければまどひきにつ

に雪にうづもれてまし／＼ける御もとにまうで、忘れては夢かと思ふといひけん心の中を思ひやりてみるべし新古今にみこの御返しを載たり「夢かとも何か思はんうき世をもそむかざりけんほどぞ悔しき此集にも伊勢もの語にもなく此集にみえたる御歌のほどにも似ぬはおぼつかなし【真淵云此返しは偽作と見ゆ】東萬呂曰小野は大原なり或抄に丹波の細江の小野に惟高の御やしき有など宗領説といへどひえのふもと、あれば大原のおくの小野無異論なりとあり然りおもひきやなどいふを物語の詞思ひのほかにと有をも文徳第一の親王なるを引かへられたるをいふと注せれどさにはあるべからず只出家し給ふをいふなり三代實録をくはしく見て辨知べし又みこの返歌の事物語は贈答を専と作りたるにそれにさへなきは新古今に入しこといかゞおぼつかなし其上古今にいらざるは歌がら此みこの口風にあらず疑らくは後人の偽作なるべし

深草の里にすみはへりて京へまうでくとてそこなりける人に

よみておくりける

年をへて住こしさとをいでいなばいとふかくさ野とやなりなん返し

り
今ぞしんくろしき物と人またん里をばかれすとふべかりけり契沖曰第二句より五もじにかへりて物と、いふ所も句絶なりこぬ人を待はくるしき物と今はじめてしるなり人またんは人をまたんといふも人のまたんといふもたがふべからざる歎我待わぶるによりて人にまたせじと思ひ知るまことの歌人なり又伊勢物語にむかしきのありつねがりいきたるにありきておそくきけるによみてやりける「君によりおもひならひぬ世中の人はこれをや戀といふらん

これたかのみこのもとにまかり通ひけるをかしらおろしてな

のといふ所に侍けるに正月にとむらばんとてまかりけるにひ

えの山のふもとに侍ければ雪いとふかりけりしひてかのむ

ろにまかりたりてながみけるにつれ／＼としていと物かな

しくてかへりまうできてよみておくりける

三代實録第二十二云「貞觀十四年七月十一日乙卯四品守彈正尹惟高親王寢疾頓出家爲沙門御説此時廿九世

わすれては夢かと思ふおほしひきや雪ふみわけてきみを見んとは契沖云心は明かなり朝夕なれつかうまつりしにおもひのほかに世をのがれさせ給ひて所しも小野といふ山里

野とならばうづらと鳴て年をへんかりにだにやは君はこざらん或抄になり平あきがたになりてたちいづるをうらむる心もなくて野とならばうづらと鳴て年はへんかりそめにも君はこぬ事のあるべきといへる心なり狩りをかりそめになすらへてよめり伊勢物語には「うづらとなりて鳴をらんと有「此歌にめで、ゆかんと思ふ心なくなりけりなどかけり鳴てといへる狩にとよそへ面白し契沖曰詞にそこなりける人伊勢物語によるに女なり東萬呂此集にはたゞそこなりける人とて雑に入れば戀の義にあらず物語にはそれを女と作りかへて男女のことにまたる物語の術なりそれをわきまへざる人々は古今を物がたりと混じて注すいとかたはらいたき事なりさらば此二首戀の部にあるべし部篇をさへ考まらざりけり契沖云物語にはうづらとなりてと有かりにだにかりそめにうづらをかるといふとをかねたり狩によせずといふ説有用べからず六帖小鷹がり「かりにとて我は來つれど女郎花みるに心を思ひつきぬる「花の色を久しき物と思はねば我は野山をかりにこそ見れ。是らになすらへて知べし六帖「我宿は鶉ふすまではらはせじ小高手にするこん人のため。真淵案に物語には詞を

少かへたりかりを契りかりそめにかるをよせたりといふも前後なり狩といふに何のうたがひなし上にうづらと鳴てと有野などにさへいひたれば狩なりそれにかりそめの事をよせも玄ぬべしとはいふべしうづらと鳴てとはうしと泪てといふをうづらによせたり又右の或抄に物語の終の語をあげたるいと人わらへなり此集にいふことにあらずかの作物語をえらぬよりまどふ事いとくちをし【真淵曰うづらと鳴て年をへんと有は古しなりてはわろし物語に言をかへたるなり】

照しらす

我を君なにはのうらに有りしかばうきめをみつあまとなりなき或抄云我を君なにはのうらみありしかばうきめを見て尼になりたるとなりなにはのうらをうらみ有しかばといへるをうらと計略してよめり返歌にさと聞えたり古き詞えらすをえらなぐさめをなぐさとよめり真淵案此ごとく注してはたがひ有なにはをば我を何ともせず事ともおもはずといふ意なりうらにうらみとは何例なし何とおもはずおもひ捨たるをうくありしかば其うきめをみつ、尼になりたるとなり返歌にうらみといひしは此歌體の意事ともせざるをうらみたるなれば意をえ

てうらむべきとも覺えずとはいへり前にもいふ如くうらみを浦とはいひかけたりうらをうらみといふ例あらず不知をえらにといふが如くは侍らす萬葉可考なり契沖云我を君なにはのうらと續けたるは何と思へるがうらみに有しかばと讀る也何とは俗に事とも思はぬ事にいへる詞也「我ならぬ人住吉の岸に出てなにはのかたをうらみつる哉。此なにはの方をといへる今の心に同じうきめといへるも蟹のかるめによせみつも見ると御津とをかねあまも海人と尼とをかねたり真淵案此注はよろし玄かし是も恨をうらといひしとは當らず即引る歌もうらみを社浦にはいひそへたれ上に野とならば鶉と鳴てといふが如し【うらにうらみといふは悪し】

此歌或人のむかしなとありけるなうな男とはずなりにければなにはのみつ寺にまかりて尼に成てよみてなとにつかはしけるとなんいへる

【源氏手習に大尼君の詞】おうなはむかしはあづまごとをこそはこともなく引き侍りしかど。細流編字なり老女の稱なり左注は假字たがへり【契沖云三津寺は新古今集に難波のみつの寺にてあしの葉のそよぐをき、て行基菩薩「あしそよぐ玄はせの波のいつまでか浮世の

中にうらみ渡らん。今みつ寺といふ所有彼跡にや【今も三津寺ありといへり】江次第十三云「齋王歸京次第勅使參着前一日給辨以下錄一日云々七日饗饌給國司祿解纒向禊所舊例三日有三所三津濱下禊所三津濱禊安曇江禊下部每度給祿各御衣更歸大江御厨儲所給國司祿三津寺禊師給五十也供給國司禊師七也齋王不下○延喜式二十二民部式上云「攝津國堀江寺充土人二人浪人十人令護佛經免課役有死關隨即差替。此堀江寺三津寺同異可考○真淵云左注はとらざる事さきに書がごとしされば三津寺も論るにおよばず其上贈答男女のなからひとは聞ゆれど雜部に入しは戀の事にあらず世間には戀ならでも男女たがひにうらむべきよしも有事なり好事のもの、玄わざを専として此撰集をとらざる人々の注どもはいかにぞやその上をうなと有も語をえらぬもの書る也おうなは老女をいふさらばあまになるともいまのごとくのうらみあるべからず

返し

なにはがたうらむべきよしおもはずいづこをみつあまとかはなる契沖云いづこをみつとはいかなる所を恨めしと見て尼とはなるとなりよせたるやう右の歌のごとし源氏帚木

に「えんに物はちして恨いふべき事をもえらぬさまに忍びてうへはつれなくみさをつくり心ひとつに思ひあまる時はいはんかたなくすごきことのはあはれなる歌をよみおき玄のぼるべきかたみをとめて深き山里世ばなれたる海づらなどにはひかくれぬかし。又云「志ふか、らんをとこをおきてみるめのまへにつらき事ありとも人の心を見えらぬやうににげかくれて人々まどはし心をみんとするほどにながき世の物おもひとなるいとあぢきなき事なり心ふかしやなどほめたてられてあはれす、みぬればやがてあまになりぬかし

今更に問べき人もおもはず八重むぐらしてかどせりてへ【古歌なり】契沖云むぐらふかくおふるを八重とはいへり門させりてへかどさせりといへなり登以約氏なりつめていへるなり文章に上に玄かくといひて下に者の字あるをてへりともよむも玄かくといへり今の世次の句の上へあげててへればとよむは誤なり八重菘してはむぐらをもと云ふ心也むぐらの深ければ分入がたければおのづから門をさすなり【後撰「八重菘さしてし門を今更に何にくやくあけて待けん。回」とふ人もなき宿ながらくる春は八重むぐらにもさはらざりけ

り〕○眞淵案此注はあたれりてへはといへといふよしなり今登以約といふ聞えたれどもわけ有事なりトイを約てチなりされば萬葉にはといふと云ことをちふともとふとも有後にはそれをまた相通しててふといふ例にてたゞちに登以の約にはあらざるなり契沖云此歌はきみすでに故なく我を恨みて尼となりつれば今更にとはるべき人もなし八重むぐらをもて門をさしてつれなくと籠りをる山をいへと此時のつかひなどにいふ心なり此歌拾遺戀の二にも又のせたり眞淵案に此契沖が注甚うがてり此歌ともに三首題しらすよみ人しらすにて上二首は贈答なり此二首はそれにか、はる事にあらず別に題しらすとも前にあれば書たるなり是を右の男の又よみしとは何の證あるにや下句にてへといふをもておもひよるなるべし是は何者にいふとも題しらすなればしりがたし題去らすの事前にいふがごとく是ほどのこととはみな有なりそれを去ひていはんとするより附會の説出来るなりつ、しむべし或抄に見えたる人にいへるよしなりと有も見えたる人にいふか知べからず

ともだちの久しうまで、ざりけるもとよみてつかはしける

み つ け

ろしからず古歌皆一語につゞくを例とす是とて一語につゞけて見んかたよろし五月は濕雨にて草の惣じて成長する月なり

人をとほで久しう有けるなりにあひうらみければよめる

身を捨て行やしにけんおもふより外なるものはこゝるなりけり契沖云思ふより外なるといはんとして身をすて、我心はいにやしつらんとはいへりとかくまぎれて思ひながらとむらふことのなかりけるおこたりを本意にはあらずといへるなり或抄に恨ある中なれど身を捨て行やせんずらん思ひの外なるものは心にて有となりといへるはかなへらず眞淵案に此兩説ともにかなへらず或抄行や去にけんと有るをせんずらんといまだゆかぬといふは本文にたがへりさて敵などの所にゆくが如く身をすててたとへころさるゝともとおもへるなるべし本文にかなはぬが上に身を捨てといふ詞をもとりたがへたり契沖が説は歌の始終にかなはぬ注なり己が志より外の物は心なりといふ歌にて行へくもおもはぬに身を捨て心はなほ通ふといふと見えたり其よしは詞に相うらみければと有をあひといふ詞を捨たる契沖が意なり詩にも歌にも相の語はたがひにすることに用ふればこれを以

水の面におふるきつきのうき草のうき事あれやれをたえてこぬ契沖曰うき草は禮記月令に季春之月萍始生といひ柳絮水に落て萍となるともいへりやよひにおふるといふは始ておひそむるにて去げくおふるは五月なるべし【五月はうき草の茂る月なり】うき事あれや君がきまさぬ「鶯公鳴をのうのうの花のうき事あれや君がきまさぬ」鶯の通ふ垣ねのうの花のうき事あれや君がきまさぬ。此二首ともに賦事有哉と書れば我をうしといふ事あればにやといふ心なり萬葉うもじ一つにつゞけ今は浮といふ詞をもてつゞけたれば下もうきといふ二文字にか、れりねをたえてこぬはうき草はねなれば絶てこぬといはんとしてねをたえてといへり後拾遺「河上やあらふの池のうきぬなはうき事あれやくる人もなし。今の心也眞淵案にうきとあれやとは人のかたに何事も侍る歟など社常にもいひやられるれ打まかせてうき事とはいふべからねば實に我をうしと思ふ事ありてにや來らぬといふなりあれやの禮は里天約なりねをたえてとはいふ草とても根なきにはあらねども土泥にはつかで水上にはなれて有ものなればたえてといはんをうき草よりいへばねをといふなり又うきと二語にかゝるといふはよ

て歌を見るに此かたもうらみ有てとはすなるに彼もうらみけるならんさる折に彼かたよりうらみていひおこせなどしけるを我心のうらみなど有ても猶其人を去たふ心のふかきをあらはさんとてうらみあるなからひなれば身はゆきとむらはねども心は行ても有んといふなり感ありて人の心もとけたけきもの、ふをもあはれと思はすべきなり「うきながら人をばえこそ忘れねばかつうらみつ、猶ぞ戀しき【是はうらみておこせたる時に心におもひたるをよめるのみにて人に贈れるにはあらざるか相恨と云によるにうらむるふし有てとはざりしを心は行て告げるにやかたより恨るはといふか】

宗岳の大よりがこしよりまうできたりける時に雪のふりける

を見て己が思ひは此雪の如くなん積るといひける折によめる

此宗岳を本文にむねをかと訓は誤なる事もそがとよむべきよしも既にいふ

君がおもひ雪とつもらばたのまれば春よりのちはあらじとおもへば伊勢物語「思へども身をしわけねばめかれせぬ雪のつもるぞ我が心なる。後撰に女のうらむる事有ておやのもとにまかりわたりて侍けるに雪の深くふりて侍ければあらたに女のむかへ車つかはしけるせうそこにくは

へてつかはしける兼輔朝臣「白雪のけさはつもれるおもひかなあはでふる夜ほどもへなくに。返しよみ人老らず「白雪のつもるおもひも頼まれず春より後はあらじとおもへば。今の歌を折にあふとて少し直して返しとせしにや

返し

宗 匠 大 頼

君をのみ思ひこしちのしら山はいつかは雪のきゆるときある契沖曰こしちとはおもひくるとつゞけたり

こしなる人につかはしける

きのつらゆき

おしひやるこしのしら山しられども一夜し夢にこえぬよぞなき拾遺に重載したるには「ひと日もとせり眞淵案に夜の字かさなれるをさらひて日とせるなるべしわざとがましく聞ゆたゞ二ながら夜にて有べし

願しらす

よみ人しらす

いざこゝにわがよはへなんすがはらふしみのさとのあれまくしをし眞淵案に大和國添下郡なり或抄に惠心僧都勸女往女義と云造紙にいまめきの中將長井侍從伏見の翁などぞふるき物語有とのせられたりさやうの物のありさまをよみける歌にや又隆縁と云僧は伏見の仙人が歌といへり云々これら何の證もなき事なり多くは佛の方便をいふ

てよみ人も大かたの人ならじこれより下六首一類なり眞淵案此注東萬呂の説に同じ後撰「すがはらやふしみの峯に見わたせば霞にまがふをはつせの山。六帖「秋の野のうつろひゆけばすがはらやふしみの里のおもほゆるかな。會丹集「草ふかみふしみの里はあれぬらんこ、にわが世の久にへぬれば

我庵はみわの山とこひしくばとむらひきませ杉たてる門

六帖第六杉第二には門の歌にみわの御歌と載たり契沖曰みわの御歌と六帖にのせたるまかるべく聞ゆる歌なり同第六歌にはとむらひを「とふくきませと有古來風體抄には我宿と有て注に是は三輪の大明神の御歌と申と有此集にかく注せる本有ける歟俊成卿の注し給へる歟さだめがたし眞淵案るに六帖にも後人の加筆とおぼしき事多くもとよりも亂墮なればとるにたらず此歌よみ人老らずと有を明神の御歌とは好事のもの、思ひよりて偽いへるなり神詠とて後世多くいへる歌みなよろしからぬ歌なりひとつもとるべからず俊成卿はよみ給ふ歌はおもしろけれど古事は知給ふ事あらぬより誤多し千載集傳教の歌などをせたりかれ歌ならば誰か歌をよまざらん契沖云清少納言に「歌は杉たてる門

とてあらぬ偽事をいひ置ては人をまどはす眼有ものはとらざる事なり【次の歌をみわの明神の歌といふ説よりこれをも仙人の歌とて偽をかざりて好事の者の云なり】題をらす讀人も老らねども歌がらのよろしきを以てのせられたるべし義はさだかには知べからず此作者賤官にあらぬとみえたり契沖曰菅原や伏みとは大和國添下郡に有日本紀垂仁紀云「九年秋七月戊午朔天皇崩於纏向宮冬十二月癸卯朔壬子葬於菅原伏見陵。延喜第九神名帳上云「大和國添下郡菅原神社。諸陵式云「菅原伏見東陵垂仁天皇在添下郡菅原伏見西陵安閑天皇在添下郡。此中に垂仁紀によれば伏見翁が事より伏見といふ山は相傳の誤也此伏見の里菅原と續けねど伊勢集に伏見にて「名に立てふしみの里といふ事は紅葉を床にしけるなりけり。此歌の上に山の邊にてとて歌有てつゞけたり山邊は添上郡にあれば父が大和守なりける時ゆきてよめるなるべし中務集にも村上の御時屏風に名所をか、せ給へる中にいそのかみとて歌ありて次にふしみとて「梅の花散かふ空にくれにけり伏見の里にやどやからまし。此續きも山城のふしみにはあらずと見えたり歌の心我なくば此里のあれんことを惜みたり下に杉たてる門の歌に

神樂歌もをかし今やうはながくてくせづきたるふぞよくうたひたる。か、れば此歌もうたへるにこそ

きせん法師

我庵はみやこのたつみしかぞすむよなうぢ山と人はいふなり或抄に云まかぞすむは然ぞすむなりまかうぞは其ま、すむなり世をうぢ山と人はいへども我はすみえたるよしなり序にいはいく殘の月を見るにあかつきの雲にあへるがごとしといふ曉の雲にあへる月のこりおほく有さまなり喜撰が歌唯二首なり「木間より見ゆるは谷の螢かもしさりの船のおきにゆくかも。此歌を續古今集にいたるべきよしを撰者いへるを爲家卿貫之が筆むなしくなるとつばやきければいれざるを爲兼卿玉葉集に此歌を入たるはいかに思ひぬるか【孫姬式云基泉歌「木の間よりみゆるは谷のほたるかもしさりの海士の海に行かも。玉葉はいさりのあまの沖にゆくかもとて喜撰が歌とて入り又樹下集に喜撰「けがれたるたぶさはふれじごくらくの西の風ふく秋の初花。眞淵案ごくらくと云は歌詞にあらず秋の初花といふ體古歌のすがたにあらず又前の歌は伊勢物語に「はる、よの星か川邊のほたるかも我住方のあまのたく火かと云歌をよしとお

もふ人の作りかへて喜撰など、せるなるべし】契沖云六帖には發句「我宿は落句」人はいふらんと有此歌宇治山の方角をさして都の巽といへり應神紀に云「夫國撰者其土自京東南之隅隔山而居于吉野河上。此やうに文章などにいへるにはめづらしからぬ事なれど歌には始めてめづらし惣じて五畿七道も皆都をもと、していふならひ也喜撰が此歌の後にこそ都の南都のいぬゐなどもよみならひけれされどなどやらん都のたつみといへるは興あるにはおとりて覺ゆるなりまかぞすむは然ぞすむなりまかぞはさぞといふ詞なり心はかくぞといふに通ず歌の心は我住所は都のたつみちかく他人は山の名をうち山と名づけて住者もなければ我はかく住なしたりといふ心なり序には言葉かすかにしてははじめをはりたしかならず秋の月をみるにあかつきの雲にあへるがごとしといひ眞名序も同じ心にいへり人はいふなりとよみすつる所確かならぬ心あるべし六帖に都「わたつみはみやこ、ぞりていにつらしよをうち山の神もみなくに。此歌いかによめるにか又いづれの代いかなる人の歌とはまらねどたゞならず見ゆる歌なりもし世をうち山と喜撰もこれを用ひられけるにや西清詩話云

「有才藻擅名而詞不工者有不以文藝稱而語驚人者如近傳華清宮一絶乃杜常武昌阻風乃方澤。此喜撰が一首も是に似たり或抄に白河院宇治御覽のため御幸有ける時餘興不盡により京極大殿今一日の御逗留を奏請せられけるに陰陽寮花落北に當れば明日還御あらば日ふたがりの慎み有と奏すれば云々行家朝臣宇治は都の南にあらず喜撰わが庵は都の巽と云々眞淵案まかはさなり左は之加約言は如是なり或抄にそのま、すむといふ注は語も意も不通なりまかといふ語古語にて多き事なるをまらざりけらし又序にははじめをはりたしかならずと有にて此歌にてその論をもとむるは非なりまかからば難ある歌を此精撰にいれんや是は序に好事の者の傍注本文に混同したりと見ゆればとらず序に其むねくはしくいへり契沖が序を引て眞名序も同じ心といふは非也「其詞花麗而首尾停滯如望秋月過曉雲。如是なるに詞かすかにしてといへるは秋の月をみるといふたとへに合べからずその體花やかにしてはじめ終たしかならずと有しにやたしかならぬさまを後世幽玄體といひて賞すればかすかにしてとなせし好事の者の所爲なるべし秋の月の花やかなるに向が面白けれどおもひがけず曉の

雲に逢るが如くなるを難とする或問或抄に喜撰歌二首ありといふ集にのせすのせたりなどいふはいかにいふにやのせたるは非なるべきか答曰俱に非なり此序に貫之が、けるによめる歌多く聞えねばと有は傍注の混にて本文に非ず序に委しくいふが如しそのうへよめる歌多からずして此歌のみ有て此歌まかも首尾停滯せる歌なれば何か此集にのせん又六人の數に入て論にたらんやその頃まで歌あまた有を以て論撰してすぐれたるを一首のせたるべし注者喜撰が歌多くつたはらねば證歌にいたさん歌なければ是彼を通じて停滯をよく知べき便りなしといふ事の傍注を書しを後に誤りて本文にならならんを皆文義をも歌をも見まる人なくしてさる論も出来るなり又其歌喜撰が歌とも定がたしその故は歌の體を見るにいとつたなし古歌まらぬ人は古人の歌は皆かゝるものなりとおもひ喜撰とさへいへば定てかくてもよき所こそあるらめとおもひて歌をよくまら給はぬより集に入るいれずの論におよぶなりたとへたしかなる喜撰が詠なりともなんぞさる歌を集にいれんや歌といふ姿にはあらざるなり後世の集どもをみるに歌の撰にはあらず皆作者の名に驚きていかさまにもよき歌な

らんとおもひて入たるよりいとつたなき事多し論にたざざるなり又問まからば歌のつゞけよくと、のほりて侍る歌にやまかれども人はいふなりといひつめたる詞首尾少ししかならぬ難侍るよし諸抄にいへるはいかゞ答曰此論有るべきなりまかかれども此集も後世にいたりて誤字多く侍れば只一書のみを守りてはさだかに聞ゆべからず是六帖に「人はいふらんと有を是として此集にいふなりと有は後來の誤字とすべしされば歌の心は此山を世をうき山と名付て人はいふらん我は如是住得てをるをといふ心也又問此僧傳記佐々木高秀古今抄云「喜撰橘諸兄孫奈良万呂子醍醐法師云々。然るにや答曰これ不考時世之誤なり其上何の證有にや古記まかる證なしとるにたらず又問千載集宇治山の僧喜撰といひけるなんすべらぎの勅をうけ給りてやまと歌の式を作りける云々答曰喜撰式といふものはあれど皆古の例にあらず後世の偽作なりその上何の證なければすべらぎの勅をうけしといふも偽なり十吟集に光孝天皇の御時勅をうけしなどいへれど是又其よしまらしたるもの外になしかゝる偽を好事のものいひ出せるをたゞす人なきかなしむべし又問まからば何人ぞや答曰傳記な

しこれのみならず傳記の忘れざる人多しまひてたづねんとすれば附會偽説多し忘れざるはそのまま、おくなるべしまかれども諸書に書さま違へり真名序には喜撰孫姫式に基泉元亨釋書に窺仙如是さまく有を以東萬呂曰古來如是書は元來正字ひとつもなく皆かな書のごとしこれを以て按にせまるとは同人歎その故は木蟬といふを正義にて姓は紀にて木のせみと名付たるべしせみのみ音便にはねていふ習なればきせんとはいひ或時はせみまるともいふかまろは男子の卑稱なればなり又眞淵案續日本紀第二始云「六月云々西山菘菟其名仙樹以兇驗稱與僧都。これ喜撰に似たり若同人か其外は無證無據なれば云にたらず亦長明無明抄に宇治山御室戸のおく廿餘町ばかり山中に入て庵の石すゑのあと有などいふは論にたらざる事をこしらへおく物なれば信するにたらぬなり源氏は作りごとなるを宇治十帖の所々今社など有を以て知べし

よみ人しらす

あれにけりあはれいくよのやどなれやすみけん人の音信しせぬ六帖作者伊勢とせり或抄に伊勢物語を以て云は例の非也此歌をもつて一條の物語りを作り此集には「あれに

けりと有を古木の物語りに彼逃利と書て詞に「にげておくにかくれにければと有をはいかにいひなせり物語の一術なるを女の歌などいふいとかたはらいたし歌の心は住けん人とはすみすて、いづちへか行けん人の音信もせずしてあれたるとなり

ならへまかりたりける時にあれたる家に女の聲ひけるを聞て

よみていれたりける

よみ人のむねさだ

源氏花散里に「中川のほどおはしするにさ、やかなる家のこだちよしばめるによくなることをあづまにまらべてかきあはせにぎは、しうひきなすなり御み、とどまりてかどぢかなる所なればさし出て見れたまへば云々。俗名をかける此集の實録たる事を知べし

わび人の住べき宿と見るなべになげきくはいることの音をする契沖曰此わび人は世に有わぶる人なりみるなべにはみるからにといふ詞なり此下に思ひしもあるくと心をいれて見るべし眞淵案に詞を加へて解せば何歌かよからざらん詞をも加へず餘る所もなきをこそよしとすればこれなべにといふ語を忘らぬよりなりなべにといふはうへにといふなり秋の部にくはしくいふがごとし

れば世にわびたる人の住べき宿と見ゆる尤なりなげきのくは、ることのねのするはといふにて詞をい、に不及なり契沖又云歎きくは、るとは嵯康琴賦曰「懐戚者聞之莫不慟慟悽悽愴愴傷心含哀嗔嗔不能自禁。此心也又萬葉に云「琴とればなげきさきだつげだしくも琴の下樋につまやこもれる。同「我せこが琴とるなべにつね人のいふなげきしもいやしきまますも。眞淵案に契沖が注もさるとに侍れど人の國のとはいふにたらず東萬呂曰此琴の音になげきといふ事をいふは日本紀に曬焼たる燃杭を琴に作りて甚能音あり新にする木を用にたらぬとてなげはうるをいふ心にて薪の木をなげきとも後世いふ皆此古事より萬葉などにはことになげきといふ語あるなり【眞淵又案に琴又は箏には異朝の人の古語用ふべし元來かれより傳ふる故なり和琴ならませばおのづから吾國の古事とすべしされど既に云ごとく歌にひとの國古事も用る古へにあらず】

はつせにまうづる道にの京にやどれりけるときよめる

二 條

源定孫宿之女説 或本源至女契沖曰續後拾遺集戀四に女藏人二條「數ならぬ我身をうみの濱千鳥跡はかもな

くなりにけるかなとかきて御祝に入て侍りけるを御覽せさせ給うて延喜御製「濱ちどりゆくへもしらぬあとなれやふみつけつらんしるべだになき。玉葉戀五には詞書の歌のみ入れりこれ今の二條歟

人ふるすさといひてこしかどもならの都もうきななりけり契沖曰人ふるすさと、は人をふるすさと、もまた人のふる里とも兩様にきこゆめづらしき人をこそもてなしすさむればふるすとはおもひ捨たる心をよめりならの都をば故郷といひてそれも人にふるさるればうきな、りといへり人にふるされたる事有時なるべし若上に引ける玉葉集の女藏人二條といふ同人ならば延喜帝のわすれさせ給へる後の事にや後撰「身は早くならの都となりにしを戀しき事のまたもふりぬる。同集に思ふ事侍りける頃志賀にまうで、「よの中をいとひがてらにこしかどもうき身ながらの山にぞ有ける。眞淵案に人とは我なり我をありともせぬこと、ふるさといひて來しなり契沖がひける二條延喜の御時の人にたがひなくば時世もかなひて侍るしかれども宿之女至之女などは正統未知なり

よみ人しらす

世の中にいづれかきしてわがならんゆきとまるをぞ宿とさだむる
 契沖曰かく知り得たらば心おたやかなりぬべし
 逢坂のあらしの風はさむけれどゆくへしらねばわびつゝぞぬる
 六帖には第三句「はやけれど。第五句「わびつゝぞふ
 ると有真淵案に上の歌の次第もぬると云べく行へしら
 ねばといふもぬると云べしせみ丸の歌と思へる人こゝ
 に住にはかなはずとて六帖にはふると直したる歎あら
 しの風を諸抄に論せる事なし是はあらしといふは山氣
 をいふあらしも風ながら暴風をいふ也さればつねの風
 にあらずあらしも風と云なりくはしくは秋に注す〇契
 沖云願注に江談云蟬丸が逢坂にてよめる「あふ坂の關
 のあらしのはげしきにしひてぞわたる世を過すとて。
 此歌に相似たる歎今案に續古今雜中に蟬丸とて入たり
 たとひ別なりともせみ丸の歌なるべし真淵案江談抄の
 説皆よりどころもなくとるにたらぬ事のみなりされば
 此せみ丸歌といふおぼつかなし今の歌に似たるなりそ
 の上今の歌の變するを後撰の蟬丸の歌にあふ坂にすめ
 るよし見ゆれば好事のものこれらをもさといひ出した
 るをたゞす人も侍らで契沖などもそれとおもへるにや
 願注に有歌は歌のさまにもあらずこれやこのとよめる

はいと古體にてよろしき歌と見ゆるをなんぞ同人か、
 るつたなきことをいはんや古歌はたゞ詞をもかざらず
 野なるがごとくおもふ人の作りなしたるなるべし萬葉
 集などをよくしらば古歌は後世の歌よりはいと華美も
 備りててにをば一體有事を去るべしこれらを歌とおも
 ひて集にのせ給ふなどははづべし今此集の歌とおも
 はせても引歌は歌ならぬをしらざりけるにや
 風のうへにありかきだめぬちりの身はゆくへしらすなりぬべらなり
 契沖云下の忠孝が長歌にも「ちりにつげとやちりの身
 につもれるとをとはるらんと讀り萬葉第十五に「ちり
 ひちの數にもあらぬわが故に思ひわぶらんいもが悲し
 さ。右三首ともせみ丸の歌といへり或抄云三首せみ丸
 の歌なるを古今には作者をあらはさず後撰には名をあ
 らはす此蟬丸關の風に心をすまし琵琶をひくを伯雅三
 位風の間相坂のかのわらやにかよひてたちき、て三曲
 をつたへたるとなり真淵案に此注に題しらすよみ人し
 らすとあるを信せざるは力不及此時分さへ名しれざる
 を後世たれかしらんや又後撰に入るは上古の風にて近
 代の歌學者流のしらざるてにをばなり今の三首かの口
 風にはあらずこれにさまのの説をいへど皆いつはり

なり右に伯雅三位琵琶をならへるといふも偽なり伯雅
 は天曆の頃の人なるをしらぬ人の偽なるを信するはい
 とかたはらいたしその上宇治拾遺には「伯雅の三位と
 云ける人は木幡とかやに目つぶれたる法師の世にあや
 しげなるに琵琶は習ける云々。亦延喜第四の御子など
 いふも偽なり此天皇十三歳にて即位延喜五年は廿二才
 にておはします第四の御子あるべからず有ともかゝる
 歌よみ給ふ齡にあるべからず是は小町集に「四の御子
 うせ給ふつとめて風ふくに「今朝よりはかなしの宮の
 秋風やまたあふ坂もあらじとおもへば。此歌をとりた
 がへるなるべし小町は仁明の比なり右三首蟬丸といふ
 は僻案抄の説なりかゝる事ははんも右のこともとらざ
 る上はわづらはしけれどまどふ人のためかりに云くは
 しくは後撰にいふべしありかの詞は前に注すちりの身
 とは數ならぬ身なり
 家をうりてよめる 伊 勢
 大和物語に監の命婦つゝみにありける家をうりて後あ
 はだといふ所にいきけるに其家の前をわたりければ
 讀たりける「ふるさとを川とみつゝもわたるかなふち
 せありとはうべもいひけり。風雅集雜一にはやうすみ

侍ける家に人のうつり居て後花を折にやるとよめる
 伊勢「花の色の昔ながらに見えつれば人の宿ともおも
 ほえぬかな。今いへる家にや
 あすか川ふるにもあらぬわがやどもせにかはりゆくものにぞありける
 契沖云明日香川のふちせかはる山の心をととりて家をう
 る心をよめり瀬にかはり行といふに錢にかはり行とよ
 せたり【真淵云はいかに入ぬを思ふにせにはたゞ瀬
 にのみにて錢をそへるにはあらじ】或抄にしからずと
 いふ只しかりおそろしき猪のしゝもふすののれとことよ
 めばやさしくなるとは是也周防内侍が「かひなくたゝ
 んとかひなをよめるも此たぐひなり或抄云此歌は伊勢
 がむすめの中務に傳授の歌なりこれにて歌のさまをも
 しり身をもをさむる道のたよりともなすべきなり歌の
 さま殊勝なりと歌仙にいへり真淵案契沖が注しかり傳
 授したるなどは誰が目撃していふにや何の書にまゐるし
 有にや皆いりほかなり古來は今のごとく歌にて身をを
 さむるなどいふ事はなし歌にて世を治るといふは是を
 うたひて人を感せしむるよりなり今いふ身を治むるな
 どは物しらぬ人のいひ事なりいとかたはらいたしか、
 るをいふによりて歌の心を知人かへりてなきなり此歌

の心何ばかりの事にやあらんことにすぐれたりと此歌
を見る歌仙はそらより飛そこなひぬべし

つくしに侍りける時まかりかよひうちける人のもとに京に
かへりまうできてつかばしける

きのとものり

古郷は見しごとらあらずなの、えのくちし所ぞこひしかりける
見しごとくに恭をこめて下に恭の古事を云り後撰「白
波の打かへすよとまつ程に濱のまさこの敷ぞ積れる。

是もまさこに恭をもたせり任筋が述異記云「晋王質伐
木至信安郡石室山見數童子圍碁一與質一物一如棗
核食之不飢局未終斧柯爛盡既歸無復時人拾遺に
院の殿上にてみやの御方より恭盤いださせ給ひけるこ
石のふたに命婦清子「をの、えのくちんもしらず君が
世のつきん限はうち心みよ。伊勢集屏風の繪にごうち
たる所「をの、えのくつばかりにはあらずともかへり
みにだに見る人のなき「も、しきはをの、えくたす山
なれや入けん人の音信もせぬ「をの、えはくちなばま
たもすげかへんうき世の中に歸らすもかな

女としだちと物がたりしてわかれて後につかはしける

みちのく女葉抄のくすなほが
みちのく女葉抄源と有説歟

問ばよとへと……諸成案に右のごとくのみありかくか
きて消おかれたればよとはかくなりとか、んとて眞淵
のたはむれておけるならんえもとの三言をつゝむれば
よの一言となるなりよりて節をよといふ

題しらす

よみ人しらす

風ふけばおきつしらなみたつ田山よほにや君がひとりこゆらん
ある人此歌はむかし大和の國なりける人のむすめにある人
すみわたりける此女親もなくなりて家もわろくなり行あひ
だこの男かふちの國に人を相まりて通ひつゝ、かれやうにの
みなりゆきけりされどもつらげなるけしきもみえでかふち
へいくごとに男の心のごとくにしつゝ、出しやりければあや
しとおもひてもしなさまにこと心もや有とうたがひて月の
おもしろかりける夜かふちへいくまねしてせんざいの中に
かくれて見れば夜ふくるまでことをかきならしつゝ、打な
げきて此歌をよみてねにければ是を聞てそれより又ほかへ
しまからずなりにけりとなんいひつたへたる

或抄に云まづしくなるま、なりひらの二道のうらみを
思はずいだしたて、かよひゆく山のおぼつかなく云々
貫之此の歌はうたの本たるべきと筆をのこせり顯昭云
おきつゝあらなみはむかしよりぬす人のことにいへりし

あかざりし袖の中にやいりにけん我たましひのなきこちする
契沖云萬葉「わがせこがきせる衣のはりめおちすいり
にけらしなわが心さへ「山菅のやますて君をおもへか
も我玉しひの此ころはなき。竹取ものがたり「みかど
かぐやひめをとめてかへり給はん事をあかず口をし
うおほしけれどたましひをとめてたる心ちしてかへら
せ給ふ

寛平御時にもろこのほう官にめされて侍ける時に春宮のさ

むらひにてをのこども酒たうべけるついでによみ侍りける

藤原たふさ

はう官は判官なり遣唐使には大使副使判官主典あり四
船ともに行なり

なよ竹のよながきうへにはつしものおきぬて物をおもふころかな
契沖云なよ竹は玄のめなり和名集に長間筈とかけりよ
りてよながきとつゝけたり初霜はおきぬてとつゝけん
料なりなよ竹の上に初霜によせてよながきにおきぬて
遙なる海路を凌ぎて歸らん事をいつのほど、も玄らね
ば物を思ふ頃にて有とよめるなり○或抄になよたけは
にがたけなりといふも同じ又よとは節なりと云眞淵案
に節なりとはたれも知れりいかでかふしをよといふと

かれどもこれはたゞ立といはんとておきつゝあらなみと
いひ沖つゝあらなみといはんとて風ふけばといへる序歌
なり萬葉に「わたのそこおきつしらなみ立田山いつか
こえなん妹があたり見ん。歌にてぬすびとの事にあら
じといへるを定家卿此の義を興すべし仰ぐべし大和に
はあらぬから衣のたぐひなりと同心し給へり契沖云六
帖には落句「獨行らんと有てさふの風又山の歌に出し
てともに作者かく山の花のこと有顯注に獨ゆくらんと
有伊勢物語は今の本と同じ顯注に普通の義をあげて云
おきつゝあら浪立田山とはぬす人を玄ら浪といへば白浪
のたつといひつゝくぬす人のたつおそろしき山を君が
行心なり立田山といはんとて沖津白浪とつゝけ浪たつ
といはんとて風ふけばとおけるなり次に顯昭の今案に
盗人を白浪といふことは侍れどかならずしもぬす人と
はおもはでもやよみ侍りけん浪はたつものなればおき
つゝあらなみたつた山とよみ侍ぬべし萬葉に「わたつみ
のおきつゝあらなみ云々此歌を和銅五年四月遣長田王
伊勢齋宮一時山邊御井作歌云々然ば今歌はたつた山を
夜ひとりこゆればぬす人のおそれも有べし長田王下向
伊勢の時山邊御井此歌ともに白浪立田山とよめりと見

えたり錦たつ川山とも讀たり諸歌仙古今皆稱盤上玉
 田愚案獨在此義還怖歎密勘云昔も今も白浪は稱
 盗人庭訓文如此但愚案遺不審たやまとはあら
 ぬ唐衣の體に續けたらば歌本意也此論可貴有與今案
 神武紀云「戊午年四月丙申朔甲辰皇師勅兵步趣龍
 田而其路狹險不得並行乃還更欲東踰膽駒山而
 入中州これにて立田路のけはしきを思ふべし萬葉
 に「ふたりゆけど行過難き秋山をいかでか君が獨こゆ
 らん」玉かつまままくま山の夕暮に獨か君が山路こゆ
 らん○盗人を白浪といふ事は後漢書云「靈帝中平元年
 張角反皇車崇討之角餘賊在西河白波谷爲盜時俗
 號白波賊拾遺集云廉義公の家のかみるに旅人の盗人
 にあひたるかたかける所藤原爲頼「ぬす人の立川の山
 にいりにけり同じかざしの名にやかくれん。かゝる歌
 にもあれど顯昭の今案此歌ぬしの心成べし與儀抄に此
 歌を貫之が歌の本とすべしといひけると有ある人此歌
 はむかし云々左注なり此事伊勢物語にはなり平の事と
 せり大和物語には昔やまとの國かつらぎの郡に男あり
 けると書出してはてに此男はおほきみなりけると有誰
 ともなし伊勢物語にたしかに見えたるなり平の事は此

集に載る時彼物語のごとくおほよそつぶさに載たり此
 歌はいづれの世たが事とも云るさねば業平の事にはあ
 らぬにや此女にかれがたになりて河内へかよひけるさ
 まなり平の心にはあらずとみゆれば物語にて虚實を交
 へたるなるべし琴を搔ならしては文選燕歌行「妾瑣々
 守空房憂來思君不敢忘不覺淚下霑衣裳援琴鳴弦發清商
 云々。眞淵案此歌左注例の後人の偽作なり物語等は皆
 々作りなして此歌を別様にせりされば題をらす讀人云
 らずにて旅立て行し人を思ひていへるなるべしその證
 は前の歌唐のはう官にてといふなればかれも旅行わか
 れをおもひこれも旅行の難をおもひやり次の歌も旅行
 に手向して行とをいふ篇なれば女の義とるにたらずな
 り平などいふ甚みだりなる注なり顯注ひとつもとるに
 たらす此集にかける所よみ人云らす題をらすとして其
 上篇次を以て信じて勘ふるより他より所なし○或問曰
 云ら浪ぬす人といふ説いづれか是なる又なり平にあら
 ぬ證も有にや答曰なり平のすみ侍る間のこと、いふは
 又何を以て證にていふにや此左注はひがごとながら是
 にもある男と有此左注云なり平とおもはゞ業平と書
 べし前にも左注に名をかかせる例なければ此條なんぞ

かくさんされば伊勢物語に此歌を以一條の物語を作る
 に同してをかしからざるより詞書を加へて歌をも意の
 別になる如くに作りなせりそれをみななり平の事と思
 ふひがとよりいふのみにて他に證はなし東方呂云なり
 平にあらぬといふ證は物語の此の條始にむかしわな
 わたらひしける人の子とも云々或抄云是は有常が任に
 行くなりといふ是ひが事なり古來任に行をぬなかわた
 らひといふこと例なし其のうへ古本に昔鄙浪爲計流人
 とかければ世わたりすぎはひに川舎へ行なり云か
 の女に王孫の通ひ給はんや案に三代實錄第三十四「元
 慶元年正月廿三日從四位下周防權守紀有常卒云々時六
 十三又業平は同四年五月廿八日卒五十六彼是を考合す
 れば有常なり平に長たる事十一歳なり云かるに物語に
 有女ありつねむすめとせばなり平の同年のごとく生出
 たるさまにて「くらべこしふりわけ髪など有をいか
 いはんや有常十五にもいたらで女あらんや時代をも不
 考事の甚しきなり又物語になり平の妻にわかる、時友
 だちなる人といふ俱に有常なりといふ是も業平にてと
 もだち有常ならば此所になり平の妻の如く云はいか
 此外も皆物語は作りなしてひとつも業平にあらずたと

へ業平の歌質にのせたるも只昔男の歌になして物がた
 りにてはなり平にあらずと知べしされば此歌をもなん
 ぞありつねが女なり平を云るあひだのこととせんやおも
 はざるの甚なり又左注に大和國なる人のむすめある人
 住けり云々物語の河内國の女の詞にも「やまと人來ら
 んと云々是をいかでなり平といはんなり平は山しる人
 なり桓武天皇延暦三年奈良より京を長岡にうつさる同
 十三年に今の京に遷さる延暦十三年より三十二年三代
 を經て後淳和天皇天長二年に生る、なりやまとい
 ふべからず○云ら浪の事はに差別ある事なるを時代を
 云らざれば諸注混じてうたがへり東方呂伊勢物語童子
 問答曰白波といふは盗人の説にか、はらずして見るべ
 き顯昭の案を定家卿も御同心とみえたるよしは顯注密
 勘に見えたれども時代わきまへられざる説なるべし萬
 葉卷第一の歌にては盗賊の説を用ひがたし古今集にて
 は題をらすの歌なればはかりがたし此物語にては白浪
 を古來盗人の説あるに云たがふべしいかとなれば此
 物語にては女の歌にて夜半にや君が獨こゆらんと此君
 も夫のとにてとに女の親なくなりて貧くなり行ゆゑい
 ふかひなくてあらんやはとて河内のたかやすの郡に行

通所いできにけりと有つきまたがふ従者とてもなく立
 田山越のさかしき道をまかも夜半に越るをおもひやり
 てなげき婦人の情にてよめる歌と作りなしたれば白波
 を盗の名といふ漢の故事に本づきていへる説あはれ深
 かるべし其上まら浪を盗賊の一名といふ説古く傳へた
 ればこそ拾遺集卷第九雜下に廉義公家のかみ繪に盗人
 にあひたるかたかける所藤原爲頼「盗人の立田の山に
 …と有もぬす人のといふ五文字は白波のとかきて本は
 有しを盗人とよみて今は白波といはず直にぬす人と書
 たれども白波のこと、は皆人まれりされば此物語り拾
 遺集の前にも白波はぬす人の異名と見る説然るべし眞
 淵案に萬葉と古今とは只詞のつゞけとのみ見て物語に
 は左様にぬす人の心をもて作りかへたりと見るにて差
 別有なりか、ることにて物語と撰集のちがひを知べし
 東萬呂又曰萬葉古今にては盗人と見るべからず且萬葉
 引て「わたつみの沖つ白浪立田山いつかこえつ、いも
 があたりみんと有は例のかな付學問にて萬葉の本に暗
 き也萬葉には海底興津白波立田山と有是は興津といは
 んとて海の底とはおけるなるべし然るを古今集古今六
 帖此物語等に風ふけばといふ五文字にかへてよめり是

萬葉時代と古今時代との差別此五文字にも有也此理は
 古體新體をまゐる人に非ずば見分る事能はじ且又いつか
 越つ、と有は誤れり萬葉には何時鹿越奈武と有奈武の
 二字をつ、とはよまれず後世の歌學者は文字の讀れず
 讀る、所までの學問にてはなかな付を本として本文
 をまらざる學問にて萬葉を引用る事十に七八讀違有る
 也又問盗人を白波と云事莊子より起れりと有さるにや
 答曰白波の事莊子にありとは不覺猶可考後漢書にみえ
 たり又問定家卿白波を盗人と見る説を疑を殘したると
 有顯昭案を興有と感せられたる趣なれば顯昭と定家卿
 同一味の説なる上は後世の歌學者流は皆此義に同心と
 見えたり然れども古説宜しく聞え侍れば定家卿の誤
 と極むべきか答曰定家卿も後には又白浪を盗人と云説
 を取用ひられたるか計り難し其故いかゞとなれば定家
 卿一人の撰集新勅撰の釋教不喻盜賊歌に「こえじた、
 同じかざしの名もつらし立田の山の夜半の白波と云歌
 を載られたり是盜賊を白波と云説の歌也○眞淵案貫之
 此歌を歌の本也と云と興儀抄に見えたれども題まらぬ
 歌にて覺束なき所侍るをいかでかさ云事のあらん是は
 かの左注物語などの説を是として感情深き歌と聞え侍

ればかの歌を以て大道と心得る人の言なるとまゐるべし
 たがみそぎゆふつけどりかからころしたつたの山にかりはへてなく
 或抄云誰人のみそぎぞと也庭鳥に木綿をつけて祓をす
 るをたがみそぎと云公家の祓境をこすとて四方の國へ
 遣しける東は相坂北は鈴鹿南は立田西はあなう也をり
 はへては折延也定家卿古今集秀十首の一つ也契沖云大
 和物語に云「やまとの國なりける人の娘いとまよらに
 て有けるを京より來りける男のかいまみてけるにいと
 をかしげなりければ盗みてかき抱きて馬にうちのせて
 にげていにけり云々日くれて立田山に宿りぬ草の中に
 あふりをときしきて女をいだきてふせり女恐ろしと思
 ふ事限なしわびしと思ひて男の物いへどいらへもせで
 なきければ男今の歌女返し「立田川岩根をさして行水
 の行へもまらぬ我ごとやなくとよみてまにけりいと淺
 ままうてなん男抱きもちてなきけりと有覺束なし○み
 そぎとは六月祓に限らずおよそ祓をいふ四境祭にこそ
 雞に木綿をつけて四方の國に放たるといへど今誰みそ
 ぎするとしてゆふをつけたる鳥ぞといへば常の人にもい
 ひたれば四境の祭に限らず鶏にゆふつけて放つ事の有
 にこそ顯昭云平城京にては龍田山攝津國へ通ふ道なれ

ば西の關にてゆふつけ鳥によせんに使有といへり唐衣
 は立田と續けん爲也天武紀云「八年十一月初置關於龍
 田山大江山。眞淵案に物語は例の歌を以て作り出たれ
 ばとるにたらず四境の祭といふ事も正記に見えぬ事な
 ればとるべからずゆふつけ鳥の事前に注せるなり【神
 樂歌「さかさ葉を神のみむろとあがむればゆふ付鳥
 のねぐらなりけり】まければ此上句にみそぎといひ下
 に立田の山とあれば神社によりて云語なり神代卷にと
 こよの長鳴鳥といふより神社に有べき吉例なり次の歌
 濱ちどりをいひて雜の歌なれば是は鶏をよめるをつら
 ねて他の意有べからずたゞ鶏のたつた山に鳴をよむ成
 べし續日本紀に三關は相坂鈴鹿不破なるよしみえ四境
 の關といふ事なし皆いつはりなるべしゆふつけ鳥とい
 ふ名あればたがみそぎのゆふといふなりをりはへを折
 延と書とは延のかなはえなる事をまらざる注なりをり
 はへはをり合といふ事なりをりあふてなくはまげくな
 く心なりをりはうちと同じく發語なり
 わすられん時しのべとぞ濱ちどりゆくへもしらすあとなとむる
 契沖云文字を鳥のあと、いふ事序に注せり顯昭云他鳥
 も同事なれども千鳥にてよみそめつればやがてよむは

歌の習ひなり又いづれの鳥もあとは同じ事なれど千鳥はさしの去らすにもなきさのひがたにも常におりゐてあさるものなり扱またしほみちぬればうらづたひしていづかたへもわたればゆくへも去らずとよむにもたより有歟今案に此歌集もしは草子などの奥にかけの歌なるべしこれより下五首一類せる歌どもなり上の歌に鳥をもてつゞけたり眞淵案千鳥は砂にぬればことにあともゆればなりその上たちて行ことあれば行へも去らぬといはんによせたり此歌契沖が説次の歌によりて思へるなるべしされども集などに書とも見えすいづくへか行人の歌にても文にても書て置たるなるべし

(清和) 貞観の御時萬葉集はいつばかりつくれるなどはせ給ひけれ

ばよみてたてまつりける 文屋ありすふ

契沖云いつばかりはいつほどなり眞淵案にばかりはほどにあらすのみといふに同じきなりばかりものみも二つなきたぐひなきなりよりて其時節をも間にもいつのみといはん事あたれり三代實録第七云「貞観五年三月廿日千午以散位從五位上文案朝臣有眞爲下總守又文案眞人有房といふ人も見えたり名も似たるは是等が父子兄弟の間にや

神な月しぐれふりおけるならの葉の名におふ宮のふることぞこれ或抄に平城の比首尾したればならの葉の…と有季よめる也契沖云願注にはならのはのならのみやことあり萬葉をえらべる時代委序に付て釋せり東萬呂曰いつばかりとはせ給ふをなら七代を廣くさして答へんは詮なきに似たれば此作者平城と心得てこたへ奉るなるべし序にも平城とあれば此集撰者は平城の頃とこゝろえたるのみえて即此歌をえらび入たるべし萬葉の時代はかの集中にて論通して後にならでは去られ難し世に古萬葉とて序など偽作せるは第一巻をいふなり其故は藤原及かたぐの宮にての歌有て卷の終になら宮と云歌一首有故なり去かれども第一巻にのみかぎりて古萬葉といふことも何の證もなく又集中を見るにうたがひ多なり凡古萬葉後萬葉といふは有つらんを後にえらめるも混同して今はいづれをといふこともわきがたしこれは其集にての傳も侍ればこゝにいはず持統文武藤原宮元明元正聖武孝謙ならの宮なり先ならの始は元明なり仍其撰とも見ゆるなりされども萬葉の文字並に訓のさま日本書紀にて書しものなる事卷々に徴有りされば元明ならず古萬葉といふ説も其書法をみればたがひたり

ふらばらのからおみおんと書非なり

人ふれすおもふ心は春霞たちいで、君がめにもみえなん契沖曰人しれすおもふ心とは望みおもふこゝろあるにや春霞はたち出てといはん爲なり此歌よみける折に合せたるべし○是も望みありける時なるべし

歌めしける時にたてまつるとよみておくにかきつけて奉りける

伊勢

よりて平城の御時と古今撰者たちのしたるに先は去たがふべし此集のごとき精撰さへ後に入し歌注の混同も多くみゆれば萬葉などは注者の追々に入たる歌も多くみゆればたしかには見わきがたし去ばらく此集の意に去たがふべし歌の心はふり置るといはんとて神無月時雨といひ下にふること、いふは古歌の體なりこの人萬葉をしり給ひけんよりてかゝる間も有その上歌のつゞけがら萬葉體なる所もあり

寛平の御時歌たてまつりけるついでにたてまつりける

大江ちさと

六帖にはちふるが作とせり

あしたつのみとりせくてなく祭は雲の上まで聞えつがなん契沖云願昭の本には落句「聞えつる哉と有て注にはともかくも見えねば書失にや聞えつがなんをよしとすべし【簡様に繼告など云多し】獨おくれては友鶴の皆たてるに獨とまりぬるを諸人の官位外進をするに獨下位に沈めるをたとへたり毛詩云「鶴鳴九臯聲聽于天。是にてよめる述懐なり日本紀竟宴歌「唐衣下てるひめつまこひぞあめに聞ゆるたづならぬねも。願集「天津風空に吹あぐる雲もあらば滯にぞたづは啼とつげなん

也又家集に「百敷の花を折ても見てしがな昔を今におもひくらべて。眞淵案に水を早は身をもとのわかき時になしてとなり伊勢の作よろしといへども小町にはしくべからず或抄に百敷は百敷の座をしけばと云眞淵案につかさ又は座をしきといふ事よりどころなしそのうへの字あれば百敷のといふつゞきはひがたき例なり百は敷多を指ししは助字なりきは城なり百城をあつめたるは帝城なり云々此末ともに前の考にてよしなればすてつ諸成云此事は冠辭考にくはしこ、をいさ、かきさせるは眞淵の勞をしらさんためにのみ眞淵曰後撰と此集とたがひ有る事はのみならず此篇次皆歌奉るにそへたれば類を以此集の詞書を是とすべし家集にはたがひ多し後人の作も交るにや此精撰をおきて他にはつきがたし【此外百磯城の考あれど冠辭考にすまへつかたの考なればみなすてぬ】

續萬葉論卷第十八終

り此歌のよみ様は五七五と物のいひたきほどよみ行てさてとおもふ時始の五七五とかきあふやうに七々ととどめたりこれを三十一字に作りなすなりされば三十一字の歌をはてに作りなす故是を長歌といはんとおもふ時そこを申事あり同じ心なるべし秘すべし云々契沖云雜體おほき中に今此集は短歌旋頭歌誹諧歌此三種を載たり業平のかきつばた貫之のをみなへし共に折句の歌なれど一首は旅に入一首は物の名に入遍昭のおちにき敏行の玉だれの小がめこれら誹諧に似たれど類にひかれてそこ／＼にいれりもの、べのよしなが同じ文字なき歌も此部にいれりぬべき歌歟短歌今短歌といふは長歌也こ、に短歌と標すと雖も下に古歌奉りしそのもくろくの長歌古歌に加へて奉れる長歌冬の長歌といへり此事難義なるによりて古來先達異義まち／＼なり京極黃門萬葉一部の卷々を委考て長き歌とし三十一字を短歌といへる由を注し其上に濱成式喜撰式孫姬式拾遺集等を考へ加へて終云「先賢之所用云長短之道理事已分明也何至于延喜五年初載長歌是稱短歌哉不審之中不審難義之中難義也但斯時萬葉集未遍披露僅聞之輩委不見歌之員數歟又不辨事之理非只就並短之字推爲號

續萬葉論卷第十九

雜體

短歌

或抄云ざつたいとよむ人あれど猶ざつていとよむべきなり風體の故なり眞淵案ざつていとよむ事しかり此の集にたゞ雜とのみ有は歌のくさ／＼のこをよみしにてともに三十一字なり今體といへるは長歌短歌旋頭歌などさま／＼のすがたある題目なり萬葉集には雜といふに四季其の外にても諸體有所の題目とせり騷旅相聞挽歌などは又一體として別にあげたりければざつたいとよむことは極めてなき事なり○或抄云此集に貫之短歌と書たるはいとおぼつかなし云々三十一字を長歌といふ五文字より始終つけばなりすゝるにながけれど短歌といふ始の五文字よりいひ出せることをば捨て詞にひかれてき行ものなり千尋の繩もすた／＼にきれぬれば短しとする故なりといへりゆめ／＼異義に付べからず此歌のことは仔細有事なり三代の帝の御時かはれる事あるなり此短歌は混本歌をつゞけたるなりいづれの文字よりよめども五文字よりよめば混本歌になるな

長歌之名歟依獨歩之僻案忘重疊之證據可謂斯道之遺恨崇徳院被下百首題之時被載短歌一首之由教長卿書之作者皆詠長歌證亡父卿撰千載集之時任古今例書短歌字訖次に奥儀抄を引擧て云任濱成朝臣式載之歟端所註長歌之體已以相違是就各本文載之不注今所用之相違雖似可辨上古與當時相替之由乍存之成憚委不分別歟非無所存哉雖有所辨存不破先達之說歟可謂知道。又童蒙抄を舉て惣ての奥書云「竊所勘出只爲備愚蒙也於今者誰改延喜以後稱來之說更尋孫姬以前注置之跡且不加私今案只顯先賢之所存許也貞永元年七月日黃門遺老と有依獨歩之僻案忘重疊證可謂斯道之遺恨とは貫之等獨歩の才人にして此誤り有事を遺恨とのたまへる也黃門の心明らかなるもの也後の人千載集に短歌と有を遺恨とのたまへると見たるは大きにあやまれり今こと書ことに長歌とのみいへるに付て案るにもとは長歌と標しけんを後人書あらためたらんとおぼしき事多ければ是をうたがふなり所詮萬葉につきて長歌を一決すべし萬葉に長歌を端作りて長歌幾首とかける事はなけれど歌一首並短歌或反歌幾首とかける短歌反歌は三十一字の歌なれば短歌に對して長歌といふとしられたり其上第五に云老

身重病經年苦及思兒等歌七首長歌一首是山上憶良歌の自注なるに長歌一首有て三十一字の歌六首有第十三云此月者君將來跡云々反歌云々右二首但或云此短歌者防人妻所作然則應知長亦同作焉憶良の注此家持の注に長歌を長歌といへる詞あらはれたり長歌に對せざれども三十一字の歌を短歌といへる證は第五梅花歌序云宜賦園梅柳成短詠三十餘人常の歌を詠める序なり第十七云橙橘初咲云々同作三首短歌云々又云七言一首云々短歌二首云々第二十云冬十一月五日夜少雷起鳴云々聊作短歌一首これら皆常の歌を短歌といへり又續日本後紀第九云嘉祥二年三月乙卯朔庚辰興福寺大法師等爲奉賀天皇寶算滿于四十奉造聖像四十軀云々副之長歌奉獻其長歌云かくていたく長き歌有長歌短歌の制明らかなる事かくのごとし後々の證文又謬説等山阿が詞林采葉抄等あれど煩はしければ出さず○眞淵案これに短歌と有ても則詞書に長歌とあれば貫之などの短歌と書ざる事は顯然其の上萬葉集を融通せばたれかかゝることやうたがはんや定家卿もまかり然るに不破先達之説歟と書給ふ所を或抄にも秘事とせり又是を貫之等の筆にあらざる事を知りたまはねば貫之をたすくるとしてしひて言

ざるを見て諸抄に短歌の説をそのまゝおけりとは是大に非なり凡學文の道は己れが名を顯はすを本意とするなれどもそれによりて後世のたすけとならんを専らとすされば一二の故人をたすけて萬人をまどはす何の道ぞやおのれその非なるをしらば故人の言といふとも何ぞ破らざらん實に定家卿其心を得ば奏て千載集を改むべき事なり後世のためとすればかつは千載に親をわらはしめたるなりいはんや此短歌と書るは撰者の書し物にはあらざるをやなんぞあらたむるには、からん皆古學にうときより兒女の仁を専らとして大道を害するものなりこゝに雜體と標して旋頭歌も又萬葉集の旋頭歌の體にたがはず詞に長歌と有て長歌の體もしかれば續萬葉とさへ書たれば萬葉をよくみる人はたがことをまつに不及この短歌といふをとらんや【眞淵今案に短は思ふに其初草にて長とありしを題と見て短と書し也是長歌とありしに極れり萬葉二十卷に冬十一月五日夜少雷起鳴雪落搜庭忽懷感憐聊作短歌一首「氣能己里能由岐爾安倍留安之比奇之夜麻多知波奈乎都刀爾通彌許奈」右一首兵部少輔大伴宿禰家持右のみならず下にひける如く萬葉短歌とあるは三十一言の歌長

歌七十言八十言にも至る其證かぞへがたし】東萬葉云長歌有て短歌をそへたればこゝに長歌短歌と標したるを長歌の二字脱したる歟標の次第旋頭歌諸歌と次々に有を以て見るべし又然らずば長歌と有しを短歌と後人書誤れるか長歌と草に書しを反歌と誤りたるを反歌は短歌の事として短歌と又云來るにや此二つをもるべからず又案に長歌のよみかたを寫るに五文字より縁にひかれて他のことにうつり又は五七五といひたきほどいひて今はとおもふ時とむるなどいふ是長歌の事をよしくしらぬ故かの三十一言の歌はつゞきすゝろにながきは繩を切しごとくつゞかすなどいふ謬説附會の注も出來るなり萬葉集を見るに長歌にもさまゝの體ありてはじめの語を又おこしてその詞の縁にていひかへし轉じかへたる法もあり一首さなくして前後首尾をと、のへたるありとかくいひ出たるよりつゞかざる法は一首も見えず古歌に冠辭有冠辭に小あり大あり至て大長なるあり是短歌には今の世序歌といふなり長歌にもその序を長うしたる有り短歌の序歌なども上は下の意につづくことなく詞の縁などのみなるを是にいたりては三十一言のうちのみじか歌といはんやかたゞ萬葉をし

らぬ人のいへるは通せざるなり
 應しらす(六帖には古き長歌) よみ人しらす
 あふこのまねなるいろにおもひそめ ○眞淵案におもひ初の意ならばまれなるいろとはいははじさては後の歌なりそめはまめのこゝろなるべし
 わが身は常に雨露のほろ、時なくふじの根のちえつゝとはに思へどもあふことかたし ○契沖引歌「わきもこにあふよしをなみ峻河なる富士の高根のちえつゝ、かあらん
 なにしかも人をうらみわたつみのおきをふかめておもひてし思ひはいまはいたづらになりぬべらなり ○契沖六帖には「人をうらみんを「人わろくみんと有わたつみの沖とは深く思ふと云事海の中にも沖の方は殊に深ければかりてたとふ萬葉「わたつみの沖を深かめてわが思へる君にはあはん年はへぬとも。同「わたつみの沖を深めておふるものいと
 も今こそ戀はずべきなき
 行水のため時なくかくなわに思ひみだれて ○顯昭云かくなわとはからくだ物のなかにとかくちがへたる物のすきかきなどのやうにみだれつくりたるあぶら物なり順が和名集に結菓とかけりむすびたる、だものと書たるもいはれたりときまかうさまにちがへたればみだる、事によ

めり○契沖云和名集に云「結葉楊氏漢語抄云結葉形如此間亦有之今案結緒加久乃阿和といへるを乃阿を反せば奈になる故にかなわなり水のあわなどのむすべるに似たれば名付けたるか江次第第二云「七日節會次第其菓子唐菓子二杯加久繩一杯云々。繩のみだれたるに似たる心歎ばかりてか、れたるか阿和と奈波と假名もたがひたるはおぼつかなし奥儀抄に寫撰式とて出だされたる五七五々體歌にも「夢のごといともはかなくなりゆけばかくなわにおもひみだれて云々。打物の手をいふに蛛手かくなわ十文字八花形などいへるかくなわも是なるべし○眞淵さきに聞るは繩のごとくしたるむがしのくわしなりと云かれれば江次第のごとしされども今案に和名に結葉を加久乃阿和と有るにおもへば江次第の假名恐らくは心得違ひにやいかになればあわはあわをといふことの有なり竊におもふにあわをは組緒をいふにやそのくみをのごとくむすびちがへくみちがへたる菓子なればかくのあわといふなるべしされどもかくとは何ぞともいまだ心を得ざればさだかに解しがたしいせ物がたりに「玉のを、あはをによりてむすべらばたえての後もあはんとぞおもふ。此歌諸抄にあはせ結な

りかたくよりたるは引はなたせどもやがてもとのごとくよれてありて絶はつる事なしと有歌の心さともきこゆるを眞名本に「玉緒平沫緒爾差而被結者と書しなりこの歌は元來萬葉「玉の緒を沫緒によりてむすべればありて後にもあはざらめかもと有を下句少し直して作りたる一條なり新勅撰に入られたるはいまの本のごとくなれば論にたらず此萬葉と眞字いせ物語と文字同ければ沫緒にてかなあわなりさればあはせをとはいふべからず云かれども下句にあはざらめと有ては上の沫の字淡と書しを同事と心得て傳寫のあやまり歎かかも沫緒なるべしと思ふは貫之歌に「春くれば瀧の白糸いかなれや結べども猶あわとみゆらん。清少納言云「うす氷沫に結べるひもなればかざす日影にゆるぶばかりを。如是あるに此集の物の名歌にも「あわをか玉のきゆとみゆらんなど讀るも沫緒の詞にあれば沫結とは緒のむすぶ一名今の俗あはちむすびと云もあわむすびにて沫結本にて合結は後説にやとおもふ今のかくのあわもそのあわむすびしたるごとくむすびたればいふにやふる雪のけなげねくおもへどし ○萬「道にあひてゑみせしからにふる雪のけなげぬがにこふちふわざも。同「朝

露のけなげなくと思ひつ、いかで此夜をあかしなにかも

はてふの身なればと有蝶になりて花にたはふると夢にみたるがやがてうつ、もかはらずとはかなきよしにいへりかくはかなき身にて戀をやまずと悲愧するなり今

えふのみなれば猶やまず思ひはふかし ○顯注云此詞きはめておぼつかなし清輔朝臣のつくられたる奥儀抄の注にも書出しながら此詞をばえ注せられずさばかりひろく見聞たる人のいひもはたらかさぬはよくかたき事にこそ其上に愚身も聞およばすみたる事も侍らねば力およばずさにやあらんと覺ゆる事も侍れどおろかにはいかでと覺ゆれば注し申さず秘藏つかまつるには侍らす密勘に基俊卿は閑浮の身なればをえふと書たるやとぞさつせられしと侍りき閑浮とは人界の身なれば思はじとおもへどかなはずとこそすこしは普通に通に心得がたき事に侍れど傳ふる説有りてこそ申されけめ道理至極しては覺え侍らねど説なきと説有るとなれば云はしさてこそは侍らめ袖中抄云此えふの身なればなほやまずといふ事は奥儀抄にも云いだしながら不釋誠おぼつかなし閑浮の身なればさすがにしながら思へどしなぬを上句の雪にそへて猶やまずと讀るを有爲の身なればしなんとおもふにも死なれず死なじとおもふにもかぎり有命なればしなずしもなきなり教長卿云院の御本に

案云證本又常の本にもえふの身とのみこそ書て侍めれば庄周が夢に胡蝶となる事は侍れど其をてふの身なればなほやまずとよまん事もいかゞとぞ覺え侍る或人云要の身なればと云事をそのまゝに假字の詞のやうに讀るにや人の身ばかり大要の物やは有さればさすがにかなぬよしをいふなり此義もさすがに要といふ事をばたしかによむべき閑浮の身はさもよみてんと覺えたり契沖も顯注密勘をあげたるのみにて何の説もなし榮雅抄も閑浮と定め又夢のことをもあげたり院御本をば 崇徳院の御本にはといへり「諸成案にえは假字の誤にてゑふの身にてやあらんもともえふにて閑浮も音なれどさすがに此身を閑浮とはよまじ又其山の言も見えず衛府の身とみれば猶矢とかけてやまずとよめるかさらは下のごとばにもこがくれてなどもあればおよばぬたかき人を六位のそのの衛府など戀ひ思へる歌歎又「たぎつ心をたれにも。又其下に「よそにも人をあはれとおもはんなどかたぐたかき人を衛府の身にて戀る歌か同

意ながらもつかさの名はかくもよまんか此次にも「ちかきまもりの身なりしをよめるをもおもひあはずべし此歌そとのまもりとよむべきを常にあふといへればかくよめる歎とのへもる身ともいふべき歎」

あしびきの山下みづのこがくれてたぎつ心をたれにかあひかたらはん
○契沖云上に「足引の山水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる。此歌よみいれたるやうなれど長歌にはおのづからさる事あるなり

色にいで人まりぬへみすみぞめの夕になれば ○すみ染は黒ければ夕の空のくらくなり行をくろき心につゞくたそがれ時とつゞくるも同心なりぬば玉のくろしとつゞくる心に夜ともやみともつゞくるが如し後撰戀「すみぞめのくらまの山に入人はたどるくもかへりきな、ん。六帖「すみぞめのたそがれ時のおぼろ夜にありこし君にさやにあひみつ。同「たゞこ、に君きまさぬか墨染のたそがれ時にそのすがたみん

ひとりあはれくとなげきあまりせんすべなみに ○契沖云あはれくとは獨ごとにははる、なりせんすべなみにとはいかにともせんするすべなきにの心なり萬葉に無念とも窮とも背てすべなしとよめり日本紀には不知所とも

いふべきを古歌にはかやうによめる事多し是は元方が「立かへりあはれとぞおもふよそにても人に心をおきつゑらなみとよめる心に同じ○眞淵案によそにも人はをとにを互にかへていひし萬葉に多し是も人をと心得べし春霞はよそといはんまでなり此あはれは面白しといふが如し

つらゆき

契沖曰是は此集のはじめに萬葉集にいらぬふるき歌をたてまつらしめ玉ふ其目錄の歌なり或抄にふる歌とは我よみおく歌のその長歌は序の長歌なりといへるは誤なり眞淵案にわがよみ置しをふる歌といはん甚よしなし萬葉集にいらぬ古き歌を奉らしめ給ふと有をよき證とすべし東萬呂云是此集撰る時の歌なれど入たり

千はやぶる神の御代よりくれ竹の ○契沖曰以上四句は惣じて歌のつたはりくる事を畧していへり以下目錄あまひこの音羽のやまのほるがすみおむひみだれて ○契沖云春なり上に「霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ。眞淵案におもひみだれてはその古歌を取集めよしあしを定るをいふ

不解所山とも厝身無所とも不知所圖ともかきてせんすべえらずとよめり和泉式部「まのぶべき人もなき身はあるをだにあはれくといひやおかまし。眞淵案にあはれは則嘆の辭呼鳴といふにおなじせんすべなみはせんかたなみなり

庭に出て立やすらへば ○契沖曰萬葉に徘徊をよめり遊仙窟には遷延をよめり眞淵案に徘徊は立もとほりといふを正訓とす義訓には立やすらひといふ所も侍るべし遷延をよめる猶以義訓にてこれも正義はのびくなる事を如此書なり左傳の文字なり

自たへの衣のそでにおく露のけなげぬべくおしへども ○契沖云此二句上にもあれども古歌なればいたはらぬなり眞淵案に此二句上は消べくおもへど世の人の身の心きたなく執心ふかきになほやみえずこふるをいひこ、には消べくもおもへどもよそながらあひみんことをたのみたるをいふ重疊したるがごとくながら同句を以あらはすなれば古歌さることは多なり

猶なげかれ春霞よそにも人にあはれとおもへば ○契沖云春霞は臙々としてよそめにはおもしろくみゆるものなればよそにも人にあはれとおもへばとそへたりよそも人をと

さみだれの空しとるにさよふけて山はとくす晴ごとになれれどめて
○契沖云夏なり上に「五月雨の空もとゞろに郭公何をうしとか夜たゞなくらん。眞淵曰たれもねざめては夜も考るなり或抄に空もうごきてとはそらの動く事いつ有にやとゞろといふは物のひゞくこゑのとゞろくとするを即いふなり

からにしきたつたの山のみちばをみてのみしおふ ○契沖云秋なり上に「こひしくば見てもまのばんもみちばを吹なちらしそ山おろしの風。古歌なれば必いひもはてす下の冬にもつゞけたり眞淵曰「立田川もみちばながる

かみな月しくくく冬夜の庭もはだれにふる雪の猶きえかへり ○契沖云以上冬なりはだれはまだらの心なり「かのこまだらに雪のふるらんなどよめるが如し波と方と同音通し禮と羅と五音通せり萬葉にはだれ霜ふりとよめれば雪にもかぎらねど又はだれとのみいひて雪とせる歌有萬十「さ、のはにはだれふりおほひけなばかもわすれんといへばましておもほゆ。同第十九「我宿のすも、の花かさはにちるはだれのいまだ残りたるかも。はだれは雪につきたる用のことばなるをやがて體に用たるなりさゞれとのみいひてさゞれ石にするが如し○眞淵

案に「まぐれ〜て冬の夜云々」「時雨の雨をたてぬきにして。又「す、きおしなみ。これらなるべし
年ごとときにつけつゝあはれてふことをいひつゝ、〇契沖云是は惣じて上の四季をつかねていへり

君をのみちよといはふ世のひとの 〇契沖曰是は賀なり「我君は千代にやちよに

おもひするがふじのれいゆるおしひ 〇同人曰以上戀なり

「思を常にするがなるふじの山社
あかすしてわかるゝなみだ 〇同人曰離別なり旅をかねたるべし「あかすしてわかるゝ、泪腫にそふ

ふちころもおれる心も 〇哀傷なり同人曰さま〜の事はたてぬきのごとしこれをよむは織ることし藤衣といふよ
りおれる心といひて此おれる心は四季等すべてわたして心うべし〇眞淵案に此部の古歌に藤衣とよめるはなし然ればたゞこゝは喪の部の事なりおれる心とはたてぬきに物思ふといふに同じ次の「八千ぐさのことはごとこの言にてまらる

やちぐさのことはごとこの契沖云雜の歌に物名雜體大歌所などを兼べし續萬葉に名付たる時は此次第なりけるにや但序に書るも次第せざれば大かたにみるべしやち

いせの海のうらの磯がひろひ集めとれりとすれど 〇契沖云催馬樂に「いせのうみきよきなきにまはがひやなのりそ
やつまんかひやひろはん玉やひろはん。是を取用ひられたる歟鹽貝は一種の名にはあらず鹽海にあるよろづの貝なりかひにはさま〜色姿あれば歌にたとふるなり眞淵案るに萬葉に鹽舟ともいふともに海なれば也又色姿有をたとふるとは過たりさま〜をひろふといはんのみ

たまのなのみじかき心おもひあへす 〇契沖曰玉のを以下謙退なり眞珠は貝の中より出れば鹽貝といふよりつゞけたるか萬葉第四第五に玉の緒の次に貝の歌をつゞけり玉の緒をばなが〜しともみぢかくとも時により事にまはがひてつゞけたりみじかき心は短才也大井川序にも「われらみじかき心のこのもかのもにまどひつたなきことこの葉ふく風の空にみだれつ、云々。眞淵案におもひあへす云々はながれもあへぬなどいふはながれはてぬにてながれきらぬなり亦萬葉「天雲にかりぞなくなるたかまとのをの上の木々はもみぢあへんかもといふは天上には鴈鳴秋の時に下にはもみぢの秋をあはせんかもといふに合なりさればこれは卷々の中によき歌を

ぐさは八千種なり物のかす〜なるをちぐさといへば猶おほくいはんとてやつ千ぐさといふなり萬葉「八千種に草木をうるて時ごとにさかん花をしみつゝ、まのばん。同「やち草の花はうつろふ常弊なる松のさえたを我はむすばな。同「長歌うちなびく春の初はやちぐさに花咲にはひ云々。眞淵曰やはいやなり千種と書も皆やいろやしなやくさはともに同じ神代卷八品のいかづちをやいろとよむにてしるべし八は大數なりといふはさる事ながらやといふはいやといふ事なりすべらぎのおほせかしこみまき〜の中につくすと 〇或抄云すめらぎとも申といふは眞淵案にさることながらいかでもいふと云事をしらでは書ことも成まじ米は倍の濁に用るならひにてすめらぎとかけば即濁なり今のいろはがなのごとくすべらぎと書ては聞えずされば須倍良義と云かなの清濁にならひ有事なり天皇にてあめす倍しらすきみを畧きいふなりまき〜の中には古歌をつくしてえらみとるなりまき〜は此の集の四季雜歌そりの外の卷々なり契沖云以下勅をうけたまはりえらむこゝろなりかしこみはおそるゝなり則恐懼等の字なり

つくしてひろひとるとはすれど短才なれば是非をも歌のかす〜をもさだかに急におもひはて極めず又はきかぬかぎり心のおよばぬを云落句に「もりやまぬらんといふにかけて見るべしさてまかる短才なるを猶大宮にとなり

猶あらたまの年へて大みやにのみ久かたのひるよるわかすつかふとて 〇契沖云猶とは短才なる上にや大みやにのみ久かたのとつゞきたるは宮中にさむらひて久しくつかうまつりてといふなり毛詩大雅「夙夜匪懈以事一人〇眞淵案に上に年へてといへば久しきとはつゞかでも有つらん又或抄に久かたと空をいふよりひの出るをひるといひひのくるゝをよるといへば空をはなれぬなりといふは非なり久かたのそらといふより何にても空なるものに冠せたりひるは久方の日と一語につゞくなり萬葉末らではかゝる古歌の冠辭は解すべからず古の例をまりて後に語を知べし扱此はじめの猶は末のもりやまぬらんへかけて見るべし

(以下五句は句中の序なり)かへりみもせぬわがやぎのしのふ草おふる板間あらみふる春雨のしりやまぬらん 〇眞淵曰或抄にかへりみもせぬは宮仕の道にはわたくしをかへりみぬといへりと有るは第二第三のよせ

ことなり契沖云去のふ草おふるいたまあらみは心のおよぶかぎりえらびあつむれども猶き、もらし見もらしやまぬらんといはん爲の序ながら述懐をかねて聞ゆ○眞淵案に此契沖が注あたりしからざれば前後のちぢめなして此歌の詞にふる歌奉りし時のもくろくの長歌と有を或抄にわがよみ置し歌と心得たるは大に非なり上にひろひあつめとれるとすれど、いひ落句にもりやしぬらんといふは古歌をひろくもとめえらめど猶不及見聞はもりやしぬらんといふ事なるを落句に心つかずしてまどへるなるべし眞淵今案に此詞書のやうはふる歌をみづからえりて奉る時の歌となるに卷々の中につくすといひ前に部立のことをいひてその卷々の中に萬葉にいらぬ古歌をとりつくし撰びて奉れりと思へど猶もりやしぬらんといふ心也されば未だ當代の歌をば撰ばぬ以前に古歌を奉りし時の目錄なれば當代の歌を撰びて此らをも入られしなるべし

六帖四にいふ同じ題

ふる歌なくばへ奉れる長歌

玉生 忠 峯

くは竹のよのふるることなかりせばいかほの沼のいかにしておもふこころなのばへまし ○いかほの沼上野なり延喜式神名帳云「上

野國群馬郡伊賀保神社。萬葉歌國同じ防人の歌等多し契沖曰あづまの人保を濁りて申めり東の俗語濁音多し【諸成云伊加保の保は乎の如くいふは半濁なり下の注にて保を音のま、にいふとおもはん人のためにいさ、か云のみ】眞淵曰東とてもさのみ濁らず拾遺「いかほのやいかほの沼のいかにしてこひしき人を今ひとめらん。六帖「かくれなくあはずなりなばみちのくのいかほのぬまの我いかにせん。契沖云此六帖の歌はかみつけをあやまりてみちのくとうつし侍る歟のばへはのべの延語なり心に思ふ事をいひ出すなり

あはれいにしへありきてふ人まるこそはうれしけれ ○家集並に六帖には「あはれむかしべと有歌の師となる人の出たるがうれしきと也契が説も同じ【延喜祝詞云去前】

身はししなからこと葉を天つそらまで聞えあげ ○眞淵案に或抄にその身はいやしきをいふ下篇ながらとのみ有は人丸をさせる詞とは見えす忠峯の身をいふとおもへるか此のつゞけがらいかに見るとも忠峯の身のこと、は見えじ此の歌の意またく人萬呂をさせるなりしかれば序に正三位と有は非なることを考るべし三位たる人を身は下ながらといふべからず是も一證と東萬呂のいはれし

契沖なども何の論もなしにかに見すぐしけんか、る所こそ心をつくべき第一也【同じ撰者のかくよめるに貫之序に正三位とか、んかは】

末の代までのあと、なし ○是まで人萬呂をいふ○眞淵案に右のうれしけれとはこ、をいふ

今も仰の下れるは塵につげとやちりの身につしれることをとほらん

○或抄云ちりにつげとやは相續する事なり家業なり家をつぐ義なりふるき事を學をば續塵といふ事なればいへり眞淵案字書曰「塵音陳埃也又文也と云此文につげといふ心歎人萬呂の文につぎて此の集をえらめとやなりちりの身とはちりあくたのごとくなるいやしき身となり玉體玉身の表裏なりつもれることを或抄に云ちりの身よりそへたり【萬十五「ちりひちの數にもあらぬ我故におもひわぶらんいもが、なしさ】又年久しくつもれる歌をえらばる、によりて其の歌をとほる、となり

今本になし同 これをおもへばいにしへも樂げがせるけだもの、雲にほえけんこちして

契沖曰忠峯集並六帖には「これをおもへばの次に「いにしへもくすりけがせるといふ二句有を此集流布の本にも此二句有もありしかれば落たるべし【舊本いにし

へも樂げがせるの二句なし】眞淵案に此二句なくては只けだもの、雲にほえけんとはいふべからず後世ならばさも有べき歎不圖出たるに似たれば二句有かたをよしとす○契沖云「雲にほえけんを家集には「そらにはえけんとあれど本文によらば雲にほえけんなるべし雲の字の草書を空の字の草と見て誤れるなるべし神仙傳曰時人傳八公安臨去時除藥器置在中庭「犬舐啄之盡得昇天故鶴鳴天上犬吠「雲中。萬葉五「我盛伊多久々多知奴久母爾得壽久須利波武等母麻多於知米也母。三代實錄云「右大臣基經疏表辭攝政言臣將隨陛下爲雲中犬吠何更歸城闕爲花表之鳴鶴

ちのなまきけもおもほえずひとつ心ぞほこらしき ○契沖云初よりこれまでは序に引て少し心を注せし故に今わづらはしくいはずあくまで歌の上さいはひをいへり

かくはあれどもてるひかりちかきましろの身なりしなたれば秋のくるかたにあざむきいで、みかきよりとのへもる身のみかきしりなさくしくもおもほえず ○てる光は天皇を日にたとふ和漢同じ左近衛

番長なりしを誰か右衛門府生に欺てなしたるしかくあるべきこと、も覺すとなり契沖云家集には「かくはほこれととあり又家集には「みかきよりとのへもる身

のといふ二句なし落たる歎なくともみかき守といふに
 て其とはしらるるひかりとは帝をば日にたとへ奉る
 なり近き守とは近衛なり忠峯もとは左近番長なり後右
 衛門府生にうつれり右衛門は西なり秋は西よりくれば
 なり今も其心にて秋のくる方といへり但近衛は中重を
 守りて左近は東右近は左近に相對して西也右衛門は外
 の重を守りて左衛門に相對して西也今は左近に相對し
 て西にうつるやうに聞ゆれど下に「みかきよりのへ
 もる身のみかきもりといへるにあらはれたり衛門をみ
 かきもりとよめり○顯注云忠峯は定國大將隨身なりい
 かに衛門府生には移されたりけるにか古くはさも侍る
 にや契仲云今案に定國の隨身なりし事は大和物語に見
 えたり○東萬呂云定國の隨身なりし物語は虚多しと
 いへども是は「夜半にふみわけことさらにこそなどの
 歌も侍りてさも有ぬべければ隨身たる證とすべし大將
 は近衛府の頭なり大中少將之次に番長など有府生は下
 官にて今俗に云下役人なり大中將皆武官故帯兵仗した
 るものを供從するなり隨身といふ事大臣にても陪從せ
 しむる事武官なれば也忠峯前は家來なるをかく經あが
 れるなるべしさて始は近衛府に有しを西のかたに下り

しなるべしされば今歌は堂上のみよくし給ふといふは
 遠たりこれらを見ても知べし
 とのへ
 或抄云御垣もりとのへもる身とは右衛門なりみかきも
 りは内裏の御垣守なり右衛門をばみかきもりとよむな
 り源氏に「とのゐ中の聲聞ゆるは正實になりぬるなる
 べしといへるも同じ事なり衛府衛士などの一時を三に
 わかちてとのゐ申をするなり眞淵案にとのゐ中のゑな
 とゑもじを書は衛門等の衛の音なりとおもひてなるべ
 し誤なりとのへなかのへなどへをかくべし外重中重内
 重にて重はへだての事なり外のへだて中のへだてかみ
 のへだてを衛ると云事なり衛を即と書てまもりの事
 といはゞ又もるといふは是重疊せるに似たり文字のう
 ゑざまをよくしらぬ人はあやまるべしされども近衛を
 このゑといふに至りてさらばことは近の音にあらざるや
 といふ人あらんかちかきを略してかきは普通にてこ
 語になし來れるなり皆御殿にちかきを先として段々に
 いへば近衛は爰の守りを略するといふもいはるべし
 てそれを惣じてにいふに九重といふより爰のへだての
 守りといふにて皆重の字へだてのことにてへといふな

り又こゝに爰のへだてといふは九重の惣名をいふにあ
 らずまどふべからず爰はちかきなり

をさく

或抄云忠峯は右衛門府生の番長なれば長々しくとよめ
 り兵衛をば中のゑと云へば右衛門を御垣守とも云おさ
 くしくもおもほえずとはおさくは優也治也長也躬
 恒が假字序にも「あるじのおさしければをかしくすみ
 なしたりと書りいせ物語にも「まだ若ければふみはお
 さくしからず詞もいひしらすといへり源氏にもいく
 らもおさく」と書其は常にありし事の絶たる様の事に
 もかけり義あまた有て治定まがたし今の歌おさくし
 くもおもほえずはうれしとも覺えずとの事也○眞淵案
 に番長なれば長々とよめりとはいかに解するにやさる
 事にはあらず番長の長の字にひかる、所にあらず又お
 さく」と云假字何を證とするにやおを書る證有べから
 ず後に委しくいふべし又中と書誤れり○契仲云日本
 紀に軌制幹了明直など書きて皆をさくしとよめりい
 づれも心違ふまじき中にも明直ならぬとみるはいよい
 ややすし心ならずうつされしなるべし○眞淵案に眞名
 いせ物語に「末稚計禮者文毛不袴況哉歌者獲不讀計禮

者云々。袴は幹に作るべし幹古汗切干去聲能事也易曰
 幹交之繼又強也是を以て見ればふみもよくか、すと
 いふ事の意なり強也といふもよくするの意よりつよき
 かたにもいふなり又草莖なり又木旁生者爲枝正出者爲
 幹又骨幹人脊股之骨也又竹也又易乾文言云貞者事之幹
 也言事以貞立猶牆垣有版幹也又考土記曰荆之幹築牆版
 也これらを以て軌制とも幹了とも明直とも書るなり長
 をいふは草木莖也骨幹などを以て人長に用たるべしさ
 ればともに意はかよふなり治ををさく」と云はしらす
 治はをさまり有は去聲今をさむるは平聲に用る字のみ
 にてをさく」と云べき意なし史記の訓などはとるにた
 らずとす萬第十四に「等夜乃野爾乎佐藝彌良波里乎佐
 乎左毛彌奈敵古山惠爾波伴爾許呂波要。此歌第一二句
 者爲獲鳥獸以柴爲屋於野是曰鳥屋也今以欲獲兔而居之
 窺之也如是徒窺之耳而能無相疑者故何母爲噴讓哉云々
 去ば此をさぎねらはれと云語勢にてをさく」と云かけ
 て冠句のみにはあらでうさぎをねらふことのみして未
 だしかぐもぬぬといふ也故におさく」と書は假字誤
 れり東萬呂釋此語曰此曰乎者發語佐者志加約言而言如
 是也眞淵今以字注考之曰好如是乎袁與與通佐者志加

のといふ二句なし落たる歎なくともみかき守といふに
て其とはしらるるひかりとは帝をば日にたとへ奉る
なり近き守とは近衛なり忠家もとは左近番長なり後右
衛門府生にうつれり右衛門は西なり秋は西よりくれば
なり今も其心にて秋のくる方といへり但近衛は中重を
守りて左近は東右近は左近に相對して西也右衛門は外
の重を守りて左衛門に相對して西也今は左近に相對し
て西にうつるやうに聞ゆれど下に「みかきよりのへ
もる身のみかきもりといへるにあらはれたり衛門をみ
かきもりとよめり○顯注云忠家は定國大將隨身なり
かに衛門府生には移されたりけるにか古くはさも侍る
にや契仲云今案に定國の隨身なりし事は大和物語に見
えたり○東萬呂云定國の隨身なりし物語は虚多しと
いへども是は「夜半にふみわけことさらにこそなどの
歌も侍りてさも有ぬべければ隨身たる證とすべし大將
は近衛府の頭なり大中少將之次に番長など有府生は下
官にて今俗に云下役人なり大中將皆武官故帶兵仗した
るものを供從するなり隨身といふ事大臣にても陪從せ
しむる事武官なれば也忠家前は家來なるをかく經あが
れるなるべしさて始は近衛府に有しを西のかたに下り

しなるべしされば今歌は堂上のみよくし給ふといふは
違たりこれらを見ても知べし
とのへ
或抄云御垣もりのへもる身とは右衛門なりみかきも
りは内裏の御垣守なり右衛門をばみかきもりとよむな
り源氏に「とのゐ中の聲聞ゆるは丑寅になりぬるなる
べしといへるも同じ事なり衛府衛士などの一時を三に
わかちてとのゐ申をするなり眞淵案にとのゐ中のゑな
とゑもじを書は衛門等の衛の音なりとおもひてなるべ
し誤なりとのへなかのへなどへをかくべし外重中重内
重にて重はへだての事なり外のへだて中のへだてかみ
のへだてを衛ると云事なり衛を即ゑと書てまもりの事
といはゞ又もるといふは是重疊せるに似たり文字のう
ゑぎまをよくしらぬ人はあやまるべしされども近衛を
このゑといふに至りてさらばことは近の音にあらすや
といふ人あらんかちかきを略してかきは普通にてこ
語になし來れるなり皆御殿にちかきを先として段々に
いへば近衛は爰の守りを略するといふもいはるべし
てそれを惣じてにいふに九重といふより爰のへだての
守りといふにて皆重の字へだてのことにてへといふな

り又こゝに爰のへだてといふは九重の惣名をいふにあ
らずまどふべからず爰はちかきなり

かさく

或抄云忠家は右衛門府生の番長なれば長々しくとよめ
り兵衛をば中のゑと云へば右衛門を御垣守とも云おさ
くしくもおもほえずとはおさくは優也治也長也躬
恒が假字序にも「あるじのおさしければをかしくすみ
なしたりと書りいせ物語にも「まだ若ければふみはお
さくしからず詞もいひしらすといへり源氏にもいく
らもおさくと書其は常にありし事の絶たる様の事に
もかけり義あまた有て治定まがたし今の歌おさくし
くもおもほえずはうれしとも覺えずとの事也○眞淵案
に番長なれば長々とよめりとはいかに解するにやさる
事にはあらず番長の長の字にひかる、所にあらず又お
さくと云假字何を證とするにやおを書る證有べから
ず後に委しくいふべし又中ゑと書誤れり○契仲云日本
紀に軌制幹了明直など書きて皆をさくしとよめりい
づれも心違ふまじき中にも明直ならぬとみるはいよい
よやすし心ならずうつされしなるべし○眞淵案に眞名
いせ物語に「末稚計禮者文毛不袴況哉歌者獲不讀計禮

者云々。袴は幹に作るべし幹古汗切干去聲能事也易曰
幹交之蠶又強也是を以て見ればふみもよくか、すと
いふ事の意なり強也といふもよくするの意よりつよき
かたにもいふなり又草莖なり又木旁生者爲枝正出者爲
幹又骨幹人脊股之骨也又脊也又易乾文言云貞者事之幹
也言事以貞立猶牆垣有版幹也又考士記曰荆之幹築牆版
也これらを以て軌制とも幹了とも明直とも書るなり長
をいふは草木莖也骨幹などを以て人長に用たるべしさ
ればともに意はかよふなり治ををさくしと云はしらす
治はをさまり有は去聲今をさむるは平聲に用る字のみ
にてをさくしと云べき意なし史記の訓などはとるにた
らずとす萬第十四に「等夜乃野爾乎佐藝彌良波里乎佐
乎左毛彌奈敵古由惠爾波伴爾許呂波要。此歌第一二句
者爲獲鳥獸以柴爲屋於野是曰鳥屋也今以欲獲兔而居之
窺之也如是徒窺之耳而能無相疑者故何母爲噴讓哉云々
去ば此をさぎねらはれと云語勢にてをさくしと云かけ
て冠句のみにはあらでうさぎをねらふことのみして未
だしかくもねぬといふ也故におさくしと書は假字誤
れり東萬呂釋此語曰此曰乎者發語佐者志加約言而言如
是也眞淵今以字注考之曰好如是是乎袁與與通佐者志加

也然猶乎者須爲發語乎されば此長歌にいふもしかあるべくもおもほえずといふ意にて能事なりといふ注にもかなふなり長字の意とは同辭前後なるを知べし

このかさねの中にては風の風もさざりき ○契沖曰離騷曰君

門多九重王逸曰天門凡有九重洛陽城闔門西向大道門九重也白氏文集曰君門九重閉などいへるは外衛にあり

て中衛に有し時をいふなり藤原孝標女「あらし社ふきこざりけれ宮路山まだもみぢばのちらでのこれる。こ

れこ、をおもひてよめるなり眞淵案あらしの風前にいふごとくあらしをあらき風といふは非なりの文字入て

はさはつゝかぬ事なり仍てあらしは山氣の一名なりそれふくは物をそこなひてあらし物なれば名とせるなり

されば嵐風にていふ心は山風なりあらしの風といふをよくしらすれば空しく詞をかさねたるが如し

今は野山しちかければ ○契沖云外衛なれば野山もまちかきやうにいひなすは歌の習なり

春は霞にたなびかれ ○契沖云萬葉に「卷向のひはらにたてる春霞くれし思ひはなづみけめやもと讀りくれしは鬱の字をかけり今も心の鬱としてむすば、る、を霞によせてたなびかれとは云り眞淵案「冬はしもにぞせめら

る、といふは寒苦の心なりされば爰に首尾して霞にこもりおもひむせびをる意をもかねてひとへに野山に居るわびしき體を云なりたなびくはかたならひくことなればたなびかれといへり心をかすみにひかれてといふ

にあらずまた契が引る歌甚非なりこれは萬葉をしらぬ人のふるく訓みおきたるをかな付學文にてさる事と思へるなるべし下句さよまれす又しかよみては何の事とも聞えざるなり此歌は萬葉第十卷春雜歌の始に只に七

首とのみ有て皆詠霞歌なりされどもこ、には七首とのみ有て奥に詠霞三首と有て霞を詠るのみの歌有されば此七首は皆霞をばいひたれども中に相聞の如きもまじ

はれるより無題の霞の歌七首を別に始に置るなるべしよりにて此歌は相聞なるべし其歌「卷向乃檜原丹立流春霞鬱之思者名積米八方。如是有を鬱之思者をくれしおもひとはいかでかよむべき又米字一を上にケの語を添てよむ例なし文字の訓を用ひたるには下には二語三

語も添る事侍る也皆ひがごとよみ也今案是は下句を「おほにしもはなつみこめやもとよみておほかたに思ふ我ならば足たゆきをしのきて來らめやといふ歌なり鬱字をばおほつかなくといふ意にもよめばこ、の心は

く事をいはん
かゝるわびしき身ながらにつもれる年をしるればいつのむつになりにけりこれにそはれるわたくしの老の數さへやよければ身はいやくて年高き事のくるしき ○契沖云年高きは身のいやしきに對してたふときこ、ろなりいつ、のむつは五六三十なり顯注に外衛の勞三十年になりぬなりと釋せられ定家卿は但外衛勞三十には侍らじたゞわが年三十年をすでに老と中にやと料簡をくはへられたれど共に不審なり忠峯が宮仕のはじめよりをいふ成べしその故は後撰に壬生忠峯が左近のつかひのをさにてふみおこせて侍りける返しに貫之「ふりぬとていたくなわびそ春雨のたゞにやむべき物ならなくに。ふりぬとては雨のふるに身のふりぬとてとよせられたれば左近番長にて年ふりてまた外衛勞三十年なること有べくもなし況や又定國の隨身なりしは猶昔のことなるべし其上歌のつゞきをもて見るに六十ばかりにても有ぬべきにやわたくしの老の數とは奉公三十年の外みづからの生年のことなりやよければ、顯昭云彌生をよひといへば彌をやとよむべき歎常の本にはせめくれればと有密勘に云老の數さへやよければ用この説いま説にはいやよきればといふなり彌過

おろそかにといふを借訓に書たるを萬葉をしらぬ人文

字を偏に心得るより歌のこ、ろにそむくなり此所に引べき歌ならぬ事を知べしわづらはしけれども引る歌の

誤より本をも失へばくはしくいふなり
夏はうつせみ鳴くらし ○眞淵案にうつせみをもぬけがらなりといふ人はこ、にいたりていかゞいはんやくはしく

冠辭考にいへり【後撰夏題しらすよみ人しらす「打はへて音をなきくらす空せみのむなし戀もわれはするかな。同「空蟬のこゑきくからに物ぞおもふ我もむなしきよにしすまへば】

秋はしぐれにそでをかし ○契沖云郭公の歌に「我衣手のひづをからなんと有き今は袖のぬる、をしぐれにかしたるといへり

冬は霜にぞせめらるゝ ○契沖云文選平子思玄賦云「迢々白露之爲霜。かしらの霜となりて老にせめらるゝをいへり

○眞淵案此注非なり是までは老をいふにあらず苦寒をいふなり契沖が例の物を引てそれになづむ僻也とる

べからず春は山野の烟霞をけし夏は與蟬鳴秋雨迢衣冬寒氣霜雪浸身といへり是不内衛るその煙風雨霜寒暑を

しのぐべきやうもなきをいふのみ何ぞこ、に老をなげ

なりいよ／＼過行心云々此事猶おぼつかなしとぞ申されし今案に彌生は彌をやよと讀にあらす三月にいたれば若草のいよ／＼生ひそへばいやおひといふべきを彌はいやを上略し生はおとよと同韻に通じてやよひとはいふなり然ば其義にあらす彌生の説はみづからおぼつかなしとなり只何となくおほければといふ心と見てあるべきにこそ樂師寺に光明皇后の立給へるといふ佛足の跡をゑり付たる石有拾遺集には山階寺にある佛跡といへりその傍に此事をよませ給へる廿首ばかりの和歌おなじくゑりて立らる、其中に「己乃美阿止夜與都比賀利乎波奈知伊太志毛呂毛呂須久比和多志多麻波奈。この夜與都比賀利は今のやよに都をくはへておほくのひかりとのたまへるなるべし○眞淵案顯昭定家卿の説はいとかひなし契が論よろしまかれども彌生の論は過たり顯昭の彌をやよとおもはれしは非なり釋也は伊也の上略於與譽同韻なりされば是も也は伊也の上略よければ、過なり佛足跡の夜與都比賀利は只數の光とはいふべからず光に數をいはんも又おぼつかなし是は愚案にやみつ國をよもつ國ともいへば是は夜と與と通與と毛と通じて四方津光といふなるべし放光於四方

拯諸之衆生といふなりまかれれば今とはたがひたりその上只何となく多ければといふ心とのみ見て有べきといふは注せるかひなし【眞淵今案にやは彌なりよければはさへぎればなりさへぎるをよぎるといふなり過るをよぎるといふは曲道をよき道と云類にてよけるといふ事にて別なりさへぎるをよぎると云はよこぎるにて三十年に又數年のよこぎりて有なり】○東萬呂曰五の六は三十なりそれに私の老の數四八三十二年なるべしまかれば彌過るといふには八四と數をいひこめたと見れば六句餘なり契沖が案も六十歳ばかりと云よく叶へり眞淵案にかゝるつゞけ古來有事なり袖中抄に出せる「なら坂をき鳴とよますほと、ぎす二四八とぞをちかへりなく。是も二四八とぞを解する人なし東萬呂云月夜よしとぞとよむべしとなり是よくあたれりよ、四と云も右に似たりいせ物語に「手乎折而會見志事乎籌禮者十五四葉歷爾計利「年多仁毛拾十而四葉經爾計留乎幾度君乎手飲將來覽。此二首も今の物語のことばとはたがひて別訓の傳有これらをもよく考てみるべし後學思てまらんがためにこゝにくはしくはす又まからは四八といふべきをやよとあれば三十二の數に

あらずと云人もあらんかまかるとは歌なれば上下して彌過るといはんために數を四八とおもはせたるのみなり又五つの六つは惣て宮仕の勞なるべし外衛のみと思ふは非なり又契が年たかきの辯は過たり唯いやしきにたかきをいひたるのみにてその内に嘆慨のこもれる也かくしつゝながらの橋のながらへてなにはのうらにたつ浪の波のしわにやおほれん【下のほはヲの如くよむ】○契沖云ながらへてを家集にはながらへばと書り波のまわも老のしわにやと有波のしわといふにつけておほ、れんといへり朗詠集………消浪浪盛面………商山月垂眉。眞淵案定家卿三十歳を老といへるかとの給へるは此文字に波のまわにやおほ、れんとあればいまだわかき時なるべしとおもひてにや六十歳にてはいまだ波のまわにおほる、とはいふべからずそれより若老をいふなれば定家卿の説いよ／＼いふにたらす老すまなすのくすり………わかえつ、みんなと三十歳のみにて云べきにあらずさすがに命をしなければ、この國なるまら山のかしらは白くなりぬとも音羽の瀧の音にきくおひすまなすのくすりしが君がやちよをわかえつゝみんな

なるなり歌の道につきての幸の外はうれへればさすがにといへり老すまなすの樂もがは列子湯問云渤海之東不知幾億萬里有大壑焉其中有五山焉一曰岱輿二曰員嶠三曰方壺四曰瀛州五曰蓬萊其山高下周旋三萬里其頂平處九千里山之中間相去七萬里以爲隣居焉其上臺榭皆金玉其上禽獸皆純縞珠玕之樹皆叢生華實皆有滋味食之不老不死所居之人皆仙聖之種一日一夕飛相往來者不可數焉○眞淵案くすりもが今の本にもると書るは誤なりかもじは願にて樂も我などいふ意なればかもじ濁るべしわかえつ、みんなとはわか、へりて見んとなり萬四「吾妹子者常世國二住家良思昔見從變若益二家利。同六「從古人之言來老人之變若云水曾名二負瀧之瀧。變若とあればわかかへりなりさらばかなはわかへと書べし然れどもわかゆあふといふにはゆといへばわかえと書べく見ゆれども是は若かへるのかへを略して留に通じて由といへる略語なれば本訓の假字和加倍と書べし【萬三「吾盛復將變八方殆寧樂京師乎不見歟將成。第二句マタカヘレヤモとか訓ればラメの約にてかへらめやとなり是もわかかへりと同じ】歌の心は段々身のうれへをいひ來りこゝに至りて君が八千代を若かへりみんなと

いふは君を祝し我も此時にあへるをよろこびて長命を
もねがふ心發るなり

君が代にあふ坂山の岩しみづこがくれたりとおもひけるかな
契沖云六帖山の題に入たるは今と同じ水の題に入たる
は落句を「何思ひけん」と有歌の心はかくばかり興し給
ふ君が世にあふ事をかねてはしらすしてあふ坂山のい
はしみづの木がくれたる如く人しれず沈める身と歎し
事をくゆる心なり或抄云君が代にあひながらこもりゐ
たる心なりといへるは下の句の意を得ぬものなり眞淵
案に契沖が説よし此たび撰者にめされて名をあらはせ
るより前々木がくれたりとおもひしをとなり契沖又云
此の集に長歌五首あり反歌はたゞ此一首のみなり反歌
は經の偶頌文章の亂のごとく長歌の要をとりていふな
り萬葉には四首五首まで有詞林采葉抄に初に短歌と書
は此歌をさすなるべしとて影略互顯といへり影を揚に
作れるは失錯歟影略互顯の心をもよく得ず僻案なれば
今彼をとらぬ故に是を略す見ん人知べし眞淵案に長歌
を載て後に有此歌をばやく短歌とのみいふべきにあら
ずはじめに短歌とあるはとるべからざる事既にいふ
そのながうた

そのながうた

凡河内朝恒

家集にはうちたてまつると有

ちはやぶるかみな月とやけさよりはくもりもあへずうちしぐれ
○家集には「初しぐれくもりもあへずけふよりはと有
六帖には「初しぐれとあり又異本にも「初しぐれとあ
り後撰にも初時雨てふ歌有後撰に「神無月ふりみふら
ずみさだめなきしぐれを冬の初なりける

もみちとともふるさとのよしの、山の山あらしもさむく日毎になりゆけ
ば ○契沖云山あらしは山おろしなり嵐の字を山下嵐と
注し即家集には「山おろしもとよめり

玉の緒とけてこきちらしおられみだれて霜こほりいやかたまれるにはの面
に ○眞淵案なりゆけば玉の緒云々此體用のたがひいか
がいやかたまれるはいよ／＼なり庭をばかた庭といひ
たれば今は霜の水りていよ／＼かたまれると云なり萬
二に「岩床や川の水凝ともよめり○契沖曰いやかたま
れるをいやかたましくと有志もこほりは霜と氷には
あらず庭のこほりたるなり

むらく見ゆる冬草のうへにふりしくまら雪のつもりてあら玉の年
なあまたし過しつるかな ○契沖云家集には「年をおほくも
と有白雪のつもり／＼ては自ら終二句の序となれりあ
る人陶淵明が歸去來辭を歸去來といひながらなどか歸

りし後の事をば賦しけんといひける時又或人「ちはや
ぶるかみなづきとやけさよりはといひて末に「白雪の
積り／＼てなど年のをはりをかけてよめるに同じと申
き○眞淵案に此助ていへるは非なり冬立からにことし
もくれなんぞと思ふ心よりいふにて中のことば共はと
しをあまた……云々てふ道行ぶりのことばのみ眞淵
はやく思へる事を猶いふ此歌作るは初冬なるべしされ
ばけさよりはといへりさて年のはてまでの事をいへる
はあまた過しつる年なれば冬はかならず有所の景をの
べてかくして年をくらしつると年のつもれるをなげく
より冬にいたりて即此嘆あるべきなり歳暮にありてよ
めるにはあらず淵明が賦歸去來の來字は助なれば今云
來ると云事にならず歸居して今その意をいふにかくの
如く歸居して有べき事なりと決然としてその趣をいふ
より歸りさらん事なる哉と前をおこしていふにていま
だ官に有てするをいふにはあらず和訓を以害字義事多
しかの國の物をば必和訓にてよむべからず今と同じ論
にあらずかれは歸り去て後に作りこれは冬の來るをみ
てするをかねていへり

七條の后のうせ給ひにける後によみける

延喜七年六月八日崩三十六如是侍れば此撰の後なり是
も後に加へられしなりけり

おきつなみあれのみまさるみやのうちは年へてすみしいせのあまし舟なが
したるこ／＼してよらんかたなくかなしきに ○契沖云津波はあ
れのみまさるといはんためにてやがて下にいせのあま
もなど縁をはなれずつゞけん料なりいせがみづからの
名をよめる歌は後撰に「いせの海に年へて住しあまな
れどかゝるみるめはかづかざりしを「おぼろげのあま
やはかづくいせの海の浪高き浦にあふるみるめは。舟
ながしたるは上の秋の歌にも「あまのながせる舟かと
ぞ見るともみちのちれるをよめり齋宮女御集「あさ
ましく舟ながしたるあまよりも我袖のうらの鹽もかわ
かす

涙の色のくれなゐはわれらが中のまぐれにて秋の紅葉とひと／＼はおのが
ちり／＼いかなればたのむかけなくなりて、 ○六帖「たのむか
たなくと有家集今に同じ陰なくぞまさされる信明集には
亭子院うせさせ給へる又の年御はてに「ふるさとの梢
のもみぢ秋はて、おのがちり／＼なるがわびしき。六
帖「山風のふきのまに／＼紅葉ばもおのがちり／＼散

ぬべらなり【御一周過て退散するに秋になりたるなり】

とまる物とは花すき君なき庭にむれたちて空をまればはつかりの鳴わたりつよそにこそ見ゆ ○契沖云人はちりくゝにまかであがれて残る物とは植おかせ給ひし花すきこそこひまゐらするやうにむなしき空にむかひてまねかばわれらは初雁の如く鳴わたりてそれをよそにこそみめとなり鴈雲井にわたれば空をまねかばといふにつけてよそに見んと云も縁なり○眞淵案に物とは、物とはの略語なり前にも例有空をまねかばとは君が御魂の天にましませばいふか猶それまではあらじそらより初鴈といひて鳴わたりよそにみんはいせなどみづからなりここに縁をもつてつゞけたるを混じて解したがふべからずいせ物語「君が方にぞよると鳴なりもよるとの略此類にてとまる物との略なり

旋頭歌

【是は五七七を上五七七を下とする歌なりさて五七七と句をおけば終る事なし七七といへばとばのをはるは自然のとなり依て五七といひおこして即七といへるは終る也かくて又五七と起して七ととむる故に上をめぐらす歌をいひ濱成式に本をならぶ歌と書も同じ】

眞淵案に旋頭俳諧などは訓も有べし語證なければ今更いひがたしされども旋頭の意はかみをめぐらすなり上句春くればのべに先咲といひて又七文字にみれどあかぬ花といひはてたれば下句のとまりに似たりそれに又まひなしといふ五文字をいひおこして上句のごとくいへば頭をめぐらすの義なり濱成式に双本といへる是に同じ歌の本とは神樂などに本末といふ本は上句をいへりされば上句をならべる義なり頭にかへるより上句をならぶるなり眞淵今案に濱成式といふものたしかならぬ物なれば歌の下句をもと、おもへる人の作れるもゑるべからず其故は上句下句とも三十一字の歌の腰より以下をならべたるものなり式の心それをいふにやとも覺ゆそれはともかくもあれ今旋頭と有を以ていふに上句に結句をそへて又上句をいひおこし七文字にてとめたればかしらをめぐらすの心あきらかなり右にいふ神樂などに本といふは上句をいへば式の説ふかりとはいふなれども式の心得たがひもやといふのみ又はは上句も下句も同じ事より本とは上をいへばそれに下の句

のならばといふ心にてぞ有べき○契沖云旋頭歌の事眞名序の中に注せしがごとし赤人集及びみづね集の中に是をかうべをめぐらす歌とかけり奥儀抄に旋頭歌は上にかへるとよむなり昔にかへる義なりかるがゆゑに濱成式には此歌を双本と名付られ本にならぶといへばむかしに返る義に同じ此注はおぼつかなし旋頭の義はみつね集にかけるがごとくかみとよむとそれはかうべの心にして昔にかへる義にあらず上下各三句なれば六句の歌ともいふ故に上句を本とし下句末として末の句本にならぶによりてこそ双本とはいふをむかしにかへる義とはいかでないふべき○眞淵案に奥儀抄のむかしにかへると云はいかなる事にや此體萬葉に多し日本紀古事記等の歌皆これにて其後たえて今又有ものならばむかしにかへるとも云べきを昔此體のみ有にあらずこれらは萬葉などをよくまらぬ人の説にて此集をのみ見て思ひよりたるなり杜撰々々○契沖云又末の集に五七五七七と三十六字による歌あり萬葉並に此集拾遺等皆五七七五七七と三十八字によめり但萬葉第十六「彌彦の神のふもとにけふしかも鹿のふすらんかはのきぬきて角つきながら。此一首のみ五七七七七とよめりこ

れも字の数は同じければ三十六字によまれたるはおぼつかなし○眞淵案に古歌は變體多し此歌旋頭歌の體とせば「伊夜彦乃神乃布本今日良毛加鹿乃伏良武皮服著而角附奈我良。鹿の下を句とし伏良武ふしぬらんとよまば上に一字餘りのみなりされば五七七五七七の體をそむくにはあらずされども此體全く旋頭にも侍らす此上に能登國歌に「塔橋熊來乃夜良爾新羅斧墮入和之河毛何河毛何鳴爲會彌浮出流夜登將見和之。此歌も句法不旋頭して相似たり是らはその變體なり何といふことをまらずよりて旋頭歌といふ物は萬葉に多し今の歌の體なりまかるを今の一首をのみ物中の下の句とするはまらぬ人のことなり論にたらず

題しらす

よみ人すらす

（みづね集）
うらわたすなちかた人に物申われそのまに白くまけるは何の花ぞも（六帖）

○契沖曰うちわたすとは遠き所長き事にいへり日本紀仁徳天皇の御歌にも「うちわたすながはえなすとよませ給へり萬葉に「打わたす竹田の原になくたづの間なく時なく我戀らくは。後撰「打わたし長き心は八橋のくもでに思ふ事はたえせじ。よりにて打わたすおち方人と續けたり或抄に打過るを云と注せるはかなはず○眞

續萬葉論卷第十九

淵案にうちわたすとはをちかたつゞくのみ竹田とつづけたるも遠きはたかくといふを思へくはしくは冠辭考にいふ○契沖云物申すわれはわれもの申と云べきを打かへして書り物申は源氏には事をいひ出す詞也常にいふも然り仁徳紀「山城のつゞきの宮に物申云々。萬葉十六「石まろに我物申すと云々。眞淵案に此注然り○契沖云八雲御抄に是ははてに七字を添と俊賴口傳にいへりと注させ給へり去れば俊賴はわれそのここにわれを下句のはじめと心得られける去からず上にいふごとく其體萬葉に一首あれど今はわれを下へつらねては一句のつゞかで心得られぬなり○眞淵案にこも又去かり萬葉を見ぬ人の口傳などはいと人わらへなり其上われといふを下につけては歌の意もきこえず旋頭てふ名も不叶○契沖云或抄に三四の句を五字七字とよみてわがそのそこには我園なりそこは邊なりと注せるは誤なりいふにたらずそこは彼所とかけり此所をこことよむにむかへる詞なり○眞淵案に此契沖がいへるも然り此返しに「のべに先さくと有をこ、には園といふは贈答の意もたがひ又わがとよみては上に物申すといひ切てわがとは自らにやさらば混雜して詞聞えず人

をさして云ならば人をばながとかなれとかこそいへわがみづからなりかへすく去らぬ人の注とるべからず契沖曰をちかたなれば白くみゆるを梅とは去れど早くさけるに驚きあやしみて何の花ぞとふなり萬葉「沫雪かはだれにふるとみるまでにながらへちるは何の花ぞも○眞淵案梅の花とは何の證にいへるにや次の歌のべに先さくと有のみなるべし其のみをもつて云難し返し

春されば野べに先さくみれどあかね花まひなしに唯なるべき花名なれや
 ○契沖云此の歌も顯昭は三四の句を七字五字に心得られ定家卿は五字七字にならひ傳へておはしけるに顯注を見て花もいひなしのなど申歌は人のみし所にてもよみて侍りしにや今こそははづかしく侍れとか、れたりこれは「みよしの、花もいひなしのそらのかとわけ入みねににはふ白雲。此歌の事也彼卿の僻案抄に云花まひなしには花もいひなしにたゞなるべき花の名なれや花もいひなしにてこそあれ安らかにいかゞのらんといへるなり歌をかけるやう君てへばは君といへばなりけなばけぬべくはきえなばきえぬべくなり物にざりけるは物にぞありけるなりとあるは見給はぬさきの

製作故なりよき人はあやまちを知て改むる事を憚からぬを智なきものは謔に梗の實はならばなれ木は棕の木といふ風情にてふた、び過すあさましきことなり顯注にまひなしにはまひなひなしにといふ詞を略してまひといふなりまひなひとは思ふ事ありて物を心ざしにとらするをいふなり萬葉にいふ「あめにます月よみ男まひはせんこよひの長きいほ夜つきこそ。此歌は幣とかきて今本にはぬさはせんとよめりぬさたてまつらん夜長かれと云詞なり或本にはまひはせんと有まひなひたてまつらん夜長かれといふなり幣の字をばまひなひともよむなり今案まひの事萬葉にあまたよめり今ひかれたる歌も今の本にはまひはせんと點せりぬさはせんとある點は萬葉をよくみぬわろき點なりこれは梅の花とは去るらんをいとくさけるをほめんとてわざと見しらぬよしにとへるを返歌も春されば野べにさくとはいひながら梅と名のらすしてまひなしにたゞにはいふべき花の名なれやとはこれも梅をほむる心なり萬葉第八縣犬養娘依梅發思歌「今のごと心を常に思へらばまづ咲く花のつちにおちめやも。又まひなしは萬葉に多き語なり【萬十春問答「春去者先鳴鳥乃鶯之事

先立之君乎之將待」幣字有をもまひとよむべし一點ぬさと點せしは萬十七長歌に「手向之神二奴佐麻都里我許比能麻久云々。同反歌「多麻保許能美知能可未多知麻比波勢牟安我毛布伎美乎奈都可之美勢余。如是長歌にぬさまつりといひ反歌にまひはせんと云に幣字あればぬさとよむ例有と思ひたるべし然れども一筋によまざるには非ねど月よみ男の歌はまひはせんとよむべし右の歌の類皆まひといへり其上萬廿六 五月十一日左大臣橘卿宴右大辨丹比國人真人之宅歌三首「和我夜度爾佐家流奈豆之故麻比波勢牟山米波奈知流奈伊也乎知爾左家「麻比之都々伎美我於保世流奈豆之故我波奈乃未等波無伎美奈良奈久爾須不花時亦同これらみな此集の歌の體にて假字にまひとかければいひなし或はぬさなどいふは皆例にたがふなりさてまひとは幣禮の事なればなりいま幣字を書きてまひとよむはその物のかはりにきぬあやを報ゆることなりそれにまひと義訓せるなり或問まひなひといふに同じと皆いへり去かるにや眞淵云去かりされどもそのまひなひをまひとはいかでないといは、又今の世に去る人有べからず是はいとひめ事にこそその始は神代の巻ほのすそりのみこと弟のみこ

とへつかへ給ふ時のためし有其後は天子より物給はる時の謝禮に舞踏をなす是則まひ也悦にたへずして舞をどる也その謝禮に舞をどりをなして御禮を申なり左右左々といふ是則ひだり右へ舞のかたちを今もする也幾遍も悦體なり今の俗振舞といふも客を招て來るを悦で舞事也客も則まふなり異國にも手舞足踏を去らずと云もよろこびのあまり立をどるなり是眼前の事にて人の去らざる事なりよりて此花もたゞになのり云べき名にはあらず謝禮幣禮をなさずばなのらじと云に幣をかくしたるなり古歌はのべに先さくと云のみにて決て梅とはいひがたし又此歌も即旋頭歌なれば春されば一句のべに先さく二句みれどあかぬ花三句まひなしに四句たゞなるべき五句花の名なれや六句如是よむべし花まひなしにとよむは萬葉數百首の旋頭歌の例に違ひ即此集次の歌の例にも違ふよく古歌を見て知べし

賦しらす

(六帖) につせ川ふる河のべにふた本ある杉としをへて又もあひみんふたしと有杉みつね集には「はつせ川ふる川のべに年を経て二本有杉又もあひみんおもかはりせと有契沖云はつせ川ふる川のべとは常は泊瀬に別にふる川のべといふ所

く故に萬葉第一の長歌に「こもりくのはつせの川に舟うけて我ゆく川の河ぐまのやそくまおちすよろづたびかへりみしつ、玉はこの道行くらしあをによしならのみやこのさほ河にいゆきいたりてとよめり同第九大神大夫任長門守三輪河邊宴歌「み諸のや神のおばせる長谷川みをしたえすば我忘れめや。此三語は三輪山なり山をやがて神と云りおばせるは帯にせる也三輪にては三輪川といへど水上長谷なれば妹脊の山の中に落る吉の川とよめるに同じ風雅集夏從三位行家「みわ川の水せき入てやまとなるふるのわさ山はさなへとる也。是又古川をみわ川とよめる心上に同じ布留社の杉のとは日本紀第十五云「天皇詰之曰石上振之神相伐本殿未云々。萬葉第十「石上布留乃神杉神備而吾八更更戀爾相爾家留。同十一「石上振乃神杉神成戀母我更爲鳴。あまりにふりにければ精靈の出來て神となりける故神杉と昔より云るなるべし其木の跡にや今も二杉といひて謹みて祭所あるよし所のもの、申けるとて或人申きか、れば今の歌泊瀬川の末のふる川のべと云心に彼神杉をふたもの杉と布留の方にてよめるをかの杉も昔語となりてければ歌のおもむきをよく知人なく

有様に思へり今案泊瀬はふるくより名高き所なれば泊瀬河をやがてふるき川と思ふ心にかさねてふる川といへる歎延喜式出雲國造神賀詞にも「彼方乃古川席此方乃古川席といへる事有堀川院次郎百首兼昌が川の歌に「ふる川のとだえをわたる旅人のもすそに青くつけるうき草とよめるもふるき川なりふる川のべはふる川のほとりなりみよしの、大川のべといふがごとし二もと有杉とは泊瀬川のはとりに昔武隈の松の様に物ふりたる杉の二本たてるが有けるなるべし又もあひみんとは二本は夫婦に似たればその杉によせて戀のこゝろによめる歎此歌古歌の姿なれば只杉をほめていへるなるべし後の人さまくゝに取用たるは此歌にはあづくべからず源氏玉かつらに「ふた本の杉のたちどを尋ねずばふる川のべに君をみましや。これ長谷にまうで、今の歌によりてよめる也但木三名寄源其親「石上ふる川のべの柳陰めぐみもあへぬ春の色かな同社若よみ人しらす「いそのかみ古川のべのかきつばた春の日數はへだて來にけり。此歌ども勅撰の集にもいらす詞書も確に證とすべきほどには侍らねどもにいその上ふる川のべとつゞけたるに付ておもへば長谷川の末北にながれてならまでもつゞ

源氏にも上にひけるやうによめるにや同じ手習の巻に手習君「はかなくてよに古川のうき瀬には尋もゆかじ二本の杉。あま君「ふる川の杉のもとだち去らねども過にし人によそへてぞ見る。此二首は唯古川とよみたれば上に長谷川を古き川といふ心歎と申つる愚案たがへる歎後の人は石上ふる川のべとあるも今の歌を布留川の事なりと心得て取るにや是正義に叶ふべく覺え侍る〇眞淵案契沖いふ所よしされども引る萬葉の歌などによめるさま解とも違へる有れど大様杉は布留の神杉にてその川はつせ川をみなもとなればいもせの山の中に落るとよめるに同じふる川といはんとて泊瀬川と置るのみなり契沖が前の注にふるき川などいふはいと非なり二本を必夫婦といはでも二つ對如の義なれば又もあひみんといふべし題去らねば戀とも何とも去るべからず源氏玉かつらにはつせにいへるは發語によれるのみふるにてよめればとりたがへたりとおもふは本歌とる様をあまりに偏におもへり手習の巻にいへるも尼君はつせへまうづる時の事なればとれる事同じとかく是を活套とせる歌を以てはいふべからず萬葉第一又第九の歌などこそよき證なれ

つらゆき

(みつれ集)
 契沖云躬恒集に有にはまぐれの雨を雨にと有君がさす
 とはみ笠の山といはん料なり萬葉に「大君のみかさの
 山のみち葉はけふのまぐれに散か過なん」君がさる
 みかさの山にゐる雲のたてはつかる、戀もするかもな
 どよめり此歌の心は枕詞を下までかけてまぐれの雨も
 君が爲に紅葉の色を添てしみつけるとよめる歟とぞみ
 ゆるそめるはしめるといふに同じそむるといふにはか
 はれり家持集に「もみちばのまぐれとふればさすかさ
 のこき紅にまみぬべらなり○眞淵案に冠句を下にひ
 かする事この頃はやく侍りき雨といふは笠の縁無にあ
 らずまかれども契沖が説いりほかなり君が爲にそむる
 といふ心にはあらず萬葉に大君のみかさとも高くらの
 みかさともつゞけし例にて君といふにさのみか、はる
 事なし只雨に笠の縁あるを曲とせるなり又そめるをそ
 むるにはあらずしみつくなりといふはいかにぞやまみ
 もそみも同じ事を殊にそめといふめ文字も下知の詞を
 むるのむるも活字なりおのづからしみつくといはゞそ
 みにけるなりと歟いはざれば自然にかなはずかなしみ

といふを金染とも萬葉に書にてそむるはまむるなり契
 沖が例の引る歌になづめるもをかし又或抄には只五文
 字は枕詞なりとのみ注せるはたらず
 俳諧歌
 契沖云今本誦とあるは俳の字なるをなだらかなる草書
 の相似たれば誦となるべし俳は玉篋云「皮皆切難戯也。
 漢書曰「談笑類俳倡。日本紀に俳優をわざをきとよめり
 誦は玉篋云「市尾切誦謗也。音義共に大きに異也誦は玉
 篋云「胡皆切和也合也調也偶也或作誦。又云「徒聊切和
 合也大予切選也淳于髡優旃等戲言にとよせて時の助け
 となれる類なるべし與儀抄には史記漢書等を引て滑稽
 になすらへらる委は彼抄をみるべし八雲御抄にこれは
 いかなるを云にかあらんまさしきやうまの人なしなど
 とむづかしき事に注せさせ給へり是も彼御抄をひらき
 て知べし其後史記滑稽傳云「大史公天道恢々豈不大
 哉談言微中亦可解紛優孟多辯常以談笑諷諫優旃善
 爲「吟言「然合「大道「淳于髡滑稽多辯郭舍人發言陳「辭
 雖「不合「大道「然合「人主和悅「これ滑稽の大體也滑稽
 は且道に非れども妙義を述て時に用あり俳諧もこれに
 准らふべし佛法にもこれあり菩薩ありて戲笑をさきと

して人の心をよろこばしめて引て道にいたらしむすな
 はちこの戲笑は善權方便なり迷者のためには方便なれ
 ど菩薩の心は眞實にして此外に道あるとなしはゆる
 同事攝なり鎌足の戲言によりて入鹿が劍を解し故に天
 智天皇大事を遂させ給ひて皇基かたまりうねめが水を
 はじきかけてあさか山の歌をよみしかば葛城王のいか
 りたちまちにとけたるたぐひもまた此心なるべし又た
 だかくのみならずたはむれによみたる歌のよきをとれ
 り萬葉第十六に嗤咲黒色歌嗤咲瘦人歌など有此類なり
 詩云戲謔兮不爲虛兮といへり論語に孔子子游が治る武
 城に行給ひ弦歌の弊あるを聞てわらひて割鶏焉用牛刀
 との給へるもたはむれなり聖人だにありつる事なれば
 たれかより／＼たはむれの事なからん○眞淵案俳諧と
 つゞける文字はあらねどふるく吾朝廷にてさいへるな
 るべしまかれば戲語を云なり歌はすべてをさなくたは
 むれたる事多ながら詞のいとみやびたらぬをいふなり
 萬葉十六卷の歌多はこれに似たれどその比いまだ俳諧
 の名はなかりけるされば此二字をおけるといへどもひ
 とへにわざをきのごときあるをあけて合「大道」
 などまでにご、にいふべからず

梅の花みにこそきつれうぐひすのひとくくといひしむる
 顯注ひとくくとは鶯の鳴はてにきりごゑにまことに
 早く鳴こと有それは人くく／＼となく様にきこゆればか
 くよめり古き物語にかくぞみゆると云り契沖曰大和物
 語に「草深くあれたるやどに鶯のひとくと鳴やたれと
 かまたん。狀ふ心は鳥なりすべて人を恐る、をも云べ
 し又やどれる枝をらんするかと思ふにもあるべし○眞
 淵案に「我やは花に手にふれたる「鳴つる枝を宿は
 と、はゞなどもいへる例をおもへば見にこそきつれ花
 を折はせぬを人をいとひしも居ると云なるべし又鳥の
 こゑを聞なす事さま／＼なりきりごゑに鳴を人くく
 とも聞なしつべし契沖云此歌より深養父が「春のとな
 りとよめるまでは此中の四季の次第なり
 素性法師
 山吹の花いろるもぬしやたれとへどこたへすくちなしにして
 或抄云山吹のきぬは紅なり下染をくちなしにてすれば
 よせていへり衣を衣架にかけたるをみてよめるにや
 【式に山吹染はなし深きには紅多く入か、らば後の山
 吹てふに似るべしこの歌にはかの櫻色にといへること

く歌のとりなしに山吹のといへるなり】○契沖曰山吹のきぬくちなしにて下をそむればその名に付てとへどこたへずとはよめり後にいはぬ色とよむも此故なり六帖「くちなしのいろに衣をそめしよりいはで心に物をこそおもへ

藤原敏行朝臣

いくばくの田をつくればかほと、ぎすしてのたなを朝なくよぶ契沖云玄での田長は郭公の別名なりいくばくの田を作ればか郭公を顯昭曰玄での田長とは郭公の一名なりと古きものに玄るせり郭公は玄での山より來りて農をす、むるゆゑに玄での田長とはいへり其詞云過時不熟となくが郭公と聞ゆるなりと申す時過ばみのらじと鳴と云々但し玄での田をさを朝なくよぶと云は玄での田をさと別物の物と聞ゆいか、自らの名をよぶべき云々今いくばく郭公を冥途の鳥也といふ事十王經に見えたらば彼經信を取にたらざる物なりされどもいにしへより相傳へて歌にも玄かよみ來れり拾遺集にうみ奉りたるみこのなくなりて又の牟郭公を聞て伊勢「玄での山越てやきつる郭公戀しき人のうへ語らなんこれらなり然れば敏行の歌に玄での田をさをよぶといふは玄での

山より來りて農をす、めて鳴をよぶといへると心得べし成都記曰「杜宇亦曰杜王自天而降稱望帝好稼穡至今蜀人將農者必先祀杜王。格物論曰「杜鵑三四月間夜鳴達日田家俟其鳴與農事。萬葉第十四東歌に「信濃なるすがのあら野に郭公なく聲きけば時過にけり。此歌過にけりは時は來にけると云心也同集に「時のゆければ都となりぬとよめるも時のいたれば都となると云心なりほと、ぎすの鳴て農業をはげむべき時のきたりたりと云心也とよめりとみゆかれこれをおもひあはするにか、る心にて異名にはつけ侍りけるなるべし【鳴聲を玄での田をさと聞しなり】○眞淵案に異邦に詩などに蜀魂杜宇などいふは望帝のことよりいふ即望帝好稼穡といひ田家俟其鳴與農事などいふをとり合て吾朝にも郭公は黄泉の鳥といふなりされば萬葉の比には只與農事てふのみにて鳴聲聞ば時さりにけりといひしを其後玄での山は死者の行所といふより彼蜀魂なる事をかね稼穡を好み與農事等のことを添て玄での田をさと郭公をいふよりやがて農をす、むるより郭公朝なくよぶと聞ゆ玄かるを拾遺または物語などには則その異名をあらはしいへるなり又凡鳥の名は多くは聲にて名付たりそ

の聲を聞なす事さま／＼なる中に郭公はいと多し過時不熟不如歸などいふもその古事よりいひなせるを本聲とおもへるもいとをかし

いつしかとまたくこゝろをばぎにあけてあまのかほらをけふやわたらん

契沖云またくこゝろをとはいそぐこゝろなり【またく

は待を延べたるのみ多久約津なり速はむづかし】史記

晋世家云「惠公與女期三日至而女一日至何速也女其念

之。此速の字をまたけるとよめり心にまたがるといふ

ことをかねていそぎおもひし心をあらはすを河わたらん

んとて衣を麻までからぐるにそへたり毛詩云「深則厲

淺則揭注曰以衣涉水曰厲攝衣涉水曰揭。土佐日記にも

「何のあしかげにことづけてほやのつまのいすし

あはびをぞこゝろにもあらぬはぎにあけてみせけると

あれどこの一段すべて心えがたしあすこそわたるべき

をはやくくいそぐ心にけふよりまうけてやわたらんと

よめりことがきの下に注せしごとくあすのことをよま

ばけふやわたらんはけふやわたらんとおもひやるなり

たなばたの心をかりてよまばけふやわたらんと思ふな

り家持集に「我やどのえの木つきの木月ごとにつかひ

はやらん心またくな。是も心いられしていそぐなとい

ふ心なり○眞淵曰萬葉に文字を捨又はそへるといふは甚非なり眞淵案にまたくを心いられいそぐなどいふはたがはねども心をといふをもし有てはぎにあけてといふてにをはをもよく考へざる注なればたがひたり或抄をもあけて後にいふべし○或抄云いつしかと待心をほ

にあけてあまのかほらをけふやわたらんとおもひやり

てよめりはぎにあけてはいそぎあるく體なりはかまの

すそなどをかきあげたる心なり又云はぎにあけては河

わたらんとてはぎにあげをするによそへたりまたくは

待と云たとつと五音なり萬葉には文字をそへ文字をす

て讀り○萬葉に文字を捨又はそへるといふは非なり歌

などには助辭發語延言といふ物を以てかぎりたるなり

さなければ俗語となるといふことをあらぬなりや、も

すれば文字をそへたりすてたりと云は愚昧よりなり異

國にも助語辭といふ事の有は何によりて有といふ事を

玄らぬよりなり又ははぎにあけていそぎありく心なりと

いふも聞えず此歌即川をわたるなればわたらんとてな

りまたくは待にてたくを約むればつになるより待心を

もいふもいはれたれど是は見たく行たくかへりたくな

どいふたぐにて皆痛の意なり待いたくなり愁殺笑殺怨

痛など書るも甚愁といふこゝろなり是も甚待かねたる心をとり扱心ををもじの下を句とすべし心をはぎにあげてとははぎにあげるは脛にて衣かゝぐるなりそれは又心をとひつゝけては混雜して意わからず此乎もじは句としていつしかくゝと待かねて有心なるをあすまではえもたへじけふまひてはぎにあげてわたりゆかんとあすをけふにいたりて待わびたるらん織女の心をはかりてよめるなり契沖が速字をまたけりと訓は義訓なりまたがるといふは非なりまちがたく有とか待痛有といふなりまつにたへずありてなす速の義を以ていへりこゝよりかしこへふみまたがる心とおもへるは古歌を考らぬいやつこ心なりいふにたらず

題しらす

凡河内みつれ

むつこともまだつきなくに明ぬめりいつらは秋のながしてふ夜は契沖云むつことは昵言なり此歌は秋の夜も名のみなりけりとよめるに同じ心ながらいづらは秋のなごいへる所俳諧にて七夕後朝の心にこゝに載たるなり戀の歌ならば戀を下に類しておける中に「秋のゝに妻なき鹿」とよめる歌の前にあるべきなり

秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまゝ花も一時

僧正遍昭

遍昭集には「あなとくしと有〇契沖云なまめくは遊仙窟には婀娜とかけり日本紀に幸媚をまめきこふとよめりいせ物語には人なまめくといへるは此まめきと同じ詞にて今も其こゝろ歟あなかしがましはあまた物いふのみはいはずをみなへしのおほく立ならびて女の色をてらひ寵をあらそふに似たるをあなかしがまのさまや花とみゆるもたゞ一時の事ぞとをしふる心なり〇眞淵聞なまめくなまはなまきみたちなまゝくなども同じ事にていまだそれにてそれになりとげぬ様のことなり草木にていはゞいまだわかばのごとし今それをなまめくと、れるはいろめき媚妍の心なりわかき物は必何にてもいろめく物なりめきは春めきなどの類にて春になりて春氣色のみゆるをいふにてめは見と同じめくのは留に通じて見ゆるなり今めきといふはくに通じてはたらくなりいせ物語最媚有女明比といへり

よみ人しらす

秋くれば野邊にたほるゝをみなへしづれの人かつまで見るべき或抄云つまでは戯として手にて摘なり〇契沖云野べにたはるゝといひつればいづれの人かつまでみるべきとは人をつみておもふよしまらする心を摘にかねたるなり

毛詩曰「匪面命之言提其耳。源氏紅葉賀に「たちぬきたるかひなをとらへていといたうつみ給へればねたきものからえたへでわらひぬ。後拾遺に千載十八「人のあしをつむにてまらぬ我かたへふみおこせよと思ふなるべし。今の俗つみきるといふなり萬葉十七「餘呂豆代爾許己呂波刀氣底和我世古我都美之乎見都追志乃備加禰都母。女の戯てをるを男の心よせたるよしまてつめて戯る體を草花なれば摘とよせたり

秋露のはれてくればをみなへし花のすがたぞ見え隠れする歌の心あきらかなり

花と見てをらんとすればをみなへしうたゝあるさまの名にこそありけれ或抄に花と見て立よりをらんとすれば女のうたてしく有さまの名にてありけるとなりうたてといふ心なり女によそへて轉變ある様の名となり〇契沖曰日本紀に奇偉をうたてあるとよめりてたとと五音通じてうたてあるなり亦古事記云「爾明旦日出之時忍爾王以平心隨

安康卷

乘御馬到立大長谷王假宮之傍而詔其大長谷王子之御伴

人未嘗座早可白也夜既曙訖可幸獵庭乃進馬出行爾侍

其大長谷王之御所人等白宇多豆物云王子宇多豆三故應慎亦宜堅御身云々貫之集にありとほしの神をいふ所に

「とし比やしるもなく去るしも見えねどうたてある神なり。以上心かよふべし花やかなりと見て立よりてをらんとすればたけもたかく枝もなくひろごりて奇偉なるすがたにてをみなへしといふは只名のみなりと云にや新萬にうたてを別様とか、れたるも奇偉の心歟或説にうたてあるさまはあまりあるさまなりとて後拾遺に「思ふとなけれどぬるゝわが袖はうたゝある人の萩の露かなといふをひけりまことに此後拾遺の歌はさもきこゆれどそれにては俳諧の心なく又外にあまりあるさまとよめる例なき歟後の歌をもて昔を證すまじきも有べし〇眞淵案萬十二「何時奈毛不戀有登者雖不有得田直比來戀之繁母。これら皆うたて同じくして花と見て折んとすればちかくよりてみれば轉いづれにみても女のごとき花なれば名によくかなへりといふにて其もと古事記上に轉をうたゝありけると訓しなり

寛平御時后宮の歌合歌

在原棟梁

契沖云菅萬には第四句「つゞりさせとてと有顯昭には春はつゞりさせかゝらはひろはんとなく故かくよむと

いへり古物には蜚をばさせと云それにつきてつゞりさせとはつゞくる也蜚のつゞりさせとなくにはあらぬにや【真淵案蟋蟀は萬葉にはかうろぎとよむべきなり諸成案に蟋蟀の事は萬葉考又百人一首初學又此集秋の部に既にはしく後の考有されどこ、は其鳴さまをもよみたり猶許して清書の時取捨すべしよりて此考真淵のいまだしき折の考ながら其まゝにてこ、にかけり○真淵又考に蟋蟀は萬葉にはかうろぎと訓べき也然るにかくも有は又名をきりつゞすと云成べし俗に此虫はかたさせすさせと鳴と云といへり玄か聞なせしと古よりの事にてつゞれさせてふきりつゞすとは云なるべし】又後拾遺序にも「秋の虫のさせるふしなしとかけるは此故也と申たり今案に又菅萬に「秋風の吹立ぬればきりぎりすおのがつゞりとこのはをぞさす。家持家集「唐衣立山の山にあやしくもつゞりさせてふきりつゞすかな。同「きりつゞす我きぬつゞれ侘人の宿も秋風よきす吹なり。同「きりつゞすつゞりさせとは鳴をれどむらさぬもたる我は聞いれず。是らを引合せてみるにきりつゞすのつゞりさせとなくに非ぬなりをのがつゞりとこのはをぞさすといひ又わがきぬつゞれとのみいひ

てともさせといはざればふるきものも後拾遺序もあやまれるなり○真淵案此論とかく決しがたし家持集は偽書なれどもおのづからふるき歌もまじれば取捨して證とすべしされどもさせといはねばとてさせといふを一偏に誤りともいふべからず本のはをぞさすと新萬に有もさせといふ名よりいひなしたるとみゆれば一證ともすべし玄かれどもきりつゞすと鳴しこゑを聞きより切々は即つゞりのごとしつゞりなればさせともいふ歟させといふ名によりてつゞりといひかけ又きりつゞすといふ歟その前後輕重去りがたく侍るその中にもとにて或人はつゞりさせと鳴とも聞なしつらむ歟今案に一虫二名にてさせともきりつゞすともいひしをつゞりといふ詞をいひそへたりとみえたり
あす春たんとしける日となりの家のかたより風の雪を吹こしける
を見てそのとなりへよみてつかはしける 清原のふかやぶ
冬ながら春のとなりのちかければ中垣より花はちりける
真淵案冬ながらといふ正月の節あすた、んとしけるなるべし○契沖云六帖にははての句「花はちりけりと有拾遺集雜秋に西なる隣にすみてかく近となり有ける

事などいひおこせて三統元夏式部大輔「梅の花匂ひのふかく見えつるは春のとなりのちかきなりけり。返し貫之「梅も皆春近しとて咲物を待時もなき我やなになる。雜秋は冬をかねたり貫之の家にて東は春の方なれば其心をあらはさん爲に詞書に西なるとなりに住てとか、れたり六帖夏のはて「こよひしも稻葉の露の玉しくは秋のとなりになればなりけり

照しらす

よみ人しらす

いそのかみふりにしこひのかみさびてたるに我はいぞねかれつる契沖云拾遺に二たび入たるには落句「ねぎぞかねつるとして作者藤原忠房朝臣と有いそのかみはふりにし戀とつゞけんためながら神さびてはこれを受けたり萬葉にはふりたる事を神さぶと云り物のふるきは精靈有てたる故にその心にいへりふりにしこひの神のごとくたるゆゑにねられぬと云り【わが戀の久しくなりて化てた、るといへり神さび神ふりにて神備ともいふさびはず、むなり神の御心あしき方にあらびすさびて其所のある間をいふ又轉じてそれよりふりたる事にもいふくはしくは萬葉考卷一にいへり契沖がふる事をいふといふはくはしからず】後のことなれど山谷が詩に夢不

到漢東茗椀乃爲祟と作れり俗にもくひ物にあてらる、などをもち、るといへり説文に云「祟神禍也徐云禍者人之所召神因而討之祟者神自出之以警之者師古云禍咎也徵所以示人也。六帖「ゆふかけていのる御室の神さびてた、るにしあればねぎぞかねつる。同「但馬糸のよれどもあはぬ思ひをば何のた、りに付てはらはん。これより宵のまにいで、入ぬる三日月のと云までは戀なり○真淵案に契沖が注さだかならず此歌は三重にいふべし惣の心は年へておもひこふより夜もねがてわびしきなりその久しく戀ることをふりにし戀といひふりにしをいはんとていそのかみと置それより神さびてといひふるき物は精靈ありてた、ることの侍ればふりにし戀の神ふりて祟にといひた、りて身をなやますれば夜もねかねぬるといふされども又た、るを立るといひかけ立てあるにはねぬことわりなれば立て有にねかぬると語の勢ひをなせり畢竟た、るといはんとて上よりつゞけた、るはいねぬと云べき爲なり

枕よりあとも恋のせめくればせんかたなみぞとこなかになる契沖云跡枕より戀のせむればせん方なく床中に圍れぬて苦しむ心也うつぼ物語「宿を出てあとも枕も定めぬ

にふみやるかたもそこはかとなし。狭衣「人まらばけちもまづべき思ひさへあと枕よりせむるころかな。重之集「いそは皆鹽満ぬればにほ鳥の波の中にぞよるはねぬべき○眞淵案或抄も契沖が説も同じく聞えたれされども戀思心におもひせまれる體をいふなり

人の也 方也 (人の云を也) (立とも也) (居とも也) (何方とも也) 戀しきかかたし かた こそあり ときけ 立て れ居 れとも なき 心 ち する 心 地 哉 (語本) 此方 聞 ゆ 或抄にかたちあるものは其形ち有が人の戀しきが形は有かとしてたてれをれともなき心地にて有と也眞淵案に此注は歌のてにをはを捨て自なすなり有ときけといふも方ありと聞てたてりをれどもなきこ、ちするとなり眞淵案にその方を有と聞てその方にむかひてをれど、いふ心の注にや只たてれをれともとのみ有てみのぞひとも向ともいはざればさはいひがたしその土こひしきがといふことばをよくしらする注なり契沖云これにふたつの様有るべし一つはか哉にてこひしきかなと一句をたて、下はそれをことわるにやこひしきかたも有りこひしからぬかたもありとこそきけなどかたてれどもをれどもこひしくてこひしからぬ方のなき心ちはするぞとよめるにや二ツにはこひしき方とつゞけてこひ

しき人の方はそなたときだまりて有とこそきけとて下はさきと同じ心にや萬葉に「かなしきか駒はたぐともとよめるはかなしと思ふ人なり」眞淵後案に戀しきは萬葉六末「佐なづらのをかに粟まき可奈之伎我こまは多具ともあはそともはじ。此かなしきかは心同じ戀しと思ふ人歟といふに同じ集中にかなしき妹かともよめり」○眞淵案にかたは方なり戀しき君が方に我るを聞侍れど君がたちてありてあれども戀しさにまどうて君がなき心ちのするとなりその方にぬれどもあふべきよしのなくてかくいふなるべしわが居るを聞といへるもまどふより人のことの如くいふなるべし方は形をもかねたり又我立どもをれども也戀しき君が方角の有と聞たれどもまどふ心より方角もなき心地して何方ともわかす思ふと也○眞淵案にこは「あやめもしらぬ戀もする哉」心空なりなどいふ様の事を思へ萬葉に「かなしきがこまはたぐともと有は悲しと思ふ人がなりこ、によれば今も戀しき人が方も云々といふなりたてれをれどもは萬五戀男子名古日歌長「敷多倍乃登許能邊佐良受立禮杆毛居禮杆毛登母爾戲禮云々

眞淵案に或抄にありぬべきやといふは似たる事にて非なり契沖曰逢見ずしてさてもあらる、やとかつは心みがてらに戯にあひみねば戯れにくきまで戀しくてあはずしてさてもあらぬ心なりたとへば木をりなる人いたはむれか、りてうちとけんとすれば心も得ずしてはらだ、しくなるやうなるをたはむれにくきといふなり源氏物語帯木に「いたくつな引てみせし間にいといたく思ひなげきてはかなく成侍りにしかばたはむれにくくなん覺え侍し。彼物語に多く書り躬恒集「君みではありぬべしやとこ、ろみにた、まくもうきから錦哉。後拾遺「相見では有ぬべしやと心みるほどはくるしきものにぞ有ける。是ら今の歌をふみてよめりと覺ゆみ、なしの山のくらなしてしがむおひの色のドぞめにせん眞淵案末の句はおも緋といふなり緋の下染にとりさて緋はあかけれど字音なれば火色をいふと見るべし火色は紅の類にて禁色なり又式を考るに紅の類は支子は不加してかへりて支子染には紅花の入なりこ、はた、歌なれば下染といひしを知べし

前本 足引の山田のそほつおのれさへ我をほしてふうればしきこと契沖曰そほつとは田を鳥などにはませじとておどろかしにたてる人がたなりいなばの露にそぼちてたてればそほつとは名付るにやさればあやしの人のかすならぬ身のといはんとてそほつによそへたるなりそれさへ我にあはまほしといふなんうれへおぼゆるとよめるなりあやしき人にけさうせられてよめる歌なるべし八雲御抄に我を烏帽子せんといふことと注させ給へるいかが思召しけるにか覺束なし萬葉「山しろのくせのわくごがほしと云われあふさわに我をほしといふ山城のくせ。後撰「いとほる、身をうれはしみいつしかと飛鳥川をも頼むべらなり。催馬樂に云「山しろのこまのわたりのうり作りわれほしてふ云々。毛詩卷耳曰「陟彼岵矣我馬病矣我僕痛矣云何 吁 矣○眞淵案此注歌の心は大かたさるべし神樂篠波末歌に「あし原田のいなつき蟹のやおのれさへよめをえずとてやさ、げてはおろしやおろしてはさ、げやさ、げてかひなげをするや。後撰秋に二人の男に物いひける女の一人につきてければいま一人が遣しける「あけくらし守るたのみをかきせつ、袂そほつ身とぞなりぬる。返し「心もておふる山田のひづちはは君まもらねどかる人もなし。又同部いなかの家にまかりて戸をた、きけれどあけすなりに

ければ田のほとりにかへるの鳴を聞て「あし引の山田のそほづ打佐て獨かへるのねをのみぞ鳴。或抄云山階寺の玄寶僧都世をのがれて備中國にゆきて山田をもるわざをして民どもにまたがひておはしける故に田を守る人をそほづといひならはせりと云又或曰僧都昔曾字頭なり是古來ソホツと云又玄寶屬僧官國史無所見昔者不治職無用不賜僧官云々只響鹿身而袖のソボツと添たり此説袖のそほづはあしけれど難玄寶説は可なり【諸成案に此注いひとけざる歎此外に在滿が説も有けれど皆そほづの説同し考るに眞淵の考にそほづはあしとのみいひて其説なしひかれし歌もみな後撰の歌にて此集よりのちなり眞淵自の説はなし或抄已下在滿が考も消して契沖説のみをのこされたり猶考べし】

きのめのと

ふじのねのならぬおもしひにもえはもえ神だにけたぬむなしけむりを或抄にふじのねのもゆる事なく烟の立をわが戀のいつともなきによせふじのねをおもひならぬ事にいひなすなり神もえ我戀にこがる、烟をけち給はぬといふ云々眞淵案此抄例ながらいと大にあやまれり是はふじのねの常にもえて烟のたつを神だにけちたまはねば我なら

をならぬと續けたるなり「ふるのわさだのほには不出といふつゞけの如し句のつゞきのみにて意は隔句と云るべし落句の字はかへる詞にあらず助辭のごとくなりぞといふに同じ古への風なりむなしけふりとはならぬおもひの空しけむりをふじの山の烟によそふれば下に置なり契沖又曰是は後撰に平貞文「我のみやもえてきえなんよと、もに思ひもならぬふじのねのごと。返しきのめのと「ふじのねのもえわたるともいかせんけちこそあらね水ならぬ身はと有贈答を思ふに同じ時のかへしにてもえはもえねとは平仲にいへるにやさらずば自らふて、いへる歎眞淵案に後撰の歌よりも少し古く聞え侍るその上後撰の兩首此集の歌によりてよめるに似たりかたぐゝ覺束なしならぬおもひにもえはもえよはたとへ我をこひてならずとておもひにもえはもえよふじのねさへけたぬをと貞文へいひ遣しつる返事に又貞文「我のみやもえてきえなんよとよめるに二たびきのめのとが返して「ふじのねのもえわたるともいかせんとよめるを始の歌はよくと、のひたれば撰てのせたるか契沖は同じ時二首返しにいひしにやといへども貞文が歌は今の歌にすがりたりと見ゆれば二首返

ぬおもひにもえはもえねとよそへていへり猶後々いふべし【眞淵今案にこをちかくとくはふじのねの神だにけさぬ烟なればわがならぬ思ひにもえはもえよと云をかくつゞけたり隔句體なり】序にふじの烟によそへて人をこひといふは此歌をいへり或抄のごとくはよそへと云べからず契沖云ふじのねのならぬ思ひとは「ちはやぶる神もおもひのあればこそ世をへてふじの山も、ゆらめとよめるごとく思ふ事なりさらばもゆまじきに昔より今にいたるまでもゆればつひにおもひのならぬと云らるゝゆゑによそへていへり淺間の神だにむなしきおもひの烟をばえけちたまはねばまして人にてはいかでけつべきなればもえなばもえよと云なり眞淵案にならぬおもひとは合條に婚に成不成の事ありて成ならずといふは戀の詞の古語なり左氏襄十二年傳云「齊侯許昏王使陰里結之杜注曰結成也。歌の心は我はならぬおもひにもえはもえよふじのねのとはにもゆるを神だにけちたまはねば人としていかでけたんといふなり云かるを五文字よりあしく解して或抄はあやまれり第一句は隔句にて神だにけたぬとつゞくべしさて五文字よりつゞけたるは富士には鳴澤有て常になるよりなる

しにのみしには有ざるべしその上同じごとく歌を二首は返しすべからずと覺ゆ若又後撰の贈答此歌によく似たれば此歌は前の順にてよみ人まらざるを好事の者後撰によりてきのめのと、加筆せるにやとにかくに歌がら少たがひて聞ゆきのめのととは定家卿後撰作者の考に云陽成院の乳母云々【此集の上にある紀のめのも是なるべし】猶序文を考るに此歌をもていへるはふじのけむりによそへて人をこひといへり此前後皆集中の部を分てとれるにみなよみ人まらざるの歌なりたまゝとれるにいたりて一時をくねるといふは僧正遍昭の作をとれるなるべしよりておもふに此きのめのと、いふおぼつかなし

きのありとも

あひ見まくほしはかすなく有ながら人につきなみまどひこそせめ契沖云あひみまくほしく思ふ心はかすかぎりなく有ながら人にあふべきつきのなきにおもひまどふといふ心を星と月によせてよめりつきなしとはことわざにも云事なり便宜なきなり遊仙窟に使をつぎくしとよめり「君にのみあはまくほしの夕ぐれは空にみちぬるわが心哉「かぞふれば空なる星もまゐるものを何をつらさ

の數にとらまし○眞淵案契沖が云所よしほしありとも
月無ばくらくしてまどふことばかりなりそれをあふべ
きよしをなみまどふといへりつきなみをおもふに枕草
子五に「このまたららびは手づからつみつるといへば
いかで女官などの様につきなみてはあらんなどいへば
とりおろして例のはひふし道にならばせ玉へるおまへた
ちなればとて云々。此注著ツナ並ナリなり女官などの臺盤につ
きならびてくふやうにはいかでかあらん

小野 小町

人にあはんつきのなきにはおもひおきてむればしり火に心やけなり
契沖云願注には月のなき夜はとありおもひおきてとは
つきなき事をおきてよりおもひ置といふにおきわたる
をそへたりむねはしりとはむねのさわぐをば走といふ
なりそれを走火にそへて心やくとはよめり清少納言に
びんなき所にて人に物を云けるにむねのいみじくはし
りけるなどかくは有と云けるいらへに「あふ坂はむね
のみつねにはしり井のみつくる人やあらんと思へば。
又さわがしき物はしり火ともかけり源氏夕霧に「むね
はしりていかでとりてしがなと御息所の御文なめり何
事有りつらんとめもあはず思ひふし給へり。浮舟に「め

もとあやしく心はしりのするかな夢もさわがしとの給
はせたり云々。右二首つきのなきといふ事は月なきに
よせたる心を種類として連ねたり○眞淵案につきのな
きよはと有かた然るべしよとよくあやまるなりむ
ねはしるは契沖が注よし「眞淵案に火のはね飛をはし
り火といふ又むねのとろくをむねはしるといふ今む
ねさわぎといふに同じ」おもひおきてをおもひ置とは
いかゞ侍らん愚案には思起てを火のおこるにそへたる
べし即おきのゐてなどいふはおこしずみの事になるな
り心のもえて不寐して居るといふをまはしていへり

寛平御時后宮の歌合のうた

藤原 興風

契沖云新萬には第二句「立出るのべ」と有若菜にもな
り見てしがなとは若き人をば人のめづれば老たる身に
ていへり摘は身をつむにそへたるべし「霞立かすがの
のべのわかなにもなり見てしがな人もつむやと。是も
とは同じ歌にや是より下三首春の戀を種類とす○眞淵
身をつむにそへたるべしとはいかゞつむとは人も取愛
するやといふべきをわかなによせてつむと云べし

題しらす

よみ人しらす

思へども猶うとまれぬ春霞がいらぬ山のあらじとおしへば
契沖云世のことわざにもあれこなたあなたかけて
一筋ならぬをば物にかゝると云さればあなたなる人の
心かろくこなたなる人にいひかゝつらふを霞の山ごと
にかゝるによせておもはぬにはあらねどたのもしから
ぬ方のうとく思はるゝとなり唯山に霞のかゝるといふ
よりはかゝりありく心にて俳諧なり清少納言にも「け
んざなどの方はいとくるしげなりみたけくまのかゝら
ぬ山なくありくほどにおそろしきめも見。拾遺雜戀い
づくとも所さだめぬ白雲のかゝらぬ山はあらじと思
ふ。いせ物語「ほとゝぎすなが鳴く里のあまたあれば
猶うとまれぬ思ふものから

春の野のまげき草葉のつまこひに思ひたつきじのほろゝとぞなく
契沖曰六帖には此歌を鹿の題にいられて下句次のよしひ
とが歌と同じく有は不審の事なり願注きじの妻こふる
よしをよまんとて春の野のまげき草葉妻こひとはよめ
るなり或人は春の野のまげき草葉は若草なりわか草は
つまをいふさてやがて草の葉のつまと續けたるなりと
申たれどあまりにや萬葉には「春の野にあさるきゝす
のつま戀におのがあたりを人にまれつゝともよめりき

じはけいゝとなくほろゝとは羽をうつ音とぞ申せど
人の同じくけいゝほろゝといひつゞけて侍ればほろ
ゝと鳴くとよめらんもたがひ侍らじ今いはゝ此俳諧の
中に四季戀雜をわかちたるに心をつけず雉子の上との
み見られて侍りけりまげき草葉にはまきじによせてよ
める戀の歌なれば妻戀のまげきこゝろをまげき草葉に
とはよせたりほろゝとぞ鳴くはまきじの聲によせてほろ
ほろとなみだのこぼるゝをいへるなり行基菩薩の御歌
玉葉「山鳥のほろゝと鳴くこゝろさけば父かとぞおも
ふ母かとぞおもふ。又夫木抄第五家集繪に野邊に雉子
のたてるところ和泉式部「かりの世とおもふなるべし
春の野べのあさたつきゝすほろゝとぞ鳴く○眞淵案る
に羽にほろゝといふありそれをうちたゝきてなくより即
ほろとなくともいふなりまきじといふ名はけんと鳴くこ
ゝろをもていふけんはまきじときこゆるなりさて歌のこゝ
ろは契沖がいへるごとし戀のうたなればつま戀のまげ
きといはんがために草葉をいひ萬葉には夏の草木を必
まげきてふことにいへれば春をいひまたまきじも春一し
ほつまこふことにいふよりなり草のつまとは若草の縁
にいふは古歌まらぬ説なり草にはいづれにてもつまは

しのおればいふなりさてこの歌戀なれば泪のほろ／＼とおちて泣涕するをきじのほろうちて鳴くにたとへたれば必きじの鳴聲といはん爲にてさても縁となるなり又行基の歌とてあるは行基歌學あるさたもなしみだりに信じていふことは、にとるにたらず夫木の歌も首尾しても聞えねばおぼつかなし

きのよし人（紀淑人）

秋の野に妻なき鹿のとしを経てなぞわがこひのかひよとぞ鳴契沖云六帖には題鹿にて發句「秋山にと云第四句」なぞやいきてのと有て作者伊勢也顯注にはなぞ我戀のかひよとなくとはなぞはなど、いふ詞なり古くは此詞を多くよめり此ころはなど、よみあへりかひよとはかひある心なりされば秋の、に年を経て妻なき鹿は我戀かひありとはいかになくぞと鹿の音を難するなりかひなしとこそなくべけれと云なり但打おもふはかひよとはなくとあらば心得あるべきにとぞ鳴といへる詞少しまざるれどふるき詞なり如是よめる事多かりかやうにおもふもおろかなる心なるべしとぞ鳴とならではいはれぬ事も侍らんふるき詞を今の世の心にてはからひがたきなり今案に是も寄鹿戀の心なり年を経て戀しゑるし

なければわが戀のかひは何ぞよといひて鳴を鹿のかひよと鳴によせたり次下に夏の歌あれども是は上の雜によする歌に一類し春秋と續けて次第せるなり「ぬれぎぬをほすさをしかの聲きけばいつかひよとぞ鳴わたりける。此歌のてにをほも又今の歌の如し今にはかなひがたし○眞淵案に或抄の説も惣じて顯注をうけたればいふにたらず契沖が説は可なり多はたがはずされども諸抄と甚たがへりよしいはざれば人老りがたかるべし先なぞといふを顯注になど、釋せしは所によりてさもあれど此歌は不叶是人老れぬおもひやなぞと、いふ又俗になぞ／＼といふ物をかくるに同じ詞にて何ぞいづれぞといふ詞なりかひよとは鹿によせればかれが聲をもてかひよとぞなくとはいへり意は年を経てとへども妹はわがつまともならぬを猶なきくるしむになにかひぞあるやかひもなきおもひを我はするといふなり諸抄のごとく鹿とのみいはゞ我戀といふ詞少しおだやかならずその上前後皆戀なるを此二首のみ詠物を篇集せんや惣て此集の篇皆心あることを古人一人も見知る人なきは何ぞや契沖東萬呂を用ふるにたらず東萬呂契沖を用ふるにあらねどおのづから眼あればあひかな

へり

み っ れ

契沖云ひとへにうすき夏ころしなればよりなん物にやはあらぬのほのひとへにうすき夏ころしなればよりなん物にやはあらぬの契沖云ひとへにうすきとは夏衣によせて人のこころのうすきをいへりなればよりなん物にやはあらぬとはよるはきぬのやぶれがたになる也和名抄云廣韻云紕反漢布一云與流緇欲壞也たてぬきのかなたこなたによる心なるべし下の句はこの心あるべし夏衣はうすき故にてはやくなれてよるものなれば人心のあだにてうすきをたよりになれよりやすかるべしといへるにやまた夏衣のごとくうすき心なればなれたらばやがて衣のよることくいとくうすらぐべき中也といふにや拾遺「夏衣うすきながらぞたのまる、ひとへなるしも身に近ければ【眞淵案今は人心のうすくあれどかくてもなれゆかば末には心もわれによりなんといふをそへたり】○眞淵案に此釋非なり先上は夏衣はうす物にて身になるればはやくよりまどふ物なり今人の心のひたすらにわれにうすく侍るともかくてもなれむつれてあらば終には我に依ざらん物にやはある必なれたらば終には我かたに心よすべしといふなり萬十六仙女の竹取翁に和する歌

九首の中六首は「我藻蔭依よみて一首は「春之野乃下草靡我藻依丹種水因將友之隨意。如是よるといふは其人に心も身さへよるなり今は人が我によりなんと讀り

たゞみれ

かくれぬのまたよりおふるぬなほのぬなほたいじくるないといふ契沖云六帖には胸句「そこより生ると有かくれぬの下よりといへるに忍び／＼の心をふくめりぬなほをうけてもろともねぬ君が名はよもた、じせめてはわがはやりにかよひくるをだにいとほかよはせよといへるなり藻をぬなほといふは沼繩の心なり沼におひて細のごとくなる故の名なりぬなほと云は根芹といふが如し繩はくるものなればくるないとひそとよせたり六帖「あだなりと名にはいはれの池なれば人のぬなほ立にざりける

よみ人まらす

ことならば思はずとやはいひはてぬなぞよの玉だすきなる顯注に玉だすきとはかけたる事にいひよせたり中々に思はずといひきらばよかるべきをかけたると云也萬に「たまたすきかけねばくるしかけたればつぎて見まくのほしき君かも。拾遺「中々にいひは、なたで信濃な

るさそぢのはしのかけたるやなぞ

おしふてふ人の心のくまことにならかくれつゝみるよしもがな
次の歌をもてみるにおもふといへど猶おぼつかなく有
れば心のくまにかくれて其是非を見たきとなり【さの
みはいかにあらず】くまは山阿河曲路隈などによせ
たり伊勢物語「老のふ山老のびて通ふ道もがな人の心
のおくも見るべく。契沖が説も大かた同じ

おしへどもおしほすとのみいふなればいなやおしほしおしふかひなし
六帖には第四句「今はおもはじと有

我をのみおしふといはるあるべきをいでや心は大ぬきにして
契沖云願注には我を君と書ていでやをばいなやになし
て上の歌にもいなやおもはじとよめりと注せらる有べ
きをとはさても有べきをといふ也いでや心はおほぬさ
にしては上に引手あまたとよめる同じ心を心のおほき
につゞけたり萬葉の数の多きに大寸とあまたかけり

【大麻江次第大祓の條に引事有○いでやは心多きをつ
よくとり出しひ起すなり】○或抄に此いでやはさて
もといふ心なり是といふ心も有此歌かけてといふ心な
り○眞淵案にいでやにかけて又は是さてもなどの心い
かでか有べき語も例も通せぬをおのれが心にまかせて

おもはざらなん思ひまゐるべく。同「思へども相もおもは
ずおもふ時おもふ人をやおもはざりけん。新古「うらみ
しなおもへば人につらかりし此世ながらのむくいなり
けりとよめるはこれをおもへるなるべし

ふかやぶ一本よみ
人まらす

おしひけん人をぞとにおしほしまさしやむくいなかりけりやは
契沖云今わがおもふ人の又相おもはぬとつらき人にあ
ひて昔のことをくゆる歌なり

よみ人まらす

出てゆかん人をとめんよしなきにとなりいかたにはなほひぬかな
契沖云猿丸集には腰句「方もなし。尾句「はなもひぬ
かもと有願昭の本には發句「いで、いなんと有て注に
この歌の心は事の始物の前に鼻ひつれば惡敷事にて有
にや或書に人のなに事をも思ひくはだつるに鼻ひつれ
ば不叶といへり又年始に鼻ひて千萬歳かなといふもは
なひるがわるき事であればよきさまにねがひなす也は
らへする折鼻ひるなといふ此心なり又人の家を出る時
おのづからわるき物などに逢ぬればくすしき人はいみ
む事にて侍りやとむべきかたもなきに隣のかたに鼻

古語を解なり古語は私をいれずして古語の例にて解べ
しいでやは前にいふ如くいづかたにても詞をおこして
いらふる語にて日本紀に乞と云字書るにて何方もよく
通る事なり此歌有べきにとは萬葉には死せざる事を有
といふその如く我をのみおもふといはゞ堪ても命も有
べきにいでその方の心は大ぬきのごとくかたぐゝに引
手あまたなれば今は命も絶ぬべしと云ほどの意也又此
前後の歌をみるに上の歌はいなやおもはじおもふかひ
なし次下の歌は我をおもふ人をおもはぬといふとも
わが人をおもはじおもはぬといふ中間に入れば有べ
きにといふは我のみ君がおもふといはゞ我も相おも
ひて有べきにいで君が心は大ぬきのごとくかたぐゝに
おもひわくれば我も君をおもふ事あらじといふなるべ
しされば願注に有いなや心はといふも聞えたりさても
いなやは私詞心は君が心なり

われをおしふ人をおしほむくいにやわがおしふ人のわれをおしほぬ
契沖云公任卿の和歌九品の中にも此歌を出してすこし
おもふ所あるなりといへり【はいかにあらず】い
なやおもはじといへると二首はことさらに同じ詞をか
かねてよめる歌なり六帖「思ふ人を思はぬ人の思ふ人

ひる人のあれかしとよめるといはれたり萬葉集にはな
ひつれば待人來るとみゆる事有是は別事也萬葉に「ま
ゆねかきはなひ紐とけまつらんやいつしかみんと思ふ
わざもこ。同「うちなびき鼻をぞひつる劔太刀身にそふ
妹が思ひけらしも。契沖又今案詩曰「寤言不寐願言則嚏
注云我甚憂悼不能寐汝思我心如是嚏比抑風。終風篇詩
萬葉と同じ心也袖中抄云「四分律云時世尊噓諸比丘呪
願言長壽時有居士噓乃禮拜比丘佛令比丘咒願言長壽今
案今俗正月元日若早且嚏即稱曰千秋萬歲急々如律令是
緣也何只在元日哉尋常禱之○眞淵案かゝる諺はさま
ぐにいひ來れば歌によりて義を云べし或抄にいで、
ゆかん人をとめんとするよしのなければいかにせん
とおもふに隣に鼻ひよかしとおもへどそれさへひぬと
なり出行するに人のなをひればいむことにてゆかぬ
とふるきものがたりには有陰陽道には九足八面鬼かへれ
ととなふ

紅にそめしこゝろもたのまれす人をあくにはうつるてふなり
或抄に人をふかくおもひそめて有しかど今はそれもた
のまれず人をあくにはうつるふといへば云々○眞淵案
に此注にわが人をあくとおもへり甚非也そめし心は人

のわれをおもひし心也人をあくとは惣じての事をいひてわがあかる、時をいへり次の篇歌にても見るべし○契沖曰六帖には「そめし衣もといひ」人をあくにしかへると思へばと有紅にそめし心といへるは深く思ひしむるを紅の衣によせたりあくは灰汁也其を他によせたり源氏末摘花に「色こき花とみしかどもなど書けがし給ふ。こ、に河海抄にひける歌「紅の色こき花と見しかども人をあくにはうつるてふなり。拾遺限なく思ひそめてし紅の人をあくにぞかへらざりける。是今の歌のよき返しになりぬべき歌なり○眞淵案に六帖に染し衣とあるは非なるべし心にてもいはるべし春に「こ、ろざしふかくそめてしともいへるごとし心をそむることはあらねどそむるは去むると同じければふかく心の人に去むるを衣をそむるにそへたり前にいふ或抄の説はそめし心をわが人にそめし心といへど上の篇とはたがひて此上下は皆人の我をあき捨らる、部類なれば人をわがあくにはあらず人をあくにはといへる事は「千代もといはふ人の子の爲などいふごとくの人にて畢竟は我をあくなりたてへていへばひろく人といふ其上たのまれずと云もわが人に心をそめてそれをた

のまれずとはいかゞ上の句下の混雑なる注なり人の我にふかしと見しもたのまれず何とふかくおもひ去みたる如きもあく時あればうすく變ずると云を紅染にたとへたるなり
 契沖云顯注には落句「はなち捨たると有牛馬はなちかふをのがひと云なり其によせて思ひはなつをものがふといふなり延喜左馬寮式云「凡放播磨國家島御馬寮直移國放寮別三十疋從當年十月始放飼來年三月下旬繫取路次之國各充二使等食并寮夫一遞送。後撰みちのくにをぶちの駒の、がふにはあれこそまされなつく物かは「君が手をかれ行秋の末にしものがひに放つ馬を悲しき○眞淵案に契沖がそれによせておもひはなつをものがふと云と有は非なり此の歌の意を考るにのがひはいまだ捨たるにはあらず始人のおろそかに成て何としもせざる間のほどなり一偏に捨はてたるたとへにはあらず顯昭捨たると云よりは今の本意かるべし捨はてられたる上にての歌なればつるといふにて聞えたり
 うぐひすのこぞのやどりのふるすとや我には人のつれなるらん

契沖云うぐひすの古巢といふこ、ろにこぞのやどりのとはつゞけたりふるすとは上にも「あだ人の我をふるせるとも「人のふるす里をいとひてともよめりふりぬとしてわする、なり○眞淵案にふりぬとしてわするるとはいかにぞや物のふるびたるは人の捨るなりそのごとくあき捨らる、をふるさる、といへり或抄にふるすはわする、なりわすらればつれなくなるなりといふ聞えたるに似て違へり此歌はふるすとやと云てにをはにか、らひ人のつれなくなり行を見て終に我をいとひ捨んとてや如是われにはつれなく有らんと上下打かへして意得べしまた契沖が如く前にいふふるすふるせるなどいふとはたがひてふるすとやのすとやは巢をいひたとへて直にふるすとやといふ歟玄からは我が年のふりぬとやつれなく有らんとといふ玄からはふるすといふ例格にあらずさだ過人をいとふと云意になるなり玄からは只こまもすさめすなどのたぐひなるべし玄かれども今更案するに我は久しくなれ來るに古巢のごとくめづらしからねばとて人の我には今更つれなかるらんやといふなるべしそれにてもふるせると云はおもひ捨ることなればこ、のてにをば似たりとおもふべけれど

ことの意たがひたり
 さかしらに夏は人まれさ、のはのさやぐ箱夜はわがひとりぬる六帖霜月の歌とせり顯注にさかしらに夏は人まねとはわがもとおもふことにあらでかたはらなる人のいふことをまねぶをさかしらとはいへり夏の夜こそあつければ人のひとり寝なるやうに我もぬれ冬も霜夜のさやけきに獨ぬることのあぢきなしとよめるなり契沖云さかしらは萬葉に賢良とも情進とも情出とも書り俗にかしこだてと云に似たり玄らぬ事をも玄りたる様にし人に先だち進む様の心也萬葉「大君のつかはさる、にさかしらにゆきし荒ら雄浪に袖ふる。六帖「秋の野に行て見るべき花の色をたがさかしらに折てきつらん。枕草子「さかしらに柳のまゆのひろごりて春の面をふする宿哉。源氏登に「さかしらにわが子といひてあやしきさまにいはれやすらん云々。さやぐはさわぐなりやと和同韻にて通せりさやとのみもよめり萬葉「さ、のはのみ山もさやにみたれども我は妹思ふわかれきぬれば○眞淵案契沖が注よしさかしとは賢の字をよみてよきなりらもじそへたるにて其様に云ことになれりそのまねするなり惣じてらもじは物一つをいはぬことにて數の

多きにいふそれよりそのことに似たるをもいふなり萬
 三^{今也}痛醜賢良乎爲跡酒不飲人乎熟見者猿二鴨似。同「默
 然居而賢良爲者飲酒而醉泣爲爾尙不如來。同六にこれ
 をもて或抄にさかさまと也といふは此歌にてのみあし
 く思ひよりたるみだり言なるを知べしまらぬ事をち
 やりかに知がほし人にさきだち出進みなどする意を得
 て如此書なり歌意も或抄には解したがへり此さかしら
 は下句にかゝるにあらす夏の夜とてふたりぬべき人
 はなきに人まねに獨ねをするがさかしだてなりあふべ
 き人あれどもあつければ獨ぬるがほなるもさかしだて
 なりと云さやぐ契沖がさわぐと同じといへりさわぐも
 そのさやぐなるこゑなれば義おなじそよといへるも
 共に鳴こゑなれどもいは初秋の風聲は物にふれてそ
 よくと冬の霜風はさやぐとなるなりさわぐもさわ
 さわとなる音なれども是はひろく何にもいへり普通す
 るとてみだりにはいふべからず故に文字も凜冽或は古
 詩孟冬寒氣至北風何慘慄などいへり秋は秋風煽々或蕭
 蕭涼々などいひていづこも時節の音有なり

平中興下ナカキ有後撰にも
 契沖曰内膳正忠望男
 遂ことの今ははつかになりぬれば夜ふか、うではつきなかりけり

可正五位下云々延喜十一年六月太上法皇開水閣排風亭
 云々應其遺者唯參議藤原朝臣仲平云々延長六年八月廿
 二日右大臣藤原朝臣仲平任左大臣^{十四}昌泰四年正月云
 々廿五日右大臣菅原朝臣任太宰權帥座事^{十八}如此あれ
 ば延喜五年の比はいと微官なるべし此歌もし本院左大
 臣なれば昌泰二年二月十四日藤原朝臣時平任左大臣^二
 九延喜九年四月四日左大臣藤原時平^三九よくかなへ
 り然らばいせが家集は偽作ならんか枇杷殿なるを後人
 書なほせるならば戀五に入藤原の仲平と有をも今の如
 く書直すべきをそこにはそのまゝなれば此作者は時平
 公歟されども「三輪の山いかにまぢみんといへるに同
 じ國の地名をとり出ていづこまでもおくれじおもふと
 いふよくかなひたれば枇杷の左大臣とあるを好事の者
 時代をまらでみだりに書直しけるにも侍らんか猶證徴
 すべき事をまつのみ○眞淵今案仲平公は延長六年に右
 大臣となられしは後の事なるをさかしら人こ、にかく
 書しならん藤原仲平と有し成べし戀の五なるは心づか
 ざるもさかしら人のわざなり
 もろこしのよしの、山にこもるとおくれんとおしふ我ならなくに
 或抄云尋ね入がたき事をつくり出て人におくるまじき

或抄に廿日になりぬればといひなし夜深からでは月を
 待得ぬ物に思ひなぞらへて讀りと有は歌知人の注とは
 見えず是は只廿日の月は夜深くならでは出ぬものなれ
 ば其に譬へて我が人に逢事の絶々にてゆるくあふと
 のならずたま／＼あふとても夜更してならでは逢よし
 のなきと云也注にも及ばねど或抄のあまりなれば云也
 はつかは萬葉に小端をよみてはつくと云同じ義也
 左のおほいまうらさき
 契沖云此作者をば八雲御抄には本院左大臣と書せ給へ
 りげにも此集の時の左大臣は本院の時平公にて秋部女
 郎花の歌にも時平公をひだりのおほひまうち君とある
 せりされどもいせ集によれば枇杷殿の歌也枇杷殿は戀
 五に藤原のなかひらの朝臣とあり又いせが集に云かく
 て世にさわぎ出来て大臣も流され給ひけるむこにて兵
 衛佐よりたちまの介に其人も流されにけり是は枇杷殿
 は菅家の聲にておはしけるに菅家の縁坐にて但馬介に
 下して流され給へるとをいへり是より前の歌なれば兵
 衛佐よりも猶微官にておはすべし然るを左大臣とは承
 平年中にこそなり給へるを今かう書るは後人のしわざ
 なるべし○眞淵案寛平二年二月十三日无位藤原仲平介

と云唐に吉野山をあはすれば俳諧には入たるなり李部
 王記に金峯山は五臺山のかたわれの五色の雲に乗じて
 飛來のよしのせられたりまかれば江都督の御嶽の塔の
 御願文に五色雲來とか、れたり定家卿説に五臺山の事
 此説あれども此うたの意にあらず唐土によしの山を合
 すればはいかにはなるなり契沖云願注云もろこしに
 よしの、山あるべきにあらねどこ、ろざしのふかきよ
 しをいはんとおもはぬにまして此國やまとのちかきに
 おくれんともおもはぬにまして此國やまとのちかきに
 あらん吉野山にこもらんにはいかでか尋ゆかざらん
 とよめるなりもろこしのよしの、山といへるに俳諧の
 心は有なりもとより此吉野の山を唐の吉野山といふな
 らばおどろくべきにあらずはいかにもとるべからず
 此歌はいせが枇杷大臣にすてられて父大和守繼蔭が國
 にあるがりゆくとして「三和の山いかに待みん年ふとも
 尋る人もあらじとおもへばとよめる歌の返しに彼のお
 とのよみてつかはしたる也密勘云如載儀抄推而唐
 の吉野とは尋人なきことをつくりいで、詠なりもろこ
 しによしの、山をあはすれば俳諧には入なり古來風體
 抄の説は是にことなり此歌は漢朝に五臺山と申山我朝

のよしの、山のやうに南に侍るなりよりてかくよめる
 歟俳諧の心にて侍るなりと有さきの説につくべし今案
 にいせ集云「人のむこに成ぬれば枇杷大臣菅家の理と成給へるをいへり我を
 今はよもとほじとおもひてもと有けるやまとにいきて
 玄ばしあらんとおもひて三輪の山いかにまぢみん云々
 又有ほどに心ぼそげにの給へればいみじくあはれにな
 ん尋ぬる人もとあるは人わろくもろこしのよしの、
 山に云々をと此をいとあはれの歌と思ひて返しを
 ばえせでかくよしるの歌たりけるびはのおとど「よ
 をうみのあわと消にし身にしあればうらむる事ぞ數ま
 さりける。奈良坂のわたりにぞおもひつきておこせた
 りける女返し「わたつみとたのめし事のあせぬれば我
 ぞわが身のうらはうらむる。此中に又有ほどにとは
 三和の山とよみて贈りたるのちある時といふなるべし
 心ぼそげにと云よりは枇杷殿の文の詞なりをとこ是を
 いとあはれと思ひてとは伊勢が三和の歌の事なりかく
 よみたりけるとは今の歌の事なり顯昭の返しといはれ
 たるはかなはずともに此集に入たるに部をたがへたる
 も返しならぬ故なるべしされども心はいかに待みんを
 うけたるに似たりびはのおとはかくよみたりけるに

はつゝかす下のよをうみのといふ歌の作者をいふなり
 よくくわきまふべし萬「事しあらばをはつせ山の石
 城にもこもらばともにおもふなわがせ」後撰戀贈太政
 大臣「ひたすらにいとひはてぬる物ならばよしの、山
 にゆくへ玄られじ。返しいせ「我宿とたのむ吉野に君
 しいらば同じかざしをさしこそはせめ」○眞淵案大和
 のよしの山は昔かくる、人の住居する所なりそれはと
 もあれ唐土のよしの、山へかくる、ともといふにては
 いかいなりおもくおもふべからず
な か き (前の中興
 なるべし)
 雲はれぬあさまの山のあさましや人の心なみてこそやまめ
 契沖云雲はれぬあさまの山の見えぬごとく人のこゝろ
 を見ずしてこそやまめそれなんあさましきと云歟是は
 見てこそのもじ濁る心なり又やむとも人の心を見は
 て、こそやまんすれ雲はれぬあさまの山の如くみずし
 てやむなんあさましきとよめる歟淺間山は淺ましやと
 續けん爲なりてもじの清濁によりて右兩義あるなり六
 帖「うらみても玄るしなれば信濃なる淺間の山の淺
 ましや身は。同「いせの海のちひろたくなはくり返し
 みてこそやまめ人の心は○眞淵案にてもじ濁る説も

聞えたるに似たれどこそといふてにをばよく解ぬな
 りこそはあたりて返したるてにをばなれば清たる説可
 然てもじ濁るならば見でや、みなんとか有べしよくよ
 くてにをばをしりて其にしたがひて解すべし○或抄に
 は雲はれぬをわがおもひのはれぬによせたり淺間山は
 あさましやといはん爲と云々といへどおもひはれぬと
 のみいふにあるべからず雲にて山の見えぬを人の心を
 みずしてやむにたとへてきて見てこそやまめとことわ
 れるなり○眞淵又案にあさましはおぞましきなりあざ
 みてふ花のおぞましきもて名付たるを思へ

なにはなるながらのはしもつくるなり今は我身を何にたとへん
 契沖云家集にながらのはしつくるとき、とて此歌あ
 り新後拾遺集戀五に亭子院御歌「つくるなるはしと玄
 るく恨むれば思ひながらをいふにぞありける。是も
 作るとは橋の縁ながら作りて後よませ給へるにや是は
 上に「世の中にふりぬるものはつの國のながらのはし
 と我となりけりといふを本にて其橋もつくられて人の
 しげく行かへばふるくかよひくる人もなきわが身を今
 は何にたとへてなぐさまんとよめるなり【こゝに引ふ

るき身は云々の歌を又作る證とするは誤なり是はくち
 て波の中に有也其をなみだといひかけし也】文徳實錄
 第五云「仁壽三年九月戊子朔戊辰攝津國奏云長柄三國
 兩河頭年橋斷絶人馬不通請准堀江川置二隻船以通濟渡
 許之。これより後久しく絶て渡されざりける也興風集
 も今はきこえずとよめるを後に又改めて渡されたるに
 や後撰に同じいせが歌に「古き身はなみだの中にみゆ
 ればやながらの橋にあやまたるらん。是はいにしへに
 なすらへて古き物によめる歟興儀抄に曰これはいせが
 子の中務君になからん世にはかやうに歌をばよめと
 いひけり古來風體抄に云此歌はながらのはし朽にし後
 又つくらねども橋はつくりつべき物なるが故につくる
 とよめるはいかひの心にて侍るなりと有はいか、侍ら
 ん宇治橋はたえねど世をうち橋の中たえてとよめるも
 橋はたゆる事もあるものなればかくはよせけめどさり
 とてはいかひに入られねばつくりつべき物なりとてま
 だつくらぬをつくるといへるにてはいかひに収まじく
 や侍らん○眞淵案契沖が案大に誤れり引る歌は釋も皆
 たがへり風體抄の義は或抄にもその趣にてはいかひに

いれりといへり是又いふにたらぬ事なり是計は契沖が論亥かり風體抄作る比の人のごとくなき事を附會せる事むかしはなし古へ人は皆實事ならではいはぬ也此説大に笑ふべし先つくるを作ると見る事一つもより所も證もなし興風が歌を引て猶作るといへるはいかに夢中の説なりけん興風伊せ同時の人也されば同じくながらの橋の盡はてたる折から也「こぼれてもあればたとへて云々今は聞えずといふにてつきはてたるを知べし興風よりいといせは後の人にあらばさもあるべきを後に又渡されけるにやとは何事ぞやその上天厩の御屏風の歌をも見ざりけるか惣じて人みなみづからよむ歌はともかくもすれどもいかにぞや古歌を解して古文を知る人のなきや此序に今はふじの山も烟た、すながらのはしもつくるなりといふに此橋は作るといふ文義あらんやふじの山もながらの橋もといへるてにをほをもしらざりけり又橋は作て人通へども我身ふりて人の通はぬといふは口にまかせたるなり歌といふ物の心をしらでみだりに古歌を論するつみ人といふべし古歌はさは解べからず俳諧の意をよくしらぬなり或抄などにもかの風體抄のあやまりをつたへていへり此部中をみ

るに俳意の多有微なるあり一句の俳優有一體の意の俳諧なる有なり此歌又前のもろこしのよしの、山などいふはたとへたる所おもむきはいかいた古歌する人は老るべし○荷田在滿序の注云今はふじの山も烟た、すながらの橋もつくるなりと聞人は歌にのみぞ心をなぐさめける烟た、すと云に不立不漸の兩説つくるといふに造盡の兩義古今の論なり今不立の説を是として盡の義を正とす是は初に富士によそへて人をこひといへるをうけて今はふじの烟も不立と云なり前々た、ざる事をいは、今不漸とも云べしすでに烟のたつ事をいひたれば今はといへるは不立の義なり古今のうつりかはる事を云「世中に古ぬるものは難波なる長柄の橋と我身なりけりとよみし橋も」なにはなるながらの橋もつくるなり今は我身を何にたとへんとよめるをもて長柄の橋も盡るなりときく人は歌にのみぞ心をなぐさむなどかけるなり歌にのみなぐさむとは前に歌をいひてなぐさめけると云るがごとし難波なる長柄のはしもつくるなりと云歌は此集俳諧の部にいせが歌なり是はかの「ふりぬるものはつの國のながらのはしと我身なりけりと云歌を本として「今はわが身を何にたとへんとよめる

なりさればふりぬるに喩し橋も盡ぬれば今はたとへん物もなきと述懐する心なり橋あらたまりなばなんぞかくよまんや歌を心えたらん人はかやうのことわりをも辨へて賊に古へを仰ぐべき事なり文徳實錄第五云「仁壽三年冬十月戊子云々攝津國奏云長柄三國云々かのごとくなれば文徳の比より斷絶なり其後橋造改ること國史に不見拾遺集に天厩の御屏風のゑにながらの橋はしらわづかに残れるかた有ける藤原のきよた、一「蘆間より見ゆる長柄の橋はしら昔の跡のしるべなりけり。天厩は村上天皇の年號なり文徳清和陽成光孝宇多醍醐朱雀村上と八代の間なりつくるなりとよみしいせは宇多天皇の比まで有し人なり【諸成云こ、に伊勢は宇多天皇の比まで有し人なりといか、すでに前にひく史の文も醍醐天皇延長昌泰比枇杷大臣と歌をよみかはしけるものを醍醐朱雀迄も有しとかけけるを傳寫の誤ならん】たとへつくるにもせよわづかの間を経て又村上天皇の比斷絶して橋はしらばかり残るまでならんや或抄に國史云弘仁三年六月遣使造長柄橋と注したれど何の國史にも所見なし文徳天皇以前の事なればたとへしかりともこ、に用なし文徳天皇の御宇斷絶の事所見有て

此後橋造られたる事は所見なければ造るとはいひがたき事なり後まで斷絶しけることは拾遺集の歌にも見えればかた、盡るの義を是とするなりよの中にふりぬるものはといふ歌は文徳以前の事なるべし
よみ人しらす
(次の歌に何かそのといふが如くなり)
まめなれど何ぞはよけくかかやのみだれてあれどあしけくもなし
契沖云まめなれど、は眞實なれど、いふ心なり日本紀に忠誠をまめとよめりいせ物語にまめをとこといへるも是也何ぞはよけくは何かはよきなりみだれてはあだにしてまめならぬなりあしけくもなしはあしくも無なりかるかやは亂れやすき草なれば亂てといはん料なりわれ人をおもふ心は眞實なれど人のさまたのまねば何かはよき大かたの人のこ、ろはかるかやのごとくこなたかなたに心のおもひ亂れてまめならねどさりとてあしくも見えねばいざわれもまめなるをやめて人なみにみだれんとなりまことみだれんとはあらねどふて、いふなり六帖に「まめなれどよきなもた、すかるかやのいざみだれなんしどろもどろに。此歌の心いはずしてこもれり刈萱は宜に従ふべし和名集に云「玉簫曰萱魚飢反與宜同和名加」世に萱草の萱に作る故注するな

り【堀川の院百首には刈萱てふ草一首題に出されたり
萬葉に「刈萱の思ひ亂てとよめるが如く是は刈たる萱
を云にやとも思ひしを六帖にかるかやとて「かるかや
の穂に出てとよみたりむかしに聞ずこのごろよりの一
種ならん」○眞淵案に「いそのかみ古にし戀のといふよ
り「人こふることを思ふといふまで數十首皆戀なりし
かるに右の「世の中にふりぬるものといふと此歌とを
雜と見て皆注せり契沖獨戀といへり是はよき案なり此
歌も戀とみざれば何の事と知がたし或抄に人のまこと
がましくみゆれどその心のさもなきは何ぞはよきな
どいふは例の歌をもてや、もすれば心事を解かんとす
るにのみか、はりて部篇をしらざるなり次の歌に「名
のたつことをしからん知てまどふはと云をあみたる
も即此心に似たり又六帖の歌は此歌の變歎全く同じき
意なり

おきかぜ

何のそのなのたつことをしからん知てまどふはわれひとりかは
契沖曰打ふて、よめる心あらはなり萬四「今のみもの
ざにもあらず古への人ぞまさりてねにさへなきし。後
撰いせ「夏虫のしる／＼まどふ思ひをばこりぬかなし

と誰かみざらん。同「よしさらばむかしの跡をたづね
みよ我のみまどふ戀の道かは
いとこなりけるなとこよそへて人のいひければ
契沖云はじめにみづからの名をかくして尿がいとこな
るをこの思かけたるよしにはのめかしいひよりける
なるべしくそはくづなり火をうちてつくるほくその如
し源氏抄「貫之葉名内教坊阿古屎。源氏手習に「いづら
くそたち琴取てまぬれといふに云々。又「いでとのもり
のくそあづまとりこといふにも云々。花鳥うつば物語
にも此詞有京くそたちともいへりうつば物語にたゞこ
そといふ名有くとこと五音通せりこれにや大和物語に
「こやしくそといひける人。又云「秋の夜の長きにめを
さましてきけば鹿なんなきける物もいはで聞きけるか
べをへだてたるをこ聞給ふやにしこそといひければ
云々。源氏夕貌に「聞給ふやきたどのこそといへると
大和物語に聞給ふや西こそといへる同じ詞なり
よそながらわが身にいとよるといへばたゞいっはりとすぐばかりなり
【波のをすげてともいへり】眞淵案に意は只今人のよそ
ながら我かたにいとこのよると云なればさらばいつは

榮雅抄云
尿源告女

りにて過るのみなることそのよそながらといふことこの
中に即有なりわがいらへずして無實事ものなりといふ
なり其をいとこをいと、いふより針に著るといひかけ
たり或抄云よそなる人のいとこを男なりといへば女た
ゞ偽りにて過ばかりなるとなり○眞淵案に此よそなる
人と五文字をいひてはいへばと腰句にいふてにをは下
句にてらしあはされず皆てにをは捨て釋せるは釋に
はあらでみづからの意なり契沖云よそながらとは他人
にしてなりわが身にいとこのよるとよせたりいとこにも
あらぬ人のいとこなるをとこにそへていふことはた
だいつはりにすぐのみなりと云ことを針に著るとよせ
たりすぐとはまめなる心なくて色ごのみなるをいへり
いつはりを針にいひなせるは上に友則が歌にいとはれ
てのみといふに痛晴てとそへたるが如し眞淵案に此注
いとむづかし是は、し書にいとこなる男とはそのよそ
へていふ人のいとこみたる歎しからば人のいとこな
る男とか書べし此詞その女のいとこみるかた安かる
べし又すぐを著と好とによせたりといふは是もよると
いへばと云てにをはにたがひたり釋甚過たり

照しらす

さぬ
榮抄又契沖し
安部清行女

れきことなきのみ聞げんやしるこそはてはなげきのもりとなるらめ
或抄此神はおもふことよくかなふとてたび／＼いひのる
にそのゑるしのなければはてはなげきのもりとなる
なり【眞淵今案にこは神もねぎとをば聞給ふにそこに
はいかでつれなきぞと男のいひおこせけん時の返しご
となるべしと】奈毛木杜大隅の名所なり○眞淵案に是
はこそといふてにをはをしらぬ注なり上下くひちがへ
り契沖云ねぎ事はねがふ事なり萬葉に祈の字をねぐと
讀り神につかふるものをねぎといふも祝詞などにてよ
ろづの事人の上身の上をねぐによりての名なるべし源
氏床夏に「人のねぎ事になしはしなびき給ひそ。又若菜
下に「心ざし深きわたくしのねぎ事になびきともいへ
りされば神に物まうすごとく我に人のねぎごとせしを
人にくからで聞入しかば今か、るなげきとはなりたり
といふ心をなげきの杜の神によせてかくはよめりなげ
きの杜大隅といへり【なげきのもりは畿内などにある
ならん大隅といへるは例のとり難し】紫式部歌に「か
きたえてひともしそふのなげきこそはてはあはでの杜
となりけれ。是は今の歌を思ひてよめりと見えたり○
眞淵案に大かた契沖がいふ所よしきのみとはまかのみ

言は如是如其なりさればねぎいふそのことも多く聞給ひたる社こそそのねぎなげくことの聞ためてあれば終になげきのもりとはなるらめなりそれを我人のいへるになびかでもあるべきをうたてき、て終にかくなげきするといふをそへたり女のうたにてよく聞えたり

大 輔祭抄又契沖いふ
源たすくが女

なげきこる山としたかくなりぬればつらづみのみぞ先つかれける契沖云なげきこるとはきもじを木になしてこるといへりこるはきるなり【こるはたゞ木折を轉せるなり】よりて萬葉に切の字をこるとよめり山とし高くはしは助辭なりそれを年高くなるにもそへて高き山とはすなはちなげきをいへり【なげきつもれるを山と高く成しといふなり】後撰「かすならぬ身をおもに、てよしの山高きなげきを思ひこりぬる。拾遺いにしへのものぼりやしけんよしの山やまより高きよはひなる人。此歌に意得べし○眞淵案になげきけんよしの山は長息なり物思ふ時は長く嘆息する物なればなげきにて今は愁憂の名となれり元來長息なれば高しと續くなりそれを木よせて山のごとくなげきのたかく成ぬればなげきこる山とつゞけたりつらづるは俗に頰杖つくといふ物おもふ

時の貌なりそれを山にはつゑつきてのぼるに猶きこりやすむる杖を必ずもつなればよせたり或抄に山年高きといふは年高といひてそのよせなきのみならずなげきこる山として外にてにをはもなく有上に山年とは歌詞にあらずいといきづかしかるべしつらづるは契沖云新になひて山路を行もの、くるしさに杖つくに物思ふ時手しておとがひをさ、ふるをよせたり列子曰「伯昏啓人北面而立敦秋登之頤立。莊子漁父云「孔子經歌有漁父者左手據膝右手持頤以聽曲終。世説曰「道林之以如意柱頰望雞籠山歎曰云々。白氏吟苦支頤云々。いせ集屏風に夜ひと夜物おもひたる女のつらづるつきたる所「夜もすがら物おもふ時のつらづるはかひなたるさぞえられたりける。六帖貫之「としげき心よりさく物おもひの花の枝をやつらづるにつく。たけ取物語「物もいはずつらづるをつきて云々

歎をばこりのみつみてあしびきの山のかひなくなりぬべらなり契沖云山に峽あればかひなくとつゞけたり上の歌餘義をつくすやうにつゞけたり或抄にうき世をのがれてすめよとなげきをこりつみてあれば山のかひもなくなりぬべきとなり山のかひに多く木をつめるによせていふ

目の前にある事なればなりと云は此つゞき戀なることをわすれたり用べからず○眞淵案篇集の事は古人皆まらざれば論におよばず此山のかひなくといふをうき世のがれてすめるといふ所と思ふは何によりいつこの詞にあるにやたゞなげきをばとこそあれあらぬ詞すべていはゞいづれの歌か解せざらんそへすあまらずして解し侍るをぞよき歌ともよき釋ともいふなり意はなげきをばつみてそのかひもなくならん様なりと云を木をこりつみて山峽の間もなくならぬべらなりといふつゞけなり「よの中のうちきたび毎に身をなげばふかき谷もや淺くなりなんといふがごときつゞけなり

人こふることをおしにに也
毎本おしにに也

契沖云願注には腰句「おもひもてと有あふこは逢期也それにもになふ木の柄をそへたり○眞淵案に柄古切昔柄老人杖【和名柄布古】攝津國四國などにて荷ふ棒をあふこと云】此歌はおもては柄なり故にこを清て期を添たるとすべし

よひの間に出入るみかづきのわけて物おしこるにもある哉眞淵案わけてといふ歌によりて三の義あり或抄に此歌にてはわかれてなりと云は非なり此歌わかれて物おも

ふと解ては何のよしとも聞えがたし歌よく見て知べし【眞淵今案にこはわれくだけなりわけてぞ出るといふは決てわりなくして出るなり新萬の歌もいせ物がたりも皆わりなく也】又或抄曰金葉に「三日月のおぼろげならぬ戀しさにわけてぞ出る雲の上よりと云はわりなくしてなりと注せり是は金葉第八戀下に藏人にて侍りける比内をわりなく出て女のもとにまかりてよめる藤原永實と有歌にてはし書にわりなくと云詞あれば即歌もそれなりといふなりわりなくとは歌にて解がたけれど是は後世の歌なれば作者の心おぼつかなし例にとるにたらずされどもわけてはわれとぞと言をてとを通して三日月よりいへるとみればよし歌は聞え侍りまかしながら今の歌をとれるなれば或抄に今の歌は別てなり金葉はわりなくとなりといふは永實の意にはあらぬ事あるべし宇治拾遺にその折を得てといふ意にをれてとかけるたぐひなりなくをわけてともいふべけれどわりなくとは理りもなくと云事にて其理りを知つ、もさはなされずして一向に心ひくことの有などをいふ詞なれば今の歌をもさも見るべけれどふるき歌なれば三日月のわれといひかけて我といひ負せたる冠句の歌な

るべし又萬葉にてはまからず猶後に云べし契沖云萬葉に「我むねのわれてくだけてとよめり三日月のかたわれなるに物思ひに心のくだくる事をそへたりいせ物語に「二日といふ夜男われてあはんといふ。新撰萬「鶯のわれてはぐ、む櫻花おもひくまなくとくもちる哉。六帖「思へばぞ月のわれても出つらんかばかり騒ぐ雲の上より。同「三日月のわれては人を思ふとも夜はふた、び出るものは○眞淵案物語のわれてはわりなくと聞ゆれど語たらぬなり眞名本に破而と書る次下に破而と書し例をおもへば而は勿の誤なるべしまからばかれはわりなくと直によむべしまからずして而正字ならばわれてといふは萬葉の如く心のわれくたく如きをいひて男のいと心くだけて切にあはんといふをわれてといふなり萬葉十一「白高山出來水石觸破衣念妹不相夕者。或抄に腰句を「いはだ、みとかな書にせり例の萬葉を口にのみ聞て見ぬ人の注は如是誤多しさればいかでか誤を解ん然るを此歌はわかれてなりといふ注は一向歌を知らざるなり下に妹あはぬ夜はと有を上にかわけてぞ思ふといかではるべき是は石にふるればくだけわる、よりいにもあはぬ夜は心のくだけさせて妹を

思ふといふ心の切なるをいふなりされば契が説あたれり今の歌も新萬も六帖もともに心のわれくたくると見て一首も通せざる事なし又詞花集に「われてもすゑにあはんとぞおもふといふを百人一首に入てさまぐいへど是は後の歌にて今の例にはあらずそれはわかれての心によみ給へりまどふべからず
(物の行進てかなほを云)
 そへにとてすればか、りかくすればあないひしらすあふさきさきに契沖曰此初の五もじ顯昭もいか、思はれけん注せられず後撰に「けふそへにくれざらめやはと思へどもと云るは萬葉副字をさへとよみたればけふさへにといふ心なれば今と同じからず此歌の外に見及ばぬ詞なり「そへには其方にとてか又さよにといふも同じ意なり」古今著聞集十六に近江法眼寛快と云僧の事かける所に云「或日又こし車にひかれて参りけるに圓宗寺の前にてたけ高く大なる法師のかきのかたびらばかりに袈裟かけたるが同行とおぼしき僧四五人具したるが行を見てこし車より飛おりて何といふともなくしやくくびをかきて相撲を取り互にひし／＼と取組て此法師を打まろばしてけり其後おのれは聞ゆる文學かなといへばそへにといらへておのれは聞ゆる壇光かなと云又そへに

とこたふいざ、らば今一度とらんとて又寄あひてとるに此度は壇光かちにけり其後いざれ高維へかおもちひくれうといへばさらなりとてそこよりやがてぐして高維へ行にけるそれよりこいになりけるとぞ。右此中にそへにといらへてといへるはさよといふ心と見ゆればうさ事の有時のがれんともせずさよと打まかせてをればそのとのみにてはてす又ことうき事重なり来るをわびてとすればか、りとはいへるなるべし或抄に添荷といふは重荷に小付といふ心なりといへりされどそれを添荷といへる事もなく又あひしらへる詞もなければ用べからず壬二集下「そへにとて頼めしくれもとかくに幾夜過行月日なるらん。此歌はいか、心えて取用られけん作者の心をまらずあないひまらずはいふべきやうもまらずの心なり詞も不及と云が如しあふさきさよは詩周南云「參差荇菜左右流之。嵇康琴賦云「夫所以經營其左右云々。是によれば源氏帚木に「とあればか、りあふさきさよにて云々。空蟬に「ひだりみぎにくるしかくおもへどかの御てならひとり出たりと云に同じ心なりかなたこなたより愛事の重なりくる心なり顯昭云あふさとはあふさまなりさよとはくるさよ

也とさまかくさまと云心なりとするものしといひかくするにもあしといひまらぬわざかなとよめり此注の心はとするにもかくするにも人のよしといはぬをわぶる心とみられたる歎よく味ふに始の義叶ふべし是より難也○眞淵案に古今著聞に有は後の詞なれば證ともいひがたし或抄にさぞといふなりといへるさよとそはまかれ共へにをそといふ語例なし尤なりなどいふ注は猶當然の口にまかせておのれが獨りおもふなるべしみなとるにたらず一禪御説に添荷なりと有は吾聞所も同じ下にかけ合の語もはべらねども下の語に皆そのごとくなりいかにとなれば馬につり合のよき荷なるに又かた方に添荷すればとかくかたぶきて左にそふれば右あまり右に付れば左かろきをたとへたるよく叶へりか、ること
 は諺にて侍れば縁語なくとも古き歌にも有事にも侍るなり其上今案に上の歌に柄をよみおも荷とあるよりそへ荷の事なれば篇集せるなり契沖よく篇集をいふにこ、にいたりて思ひよらざるはいかにぞや萬葉五「伊等能使提痛伎術爾波鹹鹽遠灌知布何其等益々母重馬荷爾表荷打等伊布許等能其等。是は重荷の上に又荷を置の諺なり今のは脇に添るよりかたぐをいへりあふさきさ

さは左右といふが如し古人もとかくなど云に左をと右をかくとよみ來れり此釋いとむづかしその上假字おふ歟あふか知がたし強て今のかなによりてあふならは合と切となるべしとかくもあふささるさもひだりみざりといへるがごとくかれ是と云も同じ意なり

世の中のうきたび毎に身をなげば深き谷こそ淺くなりなめ契沖云公任卿和歌九品の下に此上句にて「ひとひにちたびわれやまにせんと云歌有よのうきことのいたく多きよしなり萬十七「うぐひすのなくくら谷にうちはめてやけはまぬとも君をしまたん。後撰「世中にまられぬ山に身なぐとも谷の心やいはでおもはん○眞淵案萬葉の歌は谷に火葬することをいへりこ、には不叶

在原元方

世の中はいかにくるしとおもふらんこゝろの人にうらみらるれば六帖に「よろづの人にとあり非なり○東萬呂曰こゝろは此等なりこゝろそこらといひて彼是といふを一つをいひてかねたるなり

よみ人しらす

何を身のいたづらに老ぬらん年のおしはんことぞやさしき契沖云やさしきははづかしきなり心有人をやさしきと

いふはむかひてまみえんも心づかひせられてはづかしき人といふ心なればこなたの心をかなたに名付るなり萬葉五「玉島の此川上に家はあれと君をやさしみあらはさずありき。同五「よの中をうしとやさしと思へども飛たちかねつ鳥にしあらねば。六帖「くればつる年の心もはづかしくとはでや君が春になしつる。同「いかで猶有とまらせし高砂の松のおもはんこともはづかし。源氏物語かげろふに「おやにてなきあとに聞給へりともいとやさしきほどならぬを云々。又夕霧に「あさましやことありがほにわけ侍んあさ露の思はん所に猶さらばおぼしまれよ云々。道濟十體此歌は直體の歌なり眞淵案に身のやすも身のまゝまるなり人にはづれば心のちゝめばやさしといふならん枕草子三「弓矢たてほこたちなどもてありくをたがぞと間について何がし殿のといひて行はよしけしきばみやさしがりてまらずともいひ聞もいれでいぬるはいみじうにくし云々

おきかせ

身は捨つ心をだにもはふらさじつひにはいかゝなるとしるべく契沖云身は捨つとは遁世の人を云は常なれども興風が歌なれば時にもあはねば我ながら棄物にする心なり願

注はふらさじとは人の悪きふるまひするをはふれたりと云されば身をこそすてめ心をば美まうてつひにあらんやうをまたんとよめる也と云り此注も今少し叶はず又諸抄に放埒にせじといへるは放埒の音と思へり僻事なり日本紀に溢の字をはふれけりと讀めりこれなり日本紀第五崇神紀云「武埴安彦先射彦國葺不得中後彦國葺射埴安彦中何而殺焉其軍衆皆退則追破於河北而斬首過半屍骨多溢故號其處云羽振苑。古事記云「亦斬波布理其軍士故號其地謂波布理會能。續日本紀卅一光仁紀藤原左大臣永手朝臣堯時詔畧云「大臣之家内子等平母波布理不賜失不賜慈賜波温賜波人目賜云々。いせ長歌の中に「もゆる火の心ははひとあふれつゝあるかなきかにわびをれば。源氏若紫「心にまかせてゐてはふらかしつるなめりとなく歸り給ひぬ。夕貌「か、る道の空にてはふれぬべきにやあらん。明石「かくながら身をはふらかしつるにやと心細し。東屋「又見苦しきさまにて世にあふれんもまらずがほにて。玉かつら「おとしあふらさず。橋姫に「人にだにいかでまらせじとはぐ、み過せどけふあすともまらぬ身の残り少なきにさすがに行末遠き人はおちあふれてさすらへん事是の

みこそげに世を離れんきはほだしなりけれと。手習「いかでさるゐ中人のすむあたりにかゝる人のおちあふれけん。同卷「世におちあふれてあるやうに人のまねび侍りしかな。夢浮橋「まだいとかくまでおちあふるべききはとも思ふ給へざりしを云々○今の俗物を捨るをすてはふるといふ詞も是歟波と阿と同韻の字なればあふるはふる同じ溢の字常はあふるとよむを日本紀にはふるるとよめるにて知べし○眞淵案日本紀溢字よめるはこゝに不叶こゝなるははなちすてる意也源氏皆同じ續日本紀波布理不賜失と有にて意得べし放の音と思へるはいふにたらぬなり或抄に身こそすてめとあるはすてつと云つてもじを見ざりけるか是は身は捨物とまづといふなり

ちさと

まら雪のともわか身はふりぬれど心はきえぬものにぞありける萬七人麻「雪こそは春日消らん心さへ消うせられや立もかよはぬ。後撰「身ははやくなき物のごとなりにしをきえせぬものは心なりけり

題まらす

よみ人しらす

梅の花咲ての後のみなればやすき物とのみ人のいふらん

契沖云顯注に盛過たるよしをいはんとて梅の花さきて
 の後の身とはそへたり梅のすければその實なればやす
 きものとは人の云らんとそへてよめるなりいせ物語に
 「色」ごのみのすきもの云々。色好みにて誠少きを云紫式
 部日記に源氏の物語お前にあるをとの、御らんじてれ
 いのすゞろごとゞもいできたるついでに梅の下にまか
 れたる紙にか、せ給へる「すき物と名にし立ればみる
 人のをらで過るはあらじとぞ思ふ。たまはせければ」人
 にまだをられぬ物をたれかこのすき物ぞとは口ならし
 けん。此御堂殿の御歌こ、の歌をとり給へり仲文集「す
 き物を花のあたりによせたらは此床夏もねたましましや
 は【真淵今案に好者にて好事の者といふ意なり】○真淵
 案に顯昭さかり過たるよしをいふは上句はさも有べけ
 れど下句の解たがひたり盛過たるよしを注せば源氏物
 語にさだ過人といふは盛のくだちたるをいへば梅實の
 酸に過をかねて盛過たるものと我をいふらんやといふ
 意も有べきか或抄にすきものとは年のよれば人のえす
 きものと人のいふとなりといふはえずき物といふ詞何
 の事にや論にたらぬひがごとなり今案に紫式部が日記
 の「人にまだをられぬものを誰か此すき物ぞとは口な

らしけん」と有今の歌をとりて酸にいひかけて口ならし
 けんとあるにて今の歌年よりたる事の上句にはあらず
 としられたりされば上句はすき物といはん爲のみ梅の
 實といはんとして咲ての後といひすき物といはんとして
 實なればやといふなり我をすき物といふは梅の花のち
 りて後になる實の我身にてあればにやさ人のいふらん
 やといふなりゆめく咲て後といふとてさだ過たるに
 はあるべからずまからば下句解たがへりすきといふ語
 の釋よくまらで數奇などいふ音語をいふは世俗の事な
 りおのれ聞惣て大かたに物を好をばすといはず甚そ
 のとに執するをいふなり須は須義下略又之解根の略紀
 は古能美の約なりよりて過好なり物好むに過たるなり
 好色は大かたなるをそれに過たるをもすき物といへり
 物語にいろごのみのすきものといへるもかなへり○今
 又案にこれは篇次を以てみれば上句は身の盛り過たる
 を云なりされば下句にすきものといふはえずきもの或
 はまことすくなきをいふなどのことにてはあらで先に
 いふがごとくさだ過人といふを我身の盛過たるは梅花
 の咲ての後の身なれば酸物といふらんやといひかけて
 過物といふなりすきものきもじ濁るは本義ならじ縁にひ

かれて清濁をかまはぬは歌の常なり「てる月のかけの
 淡などいふがごとし

法皇にし川におはしましたりける日さる山のかひにさけぶと
 いふことを題にてよませたまうける み つ れ

わびしらにましらななきそあしびきの山のかひ有けふにやはあらぬ
 【是をはいかに入しこそわろけれこれほどの歌は此
 比多は侍らざる也】猿鳴三聲涙沾裳又三聲斷腸などい
 ひて猿の聲はかなしきもの也といへりわびしらのらは
 助辭にてさかしらのらの字のごとしましらは猿なり眞
 は發語之良の良は猿必爲群ものより良といへり一にあ
 らぬ詞なり古くは勢良といひしなりまは發語なる證な
 り西川は桂川なりと或抄にいへり大井川行幸の序に此
 題見えたれば同時の事なり

題まらす

よみ人まらす

世をいとひこのちとこと立よりてうつふし染のあさのきぬなり
 【ふし染の衣を人に贈る時よみてそへたる歎衣を人に
 贈る時又そへたるにや】契沖云六帖に落句「こけの衣
 ぞと有顯注にあさぎぬをふしにてそむる事を木のもと
 にうつふしそめと續けたるうるはしうおびなるときて
 あふのきにもそばまにもねずしてまろねにするはう

つふしにもねらる、事なればうつふしぞめとそふる也
 今案大和物語に僧正通昭の事を書くにいはく年月をへ
 てつかうまつりし君に少將後れ奉りてかはらん世を見
 じと思ひて法師になりにけりもとの人のもとにけさあ
 らひにやるとして「しもゆきのふるやの中に獨ねのうつ
 ぶしぞめの麻けさいのきぬなりとなんありける。通昭集には
 今の本の歌にて下句大和物語と同じ然れば通昭の歌な
 り僧尼令に緇ケル橡クワ壞色等を出さるふしぞめはくりなり是
 又壞色なり千載集に俊頼朝臣述懷長歌に「うつふし染
 の麻衣花のたもとにたちかへて後の世をだにと思へど
 も云々。此歌にてよまれたり古來風體抄此歌迄を出し
 て萬葉集は時を久しくへだ、りうつりて歌のすがた詞
 うちまかせてまなびがたかるべし古今の歌こそは本體
 と仰信てすべきものなればいづれもいづれもおろかな
 らねどその中にもとなるどもを所々にあるし申侍ける
 なりといへり○真淵案に僧は麻衣を服それをふしにて
 染る壞色なりうつふしといへるはふしは中空虛なるも
 のなればうつふしといへりそれを臥によせたり顯注に
 も諸抄にも丸寐してうつぶしにふせりといへるも不住
 の身の體なればささいはるべけれどうつと云をば空ふ

しの名になして臥といひかけたらんこそ安かるべし木のもと、いへるおのづから山林の意侍り

續萬葉論卷第二十

三十二首

大歌所御歌

江次第に大歌小歌有拾芥抄に云大歌所在圖書東上西門内也新嘗時供奉有親王大納言非參議別當案給年官大歌所は神樂等の歌を教ふる所又天下諸國の歌を集めそれを撰みとりてうたふ也西宮記臨時部云大歌所在圖書東新嘗時供奉有親王大納言非參議六位別當御和歌師十生案主年官供奉時給食酒と見えたり是に大歌小歌といへるは一説にうたふ弊の大小といへるは非なり大歌はおほやけ歌なり小歌は民家の歌なり今民人の如く古への民人歌それは民戸にてうたひて不升の歌なりよりておほやけに對しては小歌とはいへり

おほなほびのうたなほみと讀べし神樂歌に大なほみとあり

或抄に内裏にとのぬ申を直と云百官とのぬするによりて大直日と云大嘗會の名なり云々此の説いかでか、るおろかなる事をいへるにやとのぬは直をいふ直は當番と俗にいへる字義にて直宿といへり夫になほびの心有事何書に侍るにや直をすなほなりとよむとは字義甚別なりか、る杜撰人わらへなりすべて此一巻の事吾朝廷の學によく至らぬ人ともいふべからず定家

續萬葉論卷第十九終

卿も去り給はぬよしをみづからのたまひしなり是誠なるべし定家卿學問有人にあらず歌よみ給ふのみにては解がたしよりて諸抄の説ことごとく誤り多かれば論ずるにいとまわらず近世のことながら契沖が説は古書を引るにあたれる所多ければ是をあげいふのみ契沖云おほなほびはおほなほらひとといへるに字の落たる歟若はなほらひをなほびともいひける歟稱徳紀云「天平神護元年十一月戊午朔庚辰詔曰今勅久今日方大新嘗乃猶其比豐明開行日七在云々」孝謙天皇再祚の時の大嘗會豐明會也續日本後紀第二曰「天長十年冬十月癸未朔辛巳爲大嘗會將終禊事行幸加茂河禊事畢御直相帷扈從五位已上天皇儼焉釋日本紀第十二云、大神宮大同本紀云「神嘗祭以十七日直會云々齋宮之采女二人御綱柏爾酒盛且每人給。稱徳紀に猶良比とあるによれば續日本後紀の直會も大同本紀の直會も共になほらひと訓べき歟又此書によらばなほびと訓べき歟同神祇を祭り給て後おろしを王臣に賜はりて酒宴ありし時の歌なれば神事に限らず宴を賜りて諸臣多く集るを大直會と云歟又案に大直日と云べき歟神直日とて皆神の御名也神代紀上にいふ「伊弉諾尊既還乃追悔之曰吾前到於不須也

凶目汚穢之處故當滌去吾身之濁穢則往至筑紫日向小戸橋檣原而祓除焉遂將盥身之所汚乃與言曰上瀨是太疾下瀨太弱使瀨之中瀨也因以生神號曰八十柱津日神次將矯其枉而生神號曰神直日神次大直日神。延喜式祝詞の中におほなほと云神聞なほし見なほしといへりされば此歌をもて大直日神を祭るなるべし下のひるめの歌は天照大神を祭るに用る歌歟今彼に准ふべし茲に始めて此歌を載るはおほよそ神祇を祭らんとする時必祓をして身を清まれば其に准へてたとひ少の怠りありとも大なほびの神聞なほし見なほしてゆるし給へといふ心なるべき歟但今の歌によるに猶初の義なるべし大直日神を祭る心なし古抄に百官宿直するによりて大直日とは言大嘗會の名なりといひ宿直の時群臣内裏に祇候の目を大直日といふなどいへるはいと心得がたし殿上人番にをりて宿直する事はあれど百官の宿直といふ事聞ず大直日の直は不曲義宿直の直は當義なり其心大にとなり又宿直は常の事なり何ぞ其歌としてこゝに載らるべき又大嘗會の事にては歌更にかなはず節會の時群臣内裏祇候の目をいふといへるは然るべきをそれも大直日とか、れたるを見ず【神樂

に「末宮人の四手はさかゆるおほなほみいさわが。梁塵にいふ去では四手なりおほなほみは古今集に大直日といへると同じ神を祭時も百官の集るとをいへり諸社直會殿とてあり神事にまたがふ人の居所なり」○眞淵案に直會の事契沖が始に引る史の文のごとしされども其意いまだ契沖が説さだかならず況や神代の大直日神などのごとは甚他事にてゆめくこゝにあづからず大なほひ大新嘗乃猶比とある正記のかなうたがふべからずまかれれば此集の脱文なるべしまからずば後々なほびと略していひしなるべしさて猶比直相直會直日と書るを吾朝廷の學に通せざるより皆正訓とおもへるより正義を失ふなり【齋儀常儀に直す時の參會をいふ也なほりあひなり】是は元來天神地祇を祭るにその翌日供物の、こりして宴王卿群臣給ふその宴を大なほびといふ大とは稱美の語なりなほひは乃阿比なりそれを字をかりてかけるなりされども會とかけるは正義なり會をば阿比といふ奈保と能古と通し里阿約良にて比は女字なりされば契沖が不曲の義といへるは神號の事なり今と混同せるは語に通せざる故なり用べからず今の俗座につくをなほるといふも此なほらひの變語にやさま

ざまの説をいへど此歌をよく見て知べし此歌と續日本紀の歌と下句のたがひたるは詩經に上句同じく下句の段々にうたひかへたるがごとし是も同じ時のごとしされば續日本紀に「天平十四年正月云々又賜宴天下有位人并諸司史生於是六位已下人等鼓琴歌曰新年始邇何久志社仕奉良米萬代摩提丹宴訖賜祿云々。これと同じきを以猶良比能歌なる事ともにしるべし猶くはしくは後にいふべし

(今本)つめ
(終也)

あたらしき年のはじめにかくしこそとせなかれてたのしきをへめ

日本紀にはつかへまつらめよろづ代までに

契沖云此歌は催馬樂呂の歌なり下句は注のごとし顯注云たのしきをつめとは諸のまつりなどにはつみ木とて庭に薪を積たるをいひによせてたのしきをつめと云によするなりその薪をば左右衛門の衛士がもてまゐりてつむなりさて庭薪とかきてはつみ木とよみ侍るとぞ申かくしこそとはかくこそと云詞てふ文字をくはへたり今案につみ木のはじめは日本紀云「天武天皇五年正月十五日初位以上進カウキ薪カウキこれよりなりされど往古の歌にはたのしきをつめなどよする事は少く侍り又つみ木も俄なればおぼつかなし今案萬葉梅歌に「武都紀多知

波流能吉多良婆可久斯許曾鳥梅乎平利都々多努之岐乎倍米。此歌すべて似たるに腰句尾句をもてなすらへて按に今の歌も、とはたのしきをへめて侍りけんを古記上手のかけるかなはとになだらかにてへもじのつにまがへるを歌の事をよくもえらぬ人のうつしあやまれるにて侍べしをへめとはをはらめにてたのしき事をきはめの意なり經めと云には非ず萬葉十九家持歌に「春裏之樂終者梅花手折乎伎都追遊爾可有。此歌の第二句今の結句に同じ樂の字樂しむと直したれどそれにては者の字にごりてよむべき故に心かなはず第五の歌によりてたのしきとよむべしたのしきをへめといひてもかなひぬべきを古歌にはかゝる事のみ多し萬十五に「秋さればこひしきいもをいめにだに久しく見んをあけにけるかも。こひしきいもをといふべきをこひしきとよめるは此たぐひなり注に日本紀と侍るは續日本紀なりもしは日本紀にありとそらにおぼえてたがひたる歟これは後人の注を又後の人わきまへずして書くはへたるなるべし

主基兩帳天皇御豐樂院廣廡宴百官多比氏奏田舞伴佐伯兩氏久米舞安倍氏吉志舞內舍人倭舞入夜奏五節並如舊儀云々。江次第第五云「和舞取神枝舞也。又大嘗會次第云奏和儺昔昔舞人十人居庭中琴師二人著之笛六人立其後云々 ○契沖曰或抄に女舞なりといへり非なり○東萬呂云これは神社にてもまふべし行幸のときも有ることなり今は絶えたり【眞淵案に山人ゆふかづら等やましまひは貞觀儀式第一平野大原祭等云「次神祇副喚琴師名二人共稱唯次喚笛工名二人共稱唯副命琴笛相和調云美許止仁布江安波世 四人共稱唯先吹笛一成次調琴聲次歌人發聲先神祇後雅樂 左右山人共起和舞次神主二人共舞次祐已上一人次侍從二人共舞」又神主和舞と云ふ條もあり右に山人と云ふは平野祭云「山人廿人用左右執賢木入列立机前以次申神壽詞」又曰山人左右相分立新庭中退出さて山かづらせよと云ふは是等の神事には同書云「大臣宣賜賢木綿承稱唯退出先賜神祇官人皇太子柏手稱唯受而著之主典以上安藝木綿史生以下凡木綿右山人と已下庭中退去」

三代實錄第三云「貞觀元年十一月十九日庚午撤去悠紀

しもとゆふかつらき山に降雪のまなく時なくおもしろかな

まもと、は栞にてわが木なりそれを薪にこるにかづらにてつかねゆふなればまもとゆふかづらといふ冠句なり此元來は戀にも又只人を思ふにも有べしまかるをこに用ふるはとによりて時によりてその意を引かふるなり君の前にては君の恩をおもひ或は千代をおもふともなり神前にては神の恵をおもひ又は神に願ふことにもなるなり其例皆かゝる樂歌のとり所なり毛詩を異國にうたふに所によりことにまたがひて意をとると詩の本意とはたがふ事左傳をよくよみて知べし吾朝廷の催馬樂の歌なども後世其用ひかたを知人なし○契沖云願注云しもとゆふ葛城山とは正月の卯の日は杖を奉ることをまもと、いふ杖をばかづらにてゆへばまもとゆふかづら山とはつゝくる也是を卯杖とは云なり今案に公事に卯杖奉る事はあれども是は古きやまとまひの歌と侍れば卯杖の始れるよりは先よりの歌にや侍らん又卯杖のまもと、云る事此注の外見えざる歟和名集に云「唐令曰笞音知和名之毛毆大頭二分小頭一分半。これは罪あるものを打杖の名なりいはひて奉る卯杖にはいかでかゆ、しきまもとの名はおほせ侍るべき日本紀の景行紀に茂林をまもとはらとよみ同雄略紀には弱森と書てまもと

はらとよめり延喜式には栞をまもと、よめり萬葉第十四東歌に「おふしもとこのもと山のましばにもものらぬ妹が名かたに出んかも。枕草子に「も、の木わかたていとしもとがちにさし出たるかたつかたは青く今かた枝はこくつや、かに云々是らを思ふにかの人をうつゑのふとさばかりなる木をまもと、いひ其まげくおひたるはまもと原なりされば其をかりて薪にとるに山なればかづらをねりそにしてゆへばまもとゆふかづら山とは續けたるにこそ新續古今集には光明峯寺入道攝政左大臣「戀衣色には出じまもとゆふまさきのつなよるの時雨に。此御歌も今申愚意に同じく意得てよませ給へるなりさて此御歌は戀の歌なるべし後京極殿是を取て「まもとゆふかづら山といかならん都の雪もまなく時なし。新勅撰に入れり然るに或とき先達疑ひてのたまはく日本紀に非時と書てときじくとよめるは四時にわたりて不斷の義なりまなく時なしと云も是に同じきを都の雪もと有覺束なしと今いはゞこれかへりて一隅を守りて三隅にくらしといふべき歟本歌の心も只冬になりてはる、まなくふる心なるべければ是を取用ふるからに都の雪もとのたまはん事難あるべか

らすや萬葉第一天武天皇御歌に云「みよしの、み、かの峯に時なくぞ雪はふりけるひまなくぞ雨はふりける云々。第十三にも此つゝき有いづらの山か雨と雪と共に四時わたりてふる事有べきなぞらへて思ふべし萬葉「戀衣きならの山になく鳥のまなく時なし我戀らくは○眞淵案に契沖が説よし日本紀に非時もときじくと萬葉に無時をも時じくとよむべし雨と雪と一同に常にふるとにはあらず高山は雨も常に多雪もいつとなくふることの有よりいへるなりかづらきに四時雪の有ことはさかずよりて是はかづらき山は高山なれば冬時ふる雪のひまなくあるをたとへていへるにて間なく時なくといふとてあながちにいふべからず

あふみぶり

みすくきぶり

ふりは風俗なり近江にてうたひし歌のよろしきをあげられたるなり契沖も同じ眞淵案に是は似て非なりたゞ歌にあふみとある故と知べし契沖曰神代卷下云「此兩首歌辭今號夷曲。續日本紀云「天平六年二月癸巳朔天皇御朱雀門覽歌垣男女二百四十餘人五品已上有風流者皆交雜其中正四位下長田王從四從下栗栖王門部王從五位下野中王等爲頭以本末唱和爲難波曲倭部曲淺茅

原曲廣瀨曲八雲刺曲之音令都中士女縱覽極歡而罷賜奉歌垣男女等祿有差。或抄に催馬樂を引てさいばらは馬をかりもよほす歌なりといふは文字につきておもひつける僞言なりまかる事にあらず別に傳有こ、にはいふにおよばず
あふみより初たちくればうれの、にたづぞ鳴なるあけぬこの夜は契沖曰あふみよりのぼる道にうねの野といふ所にたづの鳴を聞て夜は明ぬとよめるなり南朝新葉集によみ人まらず「戀うねの野にたづの一聲啼わかれ又もあふみとたのめてぞこし。是今の歌を本としてよみても侍るかな以上二首は國の風以下二首は一郷の風なり○眞淵案明ぬは明ぬるなりうねの野も即近江なるべしあふみよりといひて下はそのあふみのと心得べし
みすくきぶり
水くきの岡のやかたにいとあれとれてのあさけのしものふりはし契沖云六帖には霜の題にのせたり水荳岡は筑前也萬葉にあまた讀り萬六「ますらをと思へる我や水荳のみづきの上に涙のこはん。同七「あまざらひ日方ふくらし水荳の岡の港に波立わたる。同十「秋風の口方に吹ば水荳の岡の木も色付にけり。同「鴈がねの寒く鳴より水

葦の岡の萬葉は色づきにけり。同、水葦の岡の萬葉を吹返しおもしろころが見えぬころかも。是らなり屋形はそこに作たる屋なりいとあれとは妹と我といふなり古歌には多くわれをあれとよめりねてのあさは朝明なり霜のふりはもとは忠孝歌に「草のはつかに君はもとよめるやうに霜のふりさまはと問ふ心なりをりふしをおもふに霜もいたくふりぬべき

しはつ山より

まはつ山打出てみればかきゆひの島こぎかくるたなしをぶれ眞淵案に萬葉第十四高市連黒人が羈旅八首ある中の歌なり第二句は打越くればなり出てにてはかなはず第三句かさゆひにはあらずかさぬひなり是序考にいふ今の萬葉集中の歌七首あるといふ其一つなりこは萬葉別記にいふ卷の序にては今の三は第十三卷にて古萬葉六卷の中にあらず家々の集の中也○或抄に島に身をこぎかけたる也と有島にこぎかける意なるを島こぎかくると外にてにをはなくはいひがたし其上萬葉に隠字を書たり隠義にはか、はらぬ例多かれど是は字と叶ふより島がくれ行舟をよめる也舟にははつると云詞より續けたる地名にて此地同名異所多し此歌萬葉にてみる

に三河國なり高市連黒人東より登る時歟又は下る時の歌なりされども七首の内此歌始にあれば登る時の歌にや或抄に豊後といへり又笠結は豊前笠結は豊後といへども其證なきなり他國にもまはつといふ有ども今の歌は三河なる事萬葉にてまのければ萬葉見ぬ人のとは是に不叶委しくは契沖が注もおのれが考に同じよりて次にあぐ契沖云此歌は萬葉第三に高市連黒人が羈旅八首ある中の歌三首めの歌なり二三句「打こえ見れば笠結のとあり此歌の前に年魚市方とよめり尾張也此歌の次に牧の湖高島勝野原をよめり共に近江なり終に山背高槻村ともよめり然ればあづまより都へかへり登りくる道にてよめる次第なり和名集を考見るに三河國幡豆那磯泊止郷に四極山あるべし注に之波止とあれどと、つと五音通じて同事也日本紀の孝徳紀に磯泊といふ人あり同じ文字にてまはつとあれば是をもて知べし雄略紀云「是爲三吳客道一通磯齒津路名三吳坂。上に住吉津とあれば此磯齒津は萬葉第六に「ちぬわより雨ぞふりくるしはつのおまあみたつなほせりともぬれてたへんかもとよめる所也是異所ながら同名の證なり然れば笠ゆひの島も三河なり笠といふにつきて笠結にて

有ぬべく覺ゆ○眞淵案此注よろし磯齒津といふは攝津國ともいふべし笠ゆひも笠縫も同じ事にて萬葉に縫とあれば是にまがたがふべし又或抄に四極山をよも山と萬葉によめると有は萬葉をよくもしらぬもの、古を眼ひらさても見ずして然なりとおもへるはいとおろかなり萬三、四極山打越見者笠縫之島傍隱棚無小舟。此歌の次に「近江海八十之湊」牧の湖「高島勝野」三河有二見乃道「山背高槻村。如是有高つき村の歌に「速來而毛見手益物乎山背高槻村散去奚留鴨。此次には石川郎女歌「しかのあまのめかり鹽やきの歌有て又高市連黒人二首「吾妹兒二猪名野者令見都名次山角松原何時可將示去來兒等倭部早自菅乃眞野乃松原手折而將歸。黒人妻答歌一首「自菅之眞野之松原往左來左君社見良目眞野松原。此次一首おきて又黒人の歌にも「墨吉の得名津に立てといふ歌有てともに三河より攝津大和までの歌にて妻の答に「往さくさ君こそみらめと有も東への往反の道と見えたり右の四極山を或本に豊前笠縫豊後とあるも此全篇をよくも見ぬ人の注なり○眞淵今案にしはつは萬葉第六「ちぬわとよみ合せ又此八首の様を思ふになにはの天王寺の邊の山なり難波の古圖にてしらる○

諸成案に此歌の解地名等いまだし萬葉考をもてかくべしこ、をくはしくうつし置も萬葉考のてらし合のみ神あそびの歌

東萬呂曰神あそびとは神樂なり眞淵案にすべて樂をなすをあそびといふかぐらといふ辭古へ有しかおそらくはあらじ

とりもの、歌

是は東萬呂云手に取て舞ふなり或抄にうたをうたひてさ、げものをとるなりといふ非なり又或抄に神樂にもとうたする歌とて有本歌は此集に有末歌は拾遺に有となりといふもいとしらぬ注なりもとするといふは上句をもと、いひ下句を末といひて一首の上下の名なりしらぬ人のみだりにいへる事取べからず○諸成案に此本末の注は東萬呂神樂歌の考なき前の説歟採物歌 本賢木葉の香をかぐはしみとめくれば八十氏人ぞまとあせりける。同末「神垣のみむろの山の榊葉は神のみまへに茂合にけり。是神の本末の歌なりさて神樂に本方の歌人末かたの歌人ありて本方の歌をうたひ終れば末かたへとりてうたふはじめの一句を歌人うたへば二句めより吹物はつくるなり本末これに同じ又本の歌はたづね

とふ意によみ末の歌はとわり答る如くの意によめり或抄に本の歌は此集に有末の歌は拾遺集にありといふはしらぬ人の妄の注なり今云「賢木葉の香をかぐはしみ云々は本の歌なれど拾遺にあり」神がきのみむろの山の云々は末の歌なれど此集にあり又「みてぐらの歌は本末ともに拾遺にあり下の「霜やたびおけど枯せぬ云々は又末歌なれど此集にあり何ぞ撰集に本末をとる事あらん歌は撰者の意をもとるのみ」契沖曰神樂の取物に九種あり賢木幣杖篠弓劍鉞杓和名抄云均唐韻云均音與神同和名比左古辭水器葛これなり○眞淵案に是にひかけをおとせり或抄には十種といへり

神がきのみむろの山のさかきばは神の御まへにしげりあひけり契沖云六帖發句「神垣やと有顯昭の本には「神のみまへにを「神のみむろにと有て神樂の譜には「神のみまへにと有といへり神垣のみむろの山は大和國高市郡のみむろ山なり萬葉第九には「神なびのみむろの山にたち向ふみかきの山とよめり○眞淵案これ本は神なびのみむろの山とよみけんを他の社など又は内にて諸神を祭たまふ時にうたふ故に神垣とかへてうたふ成べし神垣のみむろとてつゞけし事例なし

どのさかゆくやがて神の御めぐみをふくめりまきむくのあなしの山の山人と人もみるかに山かづらせよ契沖云六帖には發句「わがせこがと有書誤れるにや顯昭の本には第四句「人もみるがねと有六帖も同じ日本紀萬葉等には此詞有仁と禰と通ひて同事也【神樂葛歌に「わぎもこがと有一禰曰萬葉に卷向と書てまきもこ」とよめり然ればわぎもこはいひ誤なり云々山かづらとは神事に従ふ時正木のかづらにてひたひをゆふを山かづらといふとなり】○眞淵案に古事記「末伎牟久。姓氏錄に「卷掠。萬葉「卷向とあり諸本まきもくとあれど古きによりてまきむくと書べし第三句がには萬葉に我禰と書多し萬第三の歌必願ふ意見ゆ然れば人も見るがねとよむべきなり奥儀抄に神樂譜には「人も見るべくと有といへり第四句次の歌に「外山なるまさきのかづらといへる古事記日本紀共に以眞折爲鬘と有からは次の歌と合て是をもまさきのかづらと見るべし【眞淵又案に垂仁紀の一云天照御神を磯城殿祖本に鎮座ませて祠之云々其次に倭大神を定神地於穴磯邑と有是を合せ思ふに本穴磯山に神を祭給ふ地有なり其につけて此歌はよめり又式に城上郡に穴師坐兵主神社卷向坐若御

猫やたびおけどかれせぬ神樂のたちさかゆべき神のきれかし契沖云六帖には落句「神のきねかなと有やたび置とはたびくしげくふるなり顯注云神樂には巫女はつねにはなけれどやをとめとて八人の巫女相具たり石清水のみ神樂にも有今いはく古くは男女にわたりていひけるを後に女をのみいふやうにはなれるなるべし巫觀の字を思ひ合すべし【眞淵又案にきねはねぎめの意にて云ふか】たちさかゆべき神のきねとはさか木によせてたち榮ゆといはふなり萬七「山城のくせの社に草な手折そおのが時立榮ゆとも草な手折そ。以上二首は神の歌也【神樂杖の歌に「足引の山をさかしみゆふつくるさか木が杖を杖にきりつるともよめりより所あるか】○或抄に神によせて神を祝ひ奉るなり八たびは數に陰陽の數有陽數の滿は九陰數の滿は八なり十は一に歸るなりされば八を陰數の極とす○眞淵案に八の數の義はさる事に皆いへども古來は然らずやといふは語なりきねは巫女なりみこともいふみこは神子といふ紀は加美の約禰免は通韻にて神女といふ事なり語をとりてみだりに知べからず又案に或抄に神を祝ふといふはいかゞ是はさかきによせて神女の榮行ことをよめるなり神女な

魂神社もと此二社の祭の歌なるを取て後にかづらの歌に用ひられしか】○契沖云顯注に云まきもくの山といふあなしの山とも云さてかくよみつゞくるなりこの山を取あはせていふ常のとなり「かづらきたかまの山「さらしなやをば捨山かゝる事數しらず人もみるがねとは人も見るばかりにと云詞なり奥儀抄には人もみるがねとはみるべくなどいふ詞なりふうぞくの詞なり萬葉にはみるがにともいへり同詞なり五音の故なり山かづらとは神樂するにはまさきのかづらにてかしらをゆふなりかづらゆふと云物を左よりうしろに引まはしてゆふなり御神樂に有となり神樂譜には「人もみるべく山かづらせよと有密勘奥儀抄此注文と同あけほの山かづらと申事も此山より出る事と聞侍る不委注今案あるものには「わぎもこがあらしの山のとあやまりてうたふと侍り六帖に「行がうへにまたもゆけこま神垣やみむろの山の山かづらせん眞淵案に是も本は神なびのなるべし○眞淵案に是は神樂にかづらをかけし時の歌なり大嘗會に山人と言事有其山人は悠基の山主紀の山につく人なり延喜式に委しその山といふは今祇園會に車上物かざる其遺風なり大嘗會には杉山標と言山かづらせよとは其山人白きゆ

ふをもて頭をゆひてはしを下にさぐるなり猿樂に頭を
 ゆひて兩方へはしをさぐるが即それなり此かづらは上
 古はひかけのかづらといふこけなり中古は紙布なり桓
 武已來今の木綿しめんは始るなり上古にはあらぬなりあなし
 の山はその時此山より木をきりて出したるをりの事故
 此山をいふなり東萬呂曰山かづらはかのまさきかづら
 をかづらとするなり此歌何によりてあなしの山のやま
 人と人もみるがにとよみし事諸抄に釋せず是日本紀垂
 仁紀第六卷「一云鎮座於磯城嚴祖之本而祠之云々と書
 て又一云の終に云「定神地於穴磯邑云々。此上の磯城
 をまきとかなつけして又穴磯をもまきとかなをつけた
 るを同事と心得たがひたるなり磯は石の事にてまきと皆
 訓それを誤り此一云の文半上と下とも別の事なりより
 て上はまき下は安奈志なり是あなしのむらにてまつり
 たる古事なりよりてあなしの山の山人とよめり此山に
 古來神をまつる事中古已來人老らずなりたり猶袖中抄
 の論ども誤り多し

み山にはあらぬふららしと山なるまさきのかづら色つきにけり
 契沖云と山のまさきの色つくを見てとやまには今は磯
 のふるらんとおもひやるなり公任の九品には上中ほど

うるはしくてあまりの心有なり道濟十體に神妙體又新
 撰髓腦には「み山と云てと山といへるを病ともせられ
 たり以上二首かづらの歌也○眞淵案にひかけは松羅な
 りたむけ草ともいふ是なりいづれも天性のものにてこ
 とにひかけもまさき木も深山に多き物なり清切の物なれ
 ば神事に用ふ○又案るに上のかづらせよといふ歌と此
 二首神樂の葛の歌にならべ入られしはまさきかづらな
 る事知べしさて此まさきかづら元來は木なれどもかづ
 らといふ名を負たるなるべし神代紀には天香山之眞坂
 木を以て爲鬘と有なり仍ておもふまさかつきを略たる
 歟古語拾遺云「以眞辟葛爲鬘以蘿葛爲手繼以竹葉猷猷
 木爲手草云々。こは鬘としける後を以前にめぐらして
 眞辟葛と書るなるべし
 みらのくのあたりのまゆみわがひかばすふさへよりこのびくりに
 或抄云安達郡より弓を造りそめたる故なりと有何の證
 あるにや此歌に付ておもひよりたる説なるべし契沖云
 延喜六年正月廿日割安積郡置安達郡とは延喜六年に名
 付しなれどもとよりあだちといふ所は有なり是は神樂
 の取物の中の弓歌なり弓を引ばもと末のよりくるによ
 りて後までも我になびきしたひてしのびくによりこ

よといふなり○眞淵今考に是はもとみちのくの歌なる
 をとりて大歌にせしものなり其國にてあだちより出る
 弓有てよみしなるべしこ、にて造はじめしなど云は誤
 れり

我がどのいたゐのしみつ里道み人しくまればみ草生にけり
 契沖曰此歌六帖には作者家持にて「我宿のいたゐのし
 みつと有顯昭云是は執物の中の杓の末歌なり板井の清
 水とは板を筒にしたる也石を筒にしたる井をばいは非
 の清水とよめりみくさとは萍にあらで色あかきやうな
 る草のひまなくうきたるをいふ譜にはみくさゐにける
 とも有萬「いにしへのふるきつ、みは年ふかみ池のな
 ぎさにみ草生けり【眞淵案水草あるは誤也みくさ生と
 書べしみは眞なり】○眞淵案にみくさみかくれ皆發語
 なり水の略語とおもへるは不通なり草ともいふまも
 發語なる事知べし萬葉第二に「三萬刈信濃眞弓。又「水
 萬刈とも書歌も有をみくさと點せるは誤也是はみす、
 かると讀べき事神代卷に證有さて此みす、のみを水の
 意といはゞ信濃とつゞきて水の縁にはあらずたゞみは
 發語と見るべき例かぞふべからずこ、にあかき萍など
 いふはいとせまき注なり何にてもふるき井などには草

のおふる物なり

ひるめの歌

萬葉卷二に天照日女命紀に大日靈貴と申すは天照大御
 神の御事なりさて此歌神樂に「いかばかりよきわざし
 てか天照すひるめの神をまばしとゞめんといふにつけ
 て此ひるめてふ名はいへるなり是みやみ文ならばひる
 めの大御神を申す歌など有べきを右の言によりて伶人
 などの平言ツチにひるめの歌といふより此名は有を其ま、
 には書しなり既古今集の比にもすべて古意古言はおほ
 つかなく成し故なり

さいのくまひのくま川にこまとめてしげし水かへかけをだにみん

眞淵案に既にもいふ如く此歌は萬葉第四今十一「左檜隈檜隈

川爾駐馬爾水令飲吾外將見とある歌なりこは古萬葉
 のうちなりこは序考にいふとはたがひて神樂の歌に其
 比聞なれしのみにて古萬葉集中の歌ともこ、ろづかで

撰に入しと見ゆ○契沖曰顯昭本には落句「餘所にだに
 みんと有りて注に云萬葉には「さひのくまひのくま川

に馬とめてうまに水かへ我よそにみん此集さ、のくま
 と有遠萬葉歟さ、のくまにつきて篠の歌に或人よみて

侍りし如何さひのくまは萬葉の歌也平城天皇御撰也古

いふはいとせまき注なり何にてもふるき井などには草

今のさ、のくまの歌は承和の大嘗會歌なりさ、のくまを可用歟今案にひのくま川河内といふ説誤なり大和國高市郡にあり和名集には檜前と書り萬葉には顯注に引る外に第八に「さひのくまひのくま川のせをはやみ君が手とらばよらんでふかも。第二卷には「さひのくまわともよめりさひのくまひのくま川と續くるはさは萬にそへていふにてみよしの、よしの、山といへる如しひのくまのひのくまと重ねていへるなり然るをさ、のくまとはいつとなく誤れる成べし和名集「但馬國氣多那樂前佐々乃」これぞさ、のくまといふ所には侍る源氏葵には「さ、のくまにあらねばにやつれなく過給ふにつけて御心づくしなりとかけるは此集によれりなごりをしとうたふ歌なれば神の影向し給へるをとゞめ奉るとて心を得てうたへるかさて今の歌を顯注承和大嘗會歌なりと申されたるは下にきびの中山とよめる歌の左の注を是より三首の注なりと思はれたる也大に僻事なりかれは一首の注なり求子本「何わざを我はしつ、か天てるやひるめの神をまばしとゞめん。後撰敦忠朝臣母「ちかはれしかもの河原に駒とめてまばし水かへ影をだにみん〇眞淵考るに既に初にいふ如く此歌は萬

今十一葉第四の歌同十二今八「佐檜乃熊檜隈川之瀬乎早。如是有て元來はさひのくまにてさは發語なり下の詞も違有是をさ、のくまといひては何の事ともまりがたし決して誤なり是らは風俗歌を直にあげて用ふるより誤るとなへたるを其ま、に用ひられたるなるべし此集を用んなど顯昭のいへるは元來歌をわきまへず袖中抄に引る「いしばかりよきわざしてかあまてるやひるめの神をまばしとゞめん。是は大ひるめをよみ奉る歌なり今とは別なり「いづこには駒をつながん朝ひこがあさる川邊の玉ざ、の上に。この朝ひこは日のみこといふ事あればさもよむべしされども此歌後の歌なり神樂譜に後々の歌も多く入しなり此歌はさ、のくまひのくまをとりてそのこまとめてといひ自駒過隙の意にて日のことと心得たがひて如是よみたりと見ゆ玉ざ、のうへにと云はさひのくまをさ、のくまと誤りしを誤ともしらすで篠のと思ひて結句に用ひたるべしさ、のくまといひては萬葉の歌何とも聞えずその上地名にしては其國郡別なり又あさる河邊などいふ古歌にあさるといふ語をもよくしらぬ人の歌と見えたり又萬葉平城天皇の御時とは此集にてはさ見ゆれどかの御撰なる事何を證據にやみだ

りなる注なり又此歌を承和の御時といふも猶々論にたらず

かへし物の歌

今までの呂を律になすなり或説青柳の歌は催馬樂の律の歌なり〇東萬呂云和琴の呂を律にかへすなりと眞淵考るに始は次のまがねふくなどの如く呂歌をうたひて其後律にかへし青柳の歌をうたふなり源氏若菜の上に「さうがの人々みはしにめしてすぐれたるこゑのかざりいだしてかへりこゑになる夜のふけゆくま、にものしらべどもなつかしくかはりて青柳あそび給ほどげにねぐらのうぐひすもおどろきぬべく云々

青柳をかたいとによりて鶯のぬふてふかさばむめのほながさ顯昭本「ぬふてふを「ぬふといふとかけり則ぬふといふとうたひ侍る也是は神樂小前張の青柳の歌也【青柳は黄鐘調の喜春樂にあはせうたふなり】〇眞淵考に以下の歌を某の大嘗の歌と古注にいへるは大嘗の時何ぞにつけてうたひしをいふ事歟既にもいふ如く左注は論にたらねど猶その論にたらぬをあかさば風俗の歌はその時作りてよめる成べきを此次のさら／＼にといふは戀のうたなれば大嘗にわざと作れるにはあらず然れば

いづれの時といふべからずよりて考るにこれらはみなかへし物の歌なり故にさいばらの歌なり然ればかへし物の歌の類に入たり然らずば此青柳の次に何の歌と詞有べきを無にしてしれさておほみへの歌をさいばらに後に用し物と見ゆ皆風俗にて時に作れるも有又戀の歌などはかのいねつきめひるめの歌の類なるべし

まがねふくさびの中山帯にせる細谷川の音のさやけま
この歌は承和のおほんべのさびのくにうた

眞淵案に是は備中などの大嘗會に仕る時きびとはうたひかへしなるべし是も今の萬葉集中の歌の一つなり萬葉八「大きみの三笠の山の帯にせる細谷川の音のさやけさとあり〇契沖云催馬樂呂歌也顯注まがねふくとはいふ物にてふきわかすまがねとは金をいへど鐵をもあかゝねにむかへていふとこそきびの中山は備中にあり彼山の腰にめぐれる細谷川を帯にしたりといふか萬葉には「大君の三笠の山の帯にせる云々とあり又曰承和は仁明天皇の年號なりおほんべは大嘗なりおほなめともいへりみかど御位につかせ給へる年あるひは次の年行はる其故延喜式の大嘗式に見えたり御へと書るは誤

なり或説には御費にて費をにへといひて上略かたす
 けたれど費は御門に奉物を云ていつにかぎらず歌にも
 その心なし又昔費の歌と云事なし定てあやまれりと知
 べし新穀をもて神祇を祭らせ給ひみづからもきこしめ
 すなり御一世に一度行はるゝを大嘗會といひ毎年行は
 るゝを新嘗といふ其事のおこりは神代紀に見えたり委
 しき儀式は延喜式江次第等に見えたり今の歌は主基方
 の歌なり續日本後紀第三云「天長十年十一月癸卯天
 皇御八省院修禪禮禮、戊辰御豐樂院終日宴樂悠紀
 主基共立標悠紀則山上栽梧桐、兩鳳集其上、從其樹
 中一起五雲々々上懸悠紀近江四字、主基則慶山之上栽
 恒春樹々々上泛五色慶雲々々上有霞々中懸主基備中
 四字云々。八雲御抄には「于時丹波播磨國也と有おほ
 しめし誤らせ給へる歟日本紀第三十九天武紀下云「五
 年九月丙寅朔丙戌神官奏曰爲新嘗卜國郡也齊忌此云
 論則尾張國山田郡次須岐也丹波國河沙郡並食卜。こ
 れゆきはまはる心すきは其につぐ心なれば後に悠
 紀主基とかけども是はかりて書るにて正しくは齋忌次
 也催馬樂「もとしげき、びの中山昔より名のふりこ
 めは君が世のため〇眞淵案に既にいふ如く左注は偽な

ればとらずとらざれば論に不及されどおほんべは大嘗
 なり或抄御字書は誤といふは偏なり御字をば古來より
 大御の意に用ひたる多ければおほんべとよむに何のあ
 やまりかあらん只にみへとのみよむ人はしらぬ人のと
 なればいふにたらず御製を於保美宇多とよむにても知
 べし【眞淵猶案に大嘗はおほなめなりそれを後にはな
 れておほんべと唱へけるを此左注は後人の書たれば時
 の唱へのまゝに書しなるべし奈米の約禰なればねとべ
 と通じていふべしをれまでもなくて自ら略していへ
 るならん】左注とらねばこゝにいらざれども童蒙のた
 めいふのみまがねふくはまがねのまは發語なり唯かね
 ふくといはゞいづこか歌ならん歌に發語助語有ことを
 去らずしてみだりに論をなすより諸注古へに不通なり
 顯注に鐵なりとは可ならんか金銀銅錫などはいにしへ
 なくても有しなり鐵ぞ劍にも何にも用有て専らなれば
 鐵を眞がねと云べく且吉備は今もよき鐵を出せり「美
 作やくめのさら山さら」に我名はたてじよろづ代ま
 でに。契沖云是は催馬樂の呂の歌也【眞淵考さいばら
 の呂の歌にて是もかへし物の歌也】みまさかの國久米
 郡にさら山はあればくめのさら山と云性靈集に美作國

佐良莊とあれば只佐良山ともいふべきかくめのさら山
 といふにつけてさら」にといへり伊勢集に「みまさ
 かやくめのさら山さら」に昔の妹しこひらるゝ哉。
 是はいせが歌にあらじと思ふ故は昔の妹とよむべから
 ぬなり六帖「美作やくめのさら山いなみの、いな」
 君はさらにならさじ。下の句のさらには上のくめのさ
 ら山をうけたり拾遺「玉川にさらすてつくりさら」
 に昔の人の戀しきやなぞ。萬葉「玉川にさらすてつ
 りさら」になにぞこのこゝだ悲しき

なり此文美作主基なる事有とて此歌必此時の歌なる
 微有べからずその上是戀の歌なり右にいふひるめつき
 めなどの時のうたは古歌をうたひ來れるなり大嘗會の
 歌とてその事をよめるにはかゝる歌はあらぬ事なりと
 もかくも此左注前々皆物まらぬ人の附たる事なれば論
 にたらず
 此は元慶のおんべのみのうた
 眞淵案に左注をとらざれば論におよばず契沖三代實錄
 を引て注したれど皆非なり

【此左注は例の妄なり是をとれる即かへし物の歌なり】
 契沖云主基方の歌也三代實錄第三云「貞觀元年十一月
 十六日丁卯車駕幸朝堂院齋殿親奉大嘗會十九日庚午
 撤去悠紀主基兩被云々詔曰參議從三位行右衛門督美作
 守藤原朝臣宗正三位内藥正從五位上兼侍醫三河權介
 物部廣泉等正五位下參河守從五位下御長真人近人散位
 美作介大中臣朝臣眞主等並從五位上外從五位下三河介
 壹志宿禰吉野從五位下三河權掾大原宿禰麻呂美作掾佐
 伯直豐麻呂並授外從五位下。悠紀方は參河也けり〇眞
 淵案左注せる者此文を見て此時の事と思ひて附會せる

君が代はかぎりもあらじなが濱のまさこの歌はよみつくすと
 是は仁和のおんべのいせのくにうた
 契沖云續後拾遺賀部に仁和御時大嘗會悠紀方伊勢國風
 俗歌「いせの海のなぎさを清みすむ鶴のちとせの聲を
 君にきかせん。是同じ悠紀方の歌なれば作者くろぬし
 なる事まられたり〇眞淵案に是又左注をすつれば論に
 たらすくろぬしたる事も今にいたりて何ぞまらん黒主
 は近江の人なる事上にいふが如し近江の悠紀なる時は
 よみもせん大歌所の歌は名を出せしはたゞ終の歌のみ
 なりまられたりとも名書まじくや

大友のくろぬし

あふみのや鏡の山をたてたればかれてもみゆる君がちとせば
是は今上のおほんへのあふみうた

契沖云寛平九年七月十三日即位なるゆる大嘗會も此年
なり悠紀方なり袋草子に仁和の御時の歌といへるお
ぼつかなしあふみのやは只みまさかやと讀る同じ心な
り日本紀「ひらかたゆ笛吹のほるあふみのやけなのわ
くごい笛ふきのほる。萬葉あふみのや矢橋の志のを矢
にはかでまこと有とや戀しきものを。鏡の山をたてた
ればとは鏡山の立たるを鏡臺に鏡をかけたるによせて
いへり此歌にのみ作者をいへるは以前の歌どもは作者
を失へる歟○是は今上の御への歌ならば何ぞ左に注せ
ん契沖所謂左注有事は兩説をすてすと然らば今上の大
嘗會の歌なるに即今上の時の御えらみなるをいくばく
の代有てか兩説の出来るらん左注をとらざる證是にて
も知べし又案に黒主の年へぬる身とよみしは此歌より
思ひけんさて趣向似たれば好事の黒ぬしとは書しなら
んさきにもいふごとく大歌所の歌は名を出せしはたゞ
終の此歌のみなりこゝにはたとへられたりとも書まじ
くや思ひ侍る又今上の時ならば左になどか書かん

かに證となしがたし惣て神武天皇築紫より起り給ひて
西こそ五代は専らとすれ東を先とする證なし萬葉又茲
に東歌をおける事は神武天皇和皇居以後も未東は王
代に従はざる事久しく侍るにその後東にても歌を詠る
に至る事は政紀行はれたる若しなれば是を一入にあ
げたる也或抄に東遊の事に詠すべしといへるはいかに
や人わらへなるをやつくしの歌と云なし風俗の歌舞を
奏すといふは大隅さつまの卑人朝廷に参りて奏庭上舞
なり右いふ西の歌あげざるは元來の王都なれば云に及
ばざるにて知るべし東國民間の歌を撰みたる也

みちのく歌

あぶくまに霧たちわたり明ぬとしをばやらじまてばすべなし
六帖には「せなをばやらじ。契沖云顯注もあふくまは
河なり其を人にあふによせて朝きりたちてあけめども
君をばやらじ待はすべなくわびしきとよめり土民はあ
ふくまとして大わたりとぞ申なる後撰に「あふくまの霧
とはなしによもすがら立渡りつゝ世をもふる哉。是は
今の歌を取てよめるか順集に「つらくとも忘れずこひ
んかしまなるあふくま川のあふせ有やと○眞淵考るに
延喜式彼國直理郡に安福麻河泊神社有三代實錄第七云

東歌

眞淵考にこれ又うたひ物の中の東歌也さて契沖が説左
に記せりいとうがてり此國は西より開て西の國は既歌
にも京に異ならず東は遅く開けて去かも歌詞もとなれ
ば萬葉に東歌として別にせしもの也古今にのするはさる
かはりのなきよきを舉たればかはらぬなれば古へに
よりて東歌とは云也○契沖曰萬葉にも東歌あり第十四
の一卷是なり又第二十諸國の防人が歌も同じ四方の國
の歌あるべきにひとり東歌といふとは本朝は日神の國
にて東歌を尊む故歟七道をいふ時も五畿内に次で東海
道東山道と云り崇神紀に云「四十八年春正月天皇勅豐
城命活日尊曰汝等二子慈愛共濟不知為嗣各宜夢朕以
夢占之二皇子於是彼命淨沐而祈寐各得夢也會明兄
豐城命以夢辭奏于天皇曰自登御諸山向東而八廻弄
槍八廻擊刀弟活日尊以夢辭奏曰自登御諸山之巔
繩緝四方逐食粟雀則天皇相夢謂二子曰兄則一
片向東當治東國弟是悉臨四方宜繼朕位四月
立活日尊爲皇太子以豐城命令治東是上毛野
君下毛野君之始祖。是天下に對してわきてあづまをの
みいへるにて知べし○眞淵案に此説甚うがてりさだ

「陸奥國勳十等阿福麻水神」安福麻と書今の俗ふもじ
濁りていへば此安福麻玄かるべしあふくまは地をいふ
のみ昔はふを濁りけんを後世例の都邊にすみてよむな
らんあふ事にいひよせたりといふはわろし○二の句き
り立わたれかしと下心にもちてきり立わたりとはいよめ
るなり古歌にはさる事あり後の注どもは皆わろし
みちのくはいづくはあれど鹽がまのうらこぐ舟のつなでかなしも
眞淵案るにかなしとはめづるにあまりて身に入るをい
ふ子をかまふと云類のみつなでかなしもとは少し
いひたらはぬ様なれどさる所にせまらで中々に面しろ
きさまあるは古歌の常也○契沖云六帖には第四句「ま
がきの島のと有つなでは和名集云「唐韻云牽絃 音支訓
挽船繩也。顯注云陸奥の中にそこの浦山につけてを
かしき歌枕いづらは多くあれど鹽がまの浦漕舟あるさ
まをみるばかり心細く物あはれにうら悲しき事やはあ
るとよみたるにや侍らんとて伊せ物語に融のおとゞの
河原院にて業平の鹽がまにいつかきにけんとよまれし
所の詞心をえて引かる定家卿同心にて此義有與と感せ
らる但かなしもとはまことに悲歎にはあらずおもしろし
もといふ様なる詞なりと釋せらる此密勘よく叶へり顯

注は心ばそく物あはれにうら悲しと釋せられたれば猶つなでかなしも悲哀の心と見られたるなりおもしろき餘りに心有人はさも見るべけれどまづおもしろしと見るべしつなでかなしもと云にはいそべにつきてこぎゆきゆくさまの面白きをいへる心歎萬九「ありそべにつきてこぐあまから人の濱を過れば戀しく有なり。此歌をおもふべし鎌倉右大臣「なきさこぐ蟻の小ぶねのつなでかなしもとよまれたるよく心を得たる物なりみちのくはいづくはある中に鹽がまの浦に面白き事多し其中に磯につきてこぐ舟の綱で引ゆくさまのをかしとなるべし六帖「鹽がまの浦こぎつらん舟の音はきしがごとく聞ばかなしき。是今の歌をふみてよめり我せこを都へやりてしほがまの島のまつぞこひしき眞淵考るに彼國の女夫の都へのぼりけるをこひて歸らん事を待を松の名によせてよめるなり二の句を「都にとあるは後なり此迄らべにてはもととはへとありつらんを好事のなほせしならん萬葉に「わがせこをやまとへやると佐夜更で曉露にわが立ぬれし。同東歌「わがせこをやまとへやりてまつしたすあしがら山の杉のこのまかといふをおもふべし

をくるさきみつのこじまの人ならば都のつとにいざといはましを眞淵考にくりさきを黒崎と書しを後にくるとよみしか古へは黒き事をくりといへる事多し仍ておもしろきからと同じくりさきかをは發語にて初瀬ををはつせつくばをつくばといふ類なり○契沖云伊せ物がたりには「みつのこじま、でを、くりはらのあねはの松のとつくりかへたりをぐるさきといふ所のみつのこじまなりめでたき所なれば此島もし人にて聞しる事あらましかばみやこのつとにいざとさそひてのぼりなましとよめり萬七「玉つしまみれどもあかずいかにしてつ、みもてゆかんみぬ人のため

みさむらひみかさと申せ宮城野の木の下露は雨にまされり契沖云みさむらひは御侍なり御かさと申せとは御笠參らせんと申せとなり是は國司或は鎮守府將軍などの狩などに出たる時よめる歌なるべし上に「みやぎの、もとあらこのはぎ露をおもみともよめり彼野を露深き所によみならはしたるもとは此歌なり○眞淵案に此注の意たがはず或抄に雨よりは露のまさりたるにはあらず雨のふれば水のまさるといふがごとし宮城野は西の方は山かげにて露のまげき所なり笠は侍の役なりといへ

りふる雨に増と見たるは甚だ非なり元來の雨ならば今更笠を申さんやとく笠さして有なんいづことても雨の半の多少あらんや是ほどの事をたがひたるはいとわりなし只露甚だ多きをいはんとてみかさと申せともいへると見ば歌の感もあるべし

も有べし又おほくの舟の、ぼるもありくだるも有にても有べし下句の心はいなあはじと思ふには非ず此月ばかりは待過せさはる事有と云心なるべし此月ばかりと云をまばしまて君ともいひ傳へたる歎拾遺圓融院御時東三條太政大臣大將をはなれてよみて奉られける長歌の次にこれが御返した、いなふねのと仰られたりければ又御返し「いかにせん我身くだれるいなふねのまばしばかりの命たへすば。此後今の歌を得ては多くまばしばかりと云をそへてよみ侍る顯注に又もがみ川は出羽最上郡より流れ出て侍るとかやさてみちの國には北上とかやと申と云り出羽の國に住人の申けるはもがみ川はみちのくより流れ来て末は秋田の方までも流るとなん申侍る顯昭説は語る人のあやまりけるにや○眞淵案續日本紀に「割陸奥國最上郡置賜二郡隸出羽國」と有しは元來もがみはみちのくなる事まられたり其上此うたふるき體なれば和銅五年已前の歌なるもまるべからずたとひまからずともふるきによりてみちのくにうたひたるをあげられたればうたがふにたらず

しがみ川のほればくだるいなふねのいなにはあらず此つきばかり契沖云續日本紀云「和銅五年十月丁酉朔割陸奥國最上和名集置賜和名集於毛加美置賜以太美二郡隸出羽國焉。三代實錄第三十五云「出羽權守藤原朝臣保則奏狀曰管最上郡道路險絶大河流急云々。今此歌をみちのく歌に入たるは最上郡昔はみちのくなりければ歎出羽は兩郡の外古へは蝦夷の地にして後に彼等たひらぎて兩郡をそへて一國を建られければ出羽をまかしながら陸奥に屬する歎歌の心上の句はいなにはあらずといはん計の序なり其によりてのほればくだるとは古へは田ちからをば皆稻にて納けるゆゑに正稅幾萬束千束など物にも見えたりことに陸奥出羽兩國の貢調をば當國に納置ければ民どもの舟にて運ぶとてまげく上り下るなり延喜式民部式に云「凡諸國貢調庸者云々其陸奥出羽兩國使納當國。此心なりのほればくだるとは同じ舟のたびく上り下るにて

件をおきてあだし心をわがもたば末のまつ山浪も、えなん契沖云萬葉并に日本紀に此様のおきといふには除の字

を用たりあだしと云には日本紀に別異紀【眞淵考紀は若他の草の誤か】餘是等の字を書り男女の中のみならず何事にも外心有をあだし心といへり新萬にはあだといふには他の字を用ひたりあだとあだしと末は通侍るべけれど本はかはれり今の歌の心は君をさしおきてこころを我もちたらば末の松山にはるかにのきたるあなたの海に立波の山を越ぬべし浪の山をこす事有まじければあだし心は終にもたじとちかふ心なり漢高祖功臣を諸侯等に封する時のとばにも泰山如砥黃河如帶なるとも此約は變せじといひ日本紀に新羅人の誓にも東の日西に出ありなれ川のさかさまにながれ河石の、ほりて天つあかほしになるまでもかはらじといへるはあるまじき事のあらんまでと云心なれば今と同じ顯注に能因が歌枕にはもとの松中松すゑの松とて三重ありと申さればにや山とはいはで末のまつとよめる事も侍るといへり今案に末の松とよめるは源氏に「浪こゆる比ともまらず末の松まつらんとのみ思ひける哉。又松をすて、すゑの山とのみもよめり信明集「末の山昔よりまつ君をおきて浪高くともこえじと思ふ。元眞集「末の山まつ人をのみ頼みつ、我をば浪と思ふなるべし。

○眞淵案に此歌より先に此ことなしされば此すゑの松山といふ山の名あるにはあらで海にいとちかくもあらぬ所にある松たてる山をいへるなるべし本の松中の松などいへるは後につけそへたる事あるし今は一の山の名となるのちの世の常なり時代をも心得べし

さがみ歌

こよろぎのいそたちならしいそなつむめさしぬらすな沖にをれ浪
 契沖云いそなは磯に生る菜なり萬葉に「濱なつむあまをとめらともよめりめさしは顯昭めのわらははべなりと釋せらるゝを密勘云さだめて證侍らん顯昭或古物語に「きの國のなぐさの濱に貝拾ふあまのめざしのおとななりせばと侍ればめのわらはの義に叶へりとかゝる今案に神樂朝倉本歌云「朝倉やおめのみなとにあびきするたまのめざしになびきあひにけり。袖中抄に玉は響る詞也と有は今案神樂歌にはあやめをさやめあすをさすなど同韻にて通する事多ければ是もたまはあまにてあまの子を玉のめざしと云歟又催馬樂に「竹川の橋のつめなる花園に我をばはなてめざしたぐへて。是も女童をそへてゑるべとして花ぞのにつかはすと云事と聞ゆ歟衣に「めさじなる御ぐしをせちにかきやりつ、あそ

びむつれたまふとかけるもいとさなき子のひたひがみの末かほにさがりて目をさすばかりみじかきをいへれば此心にわらべをめざしと名付たる歟枕草子に「あまにそぎたるちごのめに髪のおほひたるをかきはやらで打かたむき物などみるいとうつくし。これめざしといはねど狹衣に同じ【諸成案に前のいろくの説を書て眞淵の今案を書て冠注に枕草子狹衣の文をくはへ會丹集の歌を引べし】○眞淵考に契沖密勘を引て云もよけれどもいまだし密勘に庭訓如奥儀抄あまのいさりすとて物とりいる籠なりと申されきとあるはわろし狹衣にわらべのがたちをいふあきらかに聞ゆおきにをれ波とはおきのかたにをれと磯まで打よするなと云なり○眞淵今案するには相模國余綾郡にて萬葉十四の相模歌にはよろぎの磯とよめり今大磯てふ驛のうらに此磯はあり又磯菜は萬葉に濱菜つむ海士をとめらともよみて磯に生るわかめなどをいふめざしは女わらは髪の日をさすばかり生たるほどなるをいふ枕草子狹衣などにあるを見るべし○沖にをれは折なり波は物を折かへす様にみゆる物故に此ことば有丹集に「よりこし波も沖にをれつ、と有によるべし

ひたちらうた

つくばねのこのもかのしにかげはあれど君が御かげにますかげはなし
 契沖云このもかのものはこなたおもてかなたおもてなり深く此歌をのみ執してこのもかのもは筑波山にかぎると思へるは誤なり後撰に「山風の吹のまにくもみぢばのこのもかのもにちりぬべら也。大井川序に「われらみじかき心このもかのもにまどひ云々。源氏夕顔に「げにいと小家がちにむつかしげなるこのもかのも云々。神に「このもかのもはぶかひ人云々。萬葉第十四の歌に「つくばねのをてもこのもに。此をてもこのもををちもこのもにてをちもは彼面このもは此面なれば今と同じ事也又同十四卷に「あしがらのをてもこのもともよみたればいづこにかよまざらんつくば山はしげき山なれば源重之歌に「つくば山は山まげ山しげ、れど思ひいるにはさはらざりけり。さればかくばかりまげき山なれどおほんめぐみの陰にまさる陰はなしといへる也○眞淵案或抄にかげは景氣なり君が御かげは恵なりといへり景氣と云は非なり山にかげあり其上茂山なればかげといへりいづれの山か景氣なからんとりわきていへるは茂樹の陰をゑるべしは山は葉山なり神代

紀籠山をばやまと訓まげき山はもとよりまげき山なり
是に對るに茂山を端山といふは後世の誤りなり

つくばれの葉のみぢば落つしり知るもしらぬしなべてかなしし
契沖云このもかのもより落つもるもみぢにその木此枝
とまらねど皆あはれとみるを知るもまらぬもなべてか
なしもといへる也さきのつなでかなしものかなしもに
同じ是もおほやけのあまねきおほんめぐみの所をえら
び人をわきもたまはぬにたとふる也○眞淵案に此説い
とわろし先の歌詞なりとてよむほどの筑波山の歌何ぞ
やこのもかもの心侍らんその木此枝をまじたりとて
落ばにおきてわきてかなしといふ義あらんやさしもの
此まげ山のもみぢの落敷らん事なべてこそあらめそ
れにたとへておしなべてまらぬもかなしといへ
るなりたゞおちつもりと云し様上のきり立わたりと
いへるが如しさて知もしらぬもなべてかなしもとは多
くの木の葉のおしなべてちりしきたるにたとへてかな
しもと云なり又人をなべてあはれとおもふ心有時の歌
か萬葉の相聞にこの意に彼人をも此人をも哀とおもふ
よしよみしも侍るなり且東歌の篇集は前々とは不同是
は殊に同地名をよめれば意を以てよせたるにはあらず

るなり

かひうた

契沖云土佐日記に「又ある人西のくになれどかひうた
などいふかくうたふに舟やかたのちりも空行雲もたゞ
よひぬとぞ言なる

かひがねをさやに見しかけ、れなくよこをりふせるさやの中山
契沖云さやにも見しかはさやかにも見てしがななりけ
けれなくは心なくなりけ、れこ、ろ五音通せり顯注に
或はけ、らなくともいひつるはらとれと五音通なりと
有ればけ、らなくともかける本有けるか【片岡山の歌
に「いひにきてこやせるたびと。又萬葉一あづさ弓た
弓のこやるこやりもあづさ弓たてりくも。八雲抄にくやる
てりくもつく弓のくやりくも。八雲抄にくやる
顯注こせるこはくやを約めたり甲斐人は今もこ、ぬる
をけ、ぬるといふといへり】よこをりふせるもよこを
りこせるとかきてこせるはふしたる心なりふせるとか
きたる本もありとかひのしらねをさやかにみるべきに
心もなく横たはりにけるさやの中山哉とよめる也或は
よこをりこせると書たる本有こせるもふせるも同也駿
河の國の風俗にいへり今案に是は甲斐の國のもの、遠
江に有て故郷をこひて次の歌と、もによめるを甲斐の

もの、歌なればかひ歌とはせるかもし又都へのぼると
て遠江まできて故郷を戀てよめる歎新拾遺集旅部に家
持歌とて「旅人のよこをりふせる山越て月にもいくよ
わかれしつらん。此歌古來沙汰なく家集にもなければ
覺束なし奥儀抄に玄々集左衛門權佐宣孝^{大貳三}「かひが
ねをみるともきくはまことにやよこをりふせるさやの

中山。土佐日記云「東のかたに山の横をれるをみてとへ
ばやはたの宮といふ。」と書り八雲抄に一説に横をりく
せるさやの中山といへり○眞淵案に契沖がいへる甲斐
人の都などへ行とて歎遠江までなど來りて故郷をおも
ひてよめれば甲斐歌といへるといへるはさもいはるべ
し元來甲斐人にあらずばなどか甲斐がねをしたはんか
ひ歌ともいはじ○東萬呂曰け、れは其國ぶりの詞なり
見しかはみたきとねがふ詞なりかもし清てとなへて自
ら願の意をなはるなり眞淵案に或説に四郡といふは甚
非なり是は佐野郡にあるよりさやの中山といへり四郡
にわたるにあらず其上土佐日記をよりどころとすべし
又さよとおもへる誤なり佐野郡を佐夜郡ともかくを夜
のことによせたるを物しらぬ人のよと心得たるなり長
山といふ説はいよく人わらへなりさびの中山みの、

中山などの類なり又案にみしがは見てしがななりしを
清かを濁るなりさて見てありしがななり豆阿の約多な
るを互に通して見てしといふがなは願ふ意なり甲斐人
の京などへ上るとて遠江にてよめるなり次のは都人の
甲斐にゐてよめりと見ゆ

かひがねをれこし山ご吹風を人にしがもやことづてやらん
契沖云是はかひがねの方をさして遠江の方よりみねを
こえ山をこえて吹行風を人にもがなわがおもひをこと
づてやらん物をといへるなり顯注に都へことづてやら
んと注せられたるは心たがへり都の人の甲斐に有て都
をかねてよめる歌ならば甲斐とはいはじ○東萬呂云都
といふ歌には見えねども都へと顯注にいへるは強ても
いはるべし契沖が説は非なり○眞淵案に元來其國の人
ならでもその國にてよめるを則風俗にせる事萬葉に多
し此集みちのく歌にてしほがまの歌みやこのつとに又
御侍などいへる必みちのくの人のよめるともいひがた
しその上此歌も同じ甲斐歌ながら先のは甲斐人なるべ
し此歌は必甲斐人ならでも甲斐に居てよめりと見えた
り偏に思ふべからず又都にことづてんと云をも必とは
いひがたし此作者いづこに相思ありけんしるべからず

契沖が遠江より吹行風といへることわりなしかひがねをねごえ山ごえとあれば此ねと山とは甲斐の峯かひの山なりさればかひに居者甲斐の山を吹越行風を人ならまじかばことづてやらん物をとなげきたる事明なり篇集もことによる事を忘らざりけらし○眞淵又おもふに後人の甲斐に居て都へことづてんといふか又必都ならでも其人のおもふ方有にても有べし

いせうた

あふの浦にかたえさしおほひなるなしのなりならずしねてかたらはん契沖云願注云あふの浦は志摩國に有齋宮御座獻梨之處なりされど伊せ島とていせと志摩とひとつによむなり又なりもならずもといはんとしてなるなしと讀りねてかたらはんといへば戀の心によめりさてかたえさしおほひたるやうにきぬうちおほひてなりならずもと思ふとかなひかなはずかたらはんともむ歎今案願注のさてかたえさしおほひたるやうにきぬうちおほひてといへるは捨べし取べからず萬十四東歌に「小山田の池のつみにさす柳なりもならずもなと二人はも。なとふたりはなとは汝也はもはいはもの上略にていはん也柳をさしておひつかぬおもひつかぬとあれば其をなりもな

らすもとよせて汝とふたりいはんと也眞淵云此説わるし是同心也六帖「人づまはもりかやしろかからく」の虎ふすのべかねてかたらはん○眞淵案になるといふは婚姻の詞にて各條に成不成の事有まかるを梨子によせていへり又いせにも志摩にもあふの浦といふ浦なし和名集に「志摩國英虞郡有。是萬葉第一幸于伊勢國時留京柿本朝臣人麿作歌「嗚呼見乃浦爾船乘爲良武婦等之珠裳乃須十二四寶三都良武香。東萬呂曰見字當作兒英虞浦志摩國英虞郡これ萬葉をも讀あやまりたりあみの浦と云も此國になし皆誤り也よりて此人萬呂の歌と同じくいせ歌もあごの浦とありつらんを後世寫生などの誤りたるをたゞす人無こそ口惜し又或抄に櫻麻の麻生とつゞくるなり志摩に有麻なり他所になしといへるも萬葉をまらぬ人杜撰して偽りいへるなり志摩國に麻生といふ所なし是は前に萬葉を引いていへるをみるべし地名にあらぬ證有なり強て志摩に有とせるを案ずるに伊勢國多氣郡に麻績の郷有和名平字萬葉第一「打麻乎麻績王白水郎有哉射等籠荷四間乃珠藻荆麻須。此歌を悪く心得てをみをおふと同じく思へる誤などより志摩の國に麻生と云所有など偽いへるなるべしゆめく川ふ

べからず○又思ふに伊勢國におふといふ地名なし唱へそこなへる成べし伊勢國多氣郡に麻績平字この麻績は萬葉にも式にも氏にもをみと唱ふるを若おふと心得違しにや又奄藝郡奄藝郷安無又多氣郡相可阿布是等なる歎と思へどさはあらじ既に前にいふ英虞浦もし此あごをあこの浦と書しをあうと誤りて又あふと書しならんか

冬のかものまつりの歌

藤原としゆきの朝臣

契沖云寛平御紀曰宇多帝潜龍時號王放鷹狩于加茂邊俄天陰霧降東西迷路帝臥藪中憂愁甚有一翁來告曰吾此邊老翁也春既有祭冬未有祭願賜冬祭帝心知爲加茂明神也因答曰吾力非所及宜被奏于内翁曰吾知其力所及願自重而勿輕矣言已不見帝大怪之未幾仁和三年八月廿三日立爲皇太子即日即天皇位於是信神言而寛平元年十一月廿一日己酉始行賀茂臨時祭左近中將時平朝臣爲勅使藤原敏行朝臣詠東遊歌十一月下未日試樂ありて下酉日臨時祭あり續日本紀云「延暦二年十一月戊戌朔丁巳遣近衛中將正四位上紀朝臣船守彼加茂下上二社從二位或抄云十一月中旬契沖云此歌をはてとするは歌もすぐれたるに今上の父

みかどの御神の護り給ふちからによりて寶位にのぼらせ給ふは萬代ふともと撰者もともに行末かけていはひ奉るこゝろ成べし後撰集に延喜御時賀茂臨時祭りの日御前にてさかづきとりて三條右大臣「かくてのみやむべきものかはやぶるかもやしろの萬代をみん【眞淵案に萬葉の末にはやぶる金のみさきとよみしも神のます所をよめるなればこの比にはいよ、加茂の社ともつゞくべき事也かもは靈神なればとまでは過たり】則是敏行朝臣のはじめよめる歌をおもひたまへるなるべし又此歌俊成卿は常集第一の秀句といひ給へどさる第一といはんは過たりかぎりもなくよくと、のひたる歌には侍りされば今上の御撰においては卷末とせるに是外何の歌かあらんやは眞淵又案に枕草子に見る物に「賀茂の社のゆふだすきとうたひたるはいとをかしと有は此集戀一の歌なる也それをもうたひしにや或抄にひめ小松と有べきをゆふだすきと書たるべきにやといへど其歌の末に「一日も君をかけぬ日はなしと有からはゆふだすきと有し事明けし又忠見集に子の日に姫小松をよみたりこも小松と云からは齋松にはあらじ